

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Cases and Japanese postpositions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001282

日本語における表層格と 深層格の対応関係

Cases and Japanese Postpositions

国立国語研究所

刊 行 の こ と ば

当研究所国語辞典編集室では、用例を中心とした国語大辞典の編纂をめざして用例採集作業を実施するとともに、「国語辞典編集のための準備的研究」と題する研究課題の中にいくつかのサブテーマを設けて研究を進めてきた。そのサブテーマの一つとして「表層格と深層格の対応関係」を立てたのは、用言見出しに記載する情報として、格フレームが欠くべからざるものだという認識があるからである。と同時に、その記述を効果的に行うためには、まず作業マニュアルを整備する必要があると考え、それを主目的として調査研究を行った。まだ中間段階ではあるが、調査結果がある程度まとまったので、ここに報告する次第である。

この調査と執筆を担当したのは、主として国語辞典編集室長木村睦子であるが、第2章のレビューおよび付表1の部分は同編集室非常勤研究員 岡本哲也（電気通信大学名誉教授、ロシア語・言語工学）が担当した。また同じく非常勤研究員 乾とねが文献収集などを手伝った。

平成8年11月

国立国語研究所長

水 谷 修

目 次

刊行のことば

はじめに	1
1. 格文法の必要性と応用分野	3
1.1 格文法とは	3
1.2 結合価文法と格文法	4
1.3 情報検索における「役割」	5
1.4 日本語教育での応用	6
1.5 機械翻訳での応用	7
2. 諸説概観	8
2.1 チャールズ J. フィルモア	9
2.2 井上和子	12
2.3 柴谷方良	18
2.4 寺村秀夫	21
2.5 仁田義雄	28
2.6 村木新次郎	37
2.7 μ プロジェクト	44
2.8 ユー・デー・アプレッション	52
3. 実データによる調査	60
3.1 調査の目的	60
3.2 深層格の設定	61

3.2.1	深層格の定義	63
3.2.2	格の優先順	75
3.3	調査方法	76
3.3.1	概要	76
3.3.2	資料	77
3.3.3	作業手順	77
3.4	結果および結果に基づく考察	81
4.	作業の基準と実例	87
4.1	ガ格	88
4.2	ヲ格	107
4.3	ニ格	119
4.4	デ格	165
4.5	ト格	178
4.6	カラ格	187
4.7	ヨリ格	195
4.8	へ格	198
4.9	マデ格	202
4.10	格助詞相当連語	203
5.	無格表示の扱い方	209
5.1	目的	209
5.2	仮説	209
5.3	実地検証	210
5.4	判別の方法	210
6.	基本方針に係わる問題点	213
6.1	態変換と迷惑の受身	213
6.2	深層格の組み合わせ	215

(4) 目 次

6.3 ガ格・ヲ格と他の格との関係	216
おわりに	217
参考文献	219
付表1：深層格と格助詞の対応一覧（報告者別）	227
付表2：格助詞を含む慣用句一覧	232
付表3：深層格ごとに見た述語一覧	234

Cases and Japanese postpositions

First, we want to establish the case frame as a lexical information for verbs, especially in Japanese language, second we want to know how to determine the cases from surface structures of text sentences. In Japanese, the cases or the semantic relations of dependant nouns to their governor verb, are expressed by postpositions (kaku-joshi), and our main purpose is to know the way of assigning a case to each instance of postpositions and to make an operation manual for verb items description in dictionary compilation.

This book contains:

1. The merit of describing case frames on verbs in a dictionary
(Chapter 1)
2. A general review of case theories (Chapter 2)
3. Definition of our cases and the research results on the actual condition of a Japanese text (Chapter 3)
4. Descriptions and examples of how each postposition corresponds to the cases (Chapter 4)
5. Related problems (Chapter 5, 6)

はじめに

本研究は、国立国語研究所国語辞典編集室が用例採集作業と並行して進めてきた「国語辞典編集のための準備的研究」の中のサブテーマとして取り上げたものであり、将来国語辞典編集室で実施するはずの作業に関して、指針を与えることを目的とする。

辞書に記載すべき事柄の一つとして、動詞の格フレームというものがある。現在市販されている国語辞典にはそういう記述がないようであるが、英語の辞書には文型の載っているものもあり、今後は国語辞典にもそういう情報が求められるようになるであろう。格フレームとは個々の述語が要求する名詞の数とそれらの構文上の位置の組み合わせをいうが、それに名詞と述語の意味関係を含めることもある。その構文上の関係を表層格と呼び、意味上の関係を深層格と呼ぶ。表層格を中心に記述するものを結合価文法、意味関係を主にするものを格文法と呼び分ける人もある。

表層格は、個々の言語によって表示方法が異なる。日本語では格助詞（前置詞との対比で後置詞と呼ぶこともある。）で、英語では語順と前置詞で表わされる。またドイツ語やロシア語などのように、名詞の語尾変化と前置詞で表すものもある。他方、深層格は、人によっては述語に対する名詞の意味役割などと称し、個々の言語に依存しない普遍的なものであるか、あるいは個々の言語の特質を包含する最小公倍数的なものであることを前提とする。でなければ存在価値がうすいからである。標題に「表層格と深層格の対応関係」と記したが、深層格についてまだ定説と言えるものはないし、日本語の表層格についても、どの範囲までを格フレームに組み込むか、すなわち用言と密接に関わる個別事象として辞書で記述すべきかについて、はっきりした基準はない。その辺の検討を行いながら、表層格と深層格の対応関係を調べ、作業マニュアル化することが本研究の目的である。これは一方では格助詞の意味を記述するという

2 はじめに

古典的な意味記述作業にも該当すると思うが、マニュアルの主たる用途は、個々の動詞・形容詞等について格フレーム全般を記述することにある。

深層格と表層格の対応を問題にする場合に、どちらが先かという疑問が生じる。生成を主に考えれば深層格から表層格へ、解析を主に考えれば表層格から深層格へということになる。どちらも必要なものではあるが、現時点ではまだ深層格そのものが固まっていないので、順序としてまず表層格を手がかりに深層格について検討することにした。自然言語としては当面日本語のみを取り上げるが、深層格は広く自然言語一般に通じるもの、言い換えれば中間言語¹⁾のようなものであることが望ましい。

1) ここでいう中間言語は機械翻訳における中間言語 (intermediate language) であって、日本語教育などでいう中間言語 (interlanguage) ではない。日本語教育でいう中間言語というのは、外国語学習の過程において母国語からの類推によって生じる誤用をさすものだそうで、自然発生的なものであるらしいが、機械翻訳でいう中間言語というのは、多言語間の翻訳が必要な場合に、組み合わせの数を減らすために作られる媒介物であり、人工的なものである。

1. 格文法の必要性と応用分野

1.1 格文法とは

格文法といえば、一般にフィルモアの理論を指すようであるが、ここではもう少し広い範囲のものを指す。すなわち理念としては同じであっても、実際に作り上げたものは人により異なっており、その具体的内容が我々の中心課題をなす。

言語によって記述される内容、すなわち情報を把握しようとするとき、その情報をどのように形式化したら万人に理解しやすく、かつ機械処理に適したものになるだろうか。自然言語による表現はもともと変化に富んでいて、一つの言語においても、一つの事象を記述するのに幾通りもの言い回しが存在する。まして異なる言語の間で対応をつけることは容易ではない。それをパターン化し、同一の事象はなるべく同一の記述法で表したいと思うとき、まず考えるのは、述語を軸にしてそれに直接従属する名詞句と述語の意味関係を類型化することである。フィルモアの例を借りれば、次のようになる。

(1) John opened the door with his key.

(2) His key opened the door.

(3) The door opened.

上の三つの文では、項の数がそれぞれ三、二、一となっているが、三文すべてに共通するのは「ドアがあいた」という事実であり、(1)(2)の二文に共通するのは、ドアをあけるのに鍵を使ったという事実である。第一・第二の文において‘the door’が〈対象〉であるなら、第三の文における‘the door’も〈対象〉でなければならず、第一の文における‘his key’が〈道具〉であるなら、第二文における‘his key’も〈道具〉でなければならないというのが、格文法の主張である。つまり構文上の位置とは一応無関係に、現実世界での立場

4 1. 格文法の必要性と応用分野

が同じならば、同じ深層格を持つというものである。言語の外形から発するのではなく、情報の担い手としての言語の機能的側面から言語の本質にせまろうというものである。

1.2 結合価文法と格文法

格文法と対比されるものに結合価文法というものがある。結合価というのは化学の用語で、原子がいくつか結びついて分子を構成するとき、個々の原子が持つ手の数を言い、これは元素によって大体決まっている。たとえば炭素原子の手の数は4、酸素は2、水素は1というように。それと同様にある動詞がいくつの名詞を支配しうるか、そしてその名詞が表層でどういう格形を取るかを記述するのが結合価文法である。たとえば「当たる」という動詞には‘Aガ’と‘AガBニ’と‘AガBト’という三つのパターンがある。単に格助詞を指定しただけでは情報が乏しいというわけで、A、B、…の位置にどのような名詞が入りうるかを記述したのが石綿敏雄の「日本語用言の結合価」(朝倉日本語新講座3『文法と意味I』付録2)であり、ここでは動詞「当たる」に次の五つのパターンを与えている。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| ① N(act)が V | act = action: 行為 |
| ② N(con)が N(con)に V | con = concrete: 有形物 |
| ③ N(div)が N(div)に V | div = diverse: 何でも |
| ④ N(hum)が N(act)に V | hum = human: 有意志体 |
| ⑤ N(hum)が N(hum)と V | |

ここでいささか問題なのは、これらのパターンがそれぞれ動詞のどういう意味区分に対応するか分かりにくいこと、とりわけ③が②及び④を包含するように見えることであり、②と④は不要なのではないかと感じられることである。これを分かりやすくするために、いくつかの方法が考えられる。たとえば注記を付けること、例文を掲げることなどであるが、もう一つの方法として、表層格と深層格を対にして掲げておけば、分かりやすいだけでなく、応用範囲が広がるにちがいない。たとえば上の例について、

- | | |
|--------------------|--------|
| ①' N(act) [対象] が V | 予測があたる |
|--------------------|--------|

- ②' N(con) [対象] が N(con) [場所] に V 石が頭にあたる
- ③' N(div) [対象] が N(div) [陳述] に V AさんはBさんの叔父にあたる
- ④' N(hum) [動作主] が N(act) [対象] に V 警察が捜索にあたる
- ⑤' N(hum) [対象] が N(hum) [相手1] と V A選手がB選手とあたる

ともいえる。ただし④の「あたる」は「する」「行う」などと同様、代動詞的な働きをするものであるから、通常の格フレームとして扱うのではなく、特殊な対応をしなければならぬ。つまり〈動作性名詞〉ヲ/ニ〈代動詞〉を単一の動詞として扱う必要があるということである。

例：廃棄物の処理をする／行う／実施する → 廃棄物を処理する
 調査／捜索／交渉にあたる → 調査する／捜索する／交渉する

結合価文法は文章の統語構造を解析するには役立つが、文章の内容を把握するには不十分である。というわけで、結合価文法に深層格を付加したような用言記述がすでに幾通りか行われている²⁾。結合価文法で同じ形をとるものでも、深層格を付加することで区別できよう。ただしそこで問題になるのは、深層格および名詞の意味マーカとして何を使うかである。名詞については、上にあげた石綿式意味マーカの他に「分類語彙表」の分類番号などを使った例、あるいは格フレーム記述のために独自に開発した意味体系（文献38）などもあるが、さしあたり名詞についての論議は保留し、格についてのみ考える。

1.3 情報検索における「役割」

もう一つ格文法と近い関係にあるものとして情報検索で用いる「ロール」(role indicator)を挙げることができる。フィルモアが単に「格」というときはつねに深層格をさすが、彼はまたしばしば同じ意味で「役割」という言葉を

2) それらの用言記述の多くは（企業秘密等の理由により）非公開であるが、公開されたものとして、文献23・27・28がある。

6 1. 格文法の必要性と応用分野

使う。この言葉は情報検索システムにおける「ロール」を思い起させる。ロールというのは、いくつかのキーワードが集って一つの命題を構成するとき、検索誤りのうちの第二種の過誤（不適格文献が抽出されること）が生じないようにキーワードに付加される補助記号である。ふつう情報検索はキーワードとかインデックスとか呼ばれる単語の組合せで行われるが、検索結果が現実世界において重要な意味を持つ場合には、もっと高精度の検索方式をとることがある。たとえば外交・防衛等の分野において、A国がB国を非難したのかB国がA国を非難したのか、またはC氏がA国でB国を非難したのかは重大な違いであり³⁾、また特許公報などを検索する際、問題の物質または物体が原材料なのか生産物なのか、あるいは触媒や道具なのかといった違いは重要である。命題中でキーワードの果たす役割が紛れることのないよう、あらかじめ定めた少数のロールをキーワードに付与する方式である。木村がこの言葉を初めて聞いたのは1965年であるから、たぶん格文法より古くからドキュメンテーションの世界で使われていたものと思う。翻訳と違って、検索というのは人間が非常に苦手とする作業であり、索引がなければ多大の時間を要するとともに、見落としも多いものである。またコンピュータで検索した場合でも、人手による場合にくらべて時間は桁違いに短縮されるものの、キーワードそのものがめずらしい言葉でない場合、ごみと称せられる不適格文献が多数抽出されるため、このような補助記号が考案された。

1.4 日本語教育での応用

日本語教育においては、類似の表現における意味の違いを示すために深層格

3) 外交・防衛の分野におけるこの種の研究としては、外務省・防衛庁共同研究「自動インデックスシステムに関する調査研究」（文献42～47、行政管理庁の行政情報調査研究費による）がある。ここではコンピュータを用いて、動詞、格助詞、および性格コードと称する名詞の意味マーカの三つの組み合わせから、自動的にロールを決定するシステムを開発した。動詞辞書はこのプロジェクトにおいて作成したが、名詞のシソーラスはもともと防衛庁が作成し、使用していたものである。

を用いることがあるそうである⁴⁾。たとえば

①火事で家を焼いた。

②ガスで魚を焼いた。

の主体はいずれも人間であるが、①の場合は過失によるものであるから〈経験者〉、②の場合は意図的なものであるから〈動作主〉ということになる。またそれにともなって、デ格も①〈原因〉および②〈道具〉というように仕分けられる。この種の例は、科学技術文献などにはあまり見られないと思うが、本報告書で調査対象とした読本などにはいろいろ出現するであろう。

1.5 機械翻訳での応用

機械翻訳においては、深層格というものはさほど重要なものではないことを石綿が指摘している（文献 12）。二言語間翻訳については、あるいはその通りかもしれない。A 言語と B 言語がどの程度似ているかによっても違いがあろうが、A 言語から中間言語へ、中間言語から B 言語へ、そしてその逆という道筋をたどるよりも、A 言語から直接 B 言語へ、そして B 言語から直接 A 言語へという道筋を通る方がむしろ簡単であろうし、そうなると深層格などという媒介物は不要ということになるかもしれない。しかしヨーロッパ連合のように多民族多言語をかかえる組織においては、公文書を域内のすべての公用語に翻訳しなければならないというのは大きな負担であり、二言語ずつの組合わせでなく、個々の言語から中間言語へ、中間言語から個々の言語へという多言語間翻訳が求められるのは自然のなりゆきである。そのような中間言語が存在するかどうかについては疑問をいただく向きも多いが、切実な要求であることは確かである。μ プロジェクト（2.7 参照）は日英・英日の二言語間翻訳をめざすものであるが、ここで辞書に深層格を記載したのは、なるべく汎用性のある手法を開発したいという希望に基づくものであろう。

4) 国立国語研究所の西原鈴子日本語教育指導普及部長の教示による。

2. 諸説概観

深層格に関する諸研究から、日本語につき井上、柴谷、村木、寺村、仁田および科学技術庁機械翻訳プロジェクト (μ プロジェクト)、英語につきフィルモアおよび μ プロジェクト、ロシア語につきアプレジャンの報告を対象に概観する。

村木は、動詞につき深層格そのものを主題とするが、フィルモア、井上、柴谷は、変形文法、生成文法または格文法の諸問題に関連して、アプレジャンは、辞書の記述、特に語の意味や述語の支配パターン¹の記述に関連して、深層格を論じる。 μ プロジェクトは、科学技術、特に電気工学分野を対象とする抄録を資料に、日英・英日機械翻訳を目的として日英両言語に深層格を立てる。寺村は、動詞・形容詞・名詞述語の分類、仁田は、動詞の分類を行うため深層格を分類基準の一つに使っている。

深層格とは何かの定義については、報告者はほぼ一致する。すなわち、深層格とは、述語と共起する名詞句の述語に対する意味的關係、または、述語の意味する現実の一断面、あるいは動作・状態・関係、シチュエーション・こと・事柄・出来事においてその必須または随意的参加者の担う意味的役割とする。ただし、深層格の名称は、報告者により、「格」「役」「深層格」「意味範疇」「叙述素」「格ラベル」「意味的結合価」と異なる。

深層格の種類、定義、認定法はどの報告も最終的でも網羅的でもない。

深層格の種類について、フィルモア、井上、柴谷は比較的少数、他の報告者は比較的多数認める。この分野の多くの研究者が、自分の設ける深層格に関して、アプレジャンの言うように、「必要と思うが、十分であるとはしない」であろう。

個別の深層格の定義および認定について、すべての報告者が有効な、手続き的、形式的、使える基準を設けることに努めている。例えば、表層の文の格お

よび格交替、文法関係、受動・使役その他の変形、言い替え、反問誘発テスト等を利用している。しかし、これらの基準は、問題の難しさから予想できるように、多くの場合決定的な決め手とはならず、結局、定義は、直感的記述や例文を挙げることに多く依存している。また、深層格の必須・随意の問題については、深層格の定義・認定の場合と同様に、あるいは、それ以上に、形式的手段が少なくない。

以下、各報告の主題とは別に、深層格の問題だけに注目し、例文を中心に概観し、できるだけ多く例文を示す。若干の場合に原例文の述部に限り、あるいは補う。

深層格に関する記述は、原報告者の記述に従い、個々に断らずに引用する。

例文は能動相の単文——基本文（単位文）とする。ただし、使役文、受動文、連体修飾節、名詞句その他の基本文ではないものも、報告の理解に役立つ場合や格認定の基準を示唆する場合は示す。深層格と表層の格との対応を見るとき、基本文で取る格を表層の格とする。この場合語彙的使役文は他動詞を述語とする基本文とする。

深層格の配列順は、報告に深層格の一覧表または要約がある場合はその順序に従う。順序が明らかでない場合は報告者の議論や説明の順序と報告の比較の便とを考慮して並べる。

比較のため各報告者の深層格と格助詞の対応を付表 1 に示す。他の問題、例えば、同じ深層格の定義や同一または同種の例文に対する各報告者の深層格指定の比較、また、深層格設定の妥当性等の評価は、多くの未解決の問題を残す研究の現状、ならびに、報告者によって深層格の扱いおよび関連する主題が大きく違うことを考慮して、試みなかった。

2.1 チャールズ J. フィルモア

フィルモアは、チョムスキーの標準理論が、深層構造のもつ情報から、文のすべての意味解釈は導けないこと、例えば、文の主語に動作主、経験者、起点、原因等の意味を与えられないことから、基底の構造に格範疇を導入する。すなわち、単文の命題核は、述語と一つまたはそれ以上の格範疇からなるとす

る。他方、語の意味の記述の観点から言えば、フィルモアは、記述を論理学における predicate—argument の枠組で捉え、アーギュメントの個数だけではなく、アーギュメントの意味的内容、すなわち、役を指定することを必要と考え、プレディケートの役構造を格理論の意味目録に基づき決めるとアプレッションは言う。

格文法の理論そのもの、また、設定する深層格の種類および定義が初期から種々変わっているが、以下、主に 1971 年の文献による。

[要約]

1. 深層格の種類 9 種

動作主格 (Agentive)、経験者格 (Experiencer)、道具格 (Instrumental)、対象格 (Objective)、源泉格 (Source)、目標格 (Goal)、場所格 (Locative)、時間格 (Time)、経路格 (Path)。ただし、経路格は、一文一格の原理に関連して今後の検討課題とする。

なお、以前、経験者格と目標格に当たるものを与格 (Dative)、また目標格で結果に関する部分を作格 (Factitive) あるいは結果格 (Resultative) としている。

2. 一文一格の原理

一文一格の原理は、同じ格が、複合的な場合を除いて、単文 (基本文) に一回しか起こらないとする。多数の研究者が陰に陽にこの原理を認めているが、アプレッションは一部異なる見解を述べている。

3. 二重の格役割

文中において名詞句が果たす意味的な役割が同一指示的な場合がある。移動や状態変化を表わす述語の場合に、動作主格または対象格が、目標格や源泉格と同一指示的であるとする。

4. その他

格の階層性について、格の間の主語選択の順位を示す。すなわち、動作主格、経験者格、道具格、対象格、源泉格、目標格、場所格、時間格の順である。

[各論]

動作主格：ある動作を引き起こす者の役割。意図的、かつ有生。

- I broke the door with a hammer.
- John killed the bird.

経験者格：ある心理事象を体験する者の役割。心理動詞「想像する・喜ぶ・好む」等の主体。

- I think that you are wrong.
- The play amused some of the audience.
- To me he is tall.
- I am warm.
- John was sad.

道具格：ある出来事の直接原因となったり、ある心理事象と関係して反応を起こさせる刺激となる役割。

- John broke the window with a hammer.
- A hammer broke the window.
- This jacket is warm.
- The movie was sad.
- The noise frightened me.

対象格：移動する対象物や変化する対象物。あるいは、判断、想像のような心理事象の内容を表わす役割。さらに、意味的に最も中立的。非心理動詞「死ぬ・成長する」等の主語は対象。

- I broke the window.
- The window broke.
- I imagined the accidents.
- The noise reminded me of the accidents.
- John killed the cat.
- The cat died.

源泉格：対象物の移動における起点、また状態変化および形状変化における最初の状態や形状を表わす役割。時間における起点も含む。最初の2例で文末の前置詞句は各々空間の移動、変化の結果・状態に関する目標格である。最後の

2例は二重の役割に関わる。

- Mary went from her house to the store.
- It changed from an ugly duckling to a swan.
- John sold roses to Mary. 動作主格・源泉格。
- The acorn developed into the oak. 対象格・源泉格。

目標格：対象物の移動における終点、状態や形状の変化の最終的な状態・結果を表わす役割。時間における終点も含む。最後の2例は二重の役割に関わる。

- The play lasted from 7 p.m. to 10 p.m. “from 7 p.m.” は源泉格。
- He sent a package to Mary.
- I wrote a poem.
- John hit his cane against the fence.
- Mary bought roses from John. 動作主格・目標格。
- John made a canoe out of every log. 対象格・目標格。

場所格：ある出来事が起こる場所および位置を表わす役割。

- It is warm in the room.
- He lived in Milwaukee in the forties.
- The room is warm.

時間格：ある出来事が起こる時間を表わす役割。

- Jeffrey spent Tuesday afternoon at the beach.
- Summer is warm.

経路格：移動動詞で源泉格（出発点）と目標格（到着点）が担いきれない部分を補う。最後の例は「同一の経路表現が連続的につながり解釈するかぎりでは、経路が示された文中には無数の経路表現が含まれる」ことを示す。

- He walked from the cemetery gate to the chapel along the canal.
- He walked down the hill across the bridge through the pasture to the chapel.

2.2 井上和子

フィルモア提唱の格文法に関連して、文の述語と共起する名詞句の役割とし

での「基底の格」に関する情報を素性表示として述語に与える格素性論を提案し、格素性を、「個別に述語に与える場合」と、「意味素性（〔変化〕や〔動作〕等）に基づき下位分類した述語の各下位類に一般的に与える場合」とを論じている。両議論の中で基底の格の扱いには僅かな違いがあるが、以下、両議論で挙げてある格をすべて示す。

[要約]

1. 深層格の種類 9+3種

動作主格、対象格、起点格、経験者格、目標格、助格、原因格、位置格、対称格。

使役文につき、語彙的使役文を含め、使役動作主格、許容動作主格、受益格。

2. 二重の格

二重の格につき、次の三つの場合、すなわち、起点動作主格および起点対象格を設ける場合、文の主語に立つ有生の起点格、目標格、対象格が、動作主解釈を「一般的に」受ける場合および「副詞等文の他の要素を含む文脈により」、すなわち、動作主文脈により受ける場合を区別する。一般的な動作主解釈では、起点格は使役動作主、目標格は許容動作主とするが、対象格は、主語になるのは自動詞文であるから、使役・許容の区別は不要である。なお動作主文脈は次の通り。意図や様態を示す副詞、例えば、「ワザト」や「セカセカト」をもつ文、～テミル文、～ヨウトスル文、ニ使役文、可能文、～タメニ文、「ソウスル」による代用化、「～シタコトハ～ダ」による擬似分裂文、命令文がそれである。

3. その他

感情動詞における感情の源としての起点格を認める。

有生起点格の一部を起点動作主格、「自発性」ある対象格を起点対象格とする。デ格の位置格を認めない。

格の間の主語選択の順位について、議論の一部で、次の順位を示している。すなわち、動作主格、起点格、経験者格、目標格、対象格、原因格、助格、位置格の順である。

[各論]

動作主格：動作を起こす有生名詞句。有生の意志的行為。意図的でなければ、同一述語でも動作主格ではない。状態変化を起こす動詞「溶かす・亡ぼす・埋める・決める・育てる」、直接の働き掛けを表わす動詞「読む・書く・写す」、動作・行為を表わす活動動詞「歩く・立つ・走る」の類の主体。多項述語能動文や一項述語文の有生主語になる。ガ格。直接受動文ではニまたはニヨッテを取る。なお報告にはデ格の動作主の例は見られない。最後の例の主語は使役動作主格でもある。以下、例文を同一行に2文以上示す場合は中点で区切る。

- 子供が駅まで歩く・子供が立っている
- 学生たちが掲示を読んでいる・子供がこのトラックに乗った
- 太郎は枯枝を折った・太郎はガソリンで家財道具を焼いた 「ガソリンで」は助格。
- 兄が東京に居ます
- 彼はわざと転んだ 動作主文脈がなければ普通対象格。
- ジョンが課長になった・僕はジョンが課長になって欲しい 意図がなければ対象格。
- 太郎は子供を駅まで歩かせた 使役動作主格参照。

対象格：有生・無生の動作の対象。行為の結果として状態変化を起こすもの。行為の単なる対象で変化を受けないもの。属性の対象も含む。状態変化自動詞文では主語、他動詞文では目的語である。また普通自動詞文の有生主語は対象格である。ガ格、ヲ格。ニ格の対象格を認めるように見える例が動詞「気づく」についてある。自動詞「上がる・下がる・泊まる・集まる・加わる・変わる」等の有生主語は動作主対象格となる場合がある（第一例第2文、第十一例参照）。

- 多額の金が集まった・学生が集まった
- ジョンがこの問題を解いた・この問題が解けた 起点対象格参照。
- 洗濯物が二階から落ちた・ピアノがこのトラックに乗った
- ジョンが梯子から落ちた・この箱には子供が3人入る 意図的ならば動作主。
- 机の上に辞書が数冊ある

- 多くの人々が無差別爆撃で死んだ・加藤氏は子供を死なせた
- 妹が本を彼から借りた
- 若い人達は彼の成功を羨んでいる 「若い人達は」は起点格。
- 私は足がだるい
- 太郎は誤りに気づく・父は太郎に誤りを気づかせた
- 選手団が宿舎へ引き上げた 動作主対象格（一般的解釈）。
- 太郎は二階から落ちてみた 動作主対象格（「みた」は動作主文脈）。

起点格：無生または有生。運動の始まる所や原動力。カラ格。有生主語はガ格を取り、一般に動作主の解釈を受ける。動作や感情の源も表わし、感情動詞「愛する・信じる・羨む・憎む」類の有生主語が関わる（直接受動文でニ格／カラ格を取る）。

- 洗濯物が屋上から下へ落ちた・ニュースが首相の側近から議員たちに伝わった
- 私は妹を壇からおろした
- 太郎は友達から手紙を受け取る
- メアリーがジョンを愛した・ジョンがメアリーに／から愛された
- 加藤さんは市に家を寄付した 動作主起点格（一般的解釈）。
- 彼は友達に手紙が書けた 動作主起点格（「書けた」は動作主文脈）。

経験者格：ある行為または出来事に関わりを持つ、あるいは、経験する有生名詞句の格。有生の感情経験主。統語上動作主文脈に入らない。また～タイ文、形容詞化構造の主文の主語、知覚・心理・感覚動詞文の主語や与格主体になる。述語「気づく・感じる」「見える・聞こえる・気がする」「楽しむ・喜ぶ・悩む」「ほてる・だるい・かゆい」の類に関わる。ガ格、ニ格、ヲ格。最後の例の2文は語彙的使役文である。

- われわれが異様な物音に気づいた・太郎がそのニュースにがっかりした
- 花子は父の成功を喜んだ・ジョンは宿題を忘れた
- お父さん（に）はこの字が見えない・私にはいやな予感がした・ジョンはメアリーが羨ましいのだ
- 花子は足がだるかった・太郎は顔が黒い

- 花子は歯を折った・太郎は足が滑って転んだ・彼は火事で家財道具を焼いた
 デ格は原因。
- 太郎が財布を落した 故意ならば動作主格。
- 加藤氏は子供を死なせた 使役文。
- 強盗がピストルを突きつけて家人を脅かした・加藤氏の言動が人々を苦しめた

目標格：無生または有生。動作の目標。ニ格、へ格、マデ格、ガ格。有生で主語に立つとき動作主の解釈を受ける場合がある。

- このニュースが首相の側近から議員たちに伝わった・大きな小包がアメリカから太郎の家に／へ届いた
- 加藤氏が市に家を寄付した
- ジョンは課長になった
- 洗濯物が屋上から下へ落ちた・選手団がクラブへ引き上げた
- 田村先生は子供たちを学校から駅まで歩かせた
- 学生たちは学校から通知を受け取った・子供たちが洋服を買った 動作主目標格。
- 彼は友達から手紙を受け取ろうとした 動作主目標格（動作主文脈による）。

助格：動作のための道具。動作主格と共に起。主に無生。デ格。動作受動でデ格、状態受動でニ／デ格を取る（ニヨッテを取らない）。ガ格が道具を示す場合がある。

- 太郎はガソリンで家財道具を焼いた・死体はすばやく毛布で覆われた
- 白い布が箱を覆っている・箱が白い布に／で覆われている
- 行列の人々がその家を囲んでいる 有生助格の例、意図的ならば動作主格。

原因格：有生・無生。動作や状態の原因。ヲ格、ニ格、デ格、語彙的使役文でガ格。

- ジョンは父の死を悲しんだ
- ニュースにがっかりした・犬が見知らぬ人に驚く
- 父の死で花子の運命が変わった・山田君は進学のこと悩んでいる・ジョンが火事で家財道具を焼いた

○父の死が花子の運命を変えていた・晩霜が苗木を枯らした 語彙的使役文。

○見知らぬ人が犬を驚かせた 有生原因の使役文。意図的ならば動作主格。

位置格：ニ格（状態）、ヲ格（移動）を取る。無生または有生。第三例の述語の類は対称格も取る。

○たいていの官庁が都心部にある・秘書が机の上に原稿を置いた

○運転にその人の性格が反映される

○電車がバスに衝突した 「電車の方が動いてきて衝突した」の意味。

○橋を渡って、まっすぐ行くと、右手に郵便局がある

対称格：特定の行為または相違・遠近・平行などの状態に主語と対称的に関与するもの。必ず相手を必要とする行為または状態の関与者。ト格。「同時の出来事・一緒」や「別個の出来事」のト格は深層格としない。なお対格に関わる対称格の例文（「甲を乙と連結する」等）は見られない。

○太郎が花子と結婚した

○太郎が次郎とぶつかった 「両者が動いてぶつかった」の意味。

○A線とB線は平行だ

起点動作主格：起点格、目標格、および対象格を取る述語において、有生目標格が主語に立つ場合ニ／カラ格交替をする有生起点格をいう（「受取る・相続する」類の起点格はニ格を取らず、単に起点格）。主語に立ち、ガ／カラ格交替する有生起点格も起点動作主格とるように見える。動詞「貰う・借りる・教わる・聞く」または「貸す・教える・紹介する」類に関わる。

○妹が彼から／に本を貰った

○太郎が／から弟に本を貸した

起点対象格：状態変化を起こす自発性のある無生対象物。ヲ格、ガ格。対象格では「問題が解けた」「日程が縮まった」に対し、「問題を解かした」「日程を縮ませた」とは言えない。例は動詞句で示す。

○氷を溶かす・ご飯を蒸らす・晩霜で庭木を枯らす

○氷が溶ける・卵が腐る・ジェリーが固まる・毛織物が縮む

○ジェリーを固まらせた・シンナーを蒸発させた・卵を腐らせた

使役動作主格：ガ格。第一、四例で被使役者は対象格。

- 田村先生は子供達を学校から駅まで歩かせた。
- 田村先生は子供達を一階から二階へ上げた 語彙的使役文。
- 団地の人々がバスを走らせた／バスを止めた
- 父は太郎に過ちを気づかせた

許容動作主格：ガ格。第一例の被使役者は動作主格。

- 兄は弟に進学させた
- 両親は子供たちに洋服を買わせた 文意によっては使役動作主格。

受益格：例文のみ。ニ格。目標格第六例参照。

- 両親は子供たちに洋服を買わせた

2.3 柴谷方良

生成文法の立場から、日本語の文の構成において名詞句が果たす各種の意味的役割、名詞句と述語を結ぶ意味関係および意味的役割と格助詞の関係を考察する。

[要約]

1. 意味的役割（意味範疇） 11種

動作主、対象、起点、経験者、目標、道具、由来、場所、共役者、基準、受益者。

2. 二重の意味的役割

動作主・起点および受益者・目標の例が挙げてある。

3. その他

経由や起点のヲ格名詞を対象と見る可能性を指摘している。

連れ・共同行為の意味の共役者を認める。

使役文につき、使役者は、消極的許容（この場合、経験者）を除き動作主とする。なお被使役者は、表層文では、誘発使役のニ使役文では動作主、ヲ使役文では対象、許容使役の場合ニ使役文（積極的許容）ならば動作主、ヲ使役文（消極的許容）ならば対象とする。

[各論]

動作主：意志的に動作・行為を引き起こす主体。活動動詞「走る・歩く・立

つ」類に関わる。動作を引き起こす者も意志的でない限り動作主ではない。反対に、自然・反射的な「笑う・泣く」の類も意志的ならば動作主。ガ格。

○太郎が走る・次郎が本を読む

○太郎が〔わざと〕転んだ〔 〕部は筆者。以下同じ。

○彼は太郎に走らせた・そのシーンで監督は太郎に泣かせた 誘発=使役文。

○彼は太郎を走らせた・そのシーンで監督は太郎を泣かせた 誘発ヲ使役文。

○〔親が〕よし、と言って、子供に行かせた 積極的許容使役文。

対象：ある動作・所有・状態・性状描写の対象、動作の関与しない事態・事情を表わす述語と共起する対象。愛情・称賛・叱責動詞の類の対象。意志的でなしにある動作・事象に巻き込まれる者・物。ガ格、ヲ格。ヲ格の起点または經由点の意味合いは動詞の意味から出るとする。

○太郎が氷を溶かした・太郎が本を読んだ

○太郎が一階から二階に本を運んだ・太郎が花子に英語を教えた

○氷が溶けた

○太郎が気絶した・太郎が風邪を引いた

○太郎が転んだ・太郎が動いた・太郎が笑った 無意識的・不随意的。

○太郎は若い・その花はきれいだ

○太郎は花子が好きだ・太郎は金がたくさん要る・太郎は英語ができる

○家を離れる・国を出る 離れる起点の意味合い。

○空を飛ぶ・日本の領空は外国機に飛ばれている 經由点の意味合い。

○太郎は次郎を気絶させた・花を咲かせた 誘発ヲ使役文。

起点：空間的・時間的な起点や源泉。カラ格。二重の意味的役割については「動作主であると同時に起点であれば」〈動作主・起点〉とする（直接受動文の場合、または、能動文で主語に立たない場合にニ／カラ格交替をする）。基本文で主語ならばガ格。愛情・称賛・叱責等が動作主を起点として対象に向うことを表わす感情の動詞「愛する・羨む・誉める・怒鳴る」類（直接受動でニ／カラ交替）の主体も指す。

○太郎は家から出た・太郎は次郎と駅前から歩いてきた

○東京から大阪まで・何時から（何時まで）

- ブドウからワインをつくる 源泉の意味合い。
- かれが良い印象をあたえる
- 太郎が本から英語を習った
- かれが彼女に金をあたえる／やる・彼女が金をかれに／からあたえられる／もらう 〈動作主・起点〉。
- 太郎が山田先生に／から英語を習った 〈動作主・起点〉。
- 先生から誉められたよ 〈動作主・起点〉。ニ格も取る。

経験者：感情を経験する主体。述語「好きだ・ほしい・～たい」類に関わる。カ格。

- 僕は花子が好きだ
- 親が子供を死なせた 消極的許容使役文。
- 私は母に死なれた 間接受動文。

目標：行き着く目標。へ格（方向）またはニ格（目標・帰着・密着）を取る。両者の区別は個別の動詞による。二重の役割〈目標・受益者〉は、「受益者であると同時に行き着く目標」をいう。能動文で主語に立つ有生目標格については明確な例文はない。

- 太郎が一階から二階に本を運んだ
- 東京へ飛んだ
- 太郎が花子に英語を教えた 〈受益者・目標〉。

道具：次の例文が示してある。デ格。最後の例は材料や手段を道具に含める場合である。

- 太郎は部屋で花子とハサミで紙を切った
- ぶどうでワインをつくる・バスでやって来る

由来：間接的影響の由来を表わし、ニ格を取る。間接受動文のニ格名詞はこれに当たる（有情物、雨・風など自然の力、または「自動車」のように自力をもつもの）。

- 酒に酔う・雨にぬれる
- 借金に困る・火事に驚く
- 私は母に死なれた 間接受動文。

場所：場所を示す。動詞によってデ格（静的場所）およびニ格（動的場所）を取る。「働く・遊ぶ・泣く」類はデ格、「住む・居る・在る」類はニ格、「飛ぶ・舞う」類は両方を取る。

○僕の兄は東京に住んでいる。

○子供達は道路で遊んでいる。

○雲雀が空に／で飛んでいた 「空を飛ぶ」は対象の項参照。

共役者：下記の例文が挙げられている。ト格。ト格を取る動詞「争う・平行だ」類への言及はない。

○太郎は次郎と駅前から歩いて来た・太郎は部屋で花子とハサミで紙を切った。

基準：比較のヨリ格。

○太郎は次郎より大きい、「太郎は」は〈対象〉。

受益者：所有・必要・可能概念が帰属する者。ニ格、ガ格。二重の役割を担う場合がある。

○次郎には本がある・俺にはあの人絶対必要なんだ・僕は英語がわかる。

○太郎が次郎に本をやった・太郎が花子に英語を教えた 〈受益者・目標〉。

2.4 寺村秀夫

「コトの類型」の考察に関連して、日本語の動詞、形容詞・形容動詞、名詞に関わる述語の分類を、動的事象の描写・性状規定・判断措定・感情表現・存在または所有の表現・コトを含むコトの表現を対象に、述語の必須補語・準必須補語・副次補語、補語が文中で取る格助詞、補語のコトにおける役割としての「格」（深層格）に基づき行なう。

以下、原報告の中の深層格に関する記述に注目して定義や例文を示す。

[要約]

1. 深層格の種類 32種

述語に必須的に伴うものとして、仕手、感情主、主体、出来事、存在するもの、判断の主辞、受け手、目当て、作品、内容、対象、通り路、所有・所属する人、相手、片方、誘因、基準、存在の場所、変化の結果の状態、出どころ、

到達点。ただし、〈出どころ〉および〈到達点〉は特定の表層格で次の副次的な格としての定義も受ける。

述語を特定することなく、ほとんど任意の述語に特定の表層格で伴うものとして、動的事象を包む場所（デ格）、出どころ（カラ格）、到達点（マデ格）、連れ（ト格）、時（ニ格）、期限（マデニ）、判断の及ぶ範囲（デ格）、比較の基準（ヨリ格）、道具・手段（デ格）、原因（デ格）、規準（デ格）、動作主（デ格）、性状主体の一部ないし一面特定（ガ格）。

2. その他

表層における文法関係を重視し、例えば、「郵便が届く」、「郵便を届ける」における「郵便」は各々異なる深層格〈仕手〉、〈受け手〉とする。なお、他に文の主語に立つものは、〈感情主〉〈主体〉〈出来事〉〈存在するもの〉〈判断の主辞〉である。

深層格は、〈感情主〉〈相手〉〈内容〉〈対象〉〈出どころ〉〈到達点〉〈時〉を除き、各々一つの表層格だけに対応する。

〈連れ〉のト格を認める。（柴谷、μプロジェクト参照）

〈性状主体の一部ないし一面特定〉を認める（村木、μプロジェクト、アプリケーション参照）。

一項動詞につき、判断の主辞を取る判断措定および品定め主体を取る形容詞的述語を除く述語、例えば、「明ける・暮れる・降る・融ける・降る」「始まる・鳴る・こわれる」「泣く・死ぬ・生まれる」の類は、「主体の動作・作用・変化をいうだけで充足しており」、「主体」を取るとするように見える。

[各論]

仕手：対象や客体への物理的・心理的働き掛け、対面、相互動作の主体。ある対象または客体を目指す感覚・感情の動き（「見る・嗅ぐ」「愛する・憎む」等）の主体、移動の主体、移動に働き掛けの加わる述語（他動詞類）の主体、モノおよびコトの授受の主体。ガ格。直接受動でニ格を、上記感情動詞はカラ格も、取る。以下例の一部で「甲・乙」、格の名称を〔 〕部で補った。

○甲が人を殺す・猪が畑を荒らす・何者が社長を誘拐した ヲ格〈受け手〉。

○女たちが佐助をじっと見つめる ヲ格は〈目当て〉。

- 甲が乙を愛する・甲に／から愛される ヲ格は〈目当て〉。〈感情主〉も参照。
- 義満は金閣寺を建て、義政は銀閣を作った ヲ格は〈作品〉。
- 船が港を／から出る・煙が部屋から出る カラ、ヲ格は〈出どころ〉。
- 東京の上空を飛行機が飛んでいる ヲ格は〈通り路〉。
- 子供が電車をおりた・彼が郵便を先方に届ける へ、ニ格は〈到達点〉。
- 弾が彼に当たった・銀行が彼に金を貸す ニ格は〈相手〉。
- 犬が猿とけんかする・甲が乙と愛し合う ト格は〈片方〉。
- 組合が会社に賃上げを要求している ヲ格は〈内容〉。

感情主：一時的な気の動き「驚く・怒る・興奮する」類の主体、能動的な心の動き・積極的感情の発動「愛する・嫌う・たのしむ・望む・恥じる」類、感情の直接的表出「恐ろしい・羨ましい・心配だ（ニ格も許容）」「欲しい・好きだ（ガ格のみ）」「～たい」類の主体。ガ格。第三例で主語を〈仕手〉とする場合があるが、両者の相違は明らかでない（仕手の項参照）。

- 甲は物音におどろく ニ格は〈誘因〉。
- 甲が成功をよろこぶ ヲ格は〈対象＝目当て〉。
- 甲は乙を愛する ヲ格は〈対象＝目当て〉。
- 僕（に）はそれがおそろしい ガ格は〈対象〉。感情的品定めとの違いに注意。

主体：状態変化「なる・分かれる・減る・決まる」や感覚作用・思考作用・発話行為「見る・思う・言う」類の主体、相手や片方に対する性状・態度「賛成だ・平行している・同じだ」、絶対的・相対的性状規定「長い・易しい・丸い」や感情的品定め「かわいい・恐ろしい・哀れだ（感情形容詞が主体の一般的性質を述べる場合）」類の対象、ある種の集合の中のある種の部分集合の存在（最後の例で文頭の「議員」は〈判断の及ぶ範囲（ある集合）〉）。ガ格。

- 信号が赤から青に変わった・人口が2万に減った ニ格は〈変化の結果の状態〉。
- 人が爆発（するの）を見守る ヲ格は〈対象〉。
- 人が神の存在（すること）を信じる ヲ格は〈内容〉。
- 僕は彼に賛成だ・甲は乙と逆だ ニ格は〈片方〉、ト格は〈相手〉。
- 地球は丸い・金は銀より重い・象は鼻が長い
- まむしが〔僕には〕おそろしい ニ格は感情的品定め〈基準〉。

○彼は酒癖が悪くて困る 動詞述語の性状文。

○〔議員の中で〕居眠りしている議員が半分以上あった 〈主体（部分集合）〉。

出来事：出来事の発生を表わす述語「ある・起こる・発生する」類に関わる。
ガ格。出来事の場所は副次的デ格を取る。

○けさ、あの交差点で事故があった デ格は〈動的事象を含む場所〉。

存在するもの：物理的存在（あるとき、あるものが空間を占めて存在する）、
所有・所属的存在。述語「ある・ない・いる・いない・多い・少ない」類に関
わる。ガ格。存在の場所はニ格。

○机上に本がある ニ格は〈存在の場所〉。

○あの人に奥さんがありますか ニ格は〈所有・所属する人〉。

判断の主辞：同定・類別判断の対象。判定詞「だ・です・である」類に関わ
る。ガ格。

○これは桜だ 「桜」は判断の賓辞。

受け手：動作主体〈仕手〉による物理的・心理的働き掛けに直接影響を受ける
客体、授受される対象、移動・変化の客体。ヲ格。

○いのししが畑を荒らす・橋をこわす・突風が看板を吹きとばした

○〔ものを〕食べる・〔本を〕読む

○彼が郵便を先方に届ける・彼は息子を医者にした

目当て：感覚・感情の目指すもの。心理的働きかけの対象、感情の動きにより
必ずしも影響を受けない。〈仕手〉による「見る・見つめる・嗅ぐ・感じる」
「愛する・軽蔑する・好む」類の目当て。なお〈感情主〉による「愛する・尊
敬する・好む」「喜ぶ・恥じる」類が目当てを取るという記述もある（対象の
項参照）。ヲ格。多くの場合直接受動でニ／カラ交替をする。

○女達は佐助をじっと見つめる・甲は〔臭いを〕嗅ぐ

○子どもたちが彼を愛している・彼は子どもたちに／から愛されている

○彼はひどくその衝動を恥じた・復讐を恐れる

作品：〈仕手〉により創り出されるもの、動作の結果出現するもの。ヲ格。

○このころ、紫式部が源氏物語を書いた

○穴を掘る・仏像を彫る・写真を写す・湯を沸かす・産業を興す

内容：補語としてコトを包み込むような述語の対象。〈仕手〉の働きかけ「命じる・説明する・感謝する」類が〈相手〉に伝える事柄、〈主体〉の思考作用・発話行為「思う・信じる・告げる・叫ぶ・頼む」類の内容。ヲ格（～コトヲ、ノヲを含む）、ト格。なお主体＋内容節の例を補う。

○運輸委員会が航空会社に事故の調査（をすること）を命じる・〔～に調査せよと〕要求する

○人が神を疑う・神が存在することを信じる

○〔僕は雨が降ると〕思った

対象：〈感情主〉の感情の直接表出「恐ろしい・嬉しい・心配だ・欲しい・好きだ・～たい」類のガ格対象、能動的心の動き・積極的感情「愛する・憎む・喜ぶ・恥じる・望む」類のヲ格の対象（第二例で原報告の記述「対象＝目当て」の意味は明かでない。感情主の項および仕手の項参照）。〈主体〉による感覚作用「見る・見守る・聞く・感じる・匂う」類における「コト」を指すヲ格（またはノヲ、コトヲ）の対象。

○老人（に）はそんなことがうれしい・彼女がその男性が好きだ

○甲が乙を愛する・甲が成功をよろこぶ　〈対象＝目当て〉。

○〔彼は山の爆発（するの）を〕見守る

通り路：移動・通過の場所、通り道。ヲ格。

○門を出る・街道を行く

所有・所属する人：所有、所属する人。述語「ある・いる・多い・少ない」類と共起。ニ格。

○彼女に子供があるとは知らなかった　ガ格は〈存在するもの〉。

相手：〈仕手〉の動き・働きかけが向かう対象（相手）としての対面や対象への態度を表わす「賛成する・噛みつく・飛びかかる・吠える」「恋する・問いかける」「会う・ぶつかる（ト格を取れば〈片方〉）」類のニ格（ニ格に替えられない）、〈仕手〉の関わる授受を表わす「与える・教える・賣る・紹介する・やる（ニ格を取ることもある）」「受ける・習う・買う」類のニ格またはカラ格および動詞「命じる・勧める・説明する」の類のニ格の補語。また、〈主体〉の性状を規定する形容詞的述語や動詞述語「賛成だ・面している」「似て

いる・平行している（ト格を取れば〈片方〉）」「親切だ・厳しい」類の＝格補語。

○共産党が政府案に反対している・犬が私にかみついた・甲は乙に惚れる

○弟子に免許を与える・男から絵を預る・彼に／からお金を借りる

○彼らはこの案に賛成だ・彼は子供に甘い

○人が相手にぶつかる・この子はお母さんに似ている（片方）参照。

片方：〈仕手〉との相互動作「衝突する・結婚する・～し合う・別れる」「会う・似る」類、〈主体〉の性状規定「同じだ・異なる・逆だ」「似ている・平行している」類のト格補語。

○犬が猿とけんかする・甲が乙と愛し合う

○それは彼のやり方と逆だ

○仕手が片方とぶつかる・この子はお母さんと似ている（相手）参照。

誘因：感情の誘因。一時的な気の動き「安心する・怒る・驚く」類に関わる。＝格。

○僕は物音におどろく・その結果に失望する

基準：〈主体〉の相対的品定めや感情的品定め基準。＝格。ニトツテも取る。

○帯に短し、たすきに長し

○この問題が中学生に／にとって難しい

○まむしが〔僕に／にとって〕こわい

存在の場所：存在の述語が必須的に要求する場所。＝格。

○机の上に本がない

変化の結果の状態：始めの状態から移行した結果の状態、源泉からの目標。変化の動詞「なる・変わる・化ける・分かれる・減る・固まる」「変える・決める・増やす・冷やす・割る」類に関わる。＝格。到達点と違い、へ格を取らない。なお変化の前の状態については〈出どころ（元の状態）〉を参照。

○信号が青に変わった・人口が3万から4万に増えた

○仕手が塀を緑に塗る・彼を議長に選ぶ

出どころ：移動・変化の始まる相。〈仕手〉の移動・変化「出る・降りる（ヲ格も取る）」「通る・走る」「入る・着く・集まる・泊まる」「行く・戻る」の類、

また〈主体〉の「なる・変わる・別れる」類およびそれに働き掛けの複合した他動表現に関わる。カラ格。最後の例は副次的にカラ格で出発・開始・原料・順序を表わす。

- 彼が部屋を／から出た・電車を降りた・裏通りから家に入る
- 信号が赤から青に変わった 〈出どころ(元の状態)〉。
- 東京から大阪に移った・5時から会を始める・芋から焼酎を造る・君から始めてくれ

到達点：移動・変化の終わる相。ニ格、へ格。「通る・渡る・歩く・飛ぶ」「行く・来る・帰る」類、「入る・着く・達する・泊まる(へ格を取らない)」およびそれに「働き掛け」の加わる他動表現に関わる。最後の例は副次的にマデ格で時間・場所・状態を表わす。

- 早く向う側に／へ渡れ・学校に／へ行く 〈到達点(目的地)〉。
- 三番線から電車に乗る・人口が一億に達する・後に残る・山頂に立つ
- 母親が子供を風呂に入れる・YをZに比べる
- 駅まで走る・3時まで休憩します・県知事までなあって、

動的事象を包む場所：コトの構成上必須・準必須の場所としての到達点その他の特定の場所とは区別した任意の文要素である場所、あるいは一般的な場所。デ格。

- 彼は1828年に松阪で亡くなった・駅前でバスを降りる・山頂で立つ
- 叔父さんのところで／桜の木のところで～

連れ：随伴のト格。人の意志的行為を表わすほとんど任意の動詞に伴う。

- 太郎は花子と山へ行った

時：ほとんどの叙述に加えられる時間的限定、時の点や時の幅。ニ格。無格。

- 3時に・1月までに 助詞を常に取る。
- 今朝／昨日 助詞を取らない。
- 春(に)／休みの間(に)／1980年(に)～

期限：ある時点を指定し、それ以前に起こってもよいが遅くともその時点には動詞が示す事態が実現し、それ以後は結果の状態が続くことを表わす。マデニを取る。なお述語が継続性動作動詞ならば、動作がその時点までに始まっている。

るか、終わっているかを表わす。

○3時までに帰る／来る／始まる。

判断の及ぶ範囲（空間の広がり、またはある集合）：比較、特に「最もどうこうだ」という言い方の述語に伴う。デ格。動的事象の場所を示すデ格と違う。

○この店はこの町で一番うまい・高見山が幕内で最も重い

○[出席者の中で] なにか質問したい人はありませんか 主語は〈主体（部分集合）〉。

比較の基準：性状規定の述語に伴う。ヨリ格。

○高見山は朝夕より重い・コーヒーより紅茶（のほう）がよい

道具・手段：動作の補助に使われる「何か」・道具。デ格。

○ナイフで網を切る・バスで行く

原因：できごとの原因。デ格。

○家を火事で失った・結核で死んだ

規準：述語の表わす事態が成立する条件、依りどころ、規準。デ格。

○2枚で1500円です・時速100キロで走る・これで終わりです

動作主：機関、ある資格をもつ人が動作主体でデ格を取ることがある。ガ格の動作主を認めるかどうか、また、〈仕手〉との違いは明らかでない。

○警察で取り調べたところ、うそだと分かった

○～の欄は申込人のほうで書き込んで下さい

性状規定表現における主体の一部ないし一面の特定：ガ格。全体と部分に関わる。「XがYが～」において、Xが、「Yが」を省いても、述語とつながることを一応の規準とする。つながらぬ場合は単なる性状規定の〈主体〉である（例えば「象は鼻が長い」）。

○あの兄弟は顔がよく似ている

2.5 仁田義雄

約1000の動詞につき、格体制、すなわち、動詞が要求する共演成分が取る「格」の組み合わせに基づく分類を試みている。格とは共演成分の動詞および他の共演成分群に対する類的な関係的意味のあり方である。共演成分は、述語

を構成する動詞の表わす動き・状態・関係の完成・実現に必須的に参画する関与者である。「表層で表示される格助詞を重視したため、深層的な意味関係である格については分析が不十分である」と言う（文献 37）。

以下、格に注目して述語とそれを含む例文を示す。

[要約]

1. 「格」の種類 13 種

主、対象、相方、片割れ、めあて、領域、基因、手段、同定項、経過域、ゆく先、出どころ、ありか。ただし、他に、経由域と仮称される格を認めれば、格の種類は 14 種。

2. 格の下位種

格には下位種を有するものがある。下位種は格の後の括弧内の区分で示す。

〈主〉は、運動、変化、状態に下位分類。ただし、例文には、他に、現象、動き、変化—運動、相互、被同定項の区別も見える。「現象」は「状態」に属し、「動き」は「運動」や「変化」を含むように見えるが、これら下位種の間関係は明かでない。

〈対象〉は、変化および非変化に下位分類。ただし、例文には、他に、相互、被同定項の区別もある。

〈めあて〉は、基準、対手、目的に下位分類。

〈経過域〉は、空間、時間に下位分類。ただし、例文には、場所という区分もある。

〈経由域〉は、空間、非空間に下位分類。

〈ゆく先〉は、場所、状態に下位分類。なお、「場所」については、その下位に、空間的場所と非空間的場所を区別した例もある。さらに、前者を名詞が「場所的」か「物的」かに従って場所的場所と物的場所に区別する場合もある。

〈出どころ〉は、上記〈ゆく先〉と同じ下位分類。ただし、材料—状態という区分も例文にある。

〈ありか〉は、空間および非空間に下位分類。ただし、能力を示すとする例文、また場所という区分を示した例文も見られる。

3. 格の複合・二重指定

格の複合・二重指定は「文法的な格と場所論的な格」に基づく。二重指定は次の通り。

〈主：ゆく先〉、〈主：出どころ〉、〈対象：ゆく先〉、〈対象：出どころ〉、〈相方：ゆく先〉、〈相方：出どころ〉、〈基因：出どころ〉。他に、〈出どころ：材料〉の例があるが、分類上の位置は不明である。

なお、二つの格をハイフンで結ぶ場合がある。この場合が格の二重指定に属するか否か、あるいは、両者の相違は明らかでない。

主一対象、対象一主、相方一主、ゆく先一ありか、出どころ一ありか、ありか一手段。

4. 主体または対象の関与の区別

〈ゆく先〉、〈出どころ〉、〈ありか〉につき、〈主〉または〈対象〉の関わりを区別し、格の下に小さく「主体」または「対象」と記す。本報告では、「/対」を添える。例えば、「床から棚に荷物を上げた」では、対象「荷物を」が関わる「床から」、「棚に」は各々〈出どころ/対〉、〈ゆく先/対〉である。なお〈主〉が関わる場合は、原報告は明示していない。

5. その他

〈基因〉および〈手段〉のデ格について狭く定義する。例えば、「大雨で川が溢れた・彼は交通事故で死んだ」および「バットで塀を壊す・バスで来た」におけるデ格は格成分ではなく、付加的修飾成分とする。

格の中で〈主〉〈相方〉〈領域〉〈手段〉〈経過域〉または〈経由域〉が一つの表層格だけに対応する。

[各論]

格は二重指定やハイフンで結ぶ場合等種類が多いので、以下すべて見出しを立てて示す。

主：動きや状態を体現する項。カ格。状態（あり様や性質の広がり・近づき・存在）、現象の知覚、動的事象の存在、自らの運動・移動・経過・在りか占め、自らの様変わり・位置変わりを表わす動詞に関わる。他に同定認定、相互動作も関連。ただし、この格は「常に下位類化して示しているとは限らない」。関係・状態、働き掛け、精神作用・思考判断・言語活動・知覚活動・調査発見そ

の他、様変え・空間の位置変えの主体は「状態」、「運動」または「変化」に属するように見える記述もあるが、例文に明示されていない（最後の3例参照）。例で（ ）内に〈主〉の下位区分を示す。

- 山が聳えている・今日はとても蒸す・国は富んでいる（状態）
- この川は日本海へ注いでいる・机上に本がある・国は資源に富む（状態）
- 富士山が見える・梅の香りが匂っている（現象）
- 昨日近くで火事が有った・僕はけんかに負けた（動き）
- 子供が遊ぶ・人が笑う・犬が吠える・時計が動く・風が吹く（運動）
- 船が川を下る・彼は忙しい日々を送る／田舎に住んでいる（運動）
- アスファルトが溶けた・体重が増えた・彼は課長から部長になった／正気に返った（変化）
- 猿が木から地面に／へ落ちた・男が故郷を去った（変化）
- 上着から袖が外れた・娘は良家に嫁いだ（変化）
- 老人が道端にしゃがんだ（変化—運動）
- 出発が朝9時に決まる（被同定項）
- 豊臣は徳川と争った・自由はわがままと異なる（相互）
- 条件Aは条件Bを含む・曲が哀調を帯びる・この仕事は時間を取る 関係・状態。
- 妻は夫を愛する／本を読む／～と叫ぶ／仕事を怠けた／花を摘む 対象は非変化。
- 母が室を暖める／絵を書く／机を上から下へ降ろす／友を泊める 対象は変化。

主：ゆく先：変化の結果生まれ現われてくる存在・物が変化を体現する項の位置に来るもの。ガ格。所有の位置変え（受け）・情報の位置変え（聞き）の主体・行先。ニ／カラ格の〈相方：出どころ/対〉も取る（最後の例）。（ ）内は〈主〉の下位区分。

- 歯が生えた・成果が上がった（変化）
- 人間は猿から進化した（変化）カラ格は〈出どころ(状態)〉。
- 星のガスは水素とヘリウムから成っている（変化）カラ格は〈出どころ(材料—状態)〉。
- この病気は栄養失調からくる（変化）カラ格は〈基因：出どころ〉。

○ズボンに穴が開いた・肩に痛みが走った(変化) = 格は〈ありか(空間)〉。

○僕は父に／から金を貰った・僕は先生に／から英語を教わった(主: ゆく先/対)。

主: 出どころ: 変化を起こす前の状態が変化を体現する項。移り変わり、様変わり、消え去りに関わる。ガ格。所有や情報の位置変え(授え・伝え・問い)の主体・出所も指し、カラ格との交替もする。この場合ニ格の〈相方:ゆく先/対〉を取る(最後の例参照)。

○謎が解けた・夏が去った(変化)

○大正が昭和と変わった・氷が水になった(変化) ト格とニ格は〈ゆく先(状態)〉。

○僕が／から書類を係りに渡した／三時に集合と伝えた(主:出どころ/対)。

対象一主: 受動としての自動詞に関連。ガ格。対象の意味を帯びた〈主〉を指す。例の第一文で「僕は」は意味上「見つける」運動の主である。

○僕は仕事が見つかった・魚が取れた・お金がたくさん儲かった

主一対象: 動詞自身が受動態的である。相方一主(ニ格)と共演。ガ格。

○犯人は刑事に見つかった・彼は敵に捕まった

対象: 動きが目指す対象を表わす項。ヲ格、ト格。ニ格を取る場合もある。非変化対象は、関係・状態・精神作用、思考・判断、言語活動・知覚活動・調査発見、態度的働きかけ・心的態度の表れ、移動、物理的働きかけを表わす動詞、形式動詞的動詞、同族目的を取る動詞、同定認定に関わる。変化対象は、対象への働き掛けにより動きの前で対象の状態に変化の生じる動き、すなわち、様変え、所有・情報の位置変えに関わる。()内は〈対象〉の下位区分。

○赤色は危険を示す・妻は夫を愛する・月は丸いと思った(非変化)

○英語を話す・お父さんと叫ぶ・本を読む・子供を叱る(非変化)

○家を訪れた・セーターを洗う・会議を行う・舞を舞う・借金を負う(非変化)

○僕は彼から彼女を才女だと聞いている・猫にタマと名付けた(被同定項)

○父は不動産屋から家を買った・僕はその話を彼に聞いた・僕は彼から彼女は才女だと聞いた(変化)

○壁を塗る・人を殺す・財産を増やす・会議を始める・方針を決める(変

化)

○彼は名前を春夫から春雄に改めた・父は机を二階から下へ降ろした・僕は友人を家に泊めた (変化)

○彼女はスカートをスラックスと替えた・直線で点Aを点Bと結べ (相互)
対象 (変化): ゆく先/対: 変化の結果生じた状態が変化を被る対象の位置に来るもの。生み出し、変化させ、在りかへの出現させる対象。ヲ格、ト格。

○母は大豆から醤油をこしらえた

○子供は卵から稚魚を孵した カラ格はく出どころ/対 (状態)。

○父は庭に井戸を掘った・A銀行に口座を開いた =格はくありか。

○子供が絵を書いた・彼女は帳簿に昨日入金と記している

対象 (変化): 出どころ/対: 変化を被る対象が変化の起こる前の状態であるといったもの。消し去り、生み出し、変化させに関わる。ヲ格。

○探偵は謎を解いた・男は土を壺に焼いた・彼は日本語を英語に訳した

相方: 動きの一端を担うパートナーを演じる項 (人名詞)。主体の対象を巡る態度的な表れの相手。動きは方向性をもつが、対象の移動はない。また主体の物理的動き掛け・態度的表れ・心理的な動きの目当て。=格。

○子供は父に書類を見せた/助けを求めた

○犬が子供に吠えた・男が女に恋した・乙に反対する

相方: ゆく先/対: 所有や情報の位置変え (授え、伝え・問い) の相方・行先。^(ママ)
=格。主語はく主:出どころ/対) である。

○僕が/から彼に本を贈った・父は私に正直を宝だと教えた

相方: 出どころ/対: 所有や情報の位置変え (受け取り、貰い受け、聞き) の出所かつ相方。カラ格。=格と交替する場合がある。主語はく主:ゆく先/対) である。

○会計は会員から会費を集めた

○僕はお父さんから/にお金を貰った/その話を聞いた/~と学んだ

相方一主: 動詞自身が受動的な場合相方的であり、主的であるもの。=格。

○犯人は刑事に見つかってしまった 主語はく主-対象)。

○彼は敵に捕まった/捕われた

片割れ：相互性を持つ主または対象の動き・状態の成立の相手を演じる項を表し、ト格を取る。半対称動詞では「非相互的に」ニ格の片割れを取る。第一、二例は〈主（相互）〉の、第四例は〈対象（相互）〉の片割れ。

- 太郎は花子と結婚した 動き。
- 自由はわがままと異なる 状態。
- 彼はお父さんと／によく似る
- 母は水を湯と混ぜた・点 A を点 B と結べ
- 母は水を湯に混ぜた・娘はリボンを髪に結んだ

めあて：動きの及んだり向けられたりする先を表わす項。ニ格。ノタメニ、ニタイシテ。比較の目当てはヨリ格も取る。〈相方〉と違い人名詞とは限らない。

() 内下位区分。

- 彼は結婚式にたくさんの金を掛けた（目的）
- 彼は青春を野球に賭けている・彼は政治に関心を持つ（対手）
- 我々はやり方を彼に倣う・規則に照らして～（基準）
- ペンの力は剣の力より／に優る（基準）

領域：動きや状態がそれとの関連で成り立つ領域。ニ格。ニ格の「ごみ箱」的存在。

- 命に関わる・技術者に向いている・資源に富む・叔父に当たる 状態。
- 才能に自惚れている・試合に敗れた・会社に遅れた・腕力に訴えた 動き。

基因：動きや状態を引き起こす原因となる項。ニ格、デ格。心の動き、心的状態の外への現れ、生理状態に関わる。

- 父は成功の報せに喜んだ・会場が熱演で沸いた・体が暑さに参っている
- 母は物価高に頭を悩ましている・男は痛さに顔を歪めた 再帰用法。

基因：出どころ：基因として捉えられた出どころ。カラ格。

- 病気は栄養失調からくる・成功は血の滲むような努力から生まれる 主語は〈主（変化）：ゆく先〉

手段：動きや状態を引き起こす原因となる項。動詞が要求するもの。デ格。

- 広場が参加者で埋まった・八は二で割れる
- ウイスキーを炭酸で割った・未知数をXで表した

ありかー手段：デ格は手段的、ニ格はありかの色彩を帯びる。

○家が泥に／で埋まっている

○母が砂糖を水に／で溶かした・店員が品物を紙に／で包んだ

同定項：同定認定の相手となる項。ト格、デ格、ニ格。トシテも取る。名乗り、名付け、見なされ、見なしに関わる。例文で同定項に対応する主語やヲ格補語は被同定項である。

○私は山田と言います・彼は頑固者で／として通っている・彼は大統領候補に／として立った

○課長に／で終わった・天才に生まれた・入試の採点が4日で済んだ

○子供を太郎と名付けた・彼を代表に／として選んだ・師と／として敬まう

○出発日を五月に／と決めた・小雨決行に／で纏めた・人生を旅に喩えた

経過域：動きが経過する領域または時間を表わした項。空間の通り抜け、時の経過。ヲ格を取る。() 内下位区分。

○船が川を下っている (場所)

○飛行機が空を飛んでいる (空間)

○忙しい日を暮している (時間)

經由域：「経過域的であつ出どころ的」であることを表わす。具象的・抽象的通り越し。ヲ格。() 内下位区分。

○男は大阪を経て神戸に向かった・汽車は名古屋を過ぎた (空間)

○人口は百万を越した・時間は5時を回った (非空間)

ゆく先：動き(運動・変化)の着点・目標を表わす項。変化・移動の行先。ニ格、へ格、ト格。() 内は下位区分。「対」は対象の関わりを示す。

○信号が青から赤に変わった・氷が水に／となった (状態)

○彼は名前を春夫から春雄に改めた (状態/対)

○男は土を壺に焼いた (状態/対) ヲ格は〈対象(変化)：出どころ〉。

○彼女は成田から米国に／へ立った・彼は友達の家に泊った (空間的場所)

○机を二階から下へ降ろした・デモ隊が警官隊に石を投げた (空間的場所/対)

○成績が二番から五番に下がった・娘が良家へ／に嫁いだ (非空間的場所)

○子供が学校に／へ行った・彼は京都から大阪に越した（場所的場所）

○先生は子供達を講堂に集めた・母はコップを床へ落とした（場所的場所/対）

ゆく先一ありか（空間的場所）/対：対象を移動させ、身体の一部に接触保持する動きの行先・場所。ニ格、へ格。第一例で「手で荷物を持った」ならばデ格名詞は非「格」成分とする。

○男は手に大きな荷物を持った

○母は背中に子供を負っている

出どころ：運動や変化の離点・出発点を表わす項。変化・移動の出所。カラ格、ヲ格、ト格、デ格。（ ）内下位区分。第三例の下位区分は材料的状態的出どころを示す。

○信号が赤から青に変わった・人間は猿から進化した（状態）

○監督は投手を仲田から池田に変えた・彼は新種のバラを在来種から改良した（状態/対）

○人形が土から／で出来ている・ガスがこの星の水素とヘリウムから／で成っている（材料一状態）

○男は故郷を去った・冬は第一線を退いた（場所）

○俳優は舞台中央から下手へ下がった（空間的場所）

○父は机を二階から下へ降ろした（空間的場所/対）

○常識から外れる・本家から／と別れた・急所を逸れた（非空間的場所）

○大蔵省は予算から5%教育費を削った（非空間的場所/対）

○世界中からニュースが集まる・子供は学校から家に帰った（場所的場所）

○人形の首が胴から千切れた・腕から時計が外れた（物的場所）

○母は板から釘を抜いた（物的場所/対）

出どころ：材料/対：例を示す。例文のヲ格名詞は〈対象（変化）：ゆく先〉である。なお、上記〈出どころ〉の項の第三例文の〈出どころ（材料一状態）〉参照。カラ格。

○子供が人形を土から作った・母が端切れからスカートを裁った

出どころ一ありか（場所）：在りか的意味合を帯びる出所。カラ格／ニ格を取

る。抜け落ち、ぶら下がり、遠ざかり的出現に関わる。

- 彼は選から／に漏れた・天井から／に電灯が下がっている
- 先生は名簿から／に彼の名前を抜かした・男は肩から／に鞆を吊っている
(/対)

ありか：〈主〉や〈対象〉の存在する場所。在りかを占める運動・変化、姿勢変化、状態、また、在りかへの存在させ・出現させに関わる。＝格。他に能力の持ち主・在りか、または能力の行使主（＝格／ガ格を取る。最後の例参照）。

() 内下位区分。

- 机の上に本が有る・父は田舎に住んでいる・下水にゴミが詰まった（空間）
- ズボンに穴が開いた・空に月が出た・子供が彼らに生まれた（空間）
- ねずみが壁に穴を開けた・あの山はいつも頂上に雪を頂いている（空間/対）
- 彼のやり方には問題が有る・鯨は哺乳類に属する（非空間）
- 我々は明日に試験を控えている・彼は仕事に生きがいを見つけた（非空間/対）
- 子供が紙の上に絵を書いた・彼女は帳簿に昨日入金と記した（場所/対）
- 彼女には／がその問題が解ける・君にはあの富士が見えるか

2.6 村木新次郎

叙述素（述語素）について日本語の動詞（和語動詞約 900 語を含む）の場合を論じる。叙述素とは、動詞の意味の内容上の結合能力に基づき支配される名詞と動詞の間に成立する意味的關係とする。

動詞の構文・意味上の特徴として、(抽象的) 関係、存在、所有、時間、(状態) 変化、移動(位置変化)、出発・帰着、出現・発生、消滅、自然現象、生理・心理、知覚・思考、言語活動、発見、生産、接触、付着、模様替え、離脱、(衣服) 着脱、授受、経済活動、社会活動、その他に注目する。以下、主に 1987 年の報告に従う。

[要約]

1. 叙述素の種類 30 種

叙述素は次の意味領域に属する。なお叙述素により添字が付く。

場所に関連して、空間的位置 1/2、非空間的位置 1/2、空間的起点 1/2、空間的着点 1/2、方向 1/2、空間、時間、範囲。

抽象的關係に関連して、対称 1/2、関連 1/2、比較 1/2、資格 1/2、内容 1/2、相手 n/k 、数量 1/2。

原因・目的に関連して、起因、動機 1/2、逆動機 1/2。

変化・作用に関連して、非空間的起点 1/2、非空間的着点 1/2、対象（出現） 1/2、対象（消滅） 1/2、対象（変化） 1/2、対象（受影） 2、動作主、態度。

その他、対象 1/2、手段。

全体・部分の關係に関連して、部分 $gg/go/gn/gk/gd$ 。

主人・側面の關係に関連して、焦点。

2. 叙述素と添字

叙述素には添字を有するものがある。添字は次の 3 型である。

1、2：主格名詞が介在すれば 1、対格名詞が介在すれば 2 を添える。

n, k ：叙述素〈相手〉が、表層文で取る格がニ格ならば n 、カラ格ならば k とする。

gg, go, gn, gk, gd ：叙述素〈全体・部分〉において、前者（全体）が常にガ格 (g) を取るのに対して、後者（部分）が、各々、ガ (g)、ヲ (o)、ニ (n)、カラ (k)、デ (d) 格を取る場合を区別する。

3. 叙述素と名詞句の対応

文において認める叙述素が文の中の名詞句より多い場合がある。次の二つの場合がある。

添字 1、2 のある場合。例えば、叙述素起点 LS と目標 LG が、「政府が油を中東から (LS_2) 日本に (LG_2) 運ぶ」では対格「油を」のみ、「船が石油を中東から (LS_1/LS_2) 日本に (LG_1/LG_2) 運ぶ」では主格「船が」と対格「石油を」が関連する。

全体・部分に関連する場合。例えば、「娘が (A) 爪を ($O_2c/PAGo$) 切る」

で「爪」は〈対象（変化）O_{2c}〉でもあり、〈全体・部分 PAgo〉でもある。

4. 叙述素の重なり

同じ動詞が同じ名詞を要求し、名詞の取る表層格が異なれば必ず異なる叙述素を立てる。この場合動詞が同じ事柄を指すならば、「叙述素の重なり」が生じていると見る。例えば、「部屋カラ／ヲ出る」では〈空間的起点〉と〈空間〉、「会社へ／ニ行く」では〈方向〉と〈空間的着点〉、「兄ガ／カラ渡す」では〈動作主〉と〈空間的起点〉が重なるとする。他に、〈対称〉〈関連〉〈比較〉〈内容〉〈相手〉〈非空間的起点〉〈非空間的着点〉〈手段〉に叙述素の重なりがある。

5. その他

一つの叙述素（添字付き叙述素）に一つだけ表層格が対応する。この点は他の報告者と異なる。

対象格について5種類を区別し、出現 O_e、消滅 O_d、変化 O_c、受影 O_a、ならびに、これら以外のすべてを含む無標の添字のない対象 O を認める。

経験者格あるいは感情主格は立てないが、その役を〈対象〉や〈動作者〉が担うように見える。例えば、1986年の文献によれば、「不安を感じる・酒を愛する・～かと考えた・孤独に悩む・誤植を見つけた」の主体は〈動作主〉であるのに対し、「失投に泣いた・中毒に苦しむ・腹痛を起こす・泥棒に気づいた・若者にあきれている」の主体は〈対象〉である。

デ格につき、場所を表わす場合は「状況格」とされ、また組織名等が主語に立って動作主を表わす場合に関する言及はない。

[各論]

例文の後に叙述素略号（原報告による）を示す。重なる叙述素があれば文末の（ ）内に示す。なお〔 〕部は筆者による。

空間的位置 Locational Locative：具象物の存在場所。現象・出現・認知・存在・所有動詞「ある・いる・見える・出る・生じる」「残す・もつ・つくる・見つける」等に関わる。ニ格。

○庭に子供達がいる・夜空に星が光る LL₁

○部屋に学生を残す・ひざに娘をだく LL₂

非空間的位置 Nonlocational Locative：非具象物の存在場所。「欠く・見られる・起こす・生じる」「認める・設ける・作る・うむ」等に関わる。ニ格。

○彼女には常識が欠けている・両国に戦争が起こる NL₁

○両者に差異をみとめる・解答に誤りを見いだす NL₂

空間的起点 Locational Source：具象物が起点となる所。移動・離脱・消滅に関わる。カラ格。

○社長が会議室からもどる・矢が弓からはなれる・部屋から書類がなくなる LS₁

○弟が部屋から出る (SP 参照) LS₁

○二階から荷物をおろす・柱から釘を抜く・部屋から書類をなくす LS₂

○子供を親から離す (SY₂ 参照)・兄から〔書類を〕渡す (A 参照) LS₂

空間的着点 Locational Goal：具象物が着点となる所。移動・方向・付着に関わる。ニ格。

○父が会社に行く (DR 参照)・車が右に曲がる (DR 参照) LG₁

○矢が的にあたる・〔どこかに〕泊まる LG₁

○荷物を二階にあげる・病院に子供をやる (DR 参照) LG₂

○ハンガーに上着をかける・ボタンをシャツにつける LG₂

方向 DIrectional：動作の至る所、および方向。移動・方向に関わる。ヘ格。

○兄が図書館へ行く (LG₁ 参照)・太陽が西へ沈む (LG₁ 参照) DR₁

○身を後ろへそらす (LG₂ 参照)・息子を病院へやる (LG₂ 参照) DR₂

空間 SPace：動詞「歩く・走る・泳ぐ・登る・上る・渡す・越す」等に関わる。ヲ格。

○彼らが山道を登る・車が峠を越す SP

○弟が部屋を出る (LS₁ 参照)・駅をはなれる (LS₁ 参照) SP

時間 TiMe：動詞「過ごす・送る・生きる」等に関わる。ヲ格。

○子供達が夏休みを過ごす・楽しいひとときをおくる TM

範囲 RAnge：動詞「すぐれる・勝つ」等の範囲。ニ格。

○彼は計算にすぐれている・我チームが試合に勝つ RA

対称 SYmmetrical：対称動詞「戦う・異なる」「比べる・重ねる・似せる」

等のト格共同者。

○甲が乙と戦う・乙と異なる・見本と似る (CC₁参照) SY₁

○甲を乙と比べる・見本と合わせる (CC₂参照)・子供を親と離す (LS₂参照) SY₂。

関連 ConCern: 関連動詞「似る・あう・重なる」「ぶつつける・まぜる」等に関わる。ニ格。

○見本に似る (SY₁参照)・乙に劣る (CP₁参照) CC₁

○甲を乙に混ぜる CC₂

比較 ComParative: 比較対象。比較動詞「劣る・勝る・進む」「好む・遅らす・進める」等に関わる。ヨリ格。

○甲が乙より劣る (CC₁参照) CP₁

○乙より甲を好む CP₂

資格: ESsive。「～ガ～ダ」が成立。動詞「ある・通す・おさまる」「迎える・使う・雇う」等に関わる。デ格、ニ格。

○姉は独身で通す・父は課長で終わる ES₁

○彼をゲストに迎える・お金のことを話題に持ち出す ES₂

内容 ConTent: 「～ガ～ダ」が成立。精神活動。「聞こえる・決まる・わかる」「見なす・名付ける・記す・たとえる・決める」等に関わる。ト格。

○彼が外国人とわかる・甲が乙と決まる (NG₁参照) CT₁

○彼を一人前と見なす・娘を綾子と呼ぶ・甲を乙と決める (NG₂参照)
CT₂

相手 ParTner: 物品・情報の移動・授受動詞「渡す・貸す・教える・売る」または「貰う・借りる・受ける・教わる・買う」等の相手。授受の主体は動作主。ニ格。カラ格。

○甲が乙に本を貸す・甲が乙に本を借りる (PTk参照) PTn

○甲が乙から本を借りる PTk

数量 QUantitative: 数量動詞「かかる・増える」「延ばす・続ける」等に関わる。無格。

○費用が三千円かかる・会議が3時間遅れる QU₁

○期間を3年のばす・体重を3キロ減らす QU₂

起因 AScriptive: 「悩む・驚く・落ち着く」等の起因。事柄を示す名詞を取る。ニ格。

○弟は借金に悩む・彼女は寒さにふるえる AS

動機 Motive: 動機に関わる。名詞の表わす事柄が他の事柄より遅れる。移動動詞「行く・来る・向かう」「やる・送る・出す」等に関わる。ニ格。

○母が買い物に行く・所長が挨拶に立つ MT₁

○息子を買い物にやる・弟子を修行に出す MT₂

逆動機 AntiMotive: 動機に関わる。名詞の表わす事柄が他の事柄より先行。移動動詞「戻る・帰る」「戻す・帰す」等に関わる。カラ格。

○社長が出張から帰る AM₁

○弟子を稽古から帰す AM₂

非空間的起点 Nonlocational Source: 「非具象物」が起点となる物事。変化・作用および動作の始発の状態。変化・出現・知覚に関わる。カラ格。

○信号が赤から青に変わる・妻が眠りからさめる NS₁

○話しぶりから年齢がわかる・彼は記事を日本語から英語にうつした NS₂

○米から酒をつくる (IN 参照) NS₂

非空間的着点 Nonlocational Goal: 「非具象物」が着点となる物事。変化・作用および動作の結果の状態。変化・出現・知覚に関わる。ニ格。

○娘がピアニストになる・信号が赤から青に移る・甲が乙に決まる (CT₁ 参照) NG₁

○水を氷に変える・毛糸をセーターにあむ・甲を乙に決める (CT₂ 参照) NG₂

対象 (出現) Objective:effective: 動作の結果として出現するもの。「できる・生まれる・現れる」「編む・作る・書く・起こす」に関わる。ガ格、ヲ格。

○セーターができる・ご飯が炊ける O_{1e}

○セーターをあむ・争いを起こす・ケーキをやいた O_{2e}

対象 (消滅) Objective:disappearance: 動作の結果消滅するもの。「なくなる・消える・解ける」「消す・解く・食べる・なくす」等に関わる。ガ格、ヲ

格。

○あかりが消える・謎がとける O_{1d}

○夫があかりを消す・〔ご飯を〕食べる・妻がゴミをやいた O_{2d}

対象 (変化) Objective:change:操作の結果変化するもの。「割れる・折れる・死ぬ」「壊す・殺す・削る」ガ格、ヲ格。

○ガラスが割れる・〔子供が〕死ぬ O_{1c}

○学生が机を壊す・妻が肌をやいた O_{2c}

対象 (受影) Objective:affective:作用されるが変化しないもの。接触動詞「もつ・なぐる・蹴る・さわる」の対象。ヲ格。他の4種類の〈対象〉と違ってガ格を取らない。

○彼女が荷物を持つ・彼が彼女をだく・彼はお金を外に持ち出す O_{2a}

動作主 Agent:動作の有意志主体。「歩く・飛ぶ・食べる・見る・壊す」等に関わる。ガ格。

○紳士が歩く・妹が顔を洗う A

○兄が〔書類を〕渡す (LS₂参照) A

態度 ATtitude:精神活動対象、態度的動作「甘える・なじむ・頼る」等の対象。ニ格。

○子供が親に甘える・学生が外国に憧れる AT

対象 Objective:上述の出現・消滅・変化・受影対象以外の対象。意味特徴の最も欠ける無標のもの。動詞の意味を充足する対象。意志を持たない、かつ、変化にも無関心。ガ格、ヲ格。

○桜の木がある・雪が降る・球がネットを越えた O₁

○甲が乙に優る・彼は地位が係長から課長に上がった O₁ 「地位が」は〈焦点〉。

○山を見る・〔本を〕読む・お金のことを話題に持ち出す O₂

手段 INstrument:手段や道具。事柄を成立させるために動作主が用いる道具。「通う・壊す・割る・練る・打つ」等に関わる。デ格。

○父はバスで病院へ通う・道路が車で混んでいる IN

○彼女がナイフで鉛筆を削る・米で酒をつくる (NS参照) IN

全体・部分 PArtitive: 「全体」がガ格、「部分」が、ガ、ヲ、ニ、カラ、デ格を取る。

○彼は腰が痛む・竹は地下茎が伸びる PAgg

○彼は足を痛める・桜が花を咲かせる PAg0

○父親が娘をひざにだく・薩摩芋は根に養分を蓄える PAgn

○妹が目から涙を出す・三原山が噴火口から煙を出す PAgk

○弟は足でボールを蹴る・父が手でガラスに触れる PAgd

焦点 FoCUS: 主人一側面の関係。文中の二つの主格の名詞の一方が他方の側面を表わす。状態性質を表わす動詞「違う・ずれる・すぐれる・変わる」等に関わる。ガ格。

○二人は好みが違う FC

○花子は性格が変わっている FC

2.7 μ プロジェクト (科学技術庁機械翻訳プロジェクト)

科学技術分野、特に電気工学の分野の日英・英日機械翻訳を目的とする研究において、機械辞書の日本語用言、ならびに、英語動詞・形容詞の見出語情報の一つである格フレームを構成する格拉ベル(深層格)につき定義と例を示している。

[要約]

1. 日本語の格拉ベルの種類 33種

主体、対象、受け手、与え手、相手1、相手2、時、時・始点、時・終点、時間、場所、場所・始点、場所・終点、場所・経過、始状態、終状態、属性、原因・理由、手段・道具、材料、構成要素、方式、条件、目的、役割、内容規定、範囲規定、提題、観点、比較、随伴、度合、陳述。

なお、格拉ベル〈陳述〉については定義も例文もない。

2. 英語の格拉ベルの種類 32種

動作主、無意志主体、経験者、対象、受け手、与え手、始状態、終状態、内容、相手1、相手2、受益者、随伴者、役割、度合、様態、範囲、比較、手段・道具・方法、目的、場所・始点、場所、場所・終点、場所・経過点、時・

始点、時点・時刻、時・終点、時間、原因・理由、条件、結果、譲歩。

日本語の格ラベルとの相違は、主体に替えて、動作主、無意志主体、経験者を立て、受益者、結果および譲歩を新しく設け、さらに、属性、材料、構成要素、観点、提題、陳述を廃止したことにある。

3. その他

日本語の深層格〈主体〉は、機械翻訳の都合から、いわゆる動作主や経験者を含めて極く表層に近く定義する。

授受の動詞につき、ガ格は、〈主体〉を〈与え手〉や〈受け手〉より優先する。言い替えれば、〈与え手〉と〈受け手〉は主語に立つことがない。例えば、「甲が何かを乙に与える」「甲が何かを乙から受け取る」においてガ格は〈主体〉である。

随伴者、属性、構成要素を立てる。

へ格の場所を認める例がある。

深層格の中で〈時〉〈時間〉〈属性〉〈手段・道具〉〈条件〉〈目的〉〈役割〉〈内容規定〉〈随伴〉〈度合〉が一つの表層格にだけ対応する。

[各論（日本語）]

主体 SUBject：構文上通常ガ格を取る主語（有生・無生を問わない）。ただしガ格の対象を除く。組織体名詞はデ格、有意志体はカラ格またはヨリ格も取る。

- 僕が手を挙げる
- 甲が乙に何かを与える　〈与え手〉ではない。ニ格は〈相手1〉。
- 一次エネルギーの30%を発電部門で使用する
- 役所から彼に連絡する
- 各社より音声合成用LSIの発表が続いている

対象 OBJect：動作・思弁の対象。ヲ格、ニ格（ニ格のゴミ箱的存在）。心情表現・可能表現における対象を表わすガ格。

- コレクタを共通ノードに接続する
- 果物が好きだ・右手が使えない
- 注文設計に対処する・酸素と水素の比に鈍感である

受け手 RECIPIENT：所有的・精神的移動の対象物を受け取る側（人と限らない）。動詞「与える・送る・知らせる」類に関わる。ニ格、へ格。

- 話者の声に含まれる要因は聴取者に／へ影響を与える。
- 高度なロジックを産業界に供給する
- 中央局が情報を集約して全営業所へ伝達する・C E社が原子力産業へ納入した装置

与え手 ORIGIN：所有的・精神的移動の対象物の与え手。「得る・奪う・買う・借りる・受ける・聞く」類に関わる。カラ格、ニ格、ヨリ格。

- 受け手が電池から定電力を受け取る
- 甲が友達に／から教わる
- 酸化皮膜を蒸着したものをS E社より入手する

相手 1 PARTNER：主体または対象と相並ぶ。意味をあまり変えずに主体（または対象）と交換できる。動詞の意味上必須。相手 2 とは方向性が異なる。普通ト格、ニ格も取る。

- 何かが実験値と異なる・制御用ミニコンピュータとデータウエイを共有する
- 標準化と／に関連する

相手 2 OPPONENT：動詞の意味上必須のもの。カラ格、ヨリ格、ト格。

- 事故から生命を守る
- 機械から／と独立したソフト
- 設備を雷害より保護する

時 TIME：時点を表わす。ニ格。

- 1988年にバリレン皮膜塗装を使用した・最大値は日中に現われる

時・始点 Time-FROM：時の起点。カラ格、ヨリ格。

- 5月から運用に供している
- 1980年より試験的に伝送している

時・終点 Time-TO：時の終点。ニ格、マデ格。

- 仕事を翌日に持ち越す・試験線が建設されてから今日に至る～
- 定期修理まで無事故連続運転を達成した

時間 DURation：時間間隔。無格。

- 5分間加熱する

場所 SPace：移動を伴わない場所、すなわち、定位置。物理的な空間・場所だけではなく、抽象的な空間・位置も含む。ニ格、デ格、へ格（最後の2例）。またニオイテ、ニテも取る。

- トレイン端子に現われる・識別値に差異がある・あらゆるサービスに共通した基本思想～
- 測定は音響室内で実施する・確率分布は定常定点で最大値をもつ
- 接合近傍において 1021/cm 程度となる
- 我が国にて計画されている航空海上技術衛星～
- 劈開したKCL上へエピタキシャル成長させたn型試料～
- 連続マイクロ波の中へミツバチ群落を暴露した

場所・始点 Space-FRom：場所の起点。ヲ格、カラ格、ヨリ格。

- 定性的な範囲を出ない
- 故郷を／から去る
- コンデンサから出火する・穴から観察する
- 静止衛星よりビームを伝送する・負電極より 6 m 離れている

場所・終点 Space-TO：移動の終着点。ニ格、へ格、マデ格。

- 電波が地上に到着する
- 新しい領域へコピーする・対向電極へ移動する
- 需要地帯まで送電する

場所・経過 Space-THrough：経過する場所。抽象的なものを含む。ヲ格。

- スロット上を飛ぶ・議論の段階を越える

始状態 SOURce：動作・変化の始めの状態。カラ格、ヨリ格。

- 5% から 6% へ引き上げる
- AC 22 KV より DC 変換する

終状態 GOAl：動作・変化の後の状態。変化の結果。ニ格、へ格、マデ格、ト格。

- 大事故に発展する・500 時間以上に増加した

- 温度を一定に保つ・漢字を基本ストロークに分解する・高周波に変換する
- 分散系へ移行する・定数へ収束する・英語から日本語へ翻訳する
- 応答時間は20秒まで低下可能である
- 実行時間が犠牲となった・部品ホールを理想的形状と／にした

属性 ATtribute：ニ格。

- その技術者は適応性に富む・信頼性に欠ける油遮断器～

原因・理由 CAUse：原因または理由。デ格、カラ格、ヨリ格。ノタメニ、ニヨッテを取る。

- 磁場処理で2倍以上になる
- 周波数変調が組織偏位から起こる・実験結果から確認する
- 歯数の変化割合より歯の位置を感知する
- 器具不良のために停電する
- 応用分野の発展によって、様々な変革が予想される

手段・道具 TOOL：動作行為の行われる媒体（手段や道具）。デ格、ニヨッテ、ニテを取る。

- 計算機でシミュレートする・写真で紹介する・1時間程度の練習で93%の識字率を得た
- 大容量のメモリーの使用によって効率を向上させる
- 完成組立後卓上計算機にて模擬試験を実施する

材料 MATerial：材料。デ格、カラ格、ヨリ格。

- ペーストで製作した
- ラン符号からチェーン符号を作り出す
- 2種の異なる材料より製作する

構成要素 COMponent：構成、機構、組成、仕組み、構造の要素。デ格、カラ格、ヨリ格。

- 搬送ラインは貯蔵コンベヤと加工ラインで構成する
- 手法が二つのプロセスから成る
- 計算機は無数の同一処理要素より成る・応答誤差より構成される関数～

方式 MANner：様態副詞「どのように」の答となるもの。動作の形容。ニ

格、デ格。

- 並列に配置する・基板に台形状に構成する
- 適当な時間間隔でサンプリングする・デジタル形式で記憶する・好成績で終了する

条件 CONdition：デ格、ニヨッテ、ニテを取る。

- 焦点深度で決まる・帯域幅は0.1dBで5kHz程度である
- これらは書体によって、甲は一定の形をとる・各種計算機による速度の違い～
- バイアス電圧約5Vにて10程度の利得～

目的 PURpose：動作の目的、物の用途などを示す。ニ格。ノタメニと言い換えられる。

- 手術に備える・理論解析に適する／必要である
- 物理学者のためにデータ処理をする

役割 ROLe：資格、機能を示すもの。ニ格。トシテと言い換えられる。

- 議長に選ぶ・交換条件に金5千円進呈する
- 添加不純物としてナイレンを用いる

内容規定 CONtent：いわゆる引用のト格を取る。思考、発話、命名などの内容を指す。用言の言い切り形その他に付き得る。

- これをR*(P)と記す・一般的なスロットにも適用可能と結論する

範囲規定 RANge：ニ格、デ格、カラ格。ニオイテ、ニツイテを取る。

- その重ね方にはいろいろある
- 宝石の中で一番固い
- 土台から作りかえる
- アルゴリズムの複雑さにおいて一段上である
- いくつかの電池構造について～

提題 TOPic：助詞ハまたはトハを取る。

- 遅延解とは最も確からしい解であるにすぎない

観点 VIEpoint：叙述、分析、観察等における立場。デ格、カラ格、ヨリ格。

- 運転保守上で注意が必要な箇所～

○構造欠陥の点から解析する・照明技術から見た光源特性～

○現象論的見地より検討する

比較 COmpaRison：比較の基準となるもの。ヨリ格、ニ格、ヲ格。

○偶モードより速い・分散がこれまでのものより減少した

○機械特性で前者に劣る

○ピーク電圧が耐圧を上回る

随伴 ACCompany：ト格。トトモニ、ヲトモナツテも取る。

○兄さんと電車に乗る

○空気はトンネル内をインクジェットとともに流れる

度合 DEGREE：無格。

○5%増加する・3キロ痩せた

陳述 PREdicate：例が示されていない。

[各論 (英語)]

深層格によっては、例文のみが挙げられている。場所、時、時間に関連する幾つかのラベルについては例文も定義もない。ただし、日本語の場合から推測はできる。

動作主 AGenT：Action 動詞の行為主体

○ The workman hammered the metal flat.

無意志主体 Causal POTency：無意志主体。

○ This comparison makes it possible to conclude that...

経験者 EXPeriencer：知覚・感情などの精神的現象の体験者。人間に限る。

○ The man awoke to find himself in a clinch.

対象 OBJect：変化移動および精神活動の対象物、状態表現の焦点となるもの。

○ She boiled the rice.

○ They agreed not to oppose my plan.

○ This box weighs five kilos.

受け手 RECipient：所有的移動、精神的移動における対象物の受け手。

○ I showed them how to do it.

○ I showed it to my parents.

与え手 ORIGIN：所有的移動、精神的移動における対象物の与え手（動作主を除く）。

○ He drew his power from the government.

始状態 SOURCE：変化の始状態、起点、材料。

○ The distribution changes from undercosine to overcosine.

○ This cloth is made of cotton.

終状態 GOAL：変化の終状態。終点。

○ She will make a good wife.

○ How did they become aquainted.

内容 CONTENT：対象の内容。

○ The method seems to be applicable to ...

相手 1 PARTNER：必須の相手 1。

○ The results agree with the model.

相手 2 OPPONENT：必須の相手 2。

○ What prevents you from coming earlier.

受益者 BENEFICIARY：

○ I have bought some chocolate for you.

随伴者 ACCOMPANY：

○ I'll go there with you.

役割 ROLE：

○ We made you our spokesman.

○ They chose me as their leader.

度合 DEGREE：数量補語。副詞句。

○ This box weighs five kilos.

様態 MANNER：方式。

○ He carries himself like a soldier.

範囲 RANGE：

○ This book is on semantics.

比較 COmpaRison :

○ I prefer walking to climbing.

手段・道具・方法 TOOl :

○ He did it by induction.

目的 PURpose :

○ We stopped to have a rest.

場所・始点 SPace-FRom :

場所 SPAcE : 例なし。

場所・終点 SPace-TO :

場所・経過点 SPace-THrough :

時・始点 Time-FRom :

時点・時刻 TIME :

時・終点 Time-TO :

時間 DURation :

原因・理由 CAUse :

○ He died of hunger.

条件 CONdition :

○ You may leave by request of your employer.

結果 RESult.

○ I was so tired that I could'nt go.

譲歩 COnCessive :

○ She is tall for her age.

2.8 ユー・デー・アプレシヤン

語の意味の記述と語の支配パターン間の対応を付けることに関連して、語の「意味的結合価 (semantic valency)」をロシア語の動詞、形容詞、名詞について考察する。

語の意味論的結合価とは、語に統語的従属語を結合する能力であり、かつ結

合価の各々に語義の記述の変項が対応する。直感的に言えば、意味的結合価は、語の意味から直接に生じ、その語を具体的な、他と異なる語彙要素とするものであり、この意味的結合価に付与する内容、あるいは「役」が語義を構成する。別のところで、意味的結合価を、述語が意味するシチュエーションの意味的参加者 (semantic actant) の名前を述語に結び付けるものとしている。

[要約]

1. 意味的結合価の種類 25種

基本的なものとして、主体、相手、対象、内容、場所、時間。量。

派生的なものとして、頭 (かしら)、受け手、経由者、聞き手 (以上〈主体〉から)、始点、終点、径路、源泉 (以上〈場所〉から)、原因 (〈時間〉から)、条件、動機、結果 (以上〈原因〉から)、目的 (〈内容〉と〈結果〉から)、期間 (〈時間〉と〈量〉から)、他に、局面観点、道具、材料、様態方法。ただし結合価〈様態方法〉の基本・派生の位置づけは不明と言う。

上記の基本的結合価7種がアプレシヤンの定める意味記述言語の統語関係を尽し、意味表示が意味言語によるものから自然言語によるものに移るに応じて他の結合価の分化が生じるとする。

2. 一文一格原理と対称述語

一文一格の原理は、対称述語、例えば、「会談する・仲良くなる・距離」「紹介する・別れさせる」では成立しないとする。この場合共に積極的自発的または消極的非自発的な二つの主体 (対象) を、各々、主体1 (対象1)、主体2 (対象2) とする。その他の述語、例えば、「治療する」や「売る」でも二つの対象を認めている。前者では治療される対象である患者と疾病、後者では売られる対象物と対価がそれである。

3. 意味的結合価と融合 (シンクレチズム)

融合現象は、複数の異なる意味的結合価が表層で同一の形態で同時に実現する場合をいう。この場合、恒常的融合と形態に依存する融合を区別する。例えば、「部屋で (部屋を) 片付ける」では〈対象〉と〈場所〉の恒常的融合が、「管理部で (管理部に) 尋ねる (前置詞 B)」では〈相手〉と〈場所〉の非恒常的融合が生じる。後者の文で前置詞を替えた「弟に尋ねる (前置詞 y)」では

〈相手〉だけが関わる。アプレシオンは、上述の二つ融合の場合とは違う場合として、表層で共起できる異なる結合価、例えば、「銃から散弾で撃つ」における〈道具〉（「銃」）と〈材料〉（「散弾」）が、同じ動詞を述語とする文「ロケット弾で撃つ」では融合することも注意している。

4. 結合価の分割

同一の結合価が分割される場合がある。分割は原理的には任意の結合価について起こるが、主に、主体、対象、内容が関わる。

〈主体〉および〈対象〉は、全体とその活動または被動部分に、あるいは、対象物とその属性に分割され（例。「彼は顔色が変わった」「彼に頭を（彼の頭を）撫でる」「あの男は自分の頬みごとで皆を飽き飽きさせる」「風が方向を変えた」）、他方、〈内容〉は、テーマとレンマに分割される（例。「彼を賢いと思う」）。上の例で、例えば、「彼の顔色が変わった」と言えることが、元々一つの結合価であることを示すとする。

他の結合価の分割は、〈終点〉や〈場所〉で見られる（各論参照）。なお、結合価〈局面観点〉を設定しない場合は、この結合価は別の結合価の分割を担うものとされる。

5. 動詞から派生する述語名詞

動作名詞は多くの場合動詞が意味するシチュエーション全体の典型的名称であり、派生する動詞と同じ意味的結合価をもつ（例えば「要求する」に対し「要求」）。アプレシオンは、さらに、シチュエーションの中での意味的結合価（意味的参加者）の典型的・総称的名称に当たる名詞を述語と認め、後者は動詞の意味的結合価の一部を受け継ぐとする。例えば、四価動詞「売る」における主体、対象1、相手、対象2に対する典型的呼び名「売り手・商人」、「商品・販売対象」、「買い手」、「価格」は述語である。別の例では、四価動詞「治療する」の結合価に、各々「医師・治療者」、「患者・治療対象」、「病気・治療対象」、「薬剤・治療材料」が対応する。

意味的結合価述語名詞はしばしば動作名詞と同形である。例えば、「署名」、「要求」、「喜び」は、日本語の場合と同様に、各々、署名結果、要求内容、喜びの原因（例えば「息子が唯一の喜びだ」）も表わす。他に、ロシア語で、「護

衛／護衛官（主体）、「うがい／うがい薬（材料）」、「越冬／越冬地（場所）」、「食事／食事時（時）」等の例がある。

6. その他

述語の意味的結合価を最高六価まで認める。四価以上の動詞の例を挙げる。ただし中黒は恒常的融合を示す。

六価：出張させる（出張を命じる）〈主体、対象、始点、終点、目的、期間〉。

五価：派遣する〈主体、対象、始点、終点、目的〉、運搬する〈主体、対象、始点、終点、道具〉、賃借する〈主体、対象1、相手、対象2、期間〉、打ち付ける・はんだ付けする〈主体、対象1、終点・対象2、道具、材料〉。

四価：買う〈主体、対象1、相手、対象2〉、治療する〈主体、対象1、対象2、材料または様態方法〉、塗る〈主体、対象、材料、結果〉、撃つ〈主体、対象、道具、材料〉、航行する〈主体、始点、終点、道具〉、掃き出す〈主体、対象、始点、終点〉、貼る〈主体、対象1、終点・対象2、材料〉。

述語の支配パターンとは、意味的結合価、必須性、および実現条件（表層の形態、共起制限等）の情報からなる。

[各論]

結合価の名称の英字略号は原報告による。例文は直訳に近い和訳を示し、一部は補った。

主体 Sub：いわゆる動作主や属性主を含む。対称述語には第1、第2の主体を認める。この場合両主体の行為は一致する。最後の2例は〈主体〉の分割の場合である。

- 汽車が走る・木が茂る・甲の成長～
- 甲が乙をペニシリンで治療する・甲の患者（は乙だ）・甲の薬～
- 甲は 乙と教養の点で異なる・甲と 乙の距離～ 主体1と主体2。
- 彼は 膝が震えていた 全体と部分。
- 風が 方向を変えた 対象物と属性。

相手 Contrag：対動作主。活発な主体の参加するシチュエーションにおける別の活発な主体を示す。この場合両主体の行為は一致せず、述語は全的に主体の行為だけを記述し、相手の行為は記述しない。この点が対称述語の第2主体

とは違う。第四例で述語「より大」の類は〈相手〉と〈量〉を取る。

- 甲が家を乙から100万円で買う
- 甲が家を乙にX円でY年間賃借する 五価動詞文。
- スペインから身を守る
- Xは湖よりY平方米大きい・甲は背丈が彼より高い
- 甲は人に何かを尋ねる 原文はyを取る前置詞句。
- 甲は管理部で(管理部に)何かを尋ねる nを取る前置詞句。〈相手・場所〉。

頭(かしら) Cap: 例のみ(なお頭とは、「主人」、「長」の意味)。

- 仲間を前に恥ずかしく思う・政府へこの件で陳情した
- 同僚に対する罪～ 「盗みの罪」の場合は〈内容〉参照。

対象 Obj: 第三、四、五例で原文は対象1は対格名詞句(第五例は生格)、対象2は前置詞句である。最後の2例で結合価の分割は対格名詞句と前置詞句が担う。

- 手をさする・的を撃つ・酒を売る・乙を侮辱する
- 甲が乙に影響する・甲の乙への影響～
- 人が甲を乙と別れさせる
- 医師が太郎を風邪から(風邪を)漢方薬で治療する
- 太郎の薬は(漢方薬だ)・風邪(から)の薬～ 各々対象1、対象2。
- 彼を肩において(太郎の肩を)撫でる 全体と部分。
- 種子を発芽力につき調べる 対象物と属性。

内容 Content: 最後の2例は結合価の分割(テーマとレンマ)を表わす

- 出発を知る・問題を熟慮する・貴方にはそう思われる
- 患者に転地を勧めた・親に子供が休養するよう提案した
- 分析的な考え方／系統だった教養で皆と違う 〈局面視点〉も参照。
- 大事故に対する責任～・盗みの罪～ 〈頭〉参照。
- 彼が賢いと思う 原文で接続詞 что に始まる内容節。
- 彼を賢いと思う・分子生物学を～科学と定義する 対格がテーマ。
- 彼に関する芳しくない評判～ レンマ「芳しくない」は原文で形容詞。

聞き手 Adr: 受信者・目標。情報過程の誰かに情報・内容を知らされる主体。

○議長に知らせる 「知らせる」は能動他動詞。

○甲は乙に何かを伝える

○甲は乙に何かを答える 問答に積極的に加わる〈相手〉でもある。

受け手 Recip :

○子供達にやる・人々に贈る

経由者 Via :

○ 秘書を通して渡す :

源泉 Is :

○共済組合に借りる

場所 Loc :

○森にある・あそこに住む

○部屋で (部屋を) 片づける 恒常的融合〈場所・対象〉、前置詞_Bを取る。

○血が彼の所で こめかみに (彼のこめかみに) 脈打っている 結合価の分割。

始点 Ab : 何かが存在することを止める場所。

○ここから行く・Aから連れ出す・村から移住する

終点 Ad : 何かが存在することを始める場所。

○そこへ行く・町に運ぶ

○甲が乙を所Aからキーエフへ講義に1週間出張させる 六価能動相他動詞文。

○小板を壁に打ち付ける 終点かつ対象₂。

○敵に 背後に (敵の背後に) 出る 結合価の分割。

経路 Itin :

○道を行く・海洋を航行する・眼の前を連れて行く

材料 Med : その使用がその消費および結合・束縛を引き起こす点が道具とは違う。第二例で、〈材料〉と〈道具〉の共起できることを両結合価を別に認める根拠としている。

○釘で打つ・糊で貼る・油で揚げる・ペニシリンで治療する

○銃から散弾で撃つ 原文具格。「銃」は₁₁₃を取る〈道具〉。

○ロケット弾で撃つ 原文具格の〈道具・材料〉。

道具 Instr : 主体の外部にあり、束縛されない手段。身体器官や作業部は道具

や材料ではない（例えば、「床を手で磨く」や「ナイフがパンを刃で切る」）。最後の例で道具「マット」は固定され自由に操れず、第2の対象に近い（第1対象は「足」）。

- 槌で打つ・ナイフで切る・タイプで書く 原文具格。
- 車で行く・船で航く haを取る恒常的〈道具・場所〉。
- 袖を縫製機により黒糸で縫い合わせる haを取る。「黒糸」は具格の〈材料〉。
- タオルで手を拭く 具格。「手」は対格の〈対象〉。
- マットに接して（マットで）足を拭く 前置詞oを取り〈道具・対象2〉。

様態方法 Mod：

- 粗末に扱う・敬意をもって対する・当然のことと受け取る
- 彼は私を結核から針療法で治療する 四価動詞文、材料の項も参照。

条件 Cond：

- Pならば同意する
- 以上の条件での妥協～

動機 Motiv：

- 勇敢な行動に報いて勲章を授与する・判断の良さに学生を誉める

原因 Caus：

- 友の到着を喜ぶ・誰かの言葉に怒る・風邪を恐れる
- 情報の不足から生じる・風にそよぐ・太陽に輝く

結果 Result：

- 材料をヘンナ染料薄液で赤色に塗る・水に変える
- 火事が火の不始末から起きた・スープがゼリーになった

目的 Dest：内容とその実現結果の複合する結合価。すなわち、目的とは、誰かが何かを欲し、欲求内容の結果を自分の支配する力で引き起せると考えることである。

- 万人の福祉を目指す・皇帝の暗殺を図る
- 新聞のための行列～・何かの試み～・殺害の企て～・平和のための使命～
- 甲が乙を地方からモスクワへ講習に派遣する 五価動詞文。

局面観点 Asp：第二例の述語は〈内容〉も取る。両結合価は意味上関連が深

い。

- 村道は街道より幅が1米狭い
- 甲は考え方／教養が乙とは違う 同じ述語が〈内容〉を取る場合を参照。
- 同位体とは性質が異なる

量 Quant :

- 40%超過遂行する・3倍に増す・相手より1米広い
- 体重2キログラム～

期間 Period : 時間と量から派生。一時的利用の権利の獲得、継続や中断を表わす述語に関わる。

- 給料日まで貸す・5分休憩する・3週間3万円で賃借する
- 甲が乙を地方からモスクワへ講習に1週間出張させる
- 1ヵ月の予約～

時 Temp :

- 夜中に始まる・5月2日に生まれる
- 8時のデート～

付記

本章で示した例文につき一部次のように扱った。

例数を多くしたい場合、例文の述部・動詞句に限って示す。

例の理解および諸説の比較の便のため、共通または同類の述語・共起成分・構文を含む例文や定義された述語の深層格や表層格に対応する例文が欲しい場合、報告で一部しか与えられないとき、[] で括って補う。

3. 実データによる調査

3.1 調査の目的

日本語について表層格と深層格との対応を調べる。その際、まず述語の分類を行って、その類ごとに文型を記述し、そこで深層格を指示するというやり方をとる人もある。その分類が妥当なものであれば、用言の格フレーム記述がおおむね完成したことになるわけであるが、ただ木村の経験からすると、格フレームに基づく動詞の分類は二、三百程度ですむものではない。学習者の理解を助けるには大ざっぱな分類が有効であるが、辞書の記述としては、もっと詳細な個別的な情報が必要である。深層格を立てること自体が一つの類型化であり、四捨五入であるから、丸めの誤差が何重にも累積しないよう、少なくとも第一段階としては、述語の分類を行わない。それぞれの格助詞がどのような意味に対応しうるかを、網羅的にしらべ、定性的な分析だけでなく、定量的分析も行いたい。仮に分類を行うとしたら、各述語の用例を語義によって仕分け、その上で分類する必要がある。和語動詞のように基本度の高い動詞の場合、一見出し一カテゴリーというわけにはいかず、一つの語が複数のカテゴリーに属することになる。

深層格の設定そのものについて、演繹的な手続きというのは存在しないようであるが、与えられた格の集合について、それが実情をどの程度反映するかの検証は可能である。また深層格の割当てというのはなかなかむずかしいものであって、人により時により判断の分かれるものも少なくないので、それを理由に格文法を避けて通ろうとする人もある。その理論的にも実際的にも不安定な格文法を多少なりとも安定したものにするために、実例に即して格の割当て基準を設定し、作業マニュアルを作りたい。

網羅的にしらべるといっても、ここで扱うデータは第四期国定読本というごく限られたものであり、別のデータを使えば異なる分布がえられるのは目に見

えているが、どのような部分に差が出るか、ある程度は予想がつく。ここでたつき台として用いる深層格のセットは、かつて科学技術文献用に設定され、使用されたものに少し手を加えただけのものであるから（文献 38）、科学技術文献と読本との違いが際立つことになるだろう。今回の調査だけで深層格の集合が最終的に決まるというのではなく、いくつかのデータのうちのひとつと考えている。

3.2 深層格の設定

深層格が備えるべき要件または前提としてフィルモアは次の二つを挙げている。

(1)ある特定の格役割を果たす名詞句は、単文にはせいぜい一つしかない。（一文一格の原理）

(2)述語が名詞句に与える役割は有限であること。

(2)については改めて論ずるまでもない。単に有限であるだけでなく、比較的少数であるということを経験しなければ、利用価値がないからである。(1)についてはいづれか異論の入る余地がある。人によっては一文一格の原理を立てない場合もあるし、原則的にこれを認めるにしても、深層格の範囲が広がれば、現実には多少の例外が生じることは否めない。しかしこの原理は作業仮説として有効だと思うので、木村はこれを認めた上で、さらに次の3点を加えたい。

(3)一つの表層格の用例にはつねに一つの深層格が対応する。つまり一つの連用名詞句の役割を複数の深層格の組合わせで表したりしない。（二重の格の否定 6.2 参照）

(4)格の呼称とそれが指示する内容との間にあまり大きなへだたりがないこと。これは作業者に大きな心理的負担を与えないためである。

(5)必須か任意か、あるいは格成分か修飾成分かといった区別は当面立てない。用言が強く要求するか否かの違いはむしろ存在するけれども、それと情報としての重要性は必ずしも一致しない。たとえば、時・場所を示す連用名詞句は多くの用言に係ることができ、したがって軽く扱われやすいが、ある種の記事に

においては非常に重要な地位を占めている。また必須とされるものでも、現実に記述されないことも多い。情報受信という観点から見るなら、必須であるか否かにかかわらず、記述されているものすべてを把握できることが望ましい。ただ、個々の用言について辞書で格フレームを記述する際に、起こりうるすべての格について記述するのは大きな負担であり、またそれに相応するメリットがあるかどうか疑わしいので、任意性の高いものについては用言と切り離して、名詞の意味分類と表層格との組み合わせで深層格を推測するのが实际的であろう。

(6)深層格というのは普遍的なものであるべきであり、その普遍性には言語的なものと情報的なものとがある。言語における普遍性が、あらゆる言語に共通する部分すなわち最大公約数のようなものになるのか、あらゆる言語の特質を包含するもの、すなわち最小公倍数のようなものになるのか、まだ分からない。実際には研究者の知識の有無や経済性の問題もあり、どちらをめざすにしても不徹底になる可能性は大きい。情報における普遍性とは、用途あるいは専門分野に応じて必要な情報の種類が異なるのに対し、なるべく広く包含できるようにすることをいう。

これまで具体的に示された格の集合については第2章に論述したが、ここでたたき台として用いるのは、表1に掲げるものであり、 μ プロジェクトで用いた日本語格ラベル(2.7参照)にいくらか手を加えたものである。たたき台としてこれを選んだ理由は、木村にとってなじみのあるものだという点である。調査に先立って改変したのは次の一点だけであるが、調査の結果として改めるべき点が出てくるかもしれない。

上記の格ラベルにおける第一の問題は「主体」という格である。〈動作主〉または〈経験者〉といった行為主体もしくは経験主体ではなくて、ここでの「主体」は表層における主格に近い。深層格と呼ぶにふさわしくないという批判を免れないところであるが、なぜそういうものを立てたかという点、「今日は風が強い。」の「風」が〈対象〉だというのはよいとして、「風が紙を吹き飛ばす」の「風」は何になるのかという疑問からであった。一文一格の原理からすると、「風」と「紙」の両方を〈対象〉にするわけにはいかない。フィルモ

ア流にいけば道具格になるところであろうが、自然現象、とりわけ主格の位置にあるものに「道具」という言葉を用いるのは、日本人にとっては非常に違和感がある。ここではまた原因理由格というものを立てているので、それを使うことも考えたが、そうすると原因理由格が二つ必要になる場合があって断念し、「主体」という中途半端なものを立てることになった。主格は概ね〈主体〉(SUB)ということになると、〈動作主〉(AGT)、〈経験者〉(EXP)、〈対象〉(OBJ) その他様々なものがこれに含まれることになる。英語の方では〈無意志主体〉(Causal POTency) というものを立てており、それとは別に原因理由格を設けている(文献 38)。これがよい解決法かもしれないと思い、試してみることにした⁵⁾。すなわち〈主体〉というのを削除し、代りに〈動作主〉(AGT)、〈無意志主体〉(CPO)、〈経験者〉(EXP) の三つを加えた。したがって、深層格の数は 33 から 35 にふえたわけである。

以下に掲げる深層格のうち、〈場所-始点〉(SFR)、〈時-始点〉(TFR)、〈始状態〉(SOU)、〈与え手〉(ORI) の四つをまとめて〈起点〉といい、〈場所-終点〉(STO)、〈時-終点〉(TTO)、〈終状態〉(GOA)、〈受け手〉(REC) の四つをまとめて〈終点〉または〈目標〉とする人が多い。そうすれば確かに作業は楽になるが、このように異質のものを始め・終りというだけで一つにくくってしまってもよいものか、またカテゴリーの数を減らすことによって一文一格の原理に反する例が多くなるのではないかという疑念をぬぐえないので、少なくとも当面は別にする。

3.2.1 深層格の定義

表 1 に深層格名称(日本語)、英語(大文字の部分 3 文字を略号として用いる)、用例を載せた。以下にその定義・理由等を簡単に述べる。そこに表層格

5) Huddleston のいう力格(文献 8) というのもこれと同じ趣旨のもののようなのである。道具格との違いは〈動作主〉と共起しないということであるが、フィルモアを始めとしてこれをも道具格に含めようという人は、自然現象の背後に神という〈動作主〉を想定しているようである。

表 1. 深層格一覧表

(1) 動作主	AGenT	<u>僕</u> が <u>手</u> を <u>擧げる</u> 、 <u>会社</u> でこの <u>意見</u> を <u>採用</u> する、 <u>役所</u> <u>から</u> <u>手当</u> を <u>やる</u>
(2) 経験者	EXPeriencer	<u>頼光</u> が <u>ふしぎ</u> に <u>思</u> って、 <u>人</u> を <u>驚</u> かす、 <u>蜘蛛</u> にはそれ が <u>わか</u> る
(3) 無意志主体	Causal POTency	<u>黄熱病</u> が <u>人</u> の <u>命</u> を <u>奪</u> う、 <u>夏</u> の <u>日</u> が <u>畑</u> を <u>照</u> らす
(4) 対象	OBJect	<u>海</u> が <u>荒</u> れる、 <u>網</u> を <u>引</u> 揚げる、 <u>仰</u> せに <u>従</u> う、 <u>境内</u> が <u>花</u> <u>で</u> <u>埋</u> まる
(5) 受け手	RECIpient	城の <u>修理</u> を <u>そ</u> ちに <u>申</u> し <u>つ</u> ける、 <u>近所</u> の <u>家々</u> へ <u>迷</u> 惑を か <u>け</u> る
(6) 与え手	ORIGin	<u>おちい</u> さんにも <u>ら</u> った <u>め</u> が <u>ね</u> 、 <u>河成</u> から <u>使</u> いが <u>来</u> る
(7) 相手 1	PARtner	建御雷命が <u>大國</u> 主命と <u>会</u> 見する、 <u>道路</u> が <u>鉄</u> 道と <u>並</u> ぶ
(8) 相手 2	OPPonent	<u>危</u> 急を <u>さ</u> ける、 <u>[</u> 雷害 <u>から</u> <u>保</u> 護する <u>]</u>
(9) 時	TIMe	<u>九</u> 時に <u>消</u> 燈だ、 <u>今</u> では <u>僕</u> より <u>背</u> が <u>高</u> い、 <u>よ</u> い <u>と</u> ころ へ <u>来</u> た
(10) 時-始点	Time-FRom	<u>今</u> を <u>去</u> る <u>千二</u> 百年の <u>昔</u> 、 <u>古</u> く <u>か</u> ら <u>あ</u> る、 <u>今</u> 日より <u>五</u> <u>日</u> 目
(11) 時-終点	Time-TO	<u>今</u> 日に <u>伝</u> わる、 <u>夕</u> 方 <u>ま</u> で <u>遊</u> ぶ
(12) 時間	DURation	<u>幾</u> 百年を <u>経</u> た <u>老</u> 木、 <u>[</u> 5 分間 <u>加</u> 熱する <u>]</u>
(13) 場所	SPAcE	其の <u>邊</u> を <u>探</u> す、此の <u>地</u> に <u>都</u> を <u>定</u> める、 <u>木</u> 陰で <u>踊</u> り <u>明</u> か <u>す</u>
(14) 場所-始点	Space-FRom	<u>日</u> 本を <u>出</u> 発する、 <u>学</u> 校 <u>か</u> ら <u>帰</u> る、 <u>北</u> より <u>数</u> える、
(15) 場所-終点	Space-TO	<u>日</u> が <u>地</u> 平線に <u>近</u> づく、 <u>その</u> 場へ <u>か</u> け <u>つ</u> ける、 <u>天</u> ま <u>で</u> <u>続</u> く
(16) 場所-経過	Space-THrough	<u>林</u> を <u>抜</u> ける、 <u>西</u> 岸 <u>か</u> ら <u>上</u> 陸する、

(17) 始状態	SOURce	空は <u>赤から</u> 金に、 <u>金から</u> うす青にぼかしあげたよう だ
(18) 終状態	GOAl	曲を <u>譜</u> に書上げる、小山が <u>出城</u> となる
(19) 属性	ATTriBute	日本の馬は <u>氣が荒い</u> 、 <u>城が様子を一變</u> する、彼が愛 の心に富む
(20) 原因・理由	CAUSe	<u>欲</u> に目がくらむ、 <u>重み</u> で船が傾く、 <u>鳥から</u> 思いつく
(21) 手段・道具	TOOl	<u>防水具</u> に身を固める、 <u>扇</u> で合図する
(22) 材料	MAterial	屋根を <u>かや</u> で葺く
(23) 構成要素	COMpOnent	大審院は五人の <u>判事</u> で組織される
(24) 方式	MANner	<u>號令</u> が <u>次々</u> に下る、改まった <u>口調</u> でいう、 <u>とぼとぼ</u> <u>と歩く</u>
(25) 条件	CONditiOn	からだのわりに目は小さくて、 <u>三日</u> で仕上げる
(26) 目的	PURpose	<u>取入れ</u> にはげむ、 <u>遠足</u> で旅順に行く
(27) 役割	ROLe	<u>引出物</u> に末広がりを出す、 <u>杖柱</u> と頼む、 <u>～として</u> 用 いる
(28) 内容規定	COntent	<u>舞姫</u> にきめる、 <u>～という</u> ／知る／述べる／見える
(29) 範囲規定	RANge	鐵の <u>重ね方</u> にはいろいろある、 <u>宝石</u> の <u>中</u> で一番固い [について]
(30) 提題	TOPic	「 <u>もの言ふおもちや</u> 」とは、電話のことです。
(31) 観点	VIEWpoint	五兵衛の <u>目</u> にはそれがもどかしい、 <u>にぎやかな事</u> か らいえば
(32) 比較の基準	COMpaRison	高度が <u>三百米</u> を下る、 <u>姉</u> の <u>に劣る</u> 、 <u>いわし雲</u> より大 きい
(33) 随伴	AcCOmpany	<u>兄さん</u> と <u>電車</u> に乗る、[とともに]
(34) 度合	DEGree	<u>極度</u> に傾く、 <u>十人</u> と乗れない、[3キロやせる]
(35) 陳述	PREdicative	<u>四百倍</u> に當る、 <u>仏</u> の御言葉とあれば、

として掲げたのは、あくまで本データの範囲に出現したものであって、データが変れば変る可能性がある。なお、格助詞相当連語は省略した。実際には多くの格がここに述べてあるよりも広い範囲をカバーしている。でない、はみ出す部分が多くなりすぎて役に立たない。といってあまり雑多なものを同一カテゴリーに収めると、また意味がなくなる恐れがあり、かねあいがむずかしいところである。詳しくは第4章を参照されたい。

(1) 〈動作主〉(AGT)

ある行為を行う者をさす。有意志体でなければならぬと同時に、意図的な動作であることを要する。有意志体とは、人・動物・機関(団体)のほか、時として艦船・航空機・自動車などの乗り物を含む。国名も場所として用いられるより、有意志体として働く方が多い。国より下の行政区画名(都道府県、市区町村等)も、場所になりうるとともに有意志体にもなりうる。有意志体の非意図的な動作については、自動詞ならば〈対象〉(「死ぬ」「ころぶ」「負傷する」など)、他動詞ならば〈経験者〉(「地位を失う」「事故で人を殺す」など)となる。

表層格は、基本文型においてはほとんどがガで、他にデとカラがある。

【例】 かささぎが巢をかける・船が網を張る・県から旅館に委託する・
二人で休憩室へ行く

慣用により「動作主」という言葉を用いるが、呼称としてはむしろ寺村のように「仕手」と呼ぶか、あるいは「行為者」という方が正確かもしれない。「動作」という言葉自体は意図的であることを要しないし、主体が有生である必要もないからである(例:電流計が動作する)。

(2) 〈経験者〉(EXP)

ある心理事象を体験する者をさす。〈動作主〉同様、有意志体であることを要する。また心理事象以外でも、意図せずに発生した動作については、これを用いる。

基本文型における表層格はガとニがほとんどで、他にヲとデがすこしある。

【例】 番兵がゆだんする・鬼を苦しめる・私にも見当がつく・役場の方
で忘れる

(3) 〈無意志主体〉(CPO)

他動詞に従属するガ格の無意志物。〈無意志主体〉というのはなるべく狭く限定する。他に〈対象〉にすべきもの（主としてヲ格）があって〈対象〉にはできず、しかも他に〈原因・理由〉が生じうる場合などである。原因に直接原因と間接原因がある場合、直接原因が〈無意志主体〉、間接原因が〈原因・理由〉となる。

例：衛生状態不良により 伝染病が 多くの人命を 奪った。

〈原因・理由〉 〈無意志主体〉 〈対象〉

基本文型における表層格は原則としてガのみであるが、例外的にニの例が生じた。ニが〈無意志主体〉の場合はガ格が〈対象〉になる。

【例】海水が泡をたてる・旅先で病気にかかる

(4) 〈対象〉(OBJ)

移動・変化その他あらゆる働きかけを受けるもの、また形状・性状等の記述および非意図的な現象の記述の対象となるもの。ガ格とヲ格の両方で頻度が高く、一文一格の原理に外れるケースが生じやすいので、注意を要する。〈対象〉がたぶる場合、一般的にヲ格が優先するので、ガ格に他の深層格を与える必要が生じる。

基本文型における表層格はガ・ヲ・ニがほとんどで、例外的にデがすこしある。

【例】火山がそびえる・私が悪かった・柵を作る・野球放送に聞き入る・眼が涙でいっぱいだ

(5) 〈受け手〉(REC)

「やりもらい」の動詞における受け手はその典型的なものである。ただし、受け手が常に〈受け手〉になるというわけではなく、「与える」場合のニ格・ヘ格が主たる対象である。「受ける」動詞のガ格が有意志体である場合には〈動作主〉、〈経験者〉を優先的に用いる。(3.2.2 参照)

基本文型における表層格は、ニ・ヘの他にガが少数ある。

【例】遺族に恩賞をおくる・機械に振り子を仕組む・時計屋へ直しにやる・ねじが日の光を浴びる

(6) 〈与え手〉(ORI)

「やりもらい」の動詞における与え手はその典型的なものである。ただし、与え手が常に〈与え手〉というわけではなく、「受ける」場合のニ格・カラ格が主たる対象である。「与える」場合のガ格には〈動作主〉(有意志体の場合)または〈無意志主体〉(無意志体の場合)を優先的に用いる。(3.2.2 参照)

基本文型における表層格はニ・カラ・ヨリである。

【例】 おじいさんにめがねをいただく・にいさんから説明を聞く・信濃丸より報告あり

(7) 〈相手 1〉(PAR)

共同行為者を必要とする行為における共同行為者をさす。〈相手 1〉は、〈動作主〉や〈対象〉と入れ替え可能な場合が多い。たとえば「AがBと論争する」「AがBをCと交換する」など。常に入れ替えが可能ならば、深層格も同じでよいはずであるが、すべてのケースに成り立つわけではない。なお、共同行為者といっても、第二例「AがBをCと交換する」の「C」をAの〈相手 1〉と見るかBの〈相手 1〉と見るか、二通りの解釈がありうる。Bの〈相手 1〉ならば、普通にいうところの行為者ではないわけであるが、それも〈相手 1〉に含める。ここではそのガ格対称かヲ格対称かの区別を示す標識がない。動詞によっていずれかに決まる場合もあるが、上の「交換する」のように両方の可能性を持つものもある。村木の述語素における添字「1, 2」は、この種の動詞に最も有効に働くと思われる。

表層格はニ・ト・カラである。トが最も典型的なものであるが、例数としてはニの方が多い。

【例】 旅人が人夫と言合う・その土地をこの国につきあわせる・捕鯨船が母船から離れる

(8) 〈相手 2〉(OPP)

〈相手 2〉はもともと「BをCから守る」の「Cから」に対応するものとして設けられたが、ここではそういう例はなく、「危険をまぬかれる」などのヲ格に使っている。

表層格は本資料ではヲのみである。

【例】江戸市民は兵火をまぬかれた。

(9) 〈時〉(TIM)

ある事象の起こった時点をさす。点といっても、「〇〇年」のようにかなりの幅を持つ場合もある。

表層格はニ・デ・カラ・ヘ・ヲなどである。

【例】 その間に歌を作る・途中で昼寝をする・父が後からくる・よい所へきた・夏の日を鳴き立てる

(10) 〈時—始点〉(TFR)

継続的な事象における初めの時をさす。

表層格はカラ・ヨリの他にヲが1例だけあった。

【例】 朝から風がはげしい・秋より冬にかけて・今を去る千二百年の昔

(11) 〈時—終点〉(TTO)

継続的な事象における終りの時をさす。

表層格はニ・マデである。

【例】 帰る頃になる・夜までにぎわう宮の森

(12) 〈時間〉(DUR)

ある事象の継続時間をさす。

表層でははだかで現れることが多いが、時としてニ・ヲをとる。ただし、助詞が付く場合と付かない場合とでは、意味用法に差がある。

【例】 一月あまり歩き続ける・一年に二度とない花盛り・老後を送る

(13) 〈場所〉(SPA)

ある事象の生じた場所をさす。

表層格はニ・デの他にヲ・ヘ・カラの例が見られた。

【例】 太平洋が眼下に広がる・地獄で仏に会う・その辺をさがす・あそこへ運河を作る・橋が真ん中から燃え切れる

(14) 〈場所—始点〉(SFR)

移動における起点をさす。動きを伴わない領域を示す場合(例：この辺から禁漁区だ)にもこれを用いる。

表層格はカラ・ヨリ・ヲである。

【例】 水道から水が湧き出る・三方より大砲を撃ちかける・電車をおり
る

(15) 〈場所—終点〉(STO)

移動における着点をさす。動きを伴わない領域を示す場合(例:麓から中腹まで建物で埋める)にもこれを用いる。

表層格はニ・へ・マデの他、ヲの例を認めた。

【例】 旧臣が京都に集まる・その場へかけつける・天まで上がる・後ろ
を振り返る

(16) 〈場所—経過〉(STH)

移動における経過場所をさす。「そばを通る」「山道を歩く」など移動の自動詞におけるヲ格名詞が主たる対象である。

表層格はヲ・カラ・ヨリ他にニの例があり、それはヲに置き換えるものである。

【例】 大洋を西へ西へと航海する・格子の間から手を入れる・荒野にさ
まよう

(17) 〈始状態〉(SOU)

変化が起こる前の状態をさす。変化動詞に用いる。～カラ／ヨリ～ニ／へ／マデというように〈終状態〉と対で現れることもあるが、いずれか一方だけの方が多し。〈始状態〉はいったいに〈終状態〉より出現率が低いが、この資料では特にはなはだしいようである。

表層格はカラ・ヨリが考えられるが、例数が少なく、実例はカラのみであった。

【例】 千メートルから千五百、二千と高度が増える

(18) 〈終状態〉(GOA)

変化した後の状態をさす。変化動詞に用いる。～カラ／ヨリ～ニ／へ／マデというように始状態と対で現れることもある。

表層格はニ・トが主で、他にわずかながらヲとへがあった。

【例】 橋がコンクリート造りにかわる・名を柿右衛門と改める・奇岩が
絶壁をなす

(19) 〈属性〉(ATT)

主としてガ格対象についての性状記述の中に現れる。純粹に属性をさす場合(例:日本の馬は気が荒い)と部分をさす場合(例:ななかまどは葉が藤に似ている)とがある。「～ガ(ハ)～ガ」のパターンに次いで「～ガ～ヲ」のパターンが多いのは一文一格の原理によるもので、ガとヲの両方を〈対象〉にするわけにいかないからである。ヲが〈属性〉になる場合には、ガが〈対象〉になる。もちろん、「AガBヲ」となるもののうち、非意図的であって、しかもBがAの属性ないし部分であるものに限る(例:北千島の漁場が活気を帯びて来る・松平信綱は、幼名を長四郎といへり)。

表層格はガ・ヲ・ニである。

【例】市街は小綺麗で落着きがある・花子は歯が痛い・とうろうが江上に影をうつす・鳩が夕日を背に受ける

(20) 〈原因・理由〉(CAU)

ある事象の生ずる原因をさす。原因に直接原因と間接原因がある場合、直接原因が〈無意志主体〉、間接原因が〈原因・理由〉となる。

例:衛生状態不良により 伝染病が 多くの人命を 奪った。

〈原因・理由〉 〈無意志主体〉 〈対象〉

表層格はニとデが主で、他にカラ・ヨリ・ガがある。

【例】老学者の言に感動する・景色のよいことで有名だ・さばの斑点に似ているところから俗にさば雲という・朝日が野ら一面を明るくする

(21) 〈手段・道具〉(TOO)

意図的な行為における道具ないし方法。〈動作主〉の存在を前提にするため、ガ格には用いない。我々が通常いうところの道具に近く、フィルモアの道具格よりかなり狭い。

表層格はデとニである。

【例】焼酎で傷口を洗う・言い伝えを文字に書き表す

(22) 〈材料〉(MAT)

何かを加工して物を作るときの原材料が〈材料〉である。ただしアプレシヤ

ンのように糸や釘まで材料とするのではなく、それらを〈道具〉に入れたので、対象はかなり限定される。

表層格はデのみである。

【例】 やしの葉でかごをあむ・涙で板の間に絵をかく

(23) 〈構成要素〉(COM)

何かを組立てて物を作るときの部品が〈構成要素〉である。また〈構成要素〉は物ばかりでなく、組織機関の編成などを示すのにも使う。

表層格は概ねデだと思われるが、本資料には1例しかなかったので、はっきりしない。

【例】 大審院を五人の判事で組織する

(24) 〈方式〉(MAN)

動作が発生する際の様態をさす。副詞との境がはっきりしない場合もある。というより、助詞ニ・トについては「副詞＋格助詞」に属する例も多く、それらは連用名詞句という定義に外れることになるが、用言の直接従属者には違いがないので、考察の対象に含めた。

表層格はニ・ト・デである。

【例】 道路が十文字にまじわる・続々と集まる・非常な速さで押し寄せる

(25) 〈条件〉(CON)

かくかくの場合になどという前提条件を指すのが主であるが、他にいろいろのものを含む。形は単文であっても論理的には単文の範囲を逸脱するものかもしれない。

表層格はニ・デである。

【例】 品物が少なくて買う人が多い時には値段が高くなる・光線の具合で空色に光る

(26) 〈目的〉(PUR)

行為の目的を示すのが本来で、その場合には動詞の連用形やサ変動詞語幹にニの付く形が多く用いられる(例：弁当を買いに行く)。その他に「～にふさわしい」「～に適する」など、直接的に行為と結び付かないものもこれに含め

る。

表層格はほとんどがニで、他にデがすこしある。

【例】 雀を探しに立つ・日常の計算に便利だ・主用で通る

(27) 〈役割〉(ROL)

ヲ格またはガ格に立つ名詞が事象の中で有する資格を指示する。表層ではニ・トをとり、「として」と言い換えられる。〈終状態〉との境が問題になる場合もあるが、動詞が変化動詞であるか否かで、だいたい区別がつく。

表層格はニとトである。

【例】 軍馬に買い上げる・杖柱と頼む

(28) 〈内容規定〉(COT)

発話・思考の内容を指示する部分。表層上は引用のトが大部分であるが、判断結果を示すニ格も含まれる。ただし「同意の旨を伝える」におけるヲ格は対象格とする。実際にはこの例のヲ格の名詞句（従属句を含む）には発話の内容も表されているが、一般的にはヲ格名詞句は抽象化されて、具体的内容を指示しないものだからである（例：結果を知らせる）。

表層格はトとニである。

【例】 自分が悪かったとあやまる・西国の大藩を目の上のこぶと見る・
時期が五六月頃に限られる

(29) 〈範囲規定〉(RAN)

叙述の成り立つ範囲を指定する。もともとは「～について」を対象として設けたものであるが、資料の性格が異なるために用法が広がり、いくらか雑多になった。性状記述に多いが、必ずしも述語にかかるとは限らず、副詞句にかかるとのものもある（例：世界中で一番えらい）。

表層格はニとデが主で、他にガ・ヲ・カラがある。

【例】 信長の家来に上島主水という者がいる・俳句で「雲の峰」とい
う・あなたは日本語が上手だ・おみやげをありがとう・陪審員を
人民中から選定する

(30) 〈提題〉(TOP)

「A とは B (のこと) だ」のように明確に主題として取り上げられた場合

に限って使用する。単独のハは、格助詞に変換する（または格助詞を補う）ことができる場合がほとんどであり、〈提題〉として扱わない。

表層格はト（ハ）のみである。

【例】 東交民巷とは各国公館のある所だ

(31) 〈観点〉(VIE)

観点または立場。「にとって」などは概ねこれに属する。「～ことからみれば」のように判断の根拠を指示するものもこれに含める。〈条件〉と同じく、単一命題の枠からはみだすようである。

表層格はニとカラである。

【例】 竹千代には無二の忠臣だ・船から見れば大洋同然だ

(32) 〈比較の基準〉(COR)

比較する際の基準となるものを指す。大小・優劣など、不等号で表されるものだけでなく、「同じ」「異なる」など等号で表されるようなものにも用いる。異同を示す場合には〈相手1〉(PAR) とすることも考えられる。複数個の深層格を認めるならば、両方付与しても差し支えないわけであるが、ここではそれを認めず、いずれか一方のみとし、こちらに入れた。また時間的境界を示すものが他にないので、それにも用いる。

表層格はヨリがもっとも多く、次いでニ・ト・ヲ・カラとなる。このうち、トだけは異同にしか用いない。

【例】 影の方がその物より短い・佐吉の機械が外国製に及ばない・あの美しい鳥とは違う・百階を越える・四時を過ぎる・みんなから遅れる

(33) 〈随伴〉(ACO)

共同行為者を必要としない行為における共同行為者を指す。共同行為者なしでは成り立たないような行為においては〈相手1〉を用いる。

表層格はトのみである。

【例】 友人と町へ散歩に出る

(34) 〈度合〉(DEG)

数量で表せるようなもののうち、時間以外のもの。格助詞が付かない場合が

多く、したがって本報告での例数は少ないが、無格（はだかもしくは係助詞・副助詞だけついたもの）の名詞を含めれば、かなりの数にのぼるであろう。

表層格はニ・トである。

【例】 わかる程度に教える・一段と冷気が加わる

(35) 〈陳述〉(PRE)

陳述というものは通常格に含めるべきものではないが、助詞「に」「と」「で」は助動詞「なり」「たり」「だ」と歴史的に関わりがあり、同定機能が認められるので、ひとまず立てた。例数は少ないが、文献49にも「断定」として「と」24例、「に」20例の存在を認めている。

表層格はニがほとんどで、他にト・デがある。

【例】 すべてで一千以上に及ぶ・仏の御言葉とあれば・お後の仰せで「〈略〉。」とのことです

3.2.2 格の優先順

ここでは格の組み合わせを認めない方針をとっているので、上の定義の中で一つの用例に合致しそうなものが複数ある場合には、その中から一つをえらばなければならない。定義の中でも多少ふれたが、深層格の間に優先順位を設けて、類似の用法がなるべく同一の категорияに収まるようにしたい。以下に不等号を用いて優先順を示すが、これはあくまで原則であって、マニュアル等で例外規定を設けることができる。

- ア. 〈動作主〉 > 〈与え手〉 〈動作主〉 > 〈受け手〉
- イ. 〈無意志主体〉 > 〈与え手〉
- ウ. 〈原因・理由〉 > 〈無意志主体〉
- エ. 〈比較の基準〉 > 〈相手 1〉

アは、やりもらいの動詞におけるガ格名詞に〈与え手〉〈受け手〉よりも〈動作主〉を優先的に付与することを示す（例：頼朝は万寿に褒美を与えた・私は入口で閲覧用紙をもらった）。ただし、有意志体が消極的に受け手となる場合には〈経験者〉（例：会社が損害をこうむる）、無意志体の受け手は〈受け手〉となる（例：ねじがその光を受けて）。

イは「与える」動詞におけるガ格名詞が無意志体の場合、すなわち〈動作主〉にならない場合に、〈与え手〉(ORI)ではなく〈無意志主体〉(CPO)を用いることを示す(例:月の光が人々に慰めを与える)。

ウは〈無意志主体〉の使用をなるべく制限し、〈原因・理由〉(CAU)が使える場合はそれによることを示す。ただし実際には〈無意志主体〉でも〈原因・理由〉でもよいという例は少ない。

エは異同を示すトヤニを〈相手1〉とせずに〈比較の基準〉とすることをいう。

以上4点の他にもいくつか使い分けの基準があるが、常にどちらかが優先するというのではなく、条件に応じて決まるものなので、第4章のそれぞれのところで述べる。いずれを取るにしても、判断の基準となるものは、どちらが情報として価値があるかということであるが、その価値判断の基準となるものは今のところ存在しない。何かに応用してみなければ分からないというのが実情である。

3.3 調査方法

3.3.1 概要

辞書における格フレームは1.2で述べたように文型パターンで記述するが、パターンの数がかかなり多くなることが予想されるので、記述作業のマニュアルは、文型ではなく助詞ごとにどの深層格を割り当てるかを指示するのが妥当だと思う。200個や300個のパターンで全用例の60%をカバーしたとしても、それだけで実用になるわけではないから、パターンの選択という形ではなく、一見出しごとに、かつその中の語義区分ごとに個別に記述する必要がある。文型パターンはそのための参考に過ぎない。したがってここでの調査も、パターンや述語の意味分類を問題にする前に、それぞれの格助詞を横並びで観察することから始めたい。

文脈付き用語総索引の中から9個の格助詞 ガ、ヲ、ニ、デ、ト、カラ、ヨリ、へ、マデ を見出しとする部分を抽出し、一つ一つの例に表層格と深層格を割り当て、さらにその格助詞を含む連用名詞句がどの用言に係るかを記入し

た。

表層格は見出しの格助詞そのものであることが多いが、述語が受身・使役・可能等の態を持つ場合には、基本形を想定して格助詞を変換した。また慣用的な言回しと思われるもの（例：気がつく、手に入れる）は、それ全体を一語とみて調査対象からはずしたが、格助詞相当連語については、格助詞に準じた扱いをした。したがって、実際に扱った格助詞は上記の9個より多い。また『国定読本用語総覧』ではマデをすべて副助詞としているが、ここではそれを格助詞と副助詞に二分した。

もともとのデータは助詞ごとに出現順になっているが、それを深層格によって並べ替えたり、係り先の用言によって並べ替えたりして、類似の用例に異なる深層格が付与されていないか、あるいは一つの深層格中にあまりに雑多なものが入っていないかなどをチェックし、修正した。用例が助詞ごとに集められているところから、一文中のいくつかの連用名詞句の間に深層格の重複が生じやすく、それをなくすためにも多くの労力を費やした。述語の異なり語数は2270語、結果は3.4の表3に示す通りである。また上記の作業において生じた問題点と検討の結果が第4章以降に述べてある。

3.3.2 資料

第四期国定読本（通称サクラ読本）巻1～12に出現するすべての語に文脈を付けて五十音順に配列したものが『国定読本用語総覧』巻6および7（三省堂刊）である。その全用例（延べ約123,000例）の中から、格助詞が、ヲ、ニ、ト、デ、カラ、ヨリ、へ、マデの用例約17,000例を抽出し、3.3.3に述べる手順にしたがって表層格の変換等を行ったのち、木村の判断によって深層格を割り当てた。係助詞・副助詞は直接調査の対象にしていない（第5章参照）が、格助詞を持たない名詞句についても、連用名詞句相互の整合性をはかる上で矛盾が生じないように注意した。

3.3.3 作業手順

(1) 対象範囲決定

以下の手続きにより、調査対象となる用例の範囲を定める。その結果が表 2「格分析の対象になるデータ」に掲げるものである。格助詞の全用例 17000 余のうち、まず表層格の変換によって格助詞相互の間に入りが生じるが、総数に変化はない。さらに除外例が 1000 例ほどあるが、そのうち格助詞相当連語については別途調査する (4.10 参照)。

ア. 表層格の変換

受身・使役・可能等、態によって表層の格が変わる場合には、基本文型に戻して扱う。その際、『国定読本用語総覧』における単位を変更することがある。たとえば『用語総覧』では、「によって」などは「に／よっ／て」と単位切りされているが、この作業では 1 語とみなす。

例：村人は、此の火によつて救はれたのだと気がつくと、
(火が [村人を] 救う)

基本文型との対応については、文献 20 に従う。ただし、使役文においては、基本文型よりも要素の数が多いのが普通であるし、受身の中にも基本文型中の要素と受身文型中の要素が一致しないものがある。間接受身とか迷惑 (利害) の受身とか呼ばれるものであり、上記文献中の受身のタイプ(7)~(9)がそれに該当する。その名のごとく、迷惑をこうむるケースが多いが、そうと限ったわけではない。今回扱った資料にはそういう例がなかったが、あったらどうするかを考えておかねばならない。これについては 6.1 参照。

使役の場合の扱いは下記の通りとする。ただし、ここでいう使役には、いわゆる語彙的使役は含まれない。辞書に見出しが載っているような述語は対象外とする。

①ある表層格が基本文型においても同じ表層格をとるものならば、使役文であることを無視して能動文と同じ扱いをする。

例：人をやつて雪を取捨てさせたのです。(人が雪を取り捨てる)

②ある表層格が基本文型において異なる表層格をとり、かつ使役文が基本文型と同じ数の名詞で構成される場合には、基本文型に合わせて変換する。

例：この言葉が孔子をどんなに満足させたか。

→この言葉に孔子がどんなに満足したか。

表 2. 格分析の対象になるデータ

	ガ	ヲ	ニ	デ	ト	カラ	ヨリ	へ	マデ	計
出現度数	3371	4455	4786	722	2456	660	116	662	155 ¹⁾	17383
態変換による転出 (転出先)	-184 <small>ヲ177,=7</small>	0	-144 ガ	-2 ガ	0	-2 ガ	-1 ガ	0	0	-333
態変換による転入	149	177	7	0	0	0	0	0	0	333
連体修飾	-25	0	0	0	-11	-50	-4	-7	-17 ²⁾	-114
助詞相当連語	0	0	-116 ³⁾	0	-42	0	0	0	0	-158
慣用句その他	-165	-50	-377	0	-128	-42	-6	-4	-18	-790
対象度数	3146	4582	4156	720	2275	566	105	651	120	16321

- 1) 助詞「まで」総数 192 例のうち、純粋な副助詞を除いた数。
- 2) 連体の他、「までが」「までを」等を含む。
- 3) このほか、「によって」9 例が、態変換により「が」に移動。

すなわち、能動文において原因理由を表すニヤデは使役文のガになるのである。この型の使役文は基本文型への変換が可能なので変換した。

③ガ格名詞すなわち使役者が基本文型中に存在しないものならば、使役文の文型を基本文型のように扱う。その場合に基本文型より名詞の数が一つ増えるわけで、その増えた部分をどう扱うかが問題となる。たとえば、

例：義仲（ガ）ひそかに味方の兵を敵の後に廻らせ、
 （基本文型では、「兵が～廻る」）

という例文で「兵」を〈動作主〉(AGT)とすると、一文一格の原理によって「義仲」を〈動作主〉にするわけにいかなくなる。とって他に適当な格も見当たらないので、新たに「使役主」というものを立てるか、または使役主を〈動作主〉として使役される人物（有意志体）を道具のように扱うかである。井上・柴谷のように使役文を複文扱いすれば、「義仲」が主文の主語で〈動作主〉、「兵」が補文の主語で〈動作主〉ということになって、問題が片付くことになるが、はたしてそうするのが好ましいのかどうか。一つ問題が片付く代りに別の問題が発生するのではないかということである。使役というのは「せる」「させる」「しめる」など明瞭な標識を持っているから、解釈上不都合はな

いかかもしれないが、情報内容の表示という観点からすると、あまり好ましくない。二つの〈動作主〉すなわち使役者と被使役者との関係は直接には表されず、主文と補文の関係として間接的に表されることになるが、この関係は発話文と話の内容との関係などとはかなり異質のものであり、もっと直接的な表示の方が望ましいように思う。この報告書では単文しか扱わないので、複文一般の構造や表示法と関係つけて論ずることができないが、井上流の扱いをしないですませられれば、そうしたいと思う。この件はまだ保留になっているが、実際例については、被使役者（ヲ格またはニ格名詞）を〈動作主〉にしている。使役者の方は、格助詞がついていないために処理の対象になっていない。

イ. 用例除外

連体修飾の例は除く。単独では「が」（文語）のみで、それ以外はすべて「の」を伴う。その他、慣用句や助詞相当連語（格助詞・接続助詞）の中に含まれるものを除く。慣用句の範囲をどうするかも問題になるところであるが、今回は取り上げない。すべて木村の主観によって処理した。何を慣用句としたかは、付表2に掲げてある。個別的な用法のほかに、敬語の「お～になる」のようにパターン化したものもある。ガ・ヲ・ニが多いのは当然であるが、デ格だけが全くなかったのは意外であった。

(2) 深層格付与とマニュアル作成

用例は助詞ごとに出現順になっているが、1例につき1個ずつ深層格を付与すると共に、その作業と並行して付与基準を定めるマニュアルを作成していった。その結果が第4章である。このマニュアルは直接的にはサクラ読本の用例に依存するものであるが、さほど汎用性に欠けるものではないと思う。むしろ用例が多様すぎて、うまく整理しきれなかった憾みがある。恣意的な選択はすべきでないと思って全用例を対象にしたが、中にはあまりに文学的で分析の対象とするにふさわしくない表現もあった。

(3) 述語指定

各連用名詞句の係り先となる用言を指定する。係り先の用言が二つ以上ある

場合には、原則として近い方を採用するが、それが非常にありふれた語で、遠い方の述語を採用したいと思った場合にはそうした。述語が名詞+陳述辞である場合には、助動詞「だ」をもって代表する。述語はすべてかなで入力するが、同音異語のありそうなものには後ろに漢字注記をつけた（例 きく：聞、きく：利）。述語を指定する際、敬語や古語をふつりの語に直すなど、多少手を加える（例：申し上げる、おっしゃる→いう）。また述語が省略されている場合にはかっこつきで補った。

(4) 述語による並べ替えと整合性チェック

上で指定した述語により並べ替え、同じ動詞で同じ表層格に対して異なる深層格が与えられている場合には、相応の理由があるか否かを判断し、意味が同じであるにもかかわらず異なる結果が出ている場合には、いずれかを修正した。単純なミスによる場合は修正も容易であるが、判断に迷う場合も少なくない。が、問題を残しつつも、少数の保留例を除いて、深層格付与作業を終えた。

相応の理由がある場合というのは、たとえば次のような場合である。

- ① ガ, EXP, きく：聞, , きんじょにゐた大蛙が、それをきいて、(耳にはさむ)
- ② ガ, AGT, きく：聞, , 浦島がどうしても聞きませんので、(承知する)
- ③ ガ, AGT, きく：聞, , おぢいさんやおばあさんが、なぜ泣くのかと聞きますと、(訊ねる)

(5) 例数カウントおよび用言一覧表作成

表層格・深層格・述語をこの順にソートキーとして例文を並べ替え、表層格と深層格の組の頻度と、その組ごとの述語一覧表を作った。

3.4 結果および結果に基づく考察

深層格を縦軸に、表層格を横軸にとり、例数を記入したのが表3である。まだマニュアル自体が十分に固まらない状態であるから、これらの値も変動す

ると思うが、だいたいの傾向は見てとれよう。

これを見てまず一つの表層格が多くの意味を持つことに驚く。格助詞の数が少ないのだからある程度は当然予想される場所であるが、あまりに多いと、格助詞の機能とはそもそも何なのか疑わしく思えてくる。むろん用言が決まれば選択範囲はぐっと狭まるはずであるが、そのところはまだ数量的に把握していない。表層格と深層格との関係だけならば、この程度のデータ量でも統計的意味を持ちうるが、さらに細かく分析するには、もっと大量のデータが必要である。用言が定まっても、いわゆる必須格以外のものにはあまり影響がおよばないのだとしたら、他に使える情報というのは、名詞の意味しかないことになる。名詞の意味分類と格助詞との組合わせで深層格（ロール）がある程度しぼれることは、外務省・防衛庁共同研究「自動インデックスシステムの調査研究」でも指摘している（文献 42～47）が、意味分類をどのくらい細分すればよいのか、それでもなお多義性が残るのはどれくらいか、など未知の部分が多い。樹目ごとに用例を点検して、いくらか整理したものの、大勢に影響はなかった。

それはさておき、この表を見ただけでは納得のいかない部分が多い。これに該当する例を作れと言われても思い付かないものがたくさんある。たとえばへ格で〈時〉というのは何かというと、「ソコへ、カニガキマシタ。」の「ソコへ」だったりする。これは「〈場所—終点〉(S T O)」ではないかと言われそうだが、英訳すれば「when」とか「then」とかになるだろう。「そこへ」「ところへ」を成句として扱えば、へ格に〈時〉というのを認めなくてもひとまず問題は回避できるけれど、必然的に辞書の見出しはふえる。一般に機械辞書というものは、このようにしてどんどん汚くなってゆくのである。そういうものだと割り切ってしまうればそれでもよいが、今回は成句の範囲を常識の範囲に限定したので、その分、格の方がきれいにまとまらないといえる。どちらにしろよせするかは戦略の問題である。第4章にすべてのケースについて実例が挙げてあるから、不審に思ったら参照していただきたい。以下、目につく点をいくつか列挙する。

① 〈動作主〉(A G T)のうちヲ格とニ格は使役の場合であって、それを除け

ばガ・デ・カラのみである。〈経験者〉(EXP)についてもヲ格はほぼ同様であるが、ニ格には使役以外のものも多く含まれる。

② ニの守備範囲はガとヲを合わせたよりも広く、無格が概ねガとヲのいずれかに帰着することを考えると、無格の場合よりも広範囲だと言える。

③ カラとヨリはよく似ている。一つの大きな違いは、ヨリの半数以上が比較に使われるということであって、それを除けば両者の使用分布は非常に似ている。

④ 〈随伴〉(ACO)のトはよく〈相手1〉(PAR)のトと対比されるが、用例数の上からもほぼ2:5で、よい勝負になっている。

⑤ ガ・ヲまたはガ・ヲ・ニだけを文法格とし、それ以外を状況格その他というように区別する人がある。その考え方には一理ある。大ざっぱにいうと、表層での文型は役者が一人ならばガ、二人ならばガ・ヲまたはガ・ニ、三人ならばガ・ヲ・ニというパターンをとる。英語でいえば主語・直接目的語・間接目的語に相当するわけであり、したがってこれらの格助詞には固有の意味はなく、用言との関係で自在に動くというのである。

銃口が北を向く。

人が銃口を北に向ける。

の二文の関係を考えて、新しく〈動作主〉が加わったことによって〈対象〉「銃口」と〈場所-終点〉「北」の表層格が変化した。となると、個々の用言のもつ格フレームを無視して表層格と深層格の対応を考えるのは無意味ではないかという見方も生じる。そのことがこの分布の多様さによって裏付けられた感がある。しかしいきなりパターンで記述し、集計しようとしても、文法格と状況格、または必須格と任意格とをどこで分けるかが大きな問題である。ガ・ヲだけでは狭すぎるであろうし、ニまで含めるとすると、同じニ格の中を二分しなければならなくなる。さらにトやカラはどうかという疑問も生じる。仮に最初からパターンで調査したとしたら、次には各パターン内の表層格の横並びの関係が問題になるはずであり、またいわゆる文法格以外の表層格について、別途このような調査をしなければならない。個々の用言の格フレームを記述するためには、まず同じ土俵の上で全体を見渡す必要があると考える。

表3. 表層格と深層格の対応

1996.10.16 現在

	ガ	ラ	ニ	デ	ト	カラ	ヨリ	へ	マデ	計
動作主	913	11	13	25		4				966
経験者	120	15	39	2						176
無意志主体	116		2							118
対象	1851	3955	150	12						5968
受け手	4		297					22		323
与え手			13			21	4			38
相手1			99		50	2				151
相手2		6								6
時		8	329	31		33	2	16		419
時-始点		1				138	12			151
時-終点			56						77	133
時間		15	15							30
場所		8	1322	267		1		13		1611
場所-始点		52				306	28			386
場所-終点		11	523					599	38	1171
場所-経過		348	3			28	2			381
始状態						4				4
終状態		4	299		73			1		377
属性	131	121	23							275

	ガ	ラ	ニ	デ	ト	カラ	ヨリ	へ	マデ	計
原因・理由	3		161	40		7	1			212
手段・道具			73	145						218
材料				33						33
構成要素				1						1
方式			264	90	311					665
条件			35	34						69
目的			159	3						162
役割			29		4					33
内容規定			46		1761					1807
範囲規定	8	6	86	34		3				137
提題					7					7
観点			13			7				20
比較の基準		9	49		38	1	56			153
随伴					19					19
度合			10		11					21
陳述			44	3	1					48
保留		12	4			11			5	32
計	3146	4582	4156	720	2275	566	105	651	120	16321

⑥深層格の頻度というのは記事の内容に依存する面が大きい。したがって、この表での頻度がきわめて小さいからといって、ただちに無用だときめつけるわけにはいかない。たとえば〈構成要素〉(COM)は機械構造・化学組成などの記述には重要な要素となるし、〈始状態〉(SOU)も経済的あるいは科学的指標の変動を示すのに重要である。整理できるものはした方がよいが、急ぐべきではないだろう。

4. 作業の基準と実例

この章は、本調査の主な目的である格フレーム記述のための作業マニュアルとなるはずのものである。むろん辞書における用言の格フレーム記述にあたっては、語義区分の立て方から始まって、格フレームに組込むべき表層格と深層格の範囲、必須格・準必須格・任意格などの区分、さらに名詞の意味区分として何を用いるかなど、初めに規定しなければならないことがたくさんある。しかし一番大きな問題は、どういうケースに何という深層格をあてはめるかの基準であり、それをできるだけ明確にすることがこの章の主眼である。

今回の調査で扱ったのは格助詞が顕在する例ばかりである。実際には格助詞がなくて係助詞や副助詞が現われたり、助詞を全く介しないで自立語どうしが接続することも多いが、その場合でも意味関係自体はたぶんあまり変わらないであろう。もちろん格助詞には省きやすいものとそうでないものがあるが、程度の差はきわめて大きい。第5章でいくらか触れるが、いちばん省きやすいのがガ格、次がヲ格でガ格の3%ぐらい、他はぐっと少なくなる。したがってそういうものまで含めて統計をとった場合、今回の結果とは、深層格全体の分布に差が出るだろうことは当然予想される。つまり今回の結果にくらべて、〈動作主〉や〈経験者〉や〈対象〉の割合が大きくなると思われる。もう一つ、〈度合〉や〈時〉のように、助詞を付けないのが普通であるものもある。しかしそういう量的な分布の差以外に何か違いがあるかという点、たぶんないだろうというのが木村の抱いた感想である。以下、個々の格助詞についてどういうケースをどう扱うかの基準を述べる。基準といってももちろん固まったものではなく、まだかなり流動的かつあいまいなものであり、問題点も多い。あくまで現時点での基準である。

問題点を論ずるにあたってまれに作例を用いることもあるが、ほとんどの例は実例である。以下に掲げる例は、全16,300例中、約2,000である。類似の

例が多すぎるような気がしなくもないが、動詞が変わるごとに、また名詞の意味が変わるごとに用例を挙げることによって、例の中から当面の問題と似たようなものを見出し、よりどころにすることが容易になると判断した。ただしこのデータの特徴は、小学校の教科書であるためか、擬人化した記述が多いということであり、それが通常の記述の解釈にもいくらか影響を及ぼしているかもしれない。

説明および用例の配列順は、まず表層格、次に深層格（表1の配列順と同じ）、最後に述語の五十音順である。

4.1 ガ格

(1) 〈動作主〉：AGT

名詞は有意志体に限る。有意志体+ガが常に〈動作主〉になるのではなく、原則として動作が意図的なものであることを要する。たとえば「Aが生まれた」におけるAは〈動作主〉ではなくて〈対象〉である。一つの動詞が複数の意味を持つ場合には、その意味区分ごとに、異なる扱いが許される。「彼が交渉にあたる。」の「彼」は〈動作主〉、「彼がBの先輩にあたる」の「彼」は〈対象〉というふうに。それでもなお個々の場面によって意図的であったりなかったりすることが考えられるが、用言の格フレーム記述にあたっては、いづれかに片付けるしかない。ただし今回は基礎調査という意味合いで、実際の用法に即して個別に判定した。

【実例】

ガ, AGT, あがる,, 外から歸つた母が、二階へ上つて來た。

ガ, AGT, あげる,, 僕が手を舉げると、

ガ, AGT, あつまる,, シンル中や近所ノ人が集ッテ、

ガ, AGT, いいつける,, 車掌さんが、ボーイに、「〈略〉。」と言ひつけてみた。

ガ, AGT, いう,, 「〈略〉。」と、山下君がいひました。

ガ, AGT, いく,, かりに私たちが月の世界へ行つたとすると、

ガ, AGT, いる：居,, 親がそばにゐてくれなくても、

- が, AGT, おう：追, 手, アラビヤ人が駱駝を追つてみました。
- が, AGT, おくる：送, 会, 私どもの主人が國へ送る金です。
- が, AGT, おしよせる,, 追討の官軍が忽ち江戸表に押寄せるとすれば、
- が, AGT, かえる：帰,, 使の者が歸つて来ました。
- が, AGT, かける,, かさゝぎが巢を幾つもかけてゐる。
- が, AGT, きく：聞,, 浦島がどうしても聞きませんので、
- が, AGT, きく：聞,, おぢいさんやおばあさんが、なぜ泣くのかと聞きま
すと、
- が, AGT, くる：来, 会, 三郎さんが来て待つてゐられたんだよ。
- が, AGT, さげる：提, 手, でつぶり太つた島民が、椰子の葉であんだかご
をさげて、
- が, AGT, しゅっぱんする：出帆,, アメリカ行の日本丸が、三時に出帆す
るのです。
- が, AGT, しらべる,, 皆が、それをしらべては用紙に書入れてゐる。
- が, AGT, する,, 白兔がその通りにしますと、
- が, AGT, せつめいする,, 「〈略〉。」と、秋野君が説明する。
- が, AGT, そらんずる,, 彼が天武天皇の仰のまゝに、〈略〉、古い言傳へを
そらんじ始めたのは、
- が, AGT, そろえる,, せんだうたちが、かいをそろへて一かき水をかきま
すと、
- が, AGT, たいする：帯,, 武士が刀劔を帯する意義もこゝに存する。
- が, AGT, たすける,, 徳のある者なら、天が助けるはずだ。
- が, AGT, たずねる,, 「〈略〉。」と、みことがお尋ねになると、
- が, AGT, たつ：立,, 僕等が今立つてゐる所と、
- が, AGT, つかまえる,, 或年の十月の末、子供がつばめをつかまへました。
- が, AGT, つづく,, すばやく歩兵・砲兵・工兵の乗移る自動車群が續く。
- が, AGT, つれる：連,, ばくらうが牛を連れて歸りかけると、
- が, AGT, とおる,, 一輪車の水賣が通る。
- が, AGT, とぶ,, 蜜蜂が盛に花から花へ飛んでゐた。

ガ, AGT, とまる: 泊, 船が或港に泊つた夜の事であつた。
 ガ, AGT, ならぶ, , かうして大勢のつばめが並んで居るのを見ると,
 ガ, AGT, なる, , 午後は、僕が案内役になつて、
 ガ, AGT, のりうつる, , 恐しい海賊がどやどやと乗移つて来て、
 ガ, AGT, のる, , 兄のウィルバーが、最初に乗りました。
 ガ, AGT, はしる, , きゆうくつさうに自動車走つてゐる。
 ガ, AGT, はなす: 話, 会, あなたがよく會ひたいとお話しになる江戸の賀
 茂眞淵先生が、
 ガ, AGT, ひろう, 会, わたしがひろってやらう。
 ガ, AGT, まいる, 会, たくさんの人が、たえずお参りして居るが、
 ガ, AGT, みる, , にいさんがとけいを見ようとしたので、
 ガ, AGT, もとめる, 文会, 日頃貧しと聞きし一豊が、よくもかゝる名馬を
 求めしものぞ。
 ガ, AGT, ゆききする, , 馬車や自動車がたたくさん往き來してゐる。
 ガ, AGT, ゆびさす, , 文治が指さしたので、
 ガ, AGT, よむ: 読, , 兄が史記を讀んでゐるのを、
 ガ, AGT, わたる, , 其上を、賊が我先にと渡つた。
 ガ, AGT, わたる, , 雁の群が渡つてゐる。
 ガ, AGT, わらう, , みんながどつと笑ひました。

◎意図的であるかどうか判定に苦む場合もある。「聞く」には、いくつかの
 意味があつて、上の2例はそれぞれ、①聞き入れる、②たずねる の意である
 が、その他に③耳に入る、または耳を傾ける、④判断する の意があり、④お
 よび③の「耳に入る」は〈経験者〉とする。「耳を傾ける」の方は〈動作主〉
 でよいようにも思うが、個々の例をそのいずれかに分けるのは容易でないの
 で、〈経験者〉に統一するかどうか、思案中である。「見る」についても同様の
 ことが言える。①注視する、観察する ②目に入る ③判断する の三つの意
 味のうち、①の場合は〈動作主〉、②③の場合は〈経験者〉としたいが、①と
 ②の仕分けが困難な場合も多いと思うので、〈経験者〉に統一することも考
 えている。他に④参照する ⑤介護する [赤ん坊、病人を] ⑥診察する など

の意が考えられるが、このデータの中にはなかった。

◎「待つ」のガ格も待ちあわせの場合には〈動作主〉であるが、心待ちにする場合には〈経験者〉にしたい気分である。ヲ格をとりうるものなので、〈対象〉とはしないが、「京城行の汽車が目の前に待つてゐる。」などは〈動作主〉でよいのかどうか。

◎艦船・航空機・自動車などの乗り物を有意志体扱いすることに違和感を覚える向きが多いようである。したがって、「飛ぶ」「出帆する」「走る」など自動詞の場合には〈対象〉にすると決めることも考えられるが、自動詞一般ということにすると、「巡視艇が（救助の要請を受けて）出動する」場合も〈対象〉にしなければならなくなる。当面は、どちらでもよい場合には〈動作主〉とすることにしておく。

◎「泣く」「笑う」などの感情的な動作は通常は意図的といえないわけで、〈対象〉にすべきだという人もある。「～を笑う」は〈動作主〉でそれ以外の「笑う」は〈対象〉というような仕分けも可能であるが、意図的ではないまでも制御可能という意味で「笑う」に〈動作主〉を割り当てた。

(2) 〈経験者〉：EXP

心情表現などにおける経験主体。名詞は有意志体に限る。勝ち負け、見聞のように多く本人の意志によらずに定まるものの経験主体、金品・権利・能力の保有などにおける保有主体もこれに含める。したがって、可能態の文「A=Bガ～できる」のAは〈経験者〉で、Bは〈対象〉となる。これはフィルモアのいう経験者格より範囲が広いかもしれないが、あらゆる実例になんらかの格を付与しようとするれば、こうした拡張解釈も必要になる。このうち、勝ち負けのように他に対象格となるようなものを持たない場合には対象格を用いることも考えられる。

例：AチームがBチームに勝った。

A商品がB商品に勝った。

はいずれもAを〈対象〉、Bを〈比較の基準〉(COR)とすることができるし、有意志体と無意志体を区別する理由もあまり明確でないが、当面の方針と

して、Aチームは〈経験者〉、A商品は〈対象〉とする。「死ぬ」のガ格は一般に〈対象〉とされるようなので、木村も一応それにしがった。そうなる、「急死する」「事故死する」「生きる」「長生きする」等、生死に関わるものはすべて〈対象〉にしなければならないだろう。それが可能の形をとった場合はどうなるか。可能表現を持つのは、もともとが意図的な行為であると考えられているが、「先生が生きていらつしやる限り、どうして私が死ねませう。」のように、「死ぬ」の可能動詞も存在する。しかもこの場合の「死ぬ」は自殺ではないのである。あらゆる実例の間に完全な整合を得るのは不可能で、どうしても矛盾が生じるのであるが、これもその矛盾の一例である。

【実例】

ガ, EXP, あせをかく, 会, お人形さんが汗をかくだらう。

ガ, EXP, あわてふためく, , 地はゆれ, 市民があわてふためいて居る中を,

ガ, EXP, うたがう, 会, 二人がうたがったのも、むりではないが、

ガ, EXP, うむ, , 日本が生んだ数学界の偉人に、關孝和といふ人があつた。

ガ, EXP, える, , 渴者が清冷な水を得たのにも増して大きな喜びであつた。

ガ, EXP, おこたる, 会, 私には、姉上が少しでもお勤をお怠りにならうとは思はれませぬ。

ガ, EXP, おこる: 怒, 韻, ワタシガ、ドンナニオコッテキテモ、

ガ, EXP, おしがる, 会, オヂイサンガラシガルノダカラ、

ガ, EXP, おしとおす, , 此の家にそだつた乃木大將が、一生を忠誠質素で押通して、

ガ, EXP, おとす, 会, これは、あの人か落して行つたに違ひない。

ガ, EXP, おもいたつ, 文, かくて鐵眼が此の大事業を思ひ立ちしより十七年、

ガ, EXP, おもう, , 頼光がふしぎに思って、

ガ, EXP, かつ, , 力の強い者が勝ち、

ガ, EXP, かんがえる, 会, 天下の人が、皆さう考へるわけではありますまい。

ガ, EXP, かんじる, 会, あゝいふ風に、みんなが選挙の義務といふことを

強く感じれば、

ガ, EXP, きく : 聞, , 全国の人々が、其の美しい聲を聞きました。

ガ, EXP, きく : 聞, 会, みかどが此の事を聞き召して、

ガ, EXP, きんちょうする, , 国民すべてが緊張したのである。

ガ, EXP, こういをみせる, , かうしたドイツ人が、我々日本人には、しばしば好意を見せてくれる。

ガ, EXP, ころごす, , 自分が修史に志してからすでに長い月日を過したが、

ガ, EXP, ささる, 会, 此の間から、鯛が、何かのどにさゝつて、物がたべられないで困ると申して居ます。

ガ, EXP, したう, , 近代科学を家庭生活に應用することに力める彼等が、一面には大地を慕ひ、

ガ, EXP, する, 会, あの物知りのかかしが知つて居るでせう。

ガ, EXP, たおれる, , 隣にゐた分隊長が、「あつ。」と言つて倒れた。

ガ, EXP, であう, , さばくの中で、或旅人が、二人の商人に出あつた。

ガ, EXP, どうようする, , すると、一座が少し動揺し始めました。

ガ, EXP, なれる : 慣, , 大將がなれるまで、うち中のものがそればかりたべるやうにした。

ガ, EXP, ながす, 会, 雀の子を、あの犬君が逃したの。

ガ, EXP, ねがう, , 父爲時が瀕つたやうに、

ガ, EXP, はっけんする, , たまたま其の附近に居た我が軍の兵が、これを発見した。

ガ, EXP, ひととなる, 文会, 彼が今の心にて人とならば、

ガ, EXP, ふしぎがる, , 「〈略〉。」と、客がふしぎがると、

ガ, EXP, ほしがる, , 一つには、我々が其の物をほしがるといふことと、

ガ, EXP, まける : 負, 会, ぼくらの方が負けるかも知れない。

ガ, EXP, まちこがれる, , 春になると、誰もが此の珍しいお客の歸つて来るのを待ちこがれて居ます。

ガ, EXP, まぬかれる, , わるがしこい者がまぬかれることになるであらう。

ガ, EXP, みおぼえる,, ロシヤ少女の給仕が僕の顔を見覚えてみて、
 ガ, EXP, みつける,, ふさぎ込んで下を見つめてみた女の子が、それを見
 つけて、
 ガ, EXP, みる,, ふと通りかゝつた某大尉がこれを見て、
 ガ, EXP, みる,, 月から地球を見るとすると、我々が常に見る月の四倍ぐ
 らゐな地球が、
 ガ, EXP, めざめる,, すべての人が目覚める時が必ず来るに違ひない。
 ガ, EXP, めずらしがる, 会, 都へ連れて行ったら、人が珍しがって見るだ
 らう。
 ガ, EXP, めをさます,, シシガ、目ヲサマシテ、
 ガ, EXP, もつ,, ちやうど世界中の人が、皆打出の小槌を持つてゐるやう
 なものです。
 ガ, EXP, ゆだんをする,, 番兵がゆだんをして居ると、
 ガ, EXP, ようじんする, 文会, 乗手が用心するならば、
 ガ, EXP, われにかえる,, しばし思にふけつてみた光圈が、我にかへると

◎本人の意志で決まらない状況の主体が時として〈経験者〉となり、時として
 〈対象〉になるわけで、その区別をどうするかが問題である。精神活動や五感
 に関わるもの、また勝敗や成功・失敗のように本人の努力を前提とするものは
 〈経験者〉とするとして、上例「ひととなる」(「成人する」の意)の場合には、
 生死と同様に〈対象〉とすべきかもしれない。

(3) 〈無意志主体〉：CPO

〈無意志主体〉は、他動詞のガ格で〈動作主〉や〈経験者〉にできないもの、
 すなわち無意志体をどう扱うべきかというところから案出されたものであり、
 内容的には〈原因・理由〉と重なる部分がある。

例：この事件で彼は窮地に陥った。

この事件が彼を窮地に陥れた。

の2文は、ニュアンスの差こそあれ、同一の事実を伝えるものである。にもか
 かわらず、「事件で」は〈原因・理由〉で、「事件が」は〈無意志主体〉だとい

うのは道理に合わないだけでなく、実益を損なうものになるだろう。上の例に限って言うと、この二つは同等であり、どちらも〈原因・理由〉にして差支えないと思う。ところが、〈無意志主体〉というのは、必ずしもこのような抽象的なものばかりではない。「物体が熱を放射する」「夏の日が畑を照らす」のように具象的なものも多く、そのヲ格を〈対象〉とせざるをえないとすると、ガ格をどう扱うかが大きな問題となる。「物体が…」は「物体から熱が放射する」とも言えるから、「物体」に〈場所-始点〉(SFR)を割り当てることもできるが、「夏の日が…」については、「日」に割り当てるべき適当な格がない。これを原因理由格と呼ぶのは、呼称の問題に過ぎないとは言っても、いささか抵抗がある。また一步ゆずってこれを〈原因・理由〉と認めた場合に、〈原因・理由〉が二つ必要になる例が実際に存在する(3.2.1(3)参照)。したがって、この二つを統合するわけにはいかない。とすると、残る問題は、両者をどう使い分けるかである。まず〈原因・理由〉を優先することとし(3.2.2ウ)、述語の形をいくらか変える(他動詞→自動詞、使役→能動など)ことにより、ガをデ・ニ・ニヨッテなどに変えることができる場合は〈原因・理由〉とする。そしてそれに該当しないガ格無意志名詞は〈無意志主体〉とする。

もう一つ異なる扱いを受けるケースとして、ヲ格名詞が〈属性〉(ATT)になる場合がある(例:笹が花をつける)。その場合には、ガ格名詞は〈無意志主体〉でなく〈対象〉となる。

【実例】

ガ, CPO, あたえる,, しみじみと親しめる光が、我々に大きな慰を與へるからです。

ガ, CPO, あつする,, 「荒城の月」が、満堂を壓してゆるやかに流れ始めたのであつた。

ガ, CPO, いろどる,, けやきの大木が、淡褐色にぼつと大空をいろどる。

ガ, CPO, うつ, 韻, あたゝかい御飯の湯氣が、幸福に私たちの顔を打つ。

ガ, CPO, うつしだす,, 約九百年の昔に書かれた源氏物語が、如何によく人間を〈略〉寫し出してゐるかがわかるでせう。

ガ, CPO, うばう:, ,もと此の地方に流行したマラリアと黄熱病が、かつて

は何萬といふ西洋人の命を奪つたこともあります。

ガ、CPO、おくる：送、弱イ光ヲ出シテキタオ日様ガ、ダンダン暖イ光ヲ送ルヤウニナリマス。

ガ、CPO、おしあげる、磯にくだける波が、船を陸へ押し上げようとする。

ガ、CPO、かざる、壮麗な樓閣がこれを飾つてゐる。

ガ、CPO、そそる、幾千・幾萬とも知らぬ美しい窓が、我々の心をそそる。

ガ、CPO、そめる、今沈んだあたりからさし出た幾百筋の細かい金の矢が、夕空を染めて、

ガ、CPO、たてる、縁先の雪が、かさり、かさと音を立てて

ガ、CPO、たてる、きれいな海水が、細かいあわを立てながら、

ガ、CPO、てらす、じやがいも畠を、午後の日がかんかんと照らしてゐる。

ガ、CPO、てんかいする、此の大自然が展開する景観に打たれて、

ガ、CPO、とらえる、天井からつるしてある此の大きなランプが、ふとガリレオの心をとらへました。

ガ、CPO、とりかこむ、市長公邸と、取引所と、イギリス銀行とが取囲む廣場は、

ガ、CPO、のせる、動力による飛行機が、人間をのせて空中を飛行することに成功したのは、

ガ、CPO、はく：吐、手、船室の物が、さはつてみると皆熱氣を吐いてみました。

ガ、CPO、はなつ、其の山はだの紅褐色が、萬緑の世界に異彩を放つてゐる。

ガ、CPO、ひく、内城の正門正陽門の堂々たる姿が、先づ旅行者の目を引く。

ガ、CPO、まちうける、いはゆる水の門が、第一から第六まで順々に待受けてゐる。

ガ、CPO、めくる、ほこり風が古雑誌のページをめくつてゐる。

ガ、CPO、ものがたる、きちんとした服装が先づそれを物語る。

ガ、CPO、やぶる、脱穀機の音が、あたりの静かさを破つて景氣よく聞えて

来る。

が、CPOゆする,, もろこしの葉をかさかさ秋風がゆする。

◎「壮麗な樓閣がこれを飾つてゐる。」「動力による飛行機が、人間をのせて」などは〈手段・道具〉でもよきように思われる。特に前者はそうであるが、なるべく基準を複雑にしないために、ガ格に道具格は認めないことにした。

(4) 〈対象〉：OBJ

形容詞・形容動詞・体述語（名詞＋陳述辞）および自動詞のガ格に立つ語で〈動作主〉・〈経験者〉のいずれにも該当しないものは、原則として〈対象〉になる。ただし、「～ハ～ガ」というパターンがある場合、または想定できる場合には、「～ハ」が〈経験者〉、「～ガ」が〈対象〉となる（例：彼は読書が好きだ。）ほか、「～ハ」が〈対象〉で「～ガ」が〈属性〉（例：おばあさんは耳が遠い。）または〈範囲規定〉（例：槍は長いと振り回しが不自由だ）となることも多い。

他方、他動詞の場合には、ヲ格が〈対象〉になるのがほとんどで、例外があるとすれば、「月が〔〈対象〉〕 姿を〔〈属性〉〕 あらわす」のように、ヲ格が〈属性〉になる場合である。例数としては最も多く、ごみばこになりやすいものである。

他の深層格との間で区分が問題になるのは、「車」「船」「飛行機」など、乗り物に属するもので、これを有意志体とみなすかどうかで迷うことが多い。むろん、純粹に物として扱われる場合もあるが、多くの場合に、乗っている人の意志を反映して行動するからである。「通り掛かりの漁船に救助された」という場合の「漁船」は明らかに〈動作主〉であるが、単に「船が通る」という場合にも「人が通る」のと同様に〈動作主〉とすべきか、また自動車や電車の場合にはどうか。現状ではこれらは有意志体の扱いになっている。同じ動詞で意味も同じであるにもかかわらず、名詞によって異なる深層格をとるのも問題だと思うからである。「人や車が行き交う」という場合には、「人」が〈動作主〉ならば「車」も〈動作主〉でなければならぬだろうし、「車」を〈対象〉にするなら「人」も〈対象〉にすべきだろう。

【実例】

[〈経験者〉-〈対象〉の例]

ガ,OBJ,いや：嫌,,(おたまじゃくしは)水の中にあるのが、いやになつて来ました。

ガ,OBJ,かわいそう,,和尚さんは、しばらくすると、雪舟がかはいさうになりました。

ガ,OBJ,すき：好,,(宣長は)若い頃から讀書が好きで、

ガ,OBJ,ほしい,,サルハ、ニギリメンガホシクナリマシタ。

ガ,OBJ,わかる,,天皇は、弟うかしのまごころが、よくおわかりになりました。

[〈対象〉だけの例]

ガ,OBJ,あかるい,,地平線の上だけが明かるい。

ガ,OBJ,あがる,,思はず歡呼の聲が上る。

ガ,OBJ,あく：開,,東の戸がしまつて北の戸があく。

ガ,OBJ,あたる,会,わしの豫想がほとんど當つてある。

ガ,OBJ,あらわす,,其の奥に養老の瀧が完全な姿を現す。

ガ,OBJ,あらわれる,,時には地球の十數倍に達するのが現れることがある。

ガ,OBJ,ある,,大小八千以上の工場がこゝにあつて、

ガ,OBJ,ある,,とつぜん後から切附けた者がある。

ガ,OBJ,あれる,会,ところが途中海が荒れて、

ガ,OBJ,いる：居,,松本君がずつと向かふの席にある。

ガ,OBJ,うかぶ,,ふと別の考が先生の頭に浮かびました。

ガ,OBJ,うごく,,かういふ風に星が動くといふのも、

ガ,OBJ,おおい,,割合なぎの日が多い。

ガ,OBJ,おこる：起,,やがて長州征伐の大事が起つて、

ガ,OBJ,おちる,,日が靜かに落ちて行く頃でした。

ガ,OBJ,およぶ,,話が古事記のことに及ぶと、

ガ,OBJ,かがやく,,東には今あけぼのの光が美しく輝き、

- ガ, OBJ, かくていする,, 有罪の判決が確定する前に、
- ガ, OBJ, きれい, 会, 森の木がきれいですね。
- ガ, OBJ, くだる,, これから號令が次々に下る。
- ガ, OBJ, くる: 来,, 長い夏も過ぎ、秋が来て、野山の草木が枯れる頃、
- ガ, OBJ, さく: 咲,, 京都では花が咲き、人は蝶のやうに浮かれてみた。
- ガ, OBJ, さす: 差,, 雲が切れて、日光がさして来た。
- ガ, OBJ, しぬ,, リ、エンタールが死ぬ三箇月程前のことでした。
- ガ, OBJ, じょうず, 会, これほどお前が上手だとは、
- ガ, OBJ, すむ: 済,, 十二番の舞がめでたくすみましたが、
- ガ, OBJ, する,, おかあさんの聲がした。
- ガ, OBJ, そびえる,, ごつごつした火山が至る所に聳え、
- ガ, OBJ, そまる,, 西の方の空が、まつかにそまつて居る。
- ガ, OBJ, そんざいする,, 太陽と同じやうな天體が殆ど數へ切れない程存在する。
- ガ, OBJ, たちこめる,, 濃霧が一面に立ちこめる。
- ガ, OBJ, たつ: 立,, 井戸端のうるしの木が、ぬうつと立つてゐる。
- ガ, OBJ, たつ: 立, 会, 左様致しては政道が立ちませず、
- ガ, OBJ, だ,, あの普通に頭といつて居る所が實は胴で、
- ガ, OBJ, だ, 会, 瀧壺のごく浅いのが、此の瀧の特徴だよ。
- ガ, OBJ, ちかづく,, 何時の間にかベニスが近づいてみた。
- ガ, OBJ, つける,, 道端には、笹が珍しく花をつけてみた。
- ガ, OBJ, つたう,, 「ボーン」といふかすかな音が、電線を傳つて先生の機械に響きました。
- ガ, OBJ, つづく, 手, 波に明け波に暮れる日が、それから十日間も續いたのですが、
- ガ, OBJ, つめたい,, ホームに出ると、風が冷たい。
- ガ, OBJ, てりつける,, 強い太陽の光が、山に晶に、ぎらぎらと照りつけてゐる。
- ガ, OBJ, でる, 会, 朝顔の芽が出ましたよ。

- ガ, OBJ, とおる, , 広い道路が、鐵道と並んで通つてゐる所が多い。
- ガ, OBJ, ない, , かうなつては何ともしやうがない。
- ガ, OBJ, ならぶ, , 日用品のありとあらゆるものが雜然と並んでゐる。
- ガ, OBJ, なる: 成, , さつき出發した温泉宿が、だんだん小さくなつて行つた。
- ガ, OBJ, のこる, 会, まだ雪が五六尺四方は残つてゐます。
- ガ, OBJ, はいる, , たくさんの標本がたんすの引出にはいつてゐる。
- ガ, OBJ, はしる, 会, お月様が走つてゐるのだよ。
- ガ, OBJ, ふく: 吹, , 風ガフクト、
- ガ, OBJ, へる: 滅, , 道標の數字が次第にへつて行くのが力と頼まれる。
- ガ, OBJ, ほがらかだ, , 特に空と海とが朗かである。
- ガ, OBJ, ます, , 木々の葉が一日毎に緑を増して、
- ガ, OBJ, まぢかい, , もう田植が間近いのである。
- ガ, OBJ, みえる, , かういふ兵士や其の家族たちの歌が、萬葉集に多く見えてゐる。
- ガ, OBJ, みせる, 手, 第一、海の色が何ともいへない美しさを見せます。
- ガ, OBJ, やくだつ, , 恐らく此の見せかけの廣場が役立つに違ひない。
- ガ, OBJ, やける, , 自動車小屋が、見る間に焼けた。
- ガ, OBJ, ゆかいだ, , 高い橋がぐらぐら動くのが、すてきに愉快だつた。
- ガ, OBJ, よせる, 韻, 波が寄せたり、返したり。
- ガ, OBJ, わるい, 会, わたしが悪かつた。

(5) 〈受け手〉: REC

やりもらいの動詞に用いる。ただし、やりもらいの動詞においても、与え手が常に〈与え手〉で受け手が常に〈受け手〉というわけではなく、ガ格に関しては〈与え手〉や〈受け手〉よりも〈動作主〉・〈経験者〉(有意志体の場合)または〈無意志主体〉(無意志体の場合)を優先的に用いる。しかし無意志体の受け手には上記のいずれも使えないので、その場合には〈受け手〉を用いる。したがって、1文中に〈与え手〉と〈受け手〉の両方を使う必要は生じな

い。

AがBにCを与える／あげる／やる／送る／知らせる の「Bに」が〈受け手〉,

AがBに／からCをもらう／いただく／受ける／教わる の「Bに／から」が〈与え手〉となる。

特に「売る」「買う」のように一般に相手を特定しない動詞においては、この格はあまり出番がない。もらう場合にも、相手が勝手に呉れた場合は〈受け手〉とすることも考えられるが、わざわざもらいに行く場合や、代金等を要求する場合の「いただく」は〈動作主〉であり、これらを区別するのは面倒なので、一律に〈動作主〉にしてよいと思う。

同一事象にはなるべく同じ格のセットをという趣旨からすれば、この扱いは反則的である。なぜそれほど〈動作主〉が優先するのかと問われれば、自信をもって答えることはできない。ただ、記述主体は人間であり、人間にとってもっとも重要なのはたぶん行為主体であろうという漠然たる思いがあるだけである。人によってはここに動作主-起点、動作主-終点などという二重の格を設定するわけであるが、ここでは二重の格を用いない方針なので、ひとまず上記のような扱いをする。

実際には、動詞「もらう」「いただく」のガ格は省略されたり、「は」に変わったりするのがほとんどで、格助詞の範囲だけでは、実例が少ない。ガについては、〈受け手〉の例が4例あるだけで、〈与え手〉の例はない。

【実例】

が, REC, あびる,, 僚機が、くつきりと深紅の太陽の光を浴びる。

が, REC, うける,, 江岸の建物が、強い夏の光を受けてきらきらと光つてゐる。

(6) 〈属性〉: ATT

AがBがV（形容詞を含む）という文型のうち、Aが〈経験者〉になる類（例：私は赤が好きだ。）を除いた文（例：象は鼻が長い）におけるAとBの扱いかたは二通り考えられる。一つはAが〈対象〉でBが〈属性〉とするやり

方、もう一つはAが〈提題〉(TOP)でBが〈対象〉とするやり方である。結論から言うと、木村は前者をえらんだ。あまり提題格という格は使いたくないのである。提題というと、単一命題の中での役割とは別種のもののような感じを与えるが、そういうものではないと思うし、出現頻度もかなり高い。「彼は優秀だ」というときの「彼」が〈対象〉で、「彼は頭がいい」というときの「彼」が〈提題〉というのもバランスが悪い。しかし前者の方法を採った場合にも問題がないわけではない。まず属性という言葉であるが、純粋に属性といえるものばかりでなく、全体部分関係における部分(特に身体部分)を指す場合が多い。⁶⁾「象は鼻が長い」に対して「象の鼻が長いのは…」という文言があった場合に、「鼻」を〈対象〉とするか属性とするか。つまり同じ単文中に他に〈対象〉とすべき連用名詞句がなければ、属性など思い付かないかもしれない。ここでもやはり不統一が生じる恐れがある。純粋に属性だけをいうなら用語の範囲を限定しやすいが、部分を含めるとなると、〈対象〉との境が分かりにくくなる。

上述のような問題はあるものの、やはり属性という格を立てたいと思う。その一つの理由として、次のような例を挙げることができる。

家人が泥棒の顔を見た。→ 泥棒が家人に顔を見られた。

つまり能動文におけるノ格名詞が受動文におけるガ格になっている。「見る」という語は基本的にガ格とヲ格しか取らないのに、受身になると三つの格を取りうる。これは能動→受動の変換パターンとしていささか特異であり、「料金を取られる」などの「取る」のようにもともと基本文型がガ・ヲ・カラの三つの格を持つものとは性格が異なる。そしてこのような場合のヲ格名詞は、概ね属性もしくは部分、または「秘密を知られる」「プライバシーを侵される」の「秘密」「プライバシー」のように当人と密接不可分なものである。つまり能動文に対して格を付与した場合と受動文に対して格を付与した場合とで結果

6) 村木はこれを「〈全体-部分〉の関係」と「〈主人-側面〉の関係」に分けている。人間に関してはその方が自然かもしれないが、物や技術が主たる記述対象である場合には、このような区別がわずらわしく感じられるかもしれない。

が同じになるか、少なくとも矛盾しないことが求められる。「泥棒が家人に顔を見られた。」において「家人」が〈経験者〉、「泥棒」が〈対象〉、「顔」が〈属性〉だとすると、「家人が泥棒の顔をみた。」における「家人」と「顔」の格も同じでなければならない。

寺村は、これに近いものとして「性状規定表現における主体の一部ないし一面の特定」というものを立てており、「Bガ」を除いても意味が通じる場合にだけこれを認める。「象は鼻が長い」の「鼻が」は省略不能であるからこれに該当しないという。つまり、この場合は「鼻が」が主体で、「象は」は主体でなく「象の」が主題化したものとされる。上記の「泥棒の」の場合と同様に、格フレームにおける「の」の扱いはむずかしい問題であり、今後の課題であるが、いずれにしても、省略可能か否かで区別する理由がわからないので、木村は区別をしなかった。省略が可能かどうかは、述語が「似る」「よい」のようにガ格名詞に広範な選択を許すか、「長い」のように狭い範囲のものしか取らないかの違いによって決まるもので、本質的な差異ではないと思う。「象は鼻が長い」の代りに「象は耳が大きい」といったら、「耳が」は省いてもよいことになる。

【実例】

ガ, ATT, あかい, 韻, 白い, かはいいうさぎさん。お耳が長い, 目が赤い。

ガ, ATT, あがる,, 二回・三回と試験をくりかへしました。さうして、其の都度成績が上つて行くやうでした。

ガ, ATT, あらい, 会, 日本の馬は気が荒いとかいわれるさうだが、

ガ, ATT, ある,, イタリアを旅行してゐると、どこか日本に似たところがある。

ガ, ATT, ある,, 物にねだんがあるのは、

ガ, ATT, ある,, 一番大きいのは、直径が二百粍もあるといはれてゐます。

ガ, ATT, ある,, これらの星にも、名前や番號があり、位置もきまつてゐるのですが、

ガ, ATT, ある, 手, 市街は、〈略〉、小ぎれいで落着きがあります。

ガ, ATT, いう, 会, 廣い通は、中央が車道といつて、

ガ, ATT, いたい, , 花子さんは、はがいたいので、
 ガ, ATT, いっぱいだ, , おなかが一ぱいになつたので、
 ガ, ATT, うつくしい, , 緑色のすき通るやうな觸手が菊の花のやうに美しい「いそぎんちやく」だの、
 ガ, ATT, おおきい, , 體が大きいのに、性質がごくおとなしく、
 ガ, ATT, おちつく, , さう思ふと心がちつとも落着かなかつた。
 ガ, ATT, おちる, , 高度がぐんぐん落ちて、
 ガ, ATT, おとなしい, , 性質がごくおとなしく、
 ガ, ATT, およぶ, , 此の古墳の大きなのになると、長さが數百米に及び、
 ガ, ATT, かくばる, , 前の方が角ばつてをり、
 ガ, ATT, かわる, , すつかり色がかはつて、見るから丈夫さうな油蟬になります。

ガ, ATT, くさる, , 隣では、莖がくさつて引抜けないのを、
 ガ, ATT, くらい, , 頭が黒く、のどと翼と尾とは濃い紫色を帯び、
 ガ, ATT, くわわる, , 汽車はやゝ速度が加つた。
 ガ, ATT, こい, , まだ口ばしの下の赤色が、親つばめ程こくありません。
 ガ, ATT, じょうぶ, , 當時、體がもうこれだけ丈夫になつて居たのである。
 ガ, ATT, せいせいする, , 水の上にかほを出すと、氣がせいせいするやうに思ひました。

ガ, ATT, たいら, , 天氣のよい日、底が平で、上は山の峯のやうに積上つた形に現れる白い雲は積雲といひますが、
 ガ, ATT, たえる, , たけるは息がたえました。
 ガ, ATT, たかい, , 僕よりもずつと背が高いが、
 ガ, ATT, た, 会, 馬は、ひづめが一つだけれども、
 ガ, ATT, た, , 門の輿行が柱間三間であることも、
 ガ, ATT, ちがう, , それは肉眼で見るのとすつかり感じが違つて、
 ガ, ATT, つぶれる, 会, 右の目がつぶれて居ませう。
 ガ, ATT, とおい, , オバアサンハ耳が遠イノデ、
 ガ, ATT, ときめく, , 私は、胸がときめくのを覺えた。

が, ATT, ない,, 大將には、全くたべ物に好ききらひがないやうになつた。

が, ATT, なおる,, 何時の間にかきげんがなほつて、

が, ATT, なくなる,, だんだん元氣がなくなり、

が, ATT, になる: 似,, 葉がふちに似た「なまかまど」や、

が, ATT, ぬける, 会, 前齒が二三本抜けて居ませう。

が, ATT, ひろい,, 市街は井然として道幅が廣く、

が, ATT, ふえる,, 二千と高度がふえる。

が, ATT, ふくれあがる,, 夏の日など、峯が恐しい程むくむくとふくれ上つたのは、

が, ATT, まずしい,, 家が貧しかつたために、

が, ATT, ゆるむ,, 任務を果して氣がゆるんだのか、

が, ATT, よい,, 如何に切味がよくとも捨ててかへりみられない。

が, ATT, よい,, 氣候が寒いので毛並がよく、一匹千圓といふのがあるといふ。

が, ATT, よわい,, 幼少の時體が弱く、其の上臆病であつた。

が, ATT, わるい,, 北風ト南風ハ、大ソウ仲ガワルイヤウデス。

◎上の「物にねだんがある」「星に名前や番号がある」などの例においては、ニ格が〈対象〉になる。「AにBがある」の形で最も多いのは〈場所〉—〈対象〉、次いで〈経験者〉—〈対象〉、それからこの〈対象〉—〈属性〉となるが、時として〈経験者〉—〈対象〉すなわち所有・所属関係との境界が問題になる。〈経験者〉は有意志体に限るが、〈対象〉はそれをも含みうるからである(例: 信長に〔〈経験者〉〕毛利攻めの志が〔〈対象〉〕ある)。

(7) 〈原因・理由〉: CAU

他動詞におけるガ格無意志体は〈無意志主体〉となることが多いが、そのうち下記の条件にあてはまるものを〈原因・理由〉とする。

使役文「この言葉がどんなに孔子を喜ばせたか。」は、態変換によって、基本文「この言葉にどんなに孔子が喜んだか。」に変換することができる。したがって、上記文中の「この言葉」は、いずれも〈原因・理由〉とみなすことがで

きる。それとはほぼパラレルな表現として、次の2文のように他動詞を対応する自動詞に置き換えることでガ格をニ格・デ格に変換できる場合がある。そのような場合に〈原因・理由〉を用いる。

この事件が彼を窮地に陥れた。

この事件で彼は窮地に陥った。

【実例】

ガ, CAU, あかるくする, , 空は真青にすんで、朝日がやがて野ら一面を明るくする。

ガ, CAU, あたためる, , 薄日がぼかぼかと背中を温める。

ガ, CAU, むすびつける, , 我が國語には、祖先以來の感情・精神がとけこんでをり、さうして、それがまた今日の我々を結び附けて、

(8) 〈範囲規定〉：RAN

あの人はピアノがうまい／上手だ／得意だ。

における「ピアノが」のように「に関して」と言い換えられるようなものは〈範囲規定〉とする。「あの人」は〈対象〉。

A食品はミネラルが豊富だ。

における「ミネラルが」も「ミネラルに富む」の「ミネラルに」と同様、〈範囲規定〉になる。構文的には〈属性〉に似ており、時に判別がむずかしいこともある。「この器具は構造が簡単だ。」の「構造が」は〈属性〉で、「この器具は取扱いが簡単だ。」の「取扱いが」は〈範囲規定〉である。これはニ格の場合も同様で、「耐久性に優れる」は〈属性〉で「ミネラルに富む」は〈範囲規定〉といった仕分けが必要になる。面倒だからどちらかにまとめるということも考えたが、〈属性〉の範囲があまり広くなるのも混乱のもとかと思うので、一応分けておく。なお表3から分かるように、両者の守備範囲が部分的には近接するにしても、全体としてはかなり異なるので、〈属性〉全体、あるいは〈範囲規定〉そのものをなくすわけにはいかない。まとめるにしても、ガ格の場合だけである。

【実例】

が, RAN, うまい, 会, なかなか字がうまくなった。

が, RAN, じゃうずだ, 会, あなたは、日本語が上手です。

が, RAN, ちがう, 会, 君子はそこが違ふ。

が, RAN, とくい, , 弟は、理くつよりも實際の物を作るのが得意でした。

が, RAN, ふじゆう, 会, 長いと振廻しが不自由で、

◎「それは肉眼で見るのとすつかり感じが違つて、」が〈属性〉で、「君子はそこが違ふ。」が〈範囲規定〉となるのはおかしいと感じられるかもしれない。「感じ」というのは属性の一種、「そこ」というのは何か分からないが、一言でいえないようなことということで範囲規定とみなしたわけである。そういうあいまいなことでは困るということになれば、属性とか部分とかいうものを、名詞の意味特性としてきちんと位置付け、それに属する語をリストアップすることになるだろう。

4.2 ヲ格

(1) 〈動作主〉: AGT

ガ格の場合と同じく、有意志体に限られる。通常の能動文においてヲ格名詞が〈動作主〉になることはまれであり、多くは使役文の中に現われる。四期国定読本中、例外が2例だけあった。動詞「逃す」の例である。なお、ヲ格が〈動作主〉である場合に、ガ格がどうなるかが問題になるが、一文一格の原理がくずせない以上、意図的にさせた場合には使役主という格を立てるしかないように思う。格助詞「が」の用例の中には、該当する例がなかったが、係助詞「は」「も」の例の中にそのようなものがあるはずである。検討を要するところである。「Aがらくだを逃した」というのが、「Aがらくだに逃げられた」と同じような意味合いの場合には、ガ格に〈経験者〉を用いる。

【実例】

ヲ, AGT, あらそわせる, , 裁判の目的は、決して人を争はせたり、人を罰したりすることではない。

ヲ, AGT, したがわせる, 会, 彼等をりつばに國法に従はせるのが、

ヲ, AGT, たたせる, , うばを門のわきに立たせて置いて、

ヲ, AGT, たわむれさせる, 韻, 五月の太陽は、農家の藁屋根に光彩を與へ、
其の縁先に小猫を戯れさせ、

ヲ, AGT, とまらせる,, 小鳥を止り木に止らせたりして、

ヲ, AGT, なかせる: 鳴,, ムリニ犬ヲナカセテ、

ヲ, AGT, にがす, 会, もしや、らくだを逃したのではありませんか。

ヲ, AGT, まわらせる, 文, 義仲ひそかに味方の兵を敵の後に廻らせ、

(2) 〈経験者〉: EXP

ガ格で〈経験者〉になるものが、使役の助動詞によって、または自動詞と対をなす他動詞によってヲ格となったもの。ただし、3.3.3にも述べたように、使役文型にも基本文型と項の数が同じで変換可能なものがあり、その種のものには変換した。ガ格名詞が抽象物であって、原因理由格となる場合である。

例: 嚴かな中に慈愛のこもつた言葉が、我々をいよいよ緊張させる。

〈原因・理由〉 〈経験者〉

嚴かな中に慈愛のこもつた言葉に、我々はいよいよ緊張する。

【実例】

ヲ, EXP, あっといわせる,, 見事一氣に千米近くも飛んで、人々をあつといはせました。

ヲ, EXP, おどろかす,, 此のかはいらしいお客様を驚かさないうちに氣をつけて、

ヲ, EXP, くるしめる,, サルト犬ハ、ヒッカイタリ、カミツイタリシテ、オニヲクルシメマシタ。

ヲ, EXP, さわがす,, 徒黨を組んで天下を騒がすといふことは、

ヲ, EXP, なつける, 文, 大國主命、國土を開き人をなつけて、威勢四隣に振るひ給ふ。

ヲ, EXP, ねつかせる,, おぢいさんが、孫を寝つかせようとして話をしてゐる。

(3) 〈対象〉: OBJ

動作・作用・思考の対象。最も量が多く、普遍的なものである。

【実例】

- ヲ, OBJ, あおぎみる, 韻, 私はじつと梢を仰ぎ見た、
- ヲ, OBJ, あける: 開, 友人がそつと立つて窓の戸をあけると、
- ヲ, OBJ, あげる, 向かふの食卓にすわつてゐた夫婦の客が、手をあげて私をさし招いた。
- ヲ, OBJ, あつめる, 会, よい刀を千本あつめるつもりで、
- ヲ, OBJ, あびる, 文, 鈴なりの赤き實、夕日を浴びて、
- ヲ, OBJ, いう, 会, 殿がそちの考を言へと仰せられたから、
- ヲ, OBJ, いっぺんする, 昔の不健康地を一變することに成功しました。
- ヲ, OBJ, うける, ねぢが其の光を受けて、
- ヲ, OBJ, うつす: 移, 会, 御眞影を、庭へお移し申せ。
- ヲ, OBJ, おしあげる, 磯にくだける波が、船を陸へ押上げようとする。
- ヲ, OBJ, おぼえる, 文, 神氣身にせまるをおぼえつゝ、
- ヲ, OBJ, おもう, 來し方行末を思ひながら、
- ヲ, OBJ, かける, らうのとびらに手をかけますと、
- ヲ, OBJ, くちずさむ, 此の歌を口ずさんで、
- ヲ, OBJ, こう, 鹿介は主君に志を告げ、許をこうてわざと捕はれの身となつた。
- ヲ, OBJ, さしむける, 文, 平家はあわてて討手をさし向けたり。
- ヲ, OBJ, する, 慶喜は事のすこぶる重大なのを知つて、
- ヲ, OBJ, せいする, 氣ちがひのやうにあふれる川を制し、
- ヲ, OBJ, だす, ケレドモ、潛望鏡ヲタエズ水ノ上へ出シテ居ルト、
- ヲ, OBJ, つくる, たんぼに柵を作つて、
- ヲ, OBJ, とばす, 風が吹イテ來テ、ハヒヲトバシマシタ。
- ヲ, OBJ, ながめる, 彼はしばらく澄みきつた空を眺めてゐたが、
- ヲ, OBJ, なづける, さういふ所を貝塚と名づける。
- ヲ, OBJ, のぞむ: 望, 文, 道いとはるかなる彼方に、寶物殿を望む。
- ヲ, OBJ, はかる: 図, 文, 力を合はせて源家の再興を計り、

- ヲ, OBJ, ひきあげる,, 網を引揚げる片端から、
 ヲ, OBJ, ひらく,, 二つの水門を交互に開いたり閉ぢたりすると、
 ヲ, OBJ, ふらせる: 降,, 雪ヤアラレヲ降ラセタリ、
 ヲ, OBJ, まつ, 文, 波のやゝ静まるを待ちて、
 ヲ, OBJ, みあわせる,, 海賊どもは、顔を見合はせて、
 ヲ, OBJ, みまわす,, 座を立つてあたりを見廻したが、
 ヲ, OBJ, みる,, よくねえさんに復習や宿題を見て頂いたものだった。
 ヲ, OBJ, めざす,, 燕の絶頂を目ざした。
 ヲ, OBJ, やめる,, とんぼ取を止めて歸つて來た。
 ヲ, OBJ, やる,, いくら餌をやつても、
 ヲ, OBJ, わかつ,, 此の喜びをあまねく世に分つて、

(4) 〈相手2〉: OPP

「避ける」「免れる」などのヲ格に与える。この格はもともと「AがBをCから守る」などのカラ格を対象として設けたものであるが、本データにはそういう例がなかった。ヲ格にこれを用いることにはいささか疑念があるが、ひとまずこうしておく。本データでは他にこの格を使っていないが、もしこの格を用いないとしたら、ここにあげた例は何になるか。〈場所-始点〉とでもするのだろうか。それとも単純に〈対象〉とするか。

【実例】

- ヲ, OPP, さける,, 眼前に迫る此の危急をさけるのに全力を盡くしたが、
 ヲ, OPP, さける, 会, 矢先を避ける。
 ヲ, OPP, まぬかれる,, 徳川の家名は断絶をまぬかれた。
 ヲ, OPP, まぬかれる,, 江戸市民は兵火をまぬかれた。
 ヲ, OPP, よける,, これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、

(5) 〈時〉: TIM

「～しているところを」のように、状況設定と共に用いられ、年月日等とは共存しない。

【実例】

ヲ, TIM, あいずする,, たじたじと引きめになつた所を、藤吉郎は、再び扇を上げて左右の隊に合圖した。

ヲ, TIM, いる：射,, 賊のさわぐ所を、さんざんに射た。

ヲ, TIM, うちしずめる,, 敵ノ軍艦が近ヅイテ來ルトコロヲ、<略>、魚雷デ打沈メテシマフノデアルガ、

ヲ, TIM, うつ, 文, 敵は果して不意を討たれ、

ヲ, TIM, とびまわる,, 天氣の好い夏の日を、愉快さうに飛廻り鳴きたてます。

◎最後の例は、〈時間〉(DUR) にかなり近い。ただ動詞が「送る」「すごす」「経る」などのように必須的、または準必須的にヲ格をとるものと違い、「夏の日に」といっても差支えないものである。

(6) 〈時-始点〉: TFR

「今を去る」の例のみだが、意味が明瞭なので、他と統合しにくい。

【実例】

ヲ, TFR, さる,, 今を去る千二百年の昔、

(7) 〈時間〉: DUR

本来は動作作用の継続時間を示すために設けられた深層格であり、「30分間漬ける」のように助詞の付かない場合を想定していたが、「夜を明かす」「余生を送る」などに対して他に適当なものがないので、これを付与した。

【実例】

ヲ, DUR, あかす,, 三人は其の夜を涙の中に明かしました。

ヲ, DUR, おくる：送, 会, 身軽になつて老後を送りたいと思ふ。

ヲ, DUR, おしとおす,, 此の家にそだつた乃木大將が、一生を忠誠質素で押通して、

ヲ, DUR, くらす, 文韻, かすみ立つ長き春日を子供らと手まりつきつゝこの日くらしつ

ヲ, DUR, こす: 越, 雪にうまつて冬を越した人形が、
 ヲ, DUR, すごす, 思はず時を過して、
 ヲ, DUR, へる: 経, 文, 社殿の右手に、幾百年を経たりと思はるゝ楠の老木あり。

(8) 〈場所〉: S P A

ヲが場所をさす例は少ないが、代表的な語は「探す」である。「なくし物を探す」「用例を探す」場合のヲ格は〈対象〉であるが、「室内を探す」「データベースを検索する」のように、あるものを求めてある範囲を探す場合は〈場所〉になる。「引出しを片付ける」も引出しそのものを片付けるのではなく、引出しの中を整理する意であるから、〈場所〉とする。ただし、数が少ないので、〈場所-経過〉(S T H)に統合すべきかとも思う。

【実例】

ヲ, SPA, かたづける, 机の引出をかたづけて居ると、
 ヲ, SPA, こめる, 文韻, 朝霧野山をこめて、
 ヲ, SPA, さがす, なほ其の邊をよく探すと、
 ヲ, SPA, さぐる, 文, 或は抱き或はふところを探る。
 ヲ, SPA, ほる, オヂイサンガ、ソコロホッテミマス、
 ヲ, SPA, みたす, 古都が多く、それらがすべて古美術を以て満たされてある。

(9) 〈場所-始点〉: S F R

ある場所から離れる場合に用いる。なお、純粋な場所以外のものもいくらか含まれる(例: 乳を離れる)。

【実例】

ヲ, SFR, うごく, 何時までもそこを動かうとしなかつた。
 ヲ, SFR, おちる, 文, 大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、
 ヲ, SFR, おりる, 養老驛で電車を下りた。
 ヲ, SFR, さる, つばめはそろそろ日本を去つて行きます。
 ヲ, SFR, しゅっぱつする, 手, 日本を出發してちやうど一箇月、

- ヲ, SFR, たつ: 発, 手, 明後二十五日にこゝを立つて、
 ヲ, SFR, たつ: 立, , 修行者は、座を立つてあたりを見廻したが、
 ヲ, SFR, での, , 船は爆音高く根據地を出て行く。
 ヲ, SFR, のがれる, , 彼は其の場をうまくのがれた。
 ヲ, SFR, はっする, 文, 松江を發したる汽車は、
 ヲ, SFR, はなれる, , 舟は岸をはなれました。
 ヲ, SFR, ひきあげる, , モモトラウハ、<略>、オニガシマヲヒキアゲマシタ。

(10) 〈場所—終点〉: STO

めざす場所・方角。「指す」「向く」「振り返る」「振り向く」などに関わる。なお「めざす」の場合に〈対象〉となっているのは、整合性を欠くので、どちらかに統一すべきかとも思うが、動詞によってはガ格が〈対象〉となる（例：針が北を指す）ので、〈対象〉への統一は慎重にする必要がある。このデータでは「めざす」のも地理的方角のみであるが、一般的には抽象的目標であることが多いので、一応このままでよいと判断した。

【実例】

- ヲ, STO, ふりかえる, , 後を振り返ると、
 ヲ, STO, ふりむく, 会, 決してわきを振向くな。
 ヲ, STO, むく, , 葉は、二枚重なつたまゝ上を向いて居ます。
 ヲ, STO, さす, , 鎌倉をさして上りました。
 ヲ, STO, さす, , 寒空を物ともせず東南をさして飛んで居た鳩は、

(11) 〈場所—経過〉: STH

通過する場所を表す。この例はかなり多く、ヲ格の中で〈対象〉に次ぐ重要な地位を占める。と同時に比較的分かりやすく、問題が少ない。ただし、純粋な空間だけでなく、いくらか抽象的な例もまじる。

【実例】

- ヲ, STH, あがる, , 廣い階段を上つた時に、
 ヲ, STH, あそびまわる, , 廣い野原を楽しさうに遊び廻つてゐました。

- ヲ,STH,あるく,,なれない道を一月餘りも歩き續けて、
- ヲ,STH,いく,,泥水の中を行つたりもどつたりする。
- ヲ,STH,いそぐ,韻,アゼミチヲ、トホイタンボヘイツギマス。
- ヲ,STH,いたる,,中山半島の西湖岸を休屋に至る間は、
- ヲ,STH,いちじゅんする,,廣々とした農園や牧場を一巡する。
- ヲ,STH,いっしゅうする,文,林藏は樺太の海岸を一周せんと志ししが、
- ヲ,STH,うおうさおうする,,其の周圍を、右往左往する人影がある。
- ヲ,STH,おおまわりする,,はるばる南アメリカの南端を大廻りしなければなりません。
- ヲ,STH,おしよせる,,すこぶる不規則に射出する七つの街路を、人の波、車の波が刻々と押寄せる。
- ヲ,STH,おどる,,機は軽く地上ををどりながら滑る。
- ヲ,STH,およぐ,,池の中を泳いでゐました。
- ヲ,STH,かえる,,行きには二時間餘りもかゝつた道を、ほんの一息で村まで歸つた。
- ヲ,STH,かけていく,,家の前を、村の消防隊が、〈略〉かけて行つた。
- ヲ,STH,かすめる,,耳もとをかすめる鋭い音。
- ヲ,STH,かつそうする,,ちやうど飛行機が空中を滑走するやうに、
- ヲ,STH,くぐる,会,一の鳥居をくゞつてから、
- ヲ,STH,くだる,文,一行は黒龍江を下りて河口に至り、
- ヲ,STH,こうかいする:航海,会,大洋を西へ西へと航海して、
- ヲ,STH,こえる,文,山を越えて東岸に出でんとすれば、
- ヲ,STH,さかのぼる,手,黄浦江をさかのぼると
- ヲ,STH,すかす,,たそがれの薄明かりをすかして、
- ヲ,STH,すぎる,,町を過ぎ、村を過ぎ、
- ヲ,STH,すすむ,,むしろ當然の道を進んだものといへる。
- ヲ,STH,すどおりする,,先生のおつしやることが、つい私の耳をす通りする。
- ヲ,STH,すべる,,林を縫つて長距離を滑るのは、

- ヲ,STH,たどる,,池のほとりをたどりながら、
- ヲ,STH,つかさする,,間もなく第三・第四のトンネルを通過した。
- ヲ,STH,つうじる,,イギリスは薩長を通じて官軍に好意を見せようとして
ゐた。
- ヲ,STH,つきぬける,,機は市街を西へ突抜けて、
- ヲ,STH,つたう,,小船で川や堀を傳つて大阪の町々に上げられます。
- ヲ,STH,つらぬく,文韻,やみを貫ぬく中佐の叫び。
- ヲ,STH,でいりする,文,下關海峡を出入する船舶の航路に接するを以て、
- ヲ,STH,とおす,,又は黒くいぶしたガラスを通して太陽を見ると、
- ヲ,STH,とおる,,静岡の上空を通つたのも東の間、
- ヲ,STH,とっぱする,,敵の寄手が若し門を突破すれば、
- ヲ,STH,とびあるく,,そのまはりをとび歩きました。
- ヲ,STH,とぶ,,ほの暗い空をたゞ一直線に飛んでゐるのだ。
- ヲ,STH,ぬう,手,其の船の間を縫ふやうに、
- ヲ,STH,ぬける,,杉の林を抜けると、
- ヲ,STH,のぼる,文,櫻樹多き坂道を登る。
- ヲ,STH,はいる,,門をはいつて少し行くと、
- ヲ,STH,はしる,会,釜山から四百五十料を、七時間もかゝらないで走つた
わけですね。
- ヲ,STH,ひこうする,,人間をのせて空中を飛行することに成功したのは、
- ヲ,STH,めぐる,文,廣く各地を巡りて資金をつのること數年、
- ヲ,STH,わたる,手,宇治橋を渡つて、
- ヲ,STH,わたる,会,それ、川が渡れる。

(12) 〈終状態〉: GOA

動詞は「作る」「成す」などごく限られたものである。これらの動詞においても、単純に「作り出す」の意ではなく、「筏が列を作つて」のようにガ格とヲ格の実体が重なる場合にのみ用いる。一般に行爲の結果として生じるものは〈終状態〉でなく、〈対象〉とする。

【実例】

ヲ, GOA, つくる,, かういふ大きな筏が、時に十も十五も列を作つて江心を下る。

ヲ, GOA, なす,, 特に絶壁をなす奇岩の下には、

ヲ, GOA, なす,, 後世の歌集に比べて長歌の多いのが一つの特色をなしてゐる。

(13) 〈属性〉：A T T

ガ格名詞が〈対象〉であり、ヲ格名詞がその属性または部分を指すとき、ヲ格を〈属性〉とする。「月が姿を現わす」のようにガ格名詞が〈対象〉となる場合には、ヲ格に何か別の深層格を与える必要があるからである。「人が姿を現わす」のも、特に「人」を〈動作主〉とすべき理由がなければ、「月が姿を現わす」のと同等に、〈対象〉と〈属性〉の組で表す。「姿を現わす」などは慣用句にしても差支えないかもしれないが、第二例のように名詞に修飾語がついたりすると取扱いがめんどうになるので、慣用句をあまり多く認めなかった。

【実例】

ヲ, ATT, あらわす,, 背びれのあたりを水面に現し、

ヲ, ATT, あらわす,, 其の奥に養老の瀧が完全な姿を現す。

ヲ, ATT, いう, 文, 松平信綱は、幼名を長四郎といへり。

ヲ, ATT, いっぺんする,, これを北から西から望む時、まるで様子を一變する。

ヲ, ATT, うしなう,, せつかくの國法も價値を失ひ、

ヲ, ATT, うつつ,, とうろうの色鮮かに、江上に影をうつすさまは、

ヲ, ATT, おしだす,, 富士川が注いで、其の濁流を遠く海上に押出してゐるのが見られる。

ヲ, ATT, おびる,, そろそろ北千島の漁場が活気を帯びて来る。

ヲ, ATT, くわえる,, 師弟の関係は日一日と親密の度を加へたが、

ヲ, ATT, さしかわす,, 櫻や楓の老樹が枝をさしかはず下道は、

ヲ, ATT, しょうじる,, 壁も龜裂を生じてはゐるが、

- ヲ, ATT, する,, すみれ色をした花が、
- ヲ, ATT, する,, 外の魚などは眼中にないといった風をして居ます。
- ヲ, ATT, する, 手, 夕方おなかをぺこぺこにして歸つて來ます。
- ヲ, ATT, する,, いろいろの形をした土器や、
- ヲ, ATT, する,, あの鳴き聲をする鳥なら、
- ヲ, ATT, たすかる,, あやふい御命をお助りになつた尊は、
- ヲ, ATT, たたえる：湛, 文, 流はよどんで底知らぬ青さをたゞふ。
- ヲ, ATT, たつ：絶,, 名所には、すりや乞食が多い。イタリヤもかつては其の例にもれなかつたが、今は殆ど其の跡を絶つてしまつた。
- ヲ, ATT, つける,, 秋海棠がかはいらしい淡紅色の花をつける。
- ヲ, ATT, とどろかす,, 世界の工業界に名をとどろかした豊田佐吉其の人であつた。
- ヲ, ATT, とりとめる,, 不思議にも一命を取止めた聞多が、
- ヲ, ATT, のこす, 文, 石筆はちびてわづかに寸餘を残すのみ。
- ヲ, ATT, ひく,, 富士は〈略〉、其のすそを長く下界に引いてある。
- ヲ, ATT, みせる,, 和算はいよいよ進境を見せた。
- ヲ, ATT, みせる,, 雲の色どりが何ともいへぬ美しさを見せる。

(14) 〈範囲規定〉：RAN

「争う」「言合う」「研究する」「調べる」などの動詞におけるヲ格名詞は〈対象〉と言えないこともないが、「について」「をめぐって」などと言い換えられる場合は〈範囲規定〉とする。科学技術文献においてはこの種のヲが非常に多いが、ニツイテと共存する場合には、ニツイテが広い対象、ヲが狭い対象を指すので、ニツイテを〈範囲規定〉、ヲを〈対象〉とする。まれに「…ニツイテ…ニツイテ」というのがあるが、その場合も上記に準ずる。

例：いくつかの電池構造について、特性、安定性、価格を比較検討。

〈範囲規定〉 〈対象〉

【実例】

ヲ, RAN, あらそう,, 何気なしに先程渡し賃を争つた場所へ行つて見た。

註 「先を争う」「首位を争う」は〈対象〉。

ヲ, RAN, ありがたい, 会, おみやげをありがたうございました。

ヲ, RAN, いいあう,, 人夫と、渡し賃を高い安いと言合つて居たが、

ヲ, RAN, いかる, 文, 張良其の無禮を怒りしが、

ヲ, RAN, いのる, 文韻, 神風の伊勢の内外の宮柱ゆるぎなき世をなほ祈るかな

ヲ, RAN, とう, 文韻, 敷鳥のやまと心を人間はば朝日にはふ山ざくら花

(15) 〈比較の基準〉: COR

動詞は「越える」などごく限られたものとなる。場所については〈場所一経過〉(S T H)を使うが、時に関しては〈時一経過〉というものがなく、〈時間〉(D U R)は境界線を示すものではないので、時間的境界にもこれを用いた。

【実例】

ヲ, COR, くだる,, 高度は三百米を下つて、

ヲ, COR, こえる: 越, 手, 寒暖計は四十度を越えようとしています。

ヲ, COR, こす: 越,, 八月もなかばを越せば、

ヲ, COR, すぎる,, 四時を過ぎれば、

ヲ, COR, とっばする,, 高度計は〈略〉、又も千米を突破する。

(16) 保留したもの

【実例】

ヲ, ?, うける, 文, 南を受けたる崖下など、たまたま白梅の數輪咲きそめたるを見る

ヲ, ?, かぞえる, 文, 土人の家わづかに五六を數ふるのみ。

ヲ, ?, する, 文, 社殿は、熊野川を背にして、

ヲ, ?, へだてる, 会, お堀をへだてて二重橋が見え、

◎全12例中、「へだてる」の例が7例あった。

4.3 ニ格

(1) 〈動作主〉：AGT

ほとんどが使役における被使役者である。例外的に貴人の動作に用いる。また「言い付かる」という動詞の例が1例あるが、これも特殊な例である。

【実例】

ニ, AGT, いくつかる,, 太郎サンハ、オカアサンニイヒツカッテ、ハガキヲ
ダシニイキマシタ。

ニ, AGT, いく：行, 会, お后様には、奥へいらつしやつて、しばらく（父君
に）お會ひにならぬ方がよろしうございます。

ニ, AGT, かつがせる,, しゅてんどうじの大きな首をけらいにかつがせ、

ニ, AGT, させる, 会, 今度の子馬は僕に世話をさせて下さい。

ニ, AGT, させる, 会, 電氣に話をさせようなんて、

ニ, AGT, となえさせる, 会, 妻や子供に、朝晩おねんぶつの代りになへさせ
せます。

ニ, AGT, ひかせる：引,, 發動機船にぼつぼと威勢よく引かせながら、

ニ, AGT, まもらせる, 会, 一つりつばな宮殿を建て、たくさんの兵隊に守ら
せて、

ニ, AGT, もたせる,, 家來の大男に宮の御旗を持たせて、

(2) 〈経験者〉：EXP

だれそれには、こう思える、感じられる、分かる等、知覚や感情の持ち主を指すほか、ふつうの所有関係（A=Bガアル）における持ち主もこれに含める。可能も能力の保有ということでこれに属する。井上は可能文を動作主文脈に含める。可能性が問題になるのは意志があるからということのようであるが、あることを実行することと実行する能力があることとは、別の事柄であろう。もっとも表現の仕方によっては、実行したことを含意する場合もあるが、可能文一般を動作主文脈とするのは適当でないと思う。

【実例】

[知覚・感情]

ニ, EXP, うかぶ,, 「〈略〉。」といふ深い意味が、彼にはつきりと浮かんだ。

ニ, EXP, おなじ, 文会, 我等には、かゝる所も平地に同じ。

ニ, EXP, けんとうがつく,, イタリヤ語を知らぬ私にも、それが「日本人」といふ意味だと見當はつく。

ニ, EXP, しれわたる,, 彼の勇名は、〈略〉、もう敵方にも知れ渡つてゐた。

ニ, EXP, ない, 会, うは言が出たかも知れないが、わしには何も覺えがないのです。

ニ, EXP, ない,, たとへ、慶喜に不臣の心がなかつたとしても、

ニ, EXP, なぐさめだ, 手, はるかに安南の山が半日以上も續いて見えたのも、私たちには大きな慰でした。

ニ, EXP, なつかしい, 手, 暑さに苦しむ身には、水景がなつかしくてたまりません。

ニ, EXP, ひらかせる, 会, どうか残りを聞かせて、私に悟を開かせてくれ。

ニ, EXP, ぶきみだ,, 老いた五兵衛に、今まで経験したことのない無気味なものであつた。

ニ, EXP, めずらしい,, 我々に珍しいのは、色の赤黒い、背の高い土人である。

ニ, EXP, わかる,, クモ二ハ、ソレガ、スグワカルモノト見エテ、

ニ, EXP, わく,, 子路には、ひよつとすると、さういふ考が湧いたのかも知れぬ。

[所有]

ニ, EXP, ある, 会, 旅人、その方にも、いひ分があるならば申せ。

ニ, EXP, ある, 会, 私には妻も子もありません。

[可能・要求]

ニ, EXP, いえる, 会, 口先だけで実行の伴はない事は、私には申し上げられない。

ニ, EXP, いる: 要,, 夏休過ぎから、子山羊に乳がいらなくなつたので、

ニ, EXP, ひける: 弾, 会, 私には、もうとてもひけません。

ニ, EXP, むようだ, 会, あなた方にはご用のない物でございます。

(3) 〈無意志主体〉：CPO

「かかる [病気、兵火に]」の一語だけである。整理したいと思うが、ガ格が〈対象〉になるべきものなので、適当なものが見付からない。もう少し他の資料を調べた上で処置を決めたい。

【実例】

ニ, CPO, かかる：罹,, 黄熱病にかゝつたが最後、

ニ, CPO, かかる：罹,, 江戸市中が兵火にかゝれば、

(4) 〈対象〉：OBJ

行為または思考・感情の対象。「会う」がこれと〈相手1〉(PAR)に分れているが、トと置き換え可能なものは〈相手1〉、さもなければ〈対象〉としておく。

例：ニ, OBJ, あう：会,, 弟子顔回の死にあつて、

ニ, PAR, あう：会, 文, 或時橋上にて白髮の一老人に會ふ。

中には〈受け手〉(REC)にしてもよさそうなものもある。「投票する」「加筆する」などは、「票を投ずる」「筆を加える」と読めばニ格を〈受け手〉にせざるをえないわけであるが、かりに助詞の「を」が入っていても慣用句とみなすことにして、ニ格を〈対象〉とした。

「成る」は〈終状態〉になることが多いが、ここにもいづらか含まれるのは、「世話になる」の類である。さらにニ格名詞が属性記述の対象である場合にも〈対象〉を割り当てる。その場合には、ガ格が〈属性〉(ATT)になる。

例：銅は 導電性が高い。

〈対象〉 〈属性〉

銅には高い導電性がある。

【実例】

[行為・思考・感情の対象]

ニ, OBJ, あう：会,, 其の他思ひがけぬ災難にあはぬとも限りません。

ニ, OBJ, あずかる：与,, 事實の判断にあづかる場合がある。

- ニ, OBJ, 当たる, 文, 助左衛門が公共のため一身を捧げてかゝる難事業に當れるを見て、
- ニ, OBJ, うちかつ,, あらゆる欲望にうちかつて、
- ニ, OBJ, えんりよする,, 働く人や牛にえんりよをするやうに聲をひそめて居るが、
- ニ, OBJ, おいつく,, やがて宮に追付き奉つた。
- ニ, OBJ, おうじる,, 船橋で舵を取つてみた舵手が、それに應じる。
- ニ, OBJ, おもしいたる,, これに思ひ至ると、
- ニ, OBJ, おもむく,, 國をあげて國難におもむくのも、
- ニ, OBJ, かかる,, 皆は一せいに掘りにかゝる。
- ニ, OBJ, かひつする：加筆,, 大日本史の草稿に加筆してみた光圀は、
- ニ, OBJ, かまう, 会, おれにかまふな。
- ニ, OBJ, かみつく,, 頼光のあたまにかみつかうとしました。
- ニ, OBJ, ききいる,, 自轉車を止めて野球試合の放送に聞入つてゐる一群もある。
- ニ, OBJ, きづく,, ふと人間の聲といふものの不思議さに氣附きました。
- ニ, OBJ, くみする,, 善にくみし、邪をにくむ正義觀とは、
- ニ, OBJ, こたえる,, 皆が「萬歳々々」と、ちやうちんを上げるのに答へて、
- ニ, OBJ, しがみつく,, しつかりとそれにしがみつきます。
- ニ, OBJ, したがう,, 後には朝廷の仰にも従ひませんでした。
- ニ, OBJ, したがう,, 遣唐使に従つて支那へ渡つたこともあり、
- ニ, OBJ, シャす：謝, 文, 一豊は妻の深き志に謝せり。
- ニ, OBJ, じゅうじする,, あらゆる職業に従事してゐるのだ。
- ニ, OBJ, じょうずる：乗,, 毛利方の大砲を夜に乗じてうばひ取つて、
- ニ, OBJ, たえる：耐, 文, 此の状を目撃して悲しみにたへず。
- ニ, OBJ, ちゃくしゅする：着手, 文, まさに出版に着手せんとす。
- ニ, OBJ, ちゅういする,, 下の端に當る二つの星に注意ませう。
- ニ, OBJ, つく：就,, 三人一しよに歸途についた。
- ニ, OBJ, つく：付,, おとうさんについて、私も町角までお送りしました。

- ニ, OBJ, つく : 付, , 今まで敵に附いてゐた舊臣が、
- ニ, OBJ, とうひょうする, 会, 山川さんに投票なすつたのでせう。
- ニ, OBJ, とっしんする : 突進, , こしやくにも我が爆撃編隊に突進する敵機がある。
- ニ, OBJ, とりかかる, , 史稿の訂正に取りかかった。
- ニ, OBJ, とりつく, 文, 岩角を傳ひ、かづらに取りつき、
- ニ, OBJ, どういする, 会, 今日限り五十人にへらすことに、御同意を願ひます。
- ニ, OBJ, どうじょうする : 同情, , 此の勇士の苦節に同情した。
- ニ, OBJ, ながめいる, , じつと落ちて来る水に眺め入つた。
- ニ, OBJ, ならう, 文会, 指揮官にならへ。
- ニ, OBJ, なる : 成, 会, どうも長くお世話になりました。
- ニ, OBJ, なる : 成, 会, そろそろごちそうになりませうかな。
- ニ, OBJ, なれる : 慣, , 渡るといつても、水になれた人夫の肩に乗るか、
- ニ, OBJ, にんずる, 文, 之=因り生ジタル損害ヲ賠償スル責ニ任ズ。
- ニ, OBJ, ねっちゅうする, , 其の操縦に熱中しましたが、
- ニ, OBJ, はなしかける, , 「<略>。」と、私たちに話しかけた。
- ニ, OBJ, ふくじゅうする, , 裁判できめられたことに服従することであり、
- ニ, OBJ, ふくする : 服, 手, 入營以來いたつて元気で、軍務に服して居ます。
- ニ, OBJ, ふふくだ : 不服, , 此の第一審の裁判に不服な者は、
- ニ, OBJ, まつ, , 一にスチーブソンの力にまたなければならなかつた。
- ニ, OBJ, みいる, , じつとそれに見入つて居るのであつた。
- ニ, OBJ, みとれる, , 電光形を亟がく見事な滑り振りに見とれてみると、
- ニ, OBJ, みみをかたむける, , 土人の歌に耳を傾けてみると、
- ニ, OBJ, むかう, 会, これ、武士に向かつて何たる無禮な言葉だ。
- ニ, OBJ, むくいる : 報, 候手, 君の御恩に報ゆるためには候はずや。
- ニ, OBJ, よりそう, , をおさんに寄りそつて助けようとする、

[性状記述の対象]

- ニ, OBJ, ある, , どんな力が、この木にあったのでせう、

- ニ, OBJ, ある, , 物にねだんがあるのは、
 ニ, OBJ, ある, , ほとんど無数と見えるこれらの星にも、名前や番號があり、
 ニ, OBJ, ない, , 其のため大將には、全くたべ物に好ききらひがないやうにな
 つた。
 ニ, OBJ, ない, , だから、空氣にはねだんがないのです。
 ニ, OBJ, だ, , 宮には、此の兩三年、御涙の乾くひまもない御身であらせられ
 た。

◎最後の例は貴人に対する特別な表現であって、通常はガ格になるはずのもの
 である。

(5) 〈受け手〉: REC

第一義としてはやりもらいの動詞における受け手を指す。つまりヲ格を持つ
 動詞のニ格であり、その場合のガ格・ニ格は有意志体とは限らない。

次に有意志体どうしの関係で向きがはっきりしているものにこの深層格をあ
 てはめる(「あいさつする」「合図する」「感謝する」など)。双方向的な感じの
 強いもの、言い換えれば「と」と置き換えられるようなものは〈相手1〉(P
 A R)となる。ヲ格をとらない動詞においては、〈対象〉との使い分けも問題
 になる(例: したがう)が、ヲ格をとらなくても、それに代わるもの、すなわ
 ち引用の「と」や「について」等をとるうる場合には〈受け手〉とする。また
 上記のいずれにも該当しない場合でも、ガ格が〈対象〉になる場合には、ニ格
 に他の深層格を与える必要があり、それが〈受け手〉になることもある。

【実例】

[ヲ格と共存するニ格]

- ニ, REC, あずける, , 四人の大名にお預けといふことになつた。
 ニ, REC, あたえる, 文, 一卷の書を取り出して張良に與へ、
 ニ, REC, あたえる, 韻, 五月の太陽は、農家の藁屋根に光彩を與へ、
 ニ, REC, あてはめる, , 要するに國法の規定を實際問題に當てはめることであ
 る。
 ニ, REC, あてる, , 仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、

- ニ、REC、あびせる、,、ほとんどあらゆるほめ言葉が、彼等に浴びせられた。
- ニ、REC、いいつける、会、城の修理をそちに申しつける。
- ニ、REC、いう、,、早速其の事を祖父に言ひますと、
- ニ、REC、うったえる、文、先づ藩廳に其の志をうつたへて許可を得しが、
- ニ、REC、うつす：移、,、いきなり其の稻むらの一つに火を移した。
- ニ、REC、うる：売、会、をぢさんにそのかめを賣っておくれ。
- ニ、REC、おく、会、予の馬に鞍を置け。
- ニ、REC、おくる：送、,、太陽は私たちに十分な熱と光を送つてくれる。
- ニ、REC、おくる：贈、文、彼の志をあはれみ功績をよみして、遺族に恩賞をおくりぬ。
- ニ、REC、おこす、,、公益を代表する役人たる検事が裁判所に訴を起し、
- ニ、REC、おしえる、会、きつと、あなたによい事を教へて下さるでせう。
- ニ、REC、かえす：返、,、さうして、兄神に釣針をお返しになりました。
- ニ、REC、かく：書、,、母に手紙を書かうと思つて、
- ニ、REC、かける：掛、,、首を二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。
- ニ、REC、かける：掛、,、色づいたばかりのいちごに牛乳をかけて、
- ニ、REC、かす：貸、会、どうだ、二人に五十人づつ中間を貸さう、
- ニ、REC、かたる：語、文、袴垂此の時の事を人に語りて、
- ニ、REC、くだす、文、信號旗を以て令を各艦に下せり。
- ニ、REC、くれる、,、信長は、それには目もくれないで通つて行つた。
- ニ、REC、くわえる、,、キューニョーの汽車に大改良を加へた。
- ニ、REC、ごちそうする、,、オヂイサンニ、イロイロゴチソウラシマシタ。
- ニ、REC、ささげる、会、眞心を父上に捧げます。
- ニ、REC、さしだす、文、これを自主に持歸りて、必ず日本の役所に差出すべし。
- ニ、REC、さずける、,、大切な天叢雲劔を尊にお授けになり、
- ニ、REC、しくむ、,、つまり時計の機械に振子を仕組んだもので、
- ニ、REC、しゅつがんする：出願、文、彼改めて政府に燈臺建設の事を出願し、
- ニ、REC、そうちする：装置、,、出来上つたのは、荷車に蒸氣機關を装置したや

- うなもので、
- ニ、REC、そえる、歌を作つて紙にしたゝめ、雪にそへてお后にお目につけよ
うと、
- ニ、REC、そなえる：供、年とつた上品な尼さんが佛壇に花を供へて、
- ニ、REC、だす、一郎さんに返事を出した。
- ニ、REC、つける、この子にかぐやひめといふ名をつけました。
- ニ、REC、つける、親蟬は、木の皮にきずをつけて、
- ニ、REC、つける、番人がランプに火をつけたばかりのところでした。
- ニ、REC、つける、其の数は三の次に零を二十七つけたものになる。
- ニ、REC、つげる、鹿介は主君に志を告げ、
- ニ、REC、つたえる、私たちはどこまでもこれを大切に保護し、後世に傳へな
ければならない。
- ニ、REC、てんじる：点、やさしい女性の御心に熱火が點ぜられた。
- ニ、REC、とく：説、孔子は弟子に道を説くのに、
- ニ、REC、とりつける、文、川舟に、發動機と、〈略〉とを取附けしものなり。
- ニ、REC、なげつける、青イカキラ、カニニナゲツケテ、
- ニ、REC、のこす、会、博士が札幌を去る時、泣いて別れを惜しむ學生たちに残
したといふ有名な言葉だよ。
- ニ、REC、のませる、お乳をしぼつて、私たちにも飲ませて下さいました。
- ニ、REC、はなす：話、翌日、先生に此の事をお話したら、
- ニ、REC、はなつ、文、平家の城に火を放つ。
- ニ、REC、ふぎこむ、韻、生まれたばかりの卵に、輝かしい生気を吹込む。
- ニ、REC、ふる：振、人々は、互にハンケチや帽子を腕の續く限り振つて、
- ニ、REC、ほこる、最古最美の木造建築を世界に誇り得るのは、
- ニ、REC、まかせる、会、以來めんだうな政治の事は若い者たちに任せ、
- ニ、REC、まきつける、尾を何かにきりきりと巻附けて、
- ニ、REC、みせる、商人が〈略〉、大勢の人に品物を見せてゐます。
- ニ、REC、みせる、本丸・二の丸・西の丸の三丸が、〈略〉、今日の我々に昔の
姿を殆ど其のまゝに見せてくれる。

ニ、REC、みせる、,、イギリスは薩長を通じて官軍に好意を見せようとしてゐた。

ニ、REC、むける、,、寫眞機を北極星に向けて、

ニ、REC、めいじる、文会、かゝる事は召使に命じ給へ。

ニ、REC、もうしでる、,、蕃人は其の事を呉鳳に申し出た。

ニ、REC、もってかえる、会、若い男は喜んでそれを汲み、父親に持つて歸つて孝行をした。

ニ、REC、ものがたる、,、綱吉は、法親王に種々御物語をしたついでに、

ニ、REC、もらう、会、主人勝久に、出雲一國を頂きたうございます。

ニ、REC、やる、,、モモトラウハ、犬ニオダンゴラヤリマシタ。

ニ、REC、やる、会、人夫には、役所から手當をつかはす。

ニ、REC、ゆずる、会、これをお前にゆづる。

ニ、REC、ゆだねる、,、腹一ぱい爆弾をかゝへた愛機に身をゆだねると、

ニ、REC、わかつ、,、此の喜びをあまねく世に分つて、

ニ、REC、わけあたえる、会、改めて長女と次女とにわけ與へる。

ニ、REC、わたす、文、これまでの記録一切を取りまとめ、従者に渡して言ふやう、

[ヲ以外の三項関係]

ニ、REC、(いう)、手、をばさんによろしく。

ニ、REC、(いう)、,、(臣下に) 地圖を持て。

ニ、REC、あいさつする、,、おとうさんにごあいさつをしました。

ニ、REC、あいさつする、,、再び扇を上げて左右の隊に合圖した。

ニ、REC、いいはる、,、しばらくは、「月が走る。」「雲が走る。」と、たがひにいひはってゐました。

ニ、REC、いのる、,、神サマニオイノリシマシタ。

ニ、REC、きく：聞、,、花子さんに、「〈略〉。」と、お聞きになりました。

ニ、REC、さけぶ、,、誰かが帽子を振りながら、僕等に叫んでゐる。

ニ、REC、ささやく、,、夢に金人が現れて太子にさゝやき奉つたと傳へられてゐる

ニ、REC、しらせる、文会、しばらくはなほ用をなすものぞと若き人に知らせんとて、

ニ、REC、たずねる：尋、信長は主水に尋ねた。

ニ、REC、たのむ、さうして新上屋の主人に、〈略〉と頼んでおいた。

ニ、REC、とう：問、文、又長四郎に問はるれども、

ニ、REC、ねがう、〔〈略〉。〕ト、神サマニオネガヒシマシタ。

ニ、REC、ほうこくする：報告、〔〈略〉。〕と、當直將校に報告する。

ニ、REC、わびる、泣いて主君におわびをした。

[有意志体どうしの二項関係]

ニ、REC、いたずらする、会、そばを通る子供に、いたづらをした。

ニ、REC、いとまごいする、天照大神においとまごひをなさつて、

ニ、REC、おじぎする、大シャウノオニニオジギヲシテハ、

ニ、REC、かんしゃする、かう言つて鹿介に感謝した。

ニ、REC、こうさんする、弟うかしは、〈略〉、あらためて神武天皇に降参いたしました。

ニ、REC、こうそする、地方裁判所又は控訴院に控訴し、

ニ、REC、じょうこくする、もう一度大審院に上告することが出来る。

ニ、REC、すぎる、専門の學者にすぎつたり、

ニ、REC、つかえる、皇大神宮に仕へて居られた尊の御をば、倭姫命は、

ニ、REC、まいる、会、明治神宮にも、お参りでしたか。

ニ、REC、ゆみをひく、天皇のお使に弓を引いた兄が、

[ガ格が〈対象〉になる場合]

ニ、REC、すまない、会、それが、戦死した人や、遺族の人たちにはすまないやうに思はれてね。

ニ、REC、ぞくする：属、最も古い時代に属するものとして貴重なのは、

ニ、REC、つく：付、会、扱ふ人がいけないから、馬に悪いくせが附いてしまふのだ。

ニ、REC、つよい、文韻、矢車に朝風強きのぼりかな

ニ、REC、ひびく、最初の一音が、すでにきやうだいの耳には不思議に響い

た。

ニ、REC、めいちゅうする、文、我が砲員の打出す砲弾は、よく敵艦に命中して、

ニ、REC、よびかける、,、此の聲が四方に呼掛けでもしたやうに、

[その他]

ニ、REC、つかまる：摺、,、或日、岸の草につかまつて、

ニ、REC、よりかかる、,、其のそばにある舊式のピアノによりかゝつてゐるのは、

◎初めに記したどの類にも該当しないのが「その他」に掲げた例である。「すがる」「つかまる」「よりかかる」など、ガ格が有意志体でニ格が無意志体の場合は、ニ格を〈対象〉にしてもよいわけであるが、感覚的にしっくりしないので、とりあえず〈受け手〉にした。道具格をもっと積極的に生かすつもりならば、〈手段・道具〉とすることも考えられる。

(6) 〈与え手〉：ORI

AがB=Cヲ（与える）などの裏返しとして、BがA=ノカラCヲ（もらう）などの表現がある。第一のパターンが〈動作主〉／〈無意志主体〉・〈受け手〉・〈対象〉の組合せになるのに対して、第二のパターンを〈動作主〉／〈経験者〉／〈受け手〉・〈与え手〉・〈対象〉とする。

例1 子供が（〈動作主〉） 人に（〈受け手〉） 道を（〈対象〉） 教える。

例2 月の光が（〈無意志主体〉） 我々に（〈受け手〉） 慰めを（〈対象〉）
与える。

例3 人が（〈動作主〉） 子供に／から（〈与え手〉） 道を（〈対象〉） 教わ
る。

例4 我々が（〈経験者〉） 月の光に／から（〈与え手〉） 慰めを（〈対象〉）
得る。

例5 その発言が（〈受け手〉） 各界から（〈与え手〉） 非難を（〈対象〉）
浴びる。

ここで〈対象〉は共通であるが、〈与え手〉および〈受け手〉は表層の格によ

りいろいろに変わるわけで、不都合ではないかという気もする。いずれかに統一するするとしたら、与え手を〈与え手〉、受け手を〈受け手〉にすべきであるが、三つの要素が揃わない場合、すなわち与え手・受け手のいずれかが欠ける場合も多く、もともとそれらを持たない動詞とのバランスや境界などの問題もあるので、当面保留する。ニとカラの交替がきくのが典型的な例であるが、いずれか一方に限られるものもある。

与え手が有意志体である場合は、直感的に〈与え手〉として認識しやすいが、無意志体の場合には、〈原因・理由〉(CAU)などとの境が問題になる。下記の第三例などは、「抽象的场所」に入れる人もあると思うが、ここではそのようなカテゴリーを立てていないので、抽象的依存関係もこれに含めた。

【実例】

[3項関係の中の〈与え手〉]

ニ, ORI, きく, , 専門の學者にすがつたり、友達に意見を聞いたりしなければなりませんでした。

ニ, ORI, もらう, , おぢいさんにいたゞいた目がねの玉と、

[依存関係におけるよりどころ]

ニ, ORI, ある, 文会, 皇國の興廢此の一戦にあり。

ニ, ORI, よる: 抛, , 數學もまた西洋の數學によらなければならなかつたからで、

◎「よる(因、依、抛)」というのは非常に扱いにくい動詞である。「によって」「により」の形をとれば格助詞相当連語として扱えるが、動詞と解釈せざるをえない場合が問題である。第四例は主体を人間と解すれば「道具」としてもよいように思われるが、「Bを用いる」のBを「道具」ではなく「対象」とする方針に合わせて「道具」とはしない。ガとニの二項関係であるが、ガ格が明示される場合は少なく、「～によると」のような形が多いので、情報源というような意味合いで〈与え手〉とした。「敵は山によりて陣地を固め、」というのは、ガ格が明示された数少ない例の一つであるが、これは「山を根拠地として」という具体性の強い意味を持ち、通常の「よる」とはいささか異なる。

「よりかかる」のニ格を〈受け手〉(REC)としたので、「山による」もその同類と見て〈受け手〉を付与した。

(7) 〈相手 1〉: PAR

ガ格またはヲ格名詞と対等に近い関係を持つもの。原則的には「と」に置き換えられるようなものに限定するが、「と」が概ね対等の関係を表すのに対して、「に」の場合にはある種の方向性または主従関係のようなものが認められる場合が多い。そのために〈対象〉との境がはっきりしなくなることがある。ただ、対等でないと分っていても、ガとニ、またはヲとニの両方を〈対象〉にするわけにいかないので、ガ格またはヲ格が〈対象〉となる場合のニの深層格は〈対象〉以外から選ぶ必要がある。たとえば、「弓に矢を番える」の場合には「矢」が〈対象〉になるので、「弓」を〈相手 1〉とした。

【実例】

- ニ, PAR, あう: 会, 文, 或時橋上にて白髪の一老人に會ふ。
- ニ, PAR, あう: 合, 会, こゝに御主人の書附があるによつて、それに合つたらば買ひませう。
- ニ, PAR, あくしゅする, 手, 其の黒い大きな手で、私たちに堅い握手をしました。
- ニ, PAR, あたる,, 夜風に當り朝日に當ると、
- ニ, PAR, かえる: 代, 文会, 金銀にて作りたる弓なりとも、御命には代へがたし。
- ニ, PAR, かたどる,, 太子の御子山背大兄王が、御父君にかたどつて等身の御佛とし給うたもので、
- ニ, PAR, かよう, 文韻, 目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心のまことなりけれ
- ニ, PAR, かわる: 代, 会, どうぞ私に代つて、おとうさんやおかあさんを大事にして上げて下さいね。
- ニ, PAR, かんけいがある, 会, 戦争に關係のあるいろいろの物が、
- ニ, PAR, くらべる,, 満六年といふ長い地下生活にくらべて、何といふ地上

の短い命でせう。

ニ、PAR, すりよる,, ともすると母馬にすり寄つては、

ニ、PAR, せつする：接, 文, 下關海峽を出入する船舶の航路に接するを以て、

ニ、PAR, たとえる, 手, 水上の船は、風に吹散らされた無数の木の葉にもたとへませうか。

ニ、PAR, ちかい, 文, 本土と相望む所紀淡海峽となり、四國に近き所鳴門海峽となる。

ニ、PAR, つがえる,, 一人は弓に矢をつがへ、

ニ、PAR, つぎあわせる,, その土地をこの國につきあはせて、

ニ、PAR, つづく,, 「ダーン。ダーン。」といふ發射音に續いて、〈略〉火柱が立つたと思ふと、

ニ、PAR, つなぐ,, さを突立ててそれに舟をつなぎました。

ニ、PAR, つらなる, 文, 玉垣に連なる鳥居の奥に、

ニ、PAR, とつぐ,, 宮が〈略〉、將軍家茂に嫁ぎ給うたのは、

ニ、PAR, にかよう,, 我が鹿児島市の景色に似通つたところさへあつた。

ニ、PAR, のぞむ：臨, 手, ミシガン湖といふすばらしく大きな湖にのぞんでゐる此のシカゴは、

ニ、PAR, ひきかえる, 会, 尼子家の御威光は、昔にひきかへておとろへるばかり、

ニ、PAR, ふれる, 文, 会, 流をさかのぼる魚のなはに觸るゝならん。

ニ、PAR, ぶつかる,, 海水が、〈略〉、陸にぶつかつた。

ニ、PAR, まじる,, 其のうちに、一人の美しい少女がまじつて、

ニ、PAR, まぜる,, 土に、少し砂をまぜて鉢に入れ、

ニ、PAR, まみえる, 文, 走りて岡崎に至り、家康に見えて援兵を求む。

ニ、PAR, ゆいしよふかい, 文, 舊御殿・舊御苑は、〈略〉、御二柱の神に御由緒深き所。

ニ、PAR, わかれる, 会, みなさんにお別れするのがつらくて、

時を表す名詞に付いて、事柄の発生した時や順序を示す。

【実例】

- ニ, TIM,あつまる,, 其の中に、尼子の舊臣が追々京都に集つて來た。
- ニ, TIM,ある,手,午後八時に夜の點呼があり、
- ニ, TIM,ある,文,半生の志實現するの近きにあるを喜びたりしが、
- ニ, TIM,いう,, をぢさんは何時も話の終に、口ぐせのやうに言ふ。
- ニ, TIM,いっばいだ,, 四五月頃のにしんの盛な漁期には、沿岸を走る汽車の中まで、にしんの香でいっばいだといふ。
- ニ, TIM,おこる:起,, とたんに妙なる樂の音が起つて、
- ニ, TIM,おぼえる,, 兄より先に覺えてしまふ程でした。
- ニ, TIM,おもふ,文韻,古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと
- ニ, TIM,かく:書,, 約九百年の昔に書かれた源氏物語が、
- ニ, TIM,こうじる:薨,, 家茂は其の陣中に薨じ、
- ニ, TIM,さいする:際,文,コーニの大陸に渡らんとするに際し、
- ニ, TIM,さめる:褪,韻,いつの間にやら、色がすっかりさめて居た。
- ニ, TIM,しる,, だんだん話をしてゐる中に、眞淵は宣長の學識の尋常でないことを知つて、
- ニ, TIM,する,会,其の時には、お互に目ざましい働をして、
- ニ, TIM,そなえる:供,, 人の首を取つてお祭に供へる風があつた。
- ニ, TIM,たかい,, 紫式部の名は一世に高くなりました。
- ニ, TIM,だ,手,九時には消燈ですから、
- ニ, TIM,つくる,, さうして、其の間に歌を作つて紙にしたゝめ、
- ニ, TIM,とおる,, 往く船と來る船と、同時に通ることが出来ます。
- ニ, TIM,なる:成,, 此の時には頼朝もおもしろくなつて、一しよに舞ひました。
- ニ, TIM,ねむる,会,とちゆうで一休して居るうちに、つい眠つてしまひました。
- ニ, TIM,はりかえる,文会,我も後には張りかへんと思へど、

ニ, TIM,ふむ, 文韻, 大宮の火桶のもとも寒き夜に御軍人は霜やふむらむ
ニ, TIM,みる,, 我々が常に見る月の四倍ぐらゐな地球が、

(9) 〈時—終点〉: T T O

〈時—終点〉は助詞「まで」に多く現れるが、ニ格においては「今日に伝わる」「翌日になって」などの形で出現する。

【実例】

ニ, T T O,いたる, 文, 彼改めて政府に燈臺建設の事を出願し、翌二年に至りて許さる。
ニ, T T O,およぶ,, 我が國語もまた、國初以來繼續して現在に及んでゐる。
ニ, T T O,かける,, 九月の末から十月の初にかけて、
ニ, T T O,かたりつぐ, 文韻, をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして
ニ, T T O,さかのぼる,, 十數年前にさかのぼる。
ニ, T T O,すすむ,, 世界にたぐひなき國體を成して、今日に進んで來たのであるが、
ニ, T T O,ちかづく,, 冬が終二近ヅイテ來マス。
ニ, T T O,つたわる,, 古事記にのせられて、今日に傳はつてゐる。
ニ, T T O,なる: 成,, 夜になつても薄青い空、
ニ, T T O,なる: 成, 会, もう歸つて來る頃になつたので、
ニ, T T O,はいる,, やがて次の鐵器時代にはいつたものと考へられる。
ニ, T T O,もちこす,, 簡単な生活を、そのまま今日に持越して來た彼等は、
ニ, T T O,やすい, 文韻, とこしへに民安かれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神

(10) 〈時間〉: D U R

単位時間内にいくつとか、ある時間繼續するような場合に用いる。ニ格をとるのは主として前者であり、繼續時間を示す場合は無格が多い。単位時間当たりというのは、〈条件〉(CON)とも通じるところがあるが、〈時間〉の方が限

定性が強いので、こちらに含めた。

なおこの類の特徴は、係り先が述語でなくて度合を表す名詞だということで、用言の格フレーム中に記述されることは多分ないだろうと思うが、なんらかの処置が必要なので掲げておく。

【実例】

[当り]

ニ, DUR, はったん, 韻, 日には八反、

ニ, DUR, みたび, 文会, 鐵眼は一生に三度一切經を出版せり。

ニ, DUR, なんぜんそう, 手, 大きな埠頭があつて、一年間に汽船が何千さうも出入し、

ニ, DUR, にど,, 蜂もそう出で、一年に二度とない此の花盛を、

ニ, DUR, ふたつ,, ランプが一回動くのに脈が二つ打つと、次の動きにも脈は二つ打ちます。

[継続時間]

ニ, DUR, (つづく), 文韻, 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりてこけのむすまで

ニ, DUR, わたる,, 此の織機と外國製の織機とを、一年にわたつてためしてみたが、

(ii) 〈場所〉：S P A

場所・空間を指す。「に」の用法のうちで最も頻度の高いものである。具象的空間を中心にし、抽象的空間はなるべく〈条件〉(CON)その他に振り分ける。「英国人の経営の下に発達した都市」は〈条件〉の例とする。それでもここに入れるしかないような抽象的空間もある。「あらわれる」の第二例がそうである。

〈場所-終点〉(S T O)との区別は動詞だけでは決まらず、補助動詞まで見なければならぬことがある。例えば、「部屋に入る」は〈場所-終点〉で、「引出しに入っている」は〈場所〉というように。むしろ動詞によっては、補助動詞が付いても付かなくても同じ結果になる。「庭に草が生える」と「庭に

草が生えている」のように。簡単そうに見えて意外にめんどろである。

場所格には必須のものと任意のものがあり、ニ格で表されるものは概ね必須だと言われる。しかし実例をみればわかるように、任意的なものも多い。ただし、これらの例の中には、現代ならばデを使うのがふつうだと思われるものもあり、時代がくだるにつれて分化したとの見方もできよう。

【実例】

- ニ, SPA, あおぐ, 文, 北に大内裏の宮殿を仰ぎ、
- ニ, SPA, あがる,, 向かふの空には、ぱつと火の粉が上つたり、
- ニ, SPA, あける：開,, うちの雀の宿といふのは、横に穴をあけた大きなへうたんや、古いつりどうろうなどで、
- ニ, SPA, あげる,, 艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。
- ニ, SPA, あそぶ,, 金網で囲んだ中に、黒や黄色の狐が、〈略〉遊んでゐる。
- ニ, SPA, あたる, 文, 忽ち砲弾の一破片、其の腰にあたり、
- ニ, SPA, あたる, 文, 忽ち東方に當りてはるかに數條の黒煙を見る。
- ニ, SPA, あます：余, 文, 城中には、わづかに四五日の糧食を餘せるのみ。
- ニ, SPA, あられる,, 所々に地面の赤い色さへあらはれてゐる。
- ニ, SPA, あられる,, 整備員たちの不眠の努力が、すべての飛行機の調子よい爆音に現れて、
- ニ, SPA, ある,, 門のわきに井戸があつて、
- ニ, SPA, ある,, 油蟬の子の口には、針のやうな管がありますから、
- ニ, SPA, あんちする：安置,, 御眞影は、庭の中央に安置された。
- ニ, SPA, いう, 文, 東郷司令長官の發せし戦況報告の末尾にいはいく、
- ニ, SPA, いる：居,, 横濱に生まれ、横濱に居ながら、
- ニ, SPA, うえる：植,, にいさんと朝顔を鉢に植ゑました。
- ニ, SPA, うかぶ,, 波の上に、何か小さい物が浮かんで、
- ニ, SPA, うかぶ,, ふと別の考が先生の頭に浮かびました。
- ニ, SPA, うかべる, 文, 平家は海に船を浮かべて相對せり。
- ニ, SPA, うごく, 韻, 其の下に動く起重機は、
- ニ, SPA, うつす：映,, とうろうの色鮮かに、江上に影をうつすさまは、

- ニ、SPA,うまれる,,佐吉は静岡縣のみなかに生まれた。
- ニ、SPA,えがく,,壁上にゑがかれた壁畫の數々、
- ニ、SPA,おう：負,文,後に山を負ひ、
- ニ、SPA,おおい,,途中には敵方の者が多かつた。
- ニ、SPA,おおい,,萬葉集には短歌が多いが、
- ニ、SPA,おく,,そばにはハワイの日本字新聞さへ置いてある。
- ニ、SPA,おこる：起,,網を引揚げる片端から、海面にさゞ波が起る。
- ニ、SPA,おちる,会,長い參道には、ちり一つ落ちて居らず、
- ニ、SPA,おもう,文,心の中に思ふやう、
- ニ、SPA,かかる,会,清洲橋といつて、隅田川にかゝつて居る。
- ニ、SPA,かがやく,,雲もない空には、月が美しく輝いて居た。
- ニ、SPA,かく：書,,紙に「貸家」と書いて張つて置くと、
- ニ、SPA,かくれる,,ハヒノ中ニカクレテキタクリハ、
- ニ、SPA,かける：掛,,錦の御旗を肩にかけ、
- ニ、SPA,かさねる,,よい汽車を造らうとして工夫に工夫を重ねた。
- ニ、SPA,かざる,韻,福壽草、床にかざれば、
- ニ、SPA,かたまる,,此の楊樹・柳樹の十株か二十株生ひ茂る所には、大てい農家が四五軒かたまつてゐる。
- ニ、SPA,かまえる,,かうした楊柳の陰に、農夫はさゞやかな土の家を構へる。
- ニ、SPA,きこうする：寄港,,ハワイのホノルゝに寄港する。
- ニ、SPA,きづく,文,波浪高き海上の小島に、燈臺を築かんとするが如きは、
- ニ、SPA,けいかいする,,舷門には、銃を手にした番兵があたりを警戒してゐる。
- ニ、SPA,こしかける,,川端の石に腰かけて、
- ニ、SPA,こめる,,イタリヤのピサの町に夕もやがこめて、
- ニ、SPA,ささげる,,修行者を空中に捧げ、さうして恭しく地上に安置した。
- ニ、SPA,さだめる,,仁徳天皇は、此の地に都をお定めになつて、
- ニ、SPA,さんざいする：散在,文,大小無數の島々各所に散在す。

- ニ, SPA, しく: 敷, , 日なたに敷いたむしろの上には、
- ニ, SPA, しずむ, 文韻, 船は次第に波間に沈み、
- ニ, SPA, したためる, , 其の間に歌を作つて紙にしたため、
- ニ, SPA, しょうする: 称, 文, これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、
- ニ, SPA, すくない, 文, 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。
- ニ, SPA, すてる, 文, 川原に舟をすて、
- ニ, SPA, すむ: 住, 手, 奥地に住んで居る人たちは海が珍しく、
- ニ, SPA, してある, 会, 私の方には、まだお迎へ申す準備がしてございませぬ。
- ニ, SPA, すわる, , , そこに陳列してある機械の前にすわつて、
- ニ, SPA, そびえる, , 新しい大建築が市中至る所に聳えるやうになつた。
- ニ, SPA, だ, 会, 恐らく天下に君一人だらう。
- ニ, SPA, たおれる, 文, 狐は其の場に倒れたり。
- ニ, SPA, たたえる: 湛, , 水は陸上にたゞへられて、二つの湖になりました。
- ニ, SPA, ただよう, , , 所々に白雲がたゞよつて、
- ニ, SPA, たつ: 立, 手, 坂町を上つて小高い所に立つと、
- ニ, SPA, たてる: 立, , 杉の木のそばに一米程の棒を立てて、
- ニ, SPA, ちんれつする: 陳列, , 窓際に蝶の標本が陳列してあるが、
- ニ, SPA, つく: 付, , 黒イ粉ノヤウナモノガ、磁石ニ一面ニ着イテ居タ。
- ニ, SPA, つづく, , , 霧の間に「さうしかんば」の林が續く。
- ニ, SPA, つるす, , , 日當りのよいのき先に、幾つもつるしてあるのです。
- ニ, SPA, ていしゃする, , , ハルビン驛にびたりと停車した。
- ニ, SPA, できる, , , いはば我が國に二つの名鳥が出來たことになりました。
- ニ, SPA, でる, , , 證人として法廷に出た場合には、
- ニ, SPA, とまる: 止, , 二米ぐらゐの高さの所に、あぶらぜみが一匹止つて居る。
- ニ, SPA, とる, 文, 源氏は陸に陣を取り、
- ニ, SPA, ない, , , 月には水がないと言ひましたが、
- ニ, SPA, ならぶ, 手, 兩側には寢臺が並び、

- ニ、SPA、ねる：寝、会、野や山にばかりねてゐましたが、
- ニ、SPA、のこる、元帥は、家に残つて居た人々をさしづしながら、
- ニ、SPA、のせる、其の外何でも頭にのせて賣歩いてゐます。
- ニ、SPA、のぞむ：望、文、後に山を負ひ、前に熊野などを望み、
- ニ、SPA、のりうつる、彼の身には、にはかに何者かが乗移つたやう。
- ニ、SPA、のりくむ、文韻、軍艦に乗組みて、
- ニ、SPA、のる、舟は、上げ潮に乗つて、
- ニ、SPA、はいる、たくさんの標本がたんすの引出にはいつてゐる。
- ニ、SPA、はしる、市内には、自動車が走り、
- ニ、SPA、はる、敵が、海ノ中ニ、太イ針金ノアミヲ張ルコトガアル。
- ニ、SPA、ひびきわたる、鹿介の大音聲は、兩岸にひびき渡つた。
- ニ、SPA、ひらく、更にベルリンを中心に、國內に四通八達の自動車道路が開かれ、
- ニ、SPA、ひれふす、修行者の足下にひれ伏しながら、
- ニ、SPA、ひろがる、手、眼下に廣がる太平洋を見渡しながら、
- ニ、SPA、まく：撒、ねえさんと二人で、庭に水をまいた。
- ニ、SPA、まつ、京城行の汽車が目の前に待つてゐる。
- ニ、SPA、みえる、北極星の近くに見える星程小さい圓を彗がき、
- ニ、SPA、みちる、文、櫻は山にも谷にも満ち満ちたり。
- ニ、SPA、みまう、赤坂離宮に、攝政殿下をお見まひ申し上げたのである。
- ニ、SPA、むかえうつ、文、初より敵を近海に迎へ撃つのを定め、
- ニ、SPA、もうける：設、手、ここに貯水池や信號所を設けてゐるのです。
- ニ、SPA、やどる、文、キチーにて土人の家に宿る。
- ニ、SPA、ゆうめいだ、世界に有名なパナマ運河といふのがそれなのです。
- ニ、SPA、よこたわる、旅館の寢臺に横たはりながら、
- ニ、SPA、よる：寄、一つ所に大勢寄つて、むだ話やむだな仕事をしたり
- ニ、SPA、りゅうこうする：流行、もと此の地方に流行したマラリアと黄熱病が、
- ニ、SPA、わたる、会、長さは、八つの山、八つの谷にわたるほどで、

(12) 〈場所—終点〉：S T O

移動の動詞における終点もしくは方角。「へ」と置き換えることができる。動きを伴う場合はすべて〈場所—終点〉だというわけではなく、移動に主眼がない場合（「降る」「撒く」）は〈場所〉とした。ただし「～から～に」のように呼応のあるものには〈場所—始点〉と〈場所—終点〉を用いる。〈場所〉と同じく、なるべく具象的なものに限定するが、抽象的なものもいくらかまじっている。「たっする」の第二例がその例である。

【実例】

- ニ, STO,あがる, 文, 遂に弓を拾ひ上げて陸に上る。
- ニ, STO,あつまる,, 尼子の舊臣が追々京都に集つて來た。
- ニ, STO,いく,, 宣長がかねて買ひつけの古本屋に行くのと、
- ニ, STO,いたる, 文, 那智山を去つて、新宮市に至る。
- ニ, STO,いれる,, 蟲かごに、とんぼを入れた。
- ニ, STO,うごく, 韻, 右に、左にひらひらと、動くたもとの美しさ。
- ニ, STO,うつる：移,, 鳩は、ふと、たかの一群を見たので、すばやく低空に移つた。
- ニ, STO,おくる：送,, パルプは、内地の製紙工場に送られ、
- ニ, STO,おちる,, 飛行機は地上に落ちてしまひました。
- ニ, STO,およぐ,, みんな同じ方向に泳いで居ます。
- ニ, STO,およぶ, 文, 花は麓より咲きそめて次第に山上に及ぶ。
- ニ, STO,かえる：帰,, 諸城は、片端から尼子の手に戻つた。
- ニ, STO,かえる：帰,, 聞多が山口の町から湯田の自宅に歸る途中、
- ニ, STO,かけこむ,, 汽車は又勢よくトンネルにかけ込んだ。
- ニ, STO,かたむく,, 日は西に傾きかけてゐる。
- ニ, STO,きえる,, また水の中に消えました。
- ニ, STO,くだる, 文会, 御身が奥州に下りし由はかすかに聞及びながら、
- ニ, STO,くる：來,, 其の子が尼さんのそばに來て、立つたまゝしくしく泣出した。

- ニ, STO, さしかかる, 文, 其の間、山にさしかゝれば舟を引きてこれを越え、
- ニ, STO, さしこむ: 差込, , 日光が店一ぱいに差込んで来た。
- ニ, STO, しのびいる, 韻, 鶏小屋の奥にしのび入つて
- ニ, STO, しゅうちゅうする: 集中, 文, 豫め全力を朝鮮海峡に集中してこれ
を待つ。
- ニ, STO, じょうりくする: 上陸, 手, コロール島に上陸しました。
- ニ, STO, すすむ, 文, 本道を南に進みて
- ニ, STO, せまる, , 海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、
- ニ, STO, そそぐ, 文, ナニヲー以北は海やうやく開け、潮水北に注ぎ、
- ニ, STO, だす, , をりをり水の上にかほを出してみたりしました。
- ニ, STO, たつする, 文, 遂に目的地なるデレンに達せり。
- ニ, STO, たつする, 文, 勝報上聞に達するや、
- ニ, STO, ちかづく, 文, 折から日は地平線に近づきて、
- ニ, STO, つく: 着, 手, 三日目には門司に着きます。
- ニ, STO, つたわる, 文, その作品は、〈略〉、遠く西洋諸國に傳はりて、
- ニ, STO, でる, , 洞庭の岳州から下つて本流に出る。
- ニ, STO, とうずる, 文, 手當り次第に物を運びて、窯の火にことごとく投じ
たり。
- ニ, STO, とけこむ, , やがて雨落ちのみぞにとけ込んで、
- ニ, STO, とつてかえす, , 再び家につて返すと、
- ニ, STO, とびあがる, , ひらりとらんかんの上にとび上りました。
- ニ, STO, ともなう, , 發狂した老人が荒野にさまよつてあるのをフランス兵
が發見して陣所に伴ひ、
- ニ, STO, とりおとす, 文, わきにはさみりたる弓を海中に取落したり。
- ニ, STO, につきんする, 候手, 八幡様に日參致し候も、
- ニ, STO, にゅうこうする: 入港, 手, スエズに入港しました。
- ニ, STO, のぼる, 文, 勝商は山に上りてのろしをあげ、
- ニ, STO, はいよる, 文韻, 窓ぎにははひ寄り、
- ニ, STO, はいる, , いつもの如く研究室にはいつた佐吉は、

- ニ, STO, はっちゃくする: 発着, , ベルリンには三分毎に旅客機が発着する。
- ニ, STO, ひきあげる, , 掘った石炭を地上に引上げたりすることに
- ニ, STO, ひきかえす, 文, 止むなくノテトに引返し、
- ニ, STO, ひろがる, , 大きなしげった枝は、四方にひろがって、
- ニ, STO, むかう, 文, 自動車を駆つて那智山に向かふ。
- ニ, STO, もぐりこむ, , 柔い土の中にもぐりこんでしまひます。
- ニ, STO, もちかえる, 文会, これを白主に持歸りて、
- ニ, STO, わたる, , 老父王のために軍勢を率ゐて英國に渡つた。

(13) 〈場所一経過〉: STH

この格はほとんどヲ格で表されるが、例外的に3例データ中に見出された。「さまよう」の例である。「～をさまよう」も「～にさまよう」も同じ意味と考えられるところから、実態記述としてこれを立てた。

【実例】

- ニ, STH, さまよう, , 發狂した老人が荒野にさまよつてゐるのをフランス兵が発見して陣所に伴ひ、

(14) 〈終状態〉: GOA

変化の結果を指す。「～を～に」のあとにしかるべき動詞が来ない場合は、動詞「する」が省略されているものとみなした。

例: 軍刀を杖に立上らんとす。

「軍刀を」と「杖に」は「立ち上がる」ではなく省略された「する」にかかるものとする。「する」が顕在する場合も少なくないし、動詞を補わないと構文的に無理がある。このニの意味は〈陳述〉(PRE)とも解しうるが、動詞によっては、用法が分れる。たとえば「およぶ」の場合は、年を経てある状態に至った場合は〈終状態〉で、単純に現状を記述する場合は〈陳述〉である。ただし辞書記述の際にこれらを区分することはむずかしく、いずれかに統一する必要があるかもしれない。

【実例】

- ニ、GOA、(する),、機械を相手に、「もの言ふおもちや」の研究に餘念がありません。
- ニ、GOA、(する),、それが此の尾根を界に消散する。
- ニ、GOA、あらためる,、彼は先づ支那傳來の算木による方法を、紙に書きあらはす筆算の方法に改めたのであるが、
- ニ、GOA、いたる,、まだ旅客や貨物を運ぶには至らなかつた。
- ニ、GOA、いる：入,、一音は一音より妙を加へ神に入つて、
- ニ、GOA、いろづく,、真綿を引きのばしたやうな雲が、金色に、紅に、色づき始める。
- ニ、GOA、うつる,、平野から次第に山地に移る。
- ニ、GOA、うまれる,、われ、かたじけなくも皇胤に生まれたとはいへ、
- ニ、GOA、おとしいれる,文、甚だしきは彼を危地におとしいれんとす。
- ニ、GOA、およぶ,文、行幸・御幸のありしこと、數十回の多きに及べりとぞ。
- ニ、GOA、およぶ,文、会、皆此ノ成果ヲ見ルニ及ンデ、
- ニ、GOA、おわる,、此の日の試験は失敗に終わりました。
- ニ、GOA、かえず,会、一日も早く毛利を討つて、御威光を昔に返しておくれ。
- ニ、GOA、かえる：替,、子供にあぶなくもあるから、牝牛にかへたいと言つて居ました。
- ニ、GOA、かえる：帰,文、ふと我にかへれり。
- ニ、GOA、かきあげる,、かの曲を譜に書上げた。
- ニ、GOA、かく：書,、江上に影をうつすさまは、畫にもかきたいくらゐである。
- ニ、GOA、かわる：変,、再び蒸氣機關車にかはる。
- ニ、GOA、かわる：変,、四條・七條の橋はコンクリート造に代り、
- ニ、GOA、くだける,、こつぱみぢんにくだけで、
- ニ、GOA、くむ,、材木が、〈略〉、こゝで大きな筏に組まれるのであらう。
- ニ、GOA、くわわる,、人麿も御供に加つた。
- ニ、GOA、しきる,、市街は南北二つに仕切られ、
- ニ、GOA、すく：漉,、パルプは、〈略〉、種々の紙にすかれるのである。

- ニ、GOA,すすむ,,支那の數學が未だかつて及び得なかつた高い域にまで進むことが出来たのである。
- ニ、GOA,する,韻会,アタ天キニシテオクレ。
- ニ、GOA,する,,野や山を開いて田や畠にしたり、
- ニ、GOA,たかめる,,それが代數學にまで高められるやうになつた。
- ニ、GOA,つく,,従容死についた船長久田佐助の高潔な心事は、
- ニ、GOA,つくりあげる,,今日に見る優美にして堅固極まりなきものに造り上げた。
- ニ、GOA,つくる,,それがするするとはいるくらゐの大きさに作つて、
- ニ、GOA,つくる,,パルプといふ厚紙に似たものを作るまでの工程が、
- ニ、GOA,とりかえる,,此の驛で、電氣機關車に取りかへられる。
- ニ、GOA,なる：成,,アトニナリ、サキニナリシテ、
- ニ、GOA,なる：成,,枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畠を、
- ニ、GOA,なる：成,,突撃前の大事な時になつて、
- ニ、GOA,なる：成,候手,御取りつぶしに相成り候はば、
- ニ、GOA,ぬる,,はなのりやうわきから耳へかけて、茶色にぬりました。
- ニ、GOA,のびる,,苗が二十糎ぐらゐにのびて、
- ニ、GOA,のぼる,,従一位侯爵にのぼり、
- ニ、GOA,はいる,会,ナカマニオハイリナサイ。
- ニ、GOA,はきかえる,,くつしたをぬいで足袋にはきかへたり、
- ニ、GOA,へらす,会,わしの家來を五十人にへらしをつた。
- ニ、GOA,へんじる,,しかも雨は雪に變じ、それが吹雪となつて、
- ニ、GOA,ぼかしあげる,,空は赤から金に、金からうす青に、ぼかし上げたやう。
- ニ、GOA,まとめる,,三卷の書物にまとめて天皇に奉つた。
- ニ、GOA,やくす：訳,,今日では外國語に譯され、
- ニ、GOA,ゆう,,島田に結つて、
- ニ、GOA,わかる,,日本が官軍と朝敵とに分れて、
- ニ、GOA,わかる,,モモガニツニワレテ、

(15) 〈属性〉：ATT

この格を設けた最初の目的は、「～に富む、欠ける、乏しい、満ちる」など、直接的に何かの属性・構造を記述する例文のためであった。しかしそれ以外にも多くの出番が生じている。ガ格、ヲ格についてはすでに述べたが、それらの場合と同様に、二格においても動植物の部分さをさす場合が少なからずある。二格名詞が属性を指す場合には、ガ格名詞はおおむね〈対象〉であり、部分を指す場合には、ガ格が〈経験者〉または〈動作主〉であることが多い。

【実例】

[属性]

ニ, ATT, とむ, , 人間に對する愛の心に富み、其の方面で特色ある歌を多く残してゐる。

ニ, ATT, なる：成, , 生きた人間のやうに聲を出す仕掛になつてゐました。

ニ, ATT, みちる, 文, 平生志堅く、勇氣に満ちたる軍人にして、

[(身体) 部分]

ニ, ATT, うける, , 二匹は、身に幾つものたまをうけて、

ニ, ATT, うける, , 落行く夕日を背に受け、寒空を物ともせず東南をさして飛んで居た鳩は、

ニ, ATT, おう：負, , 身には重傷を負うて、

ニ, ATT, かぶる, , 其の平たい體に、ちよつと砂をかぶると、

ニ, ATT, ささる, 会, 鯛が、何かのどにさゝつて、

ニ, ATT, しみる, , 寒さが、骨身にしみてしいんとする。

(16) 〈原因・理由〉：CAU

原因・きっかけを示す。原則として任意格であるが、多少の例外がある。「何かにつまずく」「鞆袋が柱につかえる」「泥にまみれる」などがそれである。〈手段・道具〉〈材料〉に人為性というたがをはめたため、ここを少々雑多にせざるをえなかった。

【実例】

ニ、CAU、あわてる、韻、ひびく鳴子にばらばらばつと、あわて飛立つむら雀。
 ニ、CAU、いきる、,、あらゆる生物は、此の熱、此の光のおかげに生きてゐるのである。

ニ、CAU、いそがしい、,、夕飯の支度にいそがしいおかあさん。

ニ、CAU、いだいだ：偉大、,、あらゆる生命の源泉であるだけに、それは又實に偉大な存在である。

ニ、CAU、うかれる、韻、月にうかれて、

ニ、CAU、うごく、,、楓の枝がそよ風に動いてゐる。

ニ、CAU、うしなう、文韻会、此の方面の戦闘に、二子をうしなひ給ひつる

ニ、CAU、おそれる、,、敵は、此の勢に恐れて、

ニ、CAU、おちる、,、富田城は名城であるだけに、中々落ちさうになかつた。

ニ、CAU、おどらせる、,、未來の希望に胸ををどらせながら、

ニ、CAU、おどろく、手、シカゴに黒人の多いのには驚きました。

ニ、CAU、おぼえる、文韻、白雲を通す日影に、はや夏の暑さをおぼゆ。

ニ、CAU、かおる、文、忠義にかをる弓矢のほまれは、

ニ、CAU、かがやく、,、朝日に輝く軍艦旗が、

ニ、CAU、かんしんする、手、獨唱や劇までやつてゐるのに、すつかり感心させられました。

ニ、CAU、かんずる、,、此の一握りの土に、ほのかな春の香を感ずるやうにさへ思つた。

ニ、CAU、かんどうする：感動、,、老學者の言に深く感動した宣長は、

ニ、CAU、きょうずる、,、日暮れまで其の鳴かしくらに打興ずる。

ニ、CAU、くずれる、,、はげしい震動に、此の家も、たちまち壁はくづれ、

ニ、CAU、くだける、文、岩に當り石に碎け、

ニ、CAU、くっする、,、此の重い傷にも屈せず、

ニ、CAU、くる：来、文会、雀の巣くひたるを見て、あまりの欲しさに参りて候。

ニ、CAU、くるしむ、文会、我等年久しく貧に苦しむたるに、

ニ、CAU、くれる：暮、文、義經も、涙にくれてしばし返事もせざりしが、

- ニ、CAU、くろむ、文韻、吹く潮風に黒みたるはだは赤銅さながらに。
- ニ、CAU、けむる、雨に煙る行手から、
- ニ、CAU、こりる、これにこりて、
- ニ、CAU、せんしする、前後七年にわたる長い籠城に、尼子方は多く戦死し、
- ニ、CAU、たおれる、文、身は鐵石にあらざれば、砲丸に倒るゝ兵士數知れず。
- ニ、CAU、つかえる：支、革の鞆袋が柱につかへて、
- ニ、CAU、つかれる、文、連日の苦闘に疲れ、うゑに苦しみて、
- ニ、CAU、つくらせる、聖徳太子が御父君用明天皇を追慕し給ふ餘りに作ら
せられたもので、
- ニ、CAU、つまずく、何カニツマヅイテ、
- ニ、CAU、でる、船長の聲に、防水具に身を固めた若者たちが、船室から出
て来る。
- ニ、CAU、どうようする、手、折からのモンスーンに、船は次第に動揺し始め
ました。
- ニ、CAU、なく：泣、嬉し泣きに泣いた時には、
- ニ、CAU、なる：成、烈しいけいこに、中間は、みんなへとへとになつてし
まつた。
- ニ、CAU、なる：成、彼の苦心に成つた模型飛行機は、
- ニ、CAU、におう、文韻、敷島のやまと心を人間はば朝日にはほふ山ざくら花
- ニ、CAU、にぐる、会、如何なる大雨にも、此の溪流の濁つたことはないと申
します。
- ニ、CAU、はえる：映、關東軍司令部の建物が夕日に映え、
- ニ、CAU、はぜる、文韻、とろとろともゆる火に、粟はぜて、
- ニ、CAU、はくつする、在來何かの機會に發掘されたところでは、
- ニ、CAU、ひるがえる、せんたく物の上着やもゝ引などが、風にひるがへつ
てゐる。
- ニ、CAU、びっくりする、甲の長さが一米もある「うみがめ」が居るのには、
びっくりしました。
- ニ、CAU、ふける：耽、しばし思にふけてゐた光圈が、

ニ、CAU、ふるえる、, 一同の聲が感激に震へた。

ニ、CAU、へいこうする、会、お附の百人の大騒ぎ、これには私もほとんど閉口致します。

ニ、CAU、ぼうぜんとする、手、其のすさまじさに、誰も一時ぼう然としましたが、

ニ、CAU、まわる、韻、涼しい風にくるくと、まはるは五色の風車。

ニ、CAU、まんさいだ、, 一萬尾に近い漁獲に船は満載である。

ニ、CAU、まんぞくする、, 此の成功に満足してしまふ佐吉ではなかつた。

ニ、CAU、みえがくれする、, ともすると松の梢に見えがくれするが、

ニ、CAU、みえる、, 萬歳々々の叫び聲に、もう何も見えず何も聞えません。

ニ、CAU、みつかる、, 雪のためにたべものが見つからないので、

ニ、CAU、みる、文韻、あしひきの山のは出づる月かげに大海原の波を見るかな

ニ、CAU、めがくらむ、会、結局人情や欲に目がくらんで、

ニ、CAU、めをみはる、, ちう返りや木の葉落しの妙技に、世間が驚の目をみはつたのも

ニ、CAU、もえる、, 今のイタリヤは新興の意氣にもえてゐる。

ニ、CAU、やけしぬ、, 此の火事には、焼け死んだ人もあつたさうだ。

ニ、CAU、やける、, 日にやけた顔で笑つた。

ニ、CAU、やぶれる、韻、みだれ飛ぶたまに破れて、

ニ、CAU、ゆるむ、, 此の子をどこまでも助けようとする母の一念に、はりつめた兄の心もゆるんでしまつた。

ニ、CAU、よう、, 自分の笛の音に酔つたやうに、

ニ、CAU、わく：湧、文韻、つきせぬ親王のみうらみに、悲憤の涙わきぬべし。

ニ、CAU、わすれる、, 一日の勞苦を、美しい鳴き聲に打忘れるのである。

ニ、CAU、われにかえる、文、吹く朝風に、中佐も軍曹も、ふと我にかへれり。

◎「月かげに大海原の波を見る」などは道具格のような気もするが、意図的というよりも自然のなりゆきのような感じがするので、〈原因・理由〉とした。

しかしこの種のものはゆれる可能性があり、「風のたよりに聞く」などは〈手

段・道具〉になっている。「見る」「聞く」のガ格の扱いが、〈動作主〉か〈経験者〉かという点でまだ部分的に保留になっているが、それが決まればニ格も連動していずれかに決まる。

(17) 〈手段・道具〉：TOO

意図的な行為における道具ないし方法をさす。

【実例】

- ニ, TOO, あたる,, おとうさんは、火鉢にあたりながら、
- ニ, TOO, あぶる,, 兵隊さんの靴下を火にあぶつて、
- ニ, TOO, うごかす, 文, 壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。
- ニ, TOO, うずめる,, 皆外たうのえりに首をうづめて居ました。
- ニ, TOO, おえる：負,, 私などの手にをへないやうになりました。
- ニ, TOO, かきあらわす,, 稗田阿禮がそらんずる我が國の古傳を、文字に書きあらはすことになった。
- ニ, TOO, かぎる, 文, 佐保・佐紀の連岡に北を限り、
- ニ, TOO, かためる,, 防水具に身を固めた若者たちが、
- ニ, TOO, きく：聞,, 風のたよりに此の事を聞いて、
- ニ, TOO, くむ：汲,, 吐水口からふき出る海水を、桶に汲んではどンドン流すと、
- ニ, TOO, くるむ, 会, 彼等を法衣の袖にくるんで助けたいのは山々であるが、
- ニ, TOO, さけぶ, 文, やがて「〈略〉。」と力ある聲に叫びて立上れり。
- ニ, TOO, さらす, 会, 此のお顔を荒狂ふあのあらしにおさらしになったとは。
- ニ, TOO, じゅりょうする, 文, 韻会, 他日我が手に受領せば、
- ニ, TOO, すかす,, 月の光にすかして、あちらこちら探しますと、
- ニ, TOO, すすぐ, 文, 水屋の水に口すゝぎて、
- ニ, TOO, だく,, 妹の小さな手に抱かれてゐた。
- ニ, TOO, だす, 会, 此の心にあることを口に出して言へないのでございます。
- ニ, TOO, つくす, 文, 美観言語に盡くし難し。

ニ、TOO、つつむ、会、五十兩は黄色なきれに包み、百兩は小さな袋に入れて
あります。

ニ、TOO、とおす、,くびかざりのやうに、ひもにお通しになりました。

ニ、TOO、とどめる、文、一きは目立ちてたくましき馬を、信長、目にとどめ
て、

ニ、TOO、となえる、,それをくりかへし口に唱へた。

ニ、TOO、とる、会、金州城が、手に取るやうに見えませう。

ニ、TOO、はさむ、,不意にピンセットにはさまれて、

ニ、TOO、ひたす、,水入の水を紙にひたして、

ニ、TOO、ふせる、会、雀の子を、あの犬君が逃したの。かごに伏せて置いた
のに。

ニ、TOO、ふるう、文、左手に軍刀を振るひて、

ニ、TOO、みえる、,それは、目に見えぬ熱帯の傳染病との戦でした。

ニ、TOO、もつ、,さゝの葉を手に持つて、

ニ、TOO、ゆあみする、文韻、生まれて潮にゆあみして、

(18) 〈方式〉：MAN

様態を表す。どちらかといえば副詞に近いものであり、副詞+「に」というものも含まれる。任意性の高いもので、述語の異なり語数は多いが、その割に類似の表現が多いように感じられる。

【実例】

ニ、MAN、(ねがう)、会、一寸ボフシノセイガ、高クナリマスヤウニ。

ニ、MAN、あかす、,三人は其の夜を涙の中に明かしました。

ニ、MAN、あく、,門の戸は細めにあいて居りました。

ニ、MAN、あこがれる、,ひたすらに法隆寺へとあこがれる私の心を乗せて、

ニ、MAN、あらわれる：現、,やみに包まれていた軍艦の壮大な姿が、だんだんにあらはれて来る。

ニ、MAN、あらわれる：現、,山の峯のやうに積上つた形に現れる白い雲は積雲といひますが、

- ニ、MAN、あんちする：安置、, 本尊観世音は、〈略〉、当時の太子の御姿を語りかほに、此の堂内に安置されてゐるのである。
- ニ、MAN、いう、, お供の中から大聲に、「〈略〉。」と言ふ者がある。
- ニ、MAN、いく、会、予は今後百人だけの家來をつれ、月代りに姉娘・妹娘の許へ參つて、
- ニ、MAN、いろどる、, けやきの大木が、淡褐色にぼつと大空をいろどる。
- ニ、MAN、うきあがる、, 港の光景が、なゝめに浮上つて目に映じた時は、
- ニ、MAN、うごく、, 合圖通りに動いた。
- ニ、MAN、うなづく、, 兄は涙ながらにうなづいた。
- ニ、MAN、える、文韻会、二人の我が子それぞれに、死所を得たるを喜べり。
- ニ、MAN、おいかける、韻、ま一文字に、追ひかけて、
- ニ、MAN、おおい、, 反對に、品物が多くて買ふ人が少い場合には、
- ニ、MAN、おく、, これを盤の上に縦に一本置けば一、
- ニ、MAN、おくる：送、, 汽車や飛行機で何回にも送つたといふことです。
- ニ、MAN、おそう、, 不意二敵ノ軍艦ヲオソフコトモアル。
- ニ、MAN、おどる、手、何といふことなしに、私の胸ををどらせました。
- ニ、MAN、かいらょうする、, 飛行機は日々改良せられ
- ニ、MAN、かがやく、, ゆずの實が、みづみづしく金色に輝いてゐる。
- ニ、MAN、かきあらわす、, 古語を、漢字ばかりで其のまゝに書きあらはすことが、
- ニ、MAN、かけつける、, おくればせにかけつけた顔回を見た孔子は、
- ニ、MAN、かこむ、, 兵たいがいくへにも取りかこみました。
- ニ、MAN、かさなる、, それらが上下に重なり、
- ニ、MAN、かすむ、韻、埠頭の方は煙やもやで灰色にかすんでゐる。
- ニ、MAN、かたむく、会、あゝいふ風に頭が傾いて、
- ニ、MAN、きぎいる、, 聞くとともになしに聞入つてみた。
- ニ、MAN、きんだいかする、, かうして年々に近代化して行くのもまた自然の勢であらう。
- ニ、MAN、くだる、, これから號令が次々に下る。

- ニ、MAN、くつきょくする：屈曲、右に左に屈曲する。
- ニ、MAN、くる、韻、すれ違ひに自動車が来る。
- ニ、MAN、こうげきする：攻撃、文、無二無三に攻撃せしかば、
- ニ、MAN、しさんする：四散、尼子の舊臣は、涙の中に四散した。
- ニ、MAN、しずめる、軍艦ヲ、一打子ニ沈メタ時ノユクワイハ、
- ニ、MAN、じょうそする：上訴、かういふふうに、二回まで上訴し得るやうになつてゐるのは、
- ニ、MAN、すすむ、ぐつと速度を落しながら一直線に進む船のともから、
- ニ、MAN、する、会、一しよに舟あそびをしよう。
- ニ、MAN、する、「かれひ」は何時でも體を横にしたまゝ、くねつて行きます。
- ニ、MAN、する、会、其の時には、お互に目ざましい働をして、
- ニ、MAN、そびえる、清水の塔、八坂の塔、三重五重に聳えて、
- ニ、MAN、たどる、宮の御後から急ぎ足に道をたどつて來たが、
- ニ、MAN、だ、かういふ風に、月の世界は、〈略〉死の世界ですが、
- ニ、MAN、つく：付、黒イ粉ノヤウナモノガ、磁石ニ一面ニ着イテ居タ。
- ニ、MAN、つくる、これと同じ理くつの閘門を、大仕掛に、しかも幾段にも作つたのです。
- ニ、MAN、つたえる、法隆寺が約一千三百年の古き姿を其のまゝに今日に傳へて、
- ニ、MAN、つづく、幾條の道路が縦に横に續く。
- ニ、MAN、つらなる、椅子の形に連なる五つばかりの星はカシオペア座で、
- ニ、MAN、てりはえる、白や、紫に、美しく照りはえて居ます。
- ニ、MAN、とびあがる、莖が、はね返るひやうしに、小さい神様のおからだは、ぽんと空へとび上りました。
- ニ、MAN、ながれる、甲部川の水は、此のうらみも知らぬ顔に、今もいういうと流れてゐる、
- ニ、MAN、ならぶ、閘門はどれも二列に並んでゐますから、

- ニ、MAN、のむ、一、一寸ボフシヲツマンデ、一口ニノンデシマヒマシタ。
- ニ、MAN、のる、文、後向きに乗るもあれば、
- ニ、MAN、はいる、思ひ思ひに、こつちのへうたんにはいつたり、
- ニ、MAN、はこぶ、文、手當り次第に物を運びて、
- ニ、MAN、ひらく、二つの水門を交互に開いたり閉ぢたりすると、
- ニ、MAN、ふりつづく、ひつきりなしに降續いて居る。
- ニ、MAN、まじわる、道路が十文字に交る。
- ニ、MAN、ます：増、木々の葉が一日毎に緑を増して、
- ニ、MAN、もとめる、たゞ一すぢに道を求めて止まなかつたありし日のお釋迦様であつた。
- ニ、MAN、よびあつめる、兄うかしは、すぐに手下の者を呼集めて、
- ニ、MAN、よむ：読、これでは、漢文流に「サウモクアラシ」と讀むことも出来る。
- ニ、MAN、われる、かたい背中が縦に割れて、

◎「〈色名〉+ニ」というのが多い。ここに掲げた例だけでも「いろどる」「かがやく」「かすむ」「てりはえる」などがある。〈終状態〉にもそういう例があるが、あちらは変化の結果を示すものであるから、必須といえないまでも準必須といってよいぐらい動詞との関係が強い。しかし〈方式〉に属するものも、また別の意味で関係が深そうである。上記の例の中には類似の例が多すぎるかとも思うが、任意格と言われるものも、実際にはそれほど任意でないのではないかと思っているので、あえて多くの例を掲げた。

(19) 〈条件〉：CON

かくかくの場合に、あるいは状況でという前提条件などを指す。任意格と見られる場合がほとんどであるが、それでも論理的にはこれがないと意味が変わるという場合がある。下記第1例などはそれである。形式的には単文であっても、単純命題に収まりきれないメタ言語的要素を含んでいる。接続助詞との境界も問題になるところであるが、その点には立ち入らず、たとえ形式名詞であっても名詞+ニは格助詞とみなして、下記のような例をこれに含める。

【実例】

[他に]

ニ、CON,ある,手,その外には、何のかざりもありません。

ニ、CON,かかる,会,此の川には、其の外にも、りつばな橋がたくさんかゝつて居る。

ニ、CON,もつ,,魚雷ノ外ニ、機雷ヲタクサン持ツテ居テ、

[上に]

ニ、CON,ある,,席ハミンナフサガッタ上ニ、立ツテ居ル人モ、タクサンアリマシタ。

ニ、CON,けがす,会,宮の御道筋をふさいだ上に、錦の御旗をけがし奉るとは。

[場合に]

ニ、CON,おこす,,乙が其の犯人ではなからうかといふ疑のある場合に、公益を代表する役人たる検事が裁判所に訴を起し、

ニ、CON,なる:成,,品物が少くて買ふ人が多い時には、品物のねだんは高くなります。

[当り]

ニ、CON,いっぼん,,勢のよい苗を選んで、一鉢に一本づつ植ゑました。

ニ、CON,にわ:二羽,文会,空飛ぶ鳥も、三羽に二羽は、必ず射落す程の上手なり。

[逆接]

ニ、CON,(だ),,男のくせにとあざけられた。

ニ、CON,きく:利,,晴れてゐる割合に、今日は遠望がきかない。

ニ、CON,ちいさい,,大きなからだのわりに、目は小さくて、

ニ、CON,ない,,逃げようにも逃げる途はなく、

ニ、CON,ない,,戦ふにも武器はなかつた。

[状況下で]

ニ、CON,おいしそうだ,手,見るからにおいしさうな果物が、

ニ、CON,けしとめる,会,それよりも、あの風に、四辻で火事を消し止めた

のは、えらいてがらす。

ニ、CON,さんかいする：散開,,其の掩護射撃のもとに、歩兵・工兵が散開して前進を續けてゐる。

ニ、CON,すべる,,やがて出發信號の下に滑り出す。

ニ、CON,そだつ,,此の父母の下に、此の家にそだつた乃木大將が、

ニ、CON,みあわせる,,見送りの人と、窓越しに顔を見合はせて笑つてゐる中に、

ニ、CON,みわたす,,飾磨平野が一目に見渡される。

◎「此の父母の下に、此の家にそだつた」の「此の父母の下に」などは場所格としても差支えないようなものであるが、「この家に」があるため、〈条件〉とした。

(20) 〈目的〉：PUR

動詞連用形またはサ変動詞語幹または準体言を受けて、「～するために」の意を表す場合、すなわち行為の目的を表す場合が主である。受ける動詞は「行く」「来る」「出る」などが頻度が多いが、形容詞も含め、他にもいろいろある。〈役割〉(ROL)との違いは、二格名詞が動作性のものかどうかであるが、「お礼に舞をまいましよう。」の「お礼に」のように、どちらとも言いにくい微妙なものもある(これはひとまず〈役割〉にしてある)。「のために」と置き換えられるものを基本とするが、ガ格またはヲ格が〈対象〉となる場合の二格には、「まごころが神の思し召しにかなう」「資金を救助の用にあてる」のように判断の分れそうなものも含まれる。「行く」「来る」などの動詞における〈目的〉は任意格であるが、それと異なり、これらの二格は必須のものだからである。しかし用言自体が目的に似たものを要素として含むこともあるので、必須の目的格というのもあってよいと思う。〈対象〉が使えないとすると、他に適当な格が見当たらないので、やむをえずこれを用いる場合もあり、また〈対象〉にすることは可能だが、〈目的〉の方が受入れやすいという場合もある。

【実例】

[行為の目的、任意格]

- ニ, PUR,いきる,,極めて純な感情に生きてゐたからである。
- ニ, PUR,いく,,山へシバカリニイキマシタ。
- ニ, PUR,いく,,楠公の碑を建てに行つてゐる家臣からの手紙である。
- ニ, PUR,いそぐ,韻,カマキリデイサン、イネカリニ、カマラカツイデ、アゼミチヲ、トホイタンボヘイソギマス。
- ニ, PUR,いっしょうけんめいだ,,二人は機の修繕に一生けんめいでした。
- ニ, PUR,くる: 来,会,今度新しいお堂を建てたから、見に来て下さい。
- ニ, PUR,けんきゅうする,,元來昔の歴史を知るには、其の頃に書かれた物をもととして研究するのであるが、
- ニ, PUR,しようする: 使用,,石炭を地上に引上げたりすることに使用されるに過ぎなかつた。
- ニ, PUR,する,会,申しわけに、はやしものをするとは。
- ニ, PUR,せいをだす,会,自分の職務に精を出すのが第一だ。
- ニ, PUR,たいせつだ,会,古事記を研究したい考はあつたのですが、それには萬葉集を調べておくことが大切だと思つて、
- ニ, PUR,だす,,放牧に出してから、北斗の體はめきめき丈夫になりました。
- ニ, PUR,たつ,,雀を探しに立つて向かふへ行つた。
- ニ, PUR,ついやす,文,研究に費す金は次第にかさみ、
- ニ, PUR,つくす,,眼前に迫る此の危急をさけるのに全力を盡くしたが、
- ニ, PUR,つとめる: 努,,自ら防火につとめた。
- ニ, PUR,つれていく,,草をたべさせに連れて行つたこともありましたが、
- ニ, PUR,でかける,,海へ釣りにお出かけになりました。
- ニ, PUR,でる,,友人と二人町へ散歩に出て、
- ニ, PUR,はしる,,元帥の家の人々は、手傳ひに、其の方へと走つた。
- ニ, PUR,はたらく,会,わたしは、消防にばかり働いて居て、手傳も出來ず、
- ニ, PUR,べんりだ,,それが日常の計算に非常に便利なものであつたため、
- ニ, PUR,ほんそうする,文,彼は何よりも先づ其の調達に奔走せざるべからざりき。

- ニ、PUR、まつ、重要な交通機関となるのには、一にスチーブソンの力に
またなければならなかつた。
- ニ、PUR、まねく、手、二十五日のお祭には、わざわざお招き下さいまして、
ありがたう存じます。
- ニ、PUR、むかう、東國から徴集されて九州方面の守備に向かつた兵士の一人が、
- ニ、PUR、もちいる、文、幕府は諸處に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、
- ニ、PUR、もってくる、國をひろくするには、どこかのあまった土地をもつて
来て、
- ニ、PUR、もってこいだ、かうした大筏の編成にはもつて来いといつた場所
である。
- ニ、PUR、やる、会、とけいやへなほしにやったのです。
- ニ、PUR、よい、会、名所見物に雨がいゝと言ふのは、
- ニ、PUR、よねんがない、弟は、土遊びに餘念がない。

[用言の意味自体が目的を含むもの]

- ニ、PUR、あてる、文、資金をことごとく救助の用に當てたりき。
- ニ、PUR、おようする、応用、近代科學を家庭生活に應用することに力める
彼等が、
- ニ、PUR、かかる、其の美術館をごくざつと見るにさへ、少くとも二日や三日
はかゝらう。
- ニ、PUR、かなう、此のまごころが、神のおぼしめしにかなつたのであらう、
- ニ、PUR、ささげる、ほとんど其の一生を織機の改良にさゝげた。
- ニ、PUR、さんかする、参加、会、最後の突撃に参加することが出来なかつた
のが、
- ニ、PUR、たえる、耐、斬合つて直ちに折れたり曲つたりするものは、實用
にたへないから、
- ニ、PUR、たる、文、会、汝は教ふるに足る者なり。
- ニ、PUR、てきどだ、会、水温は紅ますに適度、潮流は餘り速くないやうです。
- ニ、PUR、にあう、手、紅海は、名に似合はぬ眞青な海でした。

- ニ, PUR, はげむ, , 秋の取入れにはげんで餘念がない。
- ニ, PUR, ひつようだ, , 切るに必要な堅さを持つ百鍊鍛造の鐵と、
- ニ, PUR, ふさわしい, , いういうたる長江に最もふさはしいのは、

(21) <役割>: ROL

「として」と言い換えることのできるもの。<終状態>(GOA)との区別が問題になる場合もあるが、第一の違いは動詞が変化動詞でないことである。

【実例】

- ニ, ROL, かう: 買, , きつと軍馬に買上げられるに違ひありません。
- ニ, ROL, かく: 書, 手, 船のなごりに、今日は此の一箇月の思出を書いて見ました。
- ニ, ROL, かける, , かづらをたすきにつけ、さゝの葉を手に持つて、
- ニ, ROL, くれる, 会, 私によめに下さい。
- ニ, ROL, けんずる: 献, 文韻会, 今日の記念に獻ずべし。
- ニ, ROL, さしだす, , オレイニ、イロイロノタカラモノヲサシダシマシタ。
- ニ, ROL, たつ, 会, 唐絲の身代りに立ちたうございます。
- ニ, ROL, だす, 会, 明日のお客の引出物に、末廣がりを出さうと思ふ。
- ニ, ROL, つくる, , 此の鼓膜の代りに、薄い鐵で圓板を作つて、
- ニ, ROL, でる, , 其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでした。
- ニ, ROL, となえる, 会, 朝晩おねんぶつの代りにとなへさせます。
- ニ, ROL, ぬる, , 自分の鼻をいたづらに赤くぬつて見せた。
- ニ, ROL, ふく: 吹, , 一生の思出に、心ゆくばかり笛を吹いてから死にたいと思つた。
- ニ, ROL, まつる, , 彼等は呉鳳を神に祭つた。
- ニ, ROL, もらう, , おみやげに、おもしろい本をもらつた。

(22) <内容規定>: COT

判断や仮定における内容を指す。「に違いない」などもこれに含める。文型としては<終状態>(GOA)と似たものがあるが、具体的な行為や変化を含

む場合は〈終状態〉、心理的事象や状態記述の場合は〈内容規定〉とする。「～に決める」「～と決まる」はそのどちらとも解しうるが、一応〈内容規定〉に決めておく。

【実例】

ニ, COT, (する), 会, コーデリヤなどのの尊い眞實を賣に、どこまでも后と致します。

ニ, COT, おもう,, まことになつかしいものに思はれる。

ニ, COT, かぎる,, 鳴く時期が大體五六月頃に限られてゐますから、

ニ, COT, きめる,, さつそく舞姫にきめました。

ニ, COT, きめる,, 絲の長さを一米なら一米にきめて置くと、

ニ, COT, する, 会, 其の首を大切にしておいて、これから毎年一つづつ供へることにするがよい。

ニ, COT, する,, いくら人間や機械の力が進んだにしても、

ニ, COT, そういない, 会, 亡君の仇を報いたのは、義には相違ないが、

ニ, COT, ちがいない, 会, 津波がやつて來るに違ひない。

ニ, COT, みえる, 会, これで大小を差したりつばな武士に見えるだらう。

◎ 〈陳述〉(PRE) との関係が問題になる場合がある。「人間や機械の力が進んだにしても」が〈内容規定〉で、「相手は羅刹にもせよ、悪魔にもせよ、」が〈陳述〉だというのは一見不統一のように見える。しかし後者の文は、正しくは「相手が羅刹であるにもせよ、悪魔であるにもせよ」とあるべきであって、二重の陳述が融合して一つになった感がある。前者はトとの置き換えが可能なので、それとの整合性を考えてここに入れた。後者についてはトとの置き換えができない上、陳述性を認めないと文にならないので、〈陳述〉とした。

(23) 〈範囲規定〉: RAN

本来は「について」の場合を想定していた。つまり行為の及ぶ範囲を限定するものである。第四期国定読本に「について」の例が11例あり、それらはすべてこの格に該当する。以下にあげたものの中にも、「について」「に関して」という意味の例がある。しかし、本作業においては守備範囲が広がり、「～の

中に～がある」のように、ある範囲にある存在命題が成り立つというような記述にもこの格を付与した（例：見送人の中には、ぽつぽつ歸つて行く者もあります）。異質のものが二つ一緒になっているが、分けるとすれば新しい格を立てるか場所格を拡張するかでであろう。〈場所〉というのは重要な情報であり、あまり雑多にしたくないので、当面このままにする。「AにBがある／ない」は名詞Aの性格によってAが〈経験者〉または〈範囲規定〉または〈場所〉、Bが〈対象〉となるが、「AがBにCがある」は〈経験者〉、〈範囲規定〉、〈対象〉（例：頼朝がその刀に見覚えがある）となるか、または〈対象〉、〈範囲規定〉、〈属性〉（例：その辺りが水位に変化がない）となる。

【実例】

[ノ中ニの意]

ニ, RAN, (ある), 文, 後醍醐天皇の御製に、こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿と思ふに

ニ, RAN, ある, , 大將が何かたべ物の中にきらひな物があると見れば、

ニ, RAN, ある, 手, 大連の町の名に、〈略〉、大山通りとか乃木町・東郷町とかいふのがあることを

ニ, RAN, ある, , 頼朝を始め居合はせた者に、誰一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

ニ, RAN, ある, , 此の異なる二つの鐵の重ね方にはいろいろあるが、

ニ, RAN, ある, , 裁判所には、區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四階級があつて、

ニ, RAN, ある, , 日本が生んだ數學界の偉人に、關孝和といふ人があつた。

ニ, RAN, いる, , 信長の家來に上島主水といふ者が居た。

ニ, RAN, ほほえむ, , 木々の梢がぼうつとかすんでゐる中に、とりわけ紅梅が美しくほゝゑんでゐる。

ニ, RAN, みつかる, , 色々の蝶の中に、とうとう僕のとつじものが見つかつた。

ニ, RAN, めだつ, 文, 何れおとらぬ馬多く集り來れる中に、一きは目立ちてたくましき馬を、

[ニツイテの意]

- ニ, RAN, あかるい, , しかし理非にも明かるい人であつた。
- ニ, RAN, ある, , 今日やうな大都市となつたのには、まことに尊いいはれがあるといはねばなりません。
- ニ, RAN, ある, , 變るも道理、これには深い事情があつたのです。
- ニ, RAN, ある, , 其の刀に見おぼえがあつた頼朝は、
- ニ, RAN, ある, 会, 年中水位に變化がありませんから、
- ニ, RAN, ある, , 彼等がかういふものを生み出したのには、西洋諸國の學術の背景があり、
- ニ, RAN, いためる, , さすがに此の事件の始末に心を痛めた。
- ニ, RAN, うえる: 飢, 折から南へ飛行中だつたつばめは、食にうゑ、冷たい雨にずぶぬれになつて、
- ニ, RAN, おこる: 起, 宮の御身に何事が起つたのではなからうか。
- ニ, RAN, かんがえる, , それらの星の列に大きな熊の形を考へたからです。
- ニ, RAN, こまる, 会, 其の日の暮しに困るやうなこともあります、
- ニ, RAN, はながさく, 手, お國じまんの話に花を咲かせるのも此の時です。
- ニ, RAN, すぐれる, , 特に歌の道にすぐれてゐたので、
- ニ, RAN, せいこうする, , 佐吉はさらに動力を使用する織機の發明に成功して、
- ニ, RAN, せいふうする, 文, 遂に兵法に精通せり。
- ニ, RAN, つよい, 手, 幸ひ船に強い私は、
- ニ, RAN, とむ, 会, 豊かな平野、魚に富む川、
- ニ, RAN, はっきする, , 和算にかくも發揮された日本人の天才と錬磨があつたればこそ、
- ニ, RAN, ひらく, , ひたすら和算に独自の天地を開いたのであつて、
- ニ, RAN, まよう, , 僕はどれを見てよいかに迷つた。
- ニ, RAN, めざめる, , 尊皇の大義に、すべての人が目覺める時が必ず來るに違ひない。
- ニ, RAN, ゆだんする, , さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふので、

(24) <観点>：V I E

観点・立場。ある人にとってあだとか、ある面ではこうだとかいう時のことを指す。連語では「にとって」などとなる。語り手の判断を表すような副詞的な語句もこれに含める。

【実例】

[観点・立場]

＝, VIE, あぶない,, 子供にあぶなくもあるから、

＝, VIE, だ, 文会, 彼が今の心にて人とならば、竹千代には無二の忠臣たるべし。

＝, VIE, もどかしい,, 五兵衛の目には、それが蟻の歩みのやうに、もどかしく思はれた。

[文副詞]

＝, VIE, したう：慕,, 近代科学を家庭生活に應用することに力める彼等が、一面には大地を慕ひ、

＝, VIE, せまい,, 一般に本丸への道は狭く、

＝, VIE, なる,, 物にねだんがあるのは、一つには、我々が其の物をほしがるといふことと、いま一つには、其の物が得がたいといふことが原因になってゐることがわかります。

(25) <比較の基準>：C O R

性状記述において比較の基準となるものを指す。通常「より」と言い換えることのできるものである。「まさる」「劣る」などは典型的な動詞であるが、典型的でないもの、例えば「遅れる」については、一部の用法のみをこれに含める。「A君がみんなに／より／から遅れた。」などがその例である。「会議に遅れる」「飛行機の時間に遅れる」など、所定の時間に間に合わないのはこの類に含めない。一般に比較の基準となるものは、ガ格の<対象>と等質のものであることが要求されそうに思うが、必ずしもそうではない。たとえば

例：林蔵の怪しみもてあそぶること、キチーにも増して甚だしかりし

が、

における「キチー」は地名であり、「キチーにおいてより」あるいは「キチーにいた時より」の意味である。

「同じ」「似る」「異なる」などを比較と解するか否かは人により見解の分れるところであるが、等号も不等号も本質は同じとみて、ここに含めることにした。なおこの類は二よりもトに多い。

【実例】

[大小、優劣]

- ニ, COR,あまりある,文韻会,厚意謝するに餘りあり。
- ニ, COR,あまる,,さうして,身の丈にもあまる草を分けて,
- ニ, COR,おくれる,,戦車群の猛進におくれじと,
- ニ, COR,おとる,会,これがそなたの領地ぢや。廣さにおいても,値うちにも,決して姉のに劣りはせぬぞ。
- ニ, COR,およぶ,,佐吉の機械は外國製に及ばなかつた。
- ニ, COR,かつ,,カメガ、ウサギニカチマシタ。
- ニ, COR,かなう,会,雲サンニハ、カナヒマセン。
- ニ, COR,すぎる,,人の歩くくらの速さに過ぎなかつた。
- ニ, COR,たりる,,高さ一米にも足らぬ「たかねざくら」が,
- ニ, COR,ちかい,,眞淵はもう七十歳に近く,
- ニ, COR,まける,,アノノロイカメニマケルコトハナイトオモヒマシタ。
- ニ, COR,まさる,,外國品にまさるものを,
- ニ, COR,ます,,安萬侶の苦心は、それにも増して大きいものがあつた。
- ニ, COR,みつ,文,私財をことごとくなげうつといへども、十が一にも満たず。

[異同]

- ニ, COR,おなじ,文会,我等には、かゝる所も平地に同じ。
- ニ, COR,にる:似,,孔子の顔が陽虎に似てゐたところから,

程度を表す。内容的には数量が主であるが、数量の場合は無格になることが多く、助詞をとる場合は、直前の名詞が数詞以外のかかなり限定されたものになる。

【実例】

ニ, DEG, おしえる,, 弟子の才能に應じてわかる程度に教へた。

ニ, DEG, おもう,, 自分のやうなものをこれ程にまで思つて頂けると思ふと、

ニ, DEG, かかる,, 網の糸も切れんばかりにかゝつてゐるのだ。

ニ, DEG, かたむく,, 東海丸の船體は、極度に傾いた。

ニ, DEG, しろい, 手, チャモロ族といふのが大部分で、割合に色も白く、

ニ, DEG, せっぱくする,, 天下の雲行は、ほとんど息苦しいまでに切迫してゐる。

ニ, DEG, そんけいする, 会, 私は口で申すことの出來ます以上に、父上を尊敬も致し、

ニ, DEG, つよい, 会, これほどに強いあなたは、

ニ, DEG, ねっしんだ,, 世間の人々以上に、其の記事を熱心に讀みました。

(27) 〈陳述〉：PRE

「あたる」「およぶ」「する」「なる」などの動詞において「該当する」の意を表す場合にこれを用いる。動詞としては〈終状態〉と重なるものが多く、ニュアンスも近いが、変化を伴わない。たとえば、「なる」の用例の中でも、変化の結果を表すものは〈終状態〉となるが、「500円になります。」が単に「500円です。」と同じ意味を表す場合には〈陳述〉とする。優先度を低くし、なるべく使わないですませる。

【実例】

ニ, PRE, あたる,, つまり地峽の脊骨に當る高い岩山を切通した所で、

ニ, PRE, あたる,, 月への距離の約四百倍に當る。

ニ, PRE, およぶ, 手, すべてで一千以上に及ぶさうですが、

ニ, PRE, する, 会, 相手は羅刹にもせよ、惡魔にもせよ、

ニ, PRE, たつする,, 時には地球の十數倍に達するのが現れることがある。

- ニ、PRE,だ,,驚いたことには、
 ニ、PRE,なる：成,会,ちやうど一圓になります。
 ニ、PRE,なる：成,手,私がこゝに來てから二箇月になりますが、
 ニ、PRE,なる：成,,火元からは大分はなれて居たが、風下になつて居たので、
 ニ、PRE,なる：成,,其の時十二になる娘がありました。
 ニ、PRE,なる：成,,よこ糸が無くなれば自動的にこれをおぎなふ仕掛になつて居る機械で、
 ニ、PRE,なる：成,,低いのも三百米、高いのになると八千米——
 ニ、PRE,ほかならない,,また我が尊い國語に外ならない。

㊸保留したもの

【実例】

- ニ、?,ある,,此の外、東交民巷だの、天橋路だの、胡同だの、支那だけに變つたものや變つた名前がある。
 ニ、?,いたる,文,一木・一草に至るまで、歴史あり、古歌あり、
 ニ、?,なる,会,當時の習はしとして改元になる。
 ニ、?,わたる,,幅約二十米、東西にわたつて一直線に伐開かれた林空。

4.4 デ格

「で」の古い形である「にて」が、本データ中に 23 例ある。統計には含まなかったが、同様の調査をしたところ、「で」とよく似た分布を示した。

(1) 〈動作主〉：AGT

デ格名詞が〈動作主〉または〈経験者〉になるのは、有意志体の中でも機関（「会社で」「〇〇省で」など）や個人の集合（「みんなで」「二人で」など）に限られる。集合といっても必ずしも複数ということではなく、「私一人で」という言い方もある。「私が一人で」「甲が乙と二人で」というふうにガとデが併用されることもあり、人数+デは機関名+デとは性格が異なることも考えられ

るが、他に〈動作主〉相当のものが無い場合には、これを〈動作主〉とみなす。〈動作主〉が別に明示されている場合には、この種のデには別の深層格を割り当てる必要がある（差し当たり〈方式〉を用いている）。「自分で」などというのもその類である。

【実例】

デ, AGT, いく,, 二人で休憩室へ行つた。

デ, AGT, おどる,, オホゼイデ、ニギヤカニヲドリマシタ。

デ, AGT, さいようする,, 会社でも此の意見を採用して、

デ, AGT, そうだんする,, ミンナデサウダンシテ、

デ, AGT, ためす,, 或会社では、此の織機と外国製の織機とを、一年にわたつてためしてみたが、

デ, AGT, だす,, 此の旅館で出してくれるさしみは、

デ, AGT, つく: 撞,, 山寺では、此の火を見て早鐘をつき出した。

デ, AGT, とりはずす,, 大石橋守備隊では、さつそく信書管を取りはずし、手厚くかんごしたが、

デ, AGT, はじめる, 会, 良雄、うちでもそろそろ始めるかね。

(2) 〈経験者〉: EXP

〈動作主〉の場合と同様に、デ格名詞が〈経験者〉になるのは、有意志体の中でも機関（「会社で」「〇〇省で」など）や個人の集合（「みんなで」「二人で」など）に限られる。

【実例】

デ, EXP, わすれる, 会, 役場の方でお忘れになつたのではなからうかと思ひまして、

(3) 〈対象〉: OBJ

「AがBでいっぱいだ」のAを〈場所〉または〈経験者〉、Bを〈対象〉と判定したもので、他には「埋まる」の例があるだけである。Aを〈対象〉、Bを〈原因・理由〉などとする見方もあると思うが、どちらかといえばBに力点が

あるように思うので、Bを〈対象〉とした。

【実例】

デ, OBJ, いっぱいだ,, 雪舟は〈略〉。始は、たゞ恐しさで一ぱいでしたが、

デ, OBJ, いっぱいだ,, 兄の目は、涙で一ぱいである。

デ, OBJ, いっぱいだ,, 沿岸を走る汽車の中まで、にしんの香で一ぱいだといふ。

デ, OBJ, うずまる,, 神社・寺院の境内も、一時に花で埋まる。

(4) 〈時〉: T I M

動作や状態の存在する時を表すが、〈時〉といっても、ニ格のように「〇〇年に」というような明瞭な形をとるのではなく、「そこで」「途中で」「今では」のようにややあいまいな表現をとる。「あとで」に対して「のちに」など類似の用法もあるが、概して守備範囲を異にする。やや〈条件〉(C O N)に近い。

【実例】

デ, T I M, ある,, そこで五分間の休憩があつて、

デ, T I M, いう,, あの陳・蔡の厄で、子路や子貢が、「〈略〉。」とか、「〈略〉。」など不平がましく言つた時、

デ, T I M, おわる,, 七難八苦の生涯は、三十四歳で終を告げた。

デ, T I M, ごめんこうむる, 会, では、これで御免かうむります。

デ, T I M, しぼる,, 子山羊が飲んだ後で、おとうさんは、お乳をしぼつて、

デ, T I M, しようする: 使用,, ごく古いところでは、たゞ石を割つたまゝの、形の整はないものを使用してゐたが、

デ, T I M, たかい,, 今では、僕よりもずつと背が高いが、

デ, T I M, ひるねする,, トチュウデ、ユックリヒルネラシマシタ。

デ, T I M, ほんぶくする, 会, こゝ二三日で、きつと御本復になりますから。

デ, T I M, よぶ,, 網がつぼまつて來たところで、網船は、僕等の乗つて居る船を呼んだ。

(5) 〈場所〉: S P A

動作や状態の存在する場所を指す。デの用法中もっともポピュラーなものである。ニ格で表される場所の中にも任意的なものが少なくないことを述べたが、デ格においては例外なしに任意格だといえそうである。

【実例】

デ, SPA, あう : 会, , まるで地獄で佛にあつた心地がし、

デ, SPA, あじわえる, , ちよつと内地で味はへぬものの一つである。

デ, SPA, あそぶ, 会, こゝで遊んではいけない。

デ, SPA, ある, , 此の邊では、雪が二米近くもあつて、

デ, SPA, いう, , 西洋人はよく牧場の群羊にたとへるさうですが、日本では俗にむら雲などいつてあます。

デ, SPA, うまれる, , 何時、どこで生まれたのでせうか。

デ, SPA, えがく, , 北の空では、星が北極星をほゞ中心に、圓を廻がいて動いてゐる

デ, SPA, おこなう, , 裁判は、裁判所で判事が行ふ。

デ, SPA, おしえる, , 聾啞學校で氣の毒な子供たちを教へるやうになると、

デ, SPA, おちる, , こゝではあつといふ間に日が落ちてしまふからである。

デ, SPA, おどる, , 椰子の木かげで、〈略〉をどり明かすさうである。

デ, SPA, おわる, , 本島で、にしんの漁期の終る五月下旬から、

デ, SPA, かう : 買, , 一番安く賣る店で買ひます。

デ, SPA, かける, , カゴノマハリヤ棚ノスミナドデ、繭ヲカケ始メマスカラ、

デ, SPA, かよう, 手, 南洋群島では、内地人の子供は、皆さんと同じやうに小學校に通ひ、

デ, SPA, かわる : 代, , 石打の驛で、再び蒸氣機關車にかはる。

デ, SPA, きこえる, , 機内では自分の聲さへ聞えない。

デ, SPA, きまる, 会, 此の前の村會で戸數割がきまつた時、

デ, SPA, くみあげる, , 炭坑などで水を汲上げたり、

デ, SPA, くらす, 会, 舟で暮すほど、おもしろいことはありません。

デ, SPA, くりかえす, , 第二の閘門に入り、こゝでも又同様の手續をくりかへして、

デ, SPA, けしとめる, 会, あの風に、四辻で火事を消し止めたのは、
 デ, SPA, さかんだ,, 今、各國で日本語の研究が盛であることは聞いてみた
 が、

デ, SPA, しらべる, 会, 昆虫室がありますから、そこで調べてごらん下さい。

デ, SPA, せんたくする：洗濯,, オバアサンが、川デセンタクラシテキルト、

デ, SPA, たちあう,, 刑事裁判では、検事が立會ひ、

デ, SPA, であう,, さばくの中で、或旅人が、二人の商人に出あつた。

デ, SPA, とまる：泊,, 川べの宿場で泊つて、水の引くのを待つて居た大勢の
 旅人は、

デ, SPA, ない,, 高臺では、しばらく何の話し聲もなかつた。

デ, SPA, なく：鳴,, せみは、桐の木で鳴いて居る。

デ, SPA, なくす, 会, 家の中でなくした物でも、

デ, SPA, なる, 会, 大都會では、廣い通は、中央が車道といつて、電車や自動
 車が通る所になつて居り

デ, SPA, はじまる, 会, これから暗室で、エックス線の實驗が始ります。

デ, SPA, ふさぐ,, 方々で、官軍が、賊のひやうろうの道をふさいたので、

デ, SPA, まじわる, 手, 殊に中央のマンハッタンでは、十幾條の縦の大通と、
 横の無数の通とが、〈略〉、きちんと交つてゐます。

デ, SPA, みつける, 韻, やつでのかげで、ふつと見つけた赤い花。

デ, SPA, もらう,, 入口で閲覧用紙をもらふ。

デ, SPA, よむ：読,, 自分が江戸の屋敷で史記を讀み、

デ, SPA, よろこぶ,, 當選した家では、定めて喜んでゐることであらう。

(6) 〈原因・理由〉：CAU

動作・状態が起こる原因やきっかけを表す。述語は自動詞や形容詞、体述語
 (名詞+陳述辞)が多い。動詞も非意図的なものが大部分である。比較的判定
 しやすいところであるが、まれに〈手段・道具〉(TOO)との境が問題にな
 ることがある。「小沼一帯が狐で立つてゐる」というのは、「〜で食べている」
 と言い換えれば〈手段・道具〉に近く感じられる。

【実例】

デ, CAU, うんどうする, 会, あゝいふ風に體をしぼると、中の水が勢よく下へ出る。其の勢でくらはげは運動するのだ。

デ, CAU, かすむ, 韻, 埠頭の方は煙やもやで灰色にかすんでゐる。

デ, CAU, かたむく, , いわしの重みで、船がぐつと傾く程だ。

デ, CAU, きまる, , 思ひかねの神といふ、大そうちゑのある神様のお考で、神様方のなさることがきまりました。

デ, CAU, くずれる, , 或日、大風で外廻りの塀や石垣がくづれた。

デ, CAU, しぬ, 会, 満洲事變でなくなつた、國子さんのおとうさんがおまつりしてゐるのは、

デ, CAU, じめじめする, , 昨日の雨でじめじめして、

デ, CAU, せいりつする, , わづか二回の會見で、しかも談笑の中に開城の約が成立した。

デ, CAU, そうぞうされる, 手, かう書並べただけでも、熱帯の海のすばらしさが、ほゞ想像されるでせう。

デ, CAU, たつ：立, , 小沼一帯が狐で立つてゐるのださうだ。

デ, CAU, だ, 手, 色とりどりのテントや海水着で、海岸は花が咲いたやうです。

デ, CAU, できる, , しかも人間の力で出来た湖と聞くと、

デ, CAU, なおる, 会, おかげさまで、すっかりなほりました。

デ, CAU, なる：成, , 此の報告で敵情は明らかになつた。

デ, CAU, まんぞくする, , 近來はそれだけで満足せず、

デ, CAU, めをさます, , 雷の音で目をさまして、

デ, CAU, ゆうめいだ, 手, 又眺望の好いことでも有名です。

デ, CAU, わかる, 会, どちらも口だけではわからぬ。

(7) 〈手段・道具〉：TOO

有形の道具の他に抽象的な手段も含む。デの用法の中では〈場所〉に次いでポピュラーなものである。道具というからには、動詞は当然意図的な行為を指

すものと想像されるし、また実際にもおおむねその通りであるが、可能動詞やそれに準ずる語（「見える」など）もいくらか含まれる。ニ格の場合に比べて〈原因・理由〉との区別がしやすい。

【実例】

デ, TOO, あいずする, 会, わしが扇で合圖をする。

デ, TOO, あげる,, 大きなたもで、網からいわしをどンドン僕等の船へ上げる。

デ, TOO, あらう,, 焼酎で血だらけの傷を洗ひ、

デ, TOO, いう,, 武士らしい言葉で言ひました。

デ, TOO, いく, 手, 次の便船で、セレベスのメナドから、フィリピンのダバオまで行つて見るつもりです。

デ, TOO, いじる,, 足の親指で、板の間に落ちた涙をいちつてみました。

デ, TOO, うちしずめる,, 大砲や魚雷で打沈メルコトモアル。

デ, TOO, うちつける,, しつかりと釘で打附けてしまつた。

デ, TOO, おおう,, ごく薄い白絹か何かで空をおほつたやうになりますから、

デ, TOO, おくる,, 汽車や飛行機で何回にも送つたといふことです。

デ, TOO, かう：買, 手, 昔はそれで物を買つたり賣つたりしたのださうです。

デ, TOO, かく：書,, 「クサキハアライ」といふのを漢字だけで書けば、

デ, TOO, かく：搔,, 小さいくまでで砂をかくと、

デ, TOO, かこむ,, 金網で圍んだ中に、

デ, TOO, かたづける,, 此の機械で見る見る片附けられて行く。

デ, TOO, かんがえる,, 兄は、何でも理くつで考へる方でしたが、

デ, TOO, くだる,, 今度は前と反對の手續で降つて行くのです。

デ, TOO, けいはつする, 会, 教についていろいろ質問もし、それで予を啓發してくれることがある。

デ, TOO, しらべる,, いろいろの方法で此の事をしらべてみますと、

デ, TOO, しるす, 会, こゝに、英語で『〈略〉。』と記してある。

デ, TOO, しんどうさせる,, それを電氣で振動させたらどうかと考へました。

デ, TOO, すくう：救, 会, もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。

- デ, TOO, ためす, 会, 何かでためしてみる方法はなからうか。
- デ, TOO, つく: 搗, , ソレデ米ヲククト、
- デ, TOO, つづける, , たゞあの小さい體で長い旅行を續けるせむか、
- デ, TOO, つる: 吊, , 荒なはで枝を釣つた松の根もとに、
- デ, TOO, とりすてる, , 男たちが、雪かきで、ようしやなく新しい雪を取捨ててしまひました。
- デ, TOO, とる, , まるでかんなで面を取つたやうにきれいに續く。
- デ, TOO, いる: 煮, , 細かく碎き、藥品でどろどろになるまで煮、
- デ, TOO, ぬう, , 有合はせの小さい疊針で傷口を縫始めた。
- デ, TOO, はこぶ, , ジャンクで南京や上海方面に運ばれて行く。
- デ, TOO, はしる, , 高原の道を自動車で東へ走ると、
- デ, TOO, はねあげる, , 八尺の槍で、敵の槍先をはね上げ、
- デ, TOO, ひっぱる, 会, 大きな力で、ぐんぐんと人を引っぱつて行かれる。
- デ, TOO, ふきこむ, , ふいごで風を吹込むと、
- デ, TOO, みあげる, , かはいゝ目で空を見上げて居た。
- デ, TOO, みえる, , こんな小さい望遠鏡でさへ、はつきり見えるのですから、
- デ, TOO, みる, , 話をする時に起る空氣の振動を目で見る機械の工夫をしたり、
- デ, TOO, むかう, , 自動車で豊原市外小沼に向かふ。
- デ, TOO, れんらくする, , 先生の機械と電線で連絡した別の機械を調べてみます。

◎「釘で打ちつける」の「釘」、「金網で囲む」の「金網」は構成要素の一つと見て材料とすることも可能であるが、動詞が「作る」類でないので、〈手段・道具〉とする。

(8) 〈材料〉: MAT

ものを作る場合の材料を示す。「筆で書く」場合の「筆」は〈手段・道具〉であるが、「墨で書く」の「墨」は〈材料〉である。ただし、人間の思考や表現は概して粗いものであって、道具と材料を区別せず「筆と墨で書く」のよう

な言い方をしたりする。このように等質でないものが括られた場合には、いずれか一方を優先する規定が必要になるので、その場合には〈手段・道具〉をとることにする。また、手段・道具・材料をまとめて一つの格とすることも考えられるが、日常生活はそれでいいとして、科学技術文献などを対象にするときのことを考えて、一応分けておく。

〈材料〉を用いる動詞はかなり限定され、「作る」に類する語が多い。

【実例】

デ, MAT, あむ, 手, 椰子の葉であんだかごをさげて、

デ, MAT, かく: 書, , ぼうしには、金で字が書いてありました。

デ, MAT, かく: 描, , 足の親指を使ひながら、涙で、板の間に畫をかき始めたのでした。

デ, MAT, かざる, 手, 鳥の羽でかざつた櫛をさした男、

デ, MAT, きづく, , 石で築いた室や石棺が現れ、

デ, MAT, くまどる, , 山々の頂上から上の空は、ちやうど墨でくまどつたやうに見える。

デ, MAT, こしらえる, , ソノ松ノ木デ、ウストラコシラヘマシタ。

デ, MAT, たたむ, , 大理石でたゞまれた圓形の祭壇の前に立つと、

デ, MAT, つくる, , 此の鼓膜の代りに、薄い鐵で圓板を作つて、

デ, MAT, つつむ, , 周圍を堅い鐵で包むのが最も普通である。

デ, MAT, つみあげる, 手, 石で積上げた幾多の金字塔の中、

デ, MAT, できる, 会, これで、〈略〉望遠鏡が、出来るかも知れない。

デ, MAT, ぬる, , 赤や、青や、黄でぬった、りっぱな門が見えます。

デ, MAT, ふく: 葺, 手, お屋根をかやでふき、

デ, MAT, まく: 巻, , 輪ゴムできりきりと巻いて、

(9) 〈構成要素〉: COM

物や組織体の構成要素を指すのに用いる。本資料では1例のみである。〈材料〉と一緒にすることも可能であるが、データの性質によっては分けた方がよい場合もあると思う。

【実例】

デ, COM, そしきする,, 大審院は五人の判事で組織される。

(10) 〈方式〉: MAN

様態を表すものであり、デの用法の中ではかなり多い。必須格でないから、動詞の種類も様々のように思えるが、このデータで見る限り、立居振舞に関するものが多いようである。

【実例】

デ, MAN, あいさつする,, 元氣ナ聲デ、「略。」トアイサツラシテ、

デ, MAN, いう,, 兄は、改つた口調で言つた。

デ, MAN, うなづく,, 軍人さんが笑顔でうなづく。

デ, MAN, うる: 売,, おばあさんが一人ぼつちで、菓子や煙草を賣つて居る。

デ, MAN, おしとおす,, 一生を忠誠質素で押通して、

デ, MAN, おしよせる,, 非常な速さで押寄せて來た。

デ, MAN, おりる,, 男も女もはだして、濱へ下りて行く。

デ, MAN, かけつける,, 聞多の兄五郎三郎は、押取刀で其の場へかけつけたが、

デ, MAN, ききとる,, 宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞取つて後を追つたが、

デ, MAN, きづく,, 一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

デ, MAN, こす: 越,, 其のまゝで冬を越して、

デ, MAN, しっそうする,, 自動車がすばらしい勢で疾走する。

デ, MAN, じょうりくする, 手, 昔話の龍宮にでも來たやうな思で、コロール島に上陸しました。

デ, MAN, つめかける,, 押すな押すなでつめかける。

デ, MAN, つれてかえる,, 五箇月ぶりでうちの馬屋へ連れて歸りました。

デ, MAN, とうひょうする, 会, りつばな人を自分できめて、自分で投票する

ものです。

デ, MAN, はいる, 会, 下駄ばきで風呂へはいる人があるものですか。

デ, MAN, はずす,, すこぶるなれた手つきで魚をはづす。

デ, MAN, はやしたてる,, 胡弓・笛・たいこの鳴り物入りではやし立てる。

デ, MAN, ふりつづく, 会, さつきのやうなちやうして降續くと、

デ, MAN, ぶつかる,, 五六百の小勢でぶつつかつて行つた。

デ, MAN, まう, 韻会, 黒い衣のそろひでまふと、

デ, MAN, わらう,, 平氣なかほで、「〈略〉。」と、また笑ひました。

(1) 〈条件〉：CON

ある条件が整えばあることをする、またはある事柄・状態が発生する場合に用いる。したがって可能表現や未来の記述が多く、また数量的な記述が多い。しかし「千円で買える」の「千円で」は〈条件〉だとして、「千円で買った」の「千円で」はどうなのか。上の定義には当てはまらないが、他に適当なものが思い当たらないので、それも〈条件〉の例に含めてある。「によって」にもこの種の用法がある。

【実例】

デ, CON, (きめる),, 頼朝は一目見た上でと、萬壽を呼出しましたが、

デ, CON, (だ),, 運河の長さは全體で約八十二料、

デ, CON, いける, 手, ハルビンへは十三時間餘りで行けます。

デ, CON, かてる,, 一通りではとても勝てない、

デ, CON, きっておとす,, あと四年で、明治維新の幕が切つて落されようといふ時だ。

デ, CON, けんとうがつく,, かう言つただけでは、まだ中々見當が附かないでせう。

デ, CON, すます：済,, たゞ美しいといふだけではすまされなくなつて来る。

デ, CON, だ, 会, お二人なら、連臺で四百八十文でございます。

デ, CON, つうかする,, 十時間ばかりで船は通過します。

デ, CON, でる,, あと百七十八料で、敵軍主力の背後に出ることが出来よう。

デ, CON,のみこめる,, 二日や三日で、槍の使い方がのみこめるものではない。

デ, CON,ひかる,, 光線のぐあひで、背中のあたりが點々と空色に光るのは、
デ, CON,みえる, 会, どうだ、これで大小を差したりつばな武士に見えるだらう。

デ, CON,わたす, 会, 一體幾らで渡す。

(12) <目的>: PUR

これも下記3例のみである。先頭の2例は<原因・理由>とも解しうるが、第3例はすこし趣が異なる。いずれも意図的動作であるから、目的とする方が妥当であろう。

【実例】

デ, PUR,いく, 手, 此の間、遠足で旅順へ行きました。

デ, PUR,とおる, 会, 身どもは主用で通る者だ。

デ, PUR,はたらく, 会, おとうさんは、消防で働かねばならぬから。

(13) <範囲規定>: RAN

述語の成り立つ範囲に制限を加える。「セカイデュウデ、一バンエライアナタ」のように、一見場所を示すかと思うものもあるが、<場所>の方は出来事の起こった場所を指すのであって、<範囲規定>とは性格が異なる。<範囲規定>を有する述語は形容詞が多い。しかし細かく見ると、これにもいくつかのタイプがある。ある限定された地域・年代・分野においてというのと、ある集合を指定してその中の要素を取り立てる場合と、比較の際の着眼点を指す場合とがある。いずれにしても、デ格における<範囲規定>は、比較に用いられることが多い。

【実例】

[地域・年代・分野指定]

デ, RAN,いう,, 俳句で「雲の峯」といふのも此の入道雲です。

デ, RAN,うつくしい,, 夢殿は、我が國で一番美しい八角圓堂だといはれて

ある。

デ, RAN, つよい, 会, 西の國で、自分より強い者はない。

デ, RAN, ふるい, , いはば我が國で最も古い書物である。

デ, RAN, めずらしい, , ちやうど同じ五六月頃、日本では珍しい程美しい鳥が來ます。

[集合指定]

デ, RAN, ある, 手, 内地人の商店や家庭では、島民をやとつてある所がたくさんあります。

デ, RAN, おおきい, , 石垣の石の大きいのは有名ですが、中でも縦六米、横十一メートルといふすばらしく大きい石には、誰でもびつくりさせられません。

デ, RAN, おもう, 会, そなたたちの中で、誰が一番此のわしを大事に思ってくれるか、

デ, RAN, かたい, , 寶石の中でも一番かたくて、

デ, RAN, だ, 会, 青銅の鳥居では日本一だらう。

デ, RAN, だ, 会, 一番にぎやかな所かね。まあ、町では、銀座か新宿だらう。

デ, RAN, としわか, , 舞姫の中では一番年若でした。

デ, RAN, ひくい, , 層雲といつて、雲の中でも一番低い雲です。

[着眼点]

デ, RAN, まける：負, 手, 皆さんは、お行儀のよいことでも、アメリカの子供に負けないうせうね。

◎この類の「～で」の係り先は、用言というより副詞「一番」「最も」とすべき場合が多いが、その場合も一応「一番美しい」「一番かたい」「もっとも古い」などの最上級の形容詞に係るものとみなした。

(14) 〈陳述〉：PRE

デについては、下記3例のみである。

【実例】

デ, PRE, おもう, 会, 私の考では、長い方がよいかと存じます。

デ, PRE, だ, 会, 殿の仰では、明日から三日の間に、必ず仕上げよとのことだ。

デ, PRE, だ, , お後の仰で、「〈略〉。」とのことですよ。

4.5 ト格

(1) 〈相手 1〉：PAR

必須の相手。これには「AガBト会談する」「AガBヲCト連結する」のようにガ格と対等になる場合とヲ格と対等になる場合の二種類がある。数からいうと、ガ格対等の方がずっと多い。「AガBト」「BヲCト」といった場合、原則としてAとBまたはBとCとは交換可能であり、また「AトBガ会談する」「AガBトCヲ連結する」のように格助詞トの代りに並立助詞トを用いることもできる。しかし、この原則に当てはまらないものも、さほどまれではない。「貧苦と戦う」などは、その例である。その種のものもここに代入してある。

【実例】

[ガ格対等の例]

ト, PAR, あいのぞむ, 文, 淡路島の東端、本土と相望む所紀淡海峽となり、

ト, PAR, あわせる, , 萬壽はうばと心を合はせ、

ト, PAR, いいあう, , 見すばらしいなりをした一人の旅人が、人夫と、渡し賃を高い安いと言合つて居たが、

ト, PAR, かいけんする, 文, かの建御雷命が大國主命と會見し給ひしは、

ト, PAR, かんけいする, , 孝和に至つては、西洋の數學・學術と何等關係する所なく、

ト, PAR, こんやくする, 会, 私は持參金と婚約は致しませぬ。

ト, PAR, すれすれ, , 見たところ、水面とすれすれになつて流れてゐるが、

ト, PAR, ぜつえんする, 文, こゝに始めて樺太が大陸と全く絶縁せる島なることを確實にするを得たり。

ト, PAR, たたかう, , 氣ちがひといはれ、貧苦と戦ひ、あらゆる困難にたへて、

ト, PAR, つづく, , ベニスは陸と續いてゐる。

- ト, PAR, ともにする, 会, 船と運命を共にするのは、
- ト, PAR, なかよし, , 兄は、其の人と早速仲好しになつて、
- ト, PAR, ならば, , 広い道路が、鐵道と並んで通つてゐる所が多い。
- ト, PAR, はかる: 諮, 文会, 我が子事代主とはかりて答へ申さん。
- ト, PAR, まじわる, , さつき上つて來た線路がずっと下の方に見えて、今通
る線路と十字に交つて居る。
- ト, PAR, むすぶ, 文, 美しき山野は、太古以來の歴史と結び文學と結びて、
- ト, PAR, れんらくする, , 先生の機械と電線で連絡した別の機械を調べてみ
ます。

【ヲ格対等の例】

- ト, PAR, とりかえる, , サルハ、ニギリメシガホシクナリマシタ。カニニタ
ノンデ、カキノタネト、トリカヘテモラヒマシタ。

(2) 〈終状態〉: GOA

変化の結果を指す。「に」に言い換えられる。動詞は「なる」が最も多く、
次いで「する」である。

【実例】

- ト, GOA, あらためる, 文, やがて名を柿右衛門と改めたり。
- ト, GOA, うまれる, 文韻, 國といふ國をめぐるて日の本の人と生まれし幸は
知りにき
- ト, GOA, する, , こゝ北千島の一角を根據地とする約百隻の流し網出漁船は、
- ト, GOA, する, , 凡そ十一年を週期として増減してゐる。
- ト, GOA, なる: 成, 文, 其の間わづかに三町ばかりとなれり。
- ト, GOA, なる: 成, , これらの小山がすべて出城となつて、

(3) 〈方式〉: MAN

様態を示す語に付く。したがって必須格に該当することはなく、あまり格と
して意識されない。名詞+格助詞というより、副詞+格助詞に属するものが多
く、副詞の一部とみなされたりもする。ここで取り上げる必要もないかもしれ

ないが、述語との結びつきはかなり密であり、用言情報の一つとして何らかの措置が必要であろう。量的には〈内容規定〉に次いで多い。また語彙的にもバラエティに富んでいる。

【実例】

- ト, MAN,あがる,,しづしづと上つて行くさまは、
- ト, MAN,あけわたす,,おめおめと江戸城を明渡すはずはない。
- ト, MAN,あたためる,,薄日がぼかぼかと背中を温める。
- ト, MAN,あつまる,,今まで敵に附いてゐた舊臣が、續々と勝久の所へ集つた。
- ト, MAN,あるく,,とほとほと歩く。
- ト, MAN,いどうする,,一見はなはだゆるゆると移動してゐるが、
- ト, MAN,うえつける,,青々と植ゑつけられた夏の稻田を思ひ浮かべて居るでせう。
- ト, MAN,うかびあがる,,青銅の胸像がくつきりと浮かび上つて見える。
- ト, MAN,うごく,,風とは反對に波が沖へ沖へと動いて、
- ト, MAN,おいしげる,,大木がこんもりと生ひしげり、
- ト, MAN,おいまくる,,北風ヲドシドシト追ヒマクリマス。
- ト, MAN,おしよせる,,車の波が刻々と押寄せる。
- ト, MAN,おちつく,,此の塔ぐらゐ、どつしりと落着いて見えるものはない。
- ト, MAN,おちる,,ぼたり、ぼたりと落ちて、
- ト, MAN,おもふ,,麓の乃木神社に詣でてつくづくと忠臣の心を思ふ。
- ト, MAN,およぐ,,いういうと泳いで、
- ト, MAN,かいけつする,,次から次へと解決されるやうになつた。
- ト, MAN,かえる:帰,,自分の家へいそいそと歸つて來たつばめを迎へる人の心は、
- ト, MAN,かがやく,,きらきらと銀色にかゞやいて居ます。
- ト, MAN,かけだす,韻,ばらばらとかけ出し、
- ト, MAN,かけまわる,,アチラコチラトカケマハッテ、

- ト, MAN, かさなる,, 數十の檣は層々と重なり、
- ト, MAN, かじる, 会, ネズミサンニガリガリトカジラレテハ、
- ト, MAN, かすむ, 韻, ほんのりと空もかすんで、
- ト, MAN, かたまる,, もくもくと大きくかたまつたり、
- ト, MAN, かむ: 嚙, 韻, さくさくと白菜をかむ。
- ト, MAN, かる: 刈,, ざくざくと、稲を刈る音が聞える。
- ト, MAN, かわく, 文, 表面のみかさかさ乾ける地面より、
- ト, MAN, かんがえる,, いろいろと考へ續けました。
- ト, MAN, かんしんする,, つくづくと感心させられる。
- ト, MAN, かんずる,, さうしたものにしみじみと春の幸福を感じる。
- ト, MAN, きこえる, 文韻, ほろほろと聞ゆる笛の音いづこ。
- ト, MAN, きざむ,, 一糎、二糎ときざむやうに、
- ト, MAN, きぜわしい,, かちかちと氣ぜはしいのは置時計で、
- ト, MAN, きる: 切,, をのでこん、こん、と木をきりはじめました。
- ト, MAN, くりひろげる,, 北京はたゞ廣々と、平にくりひろげられた市街だと感ずる。
- ト, MAN, くる: 來,, 樂長がつかつかと私のそばへ來た。
- ト, MAN, くわえる: 加,, 師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、
- ト, MAN, こうかいする: 航海, 会, 大洋を西へ西へと航海して、
- ト, MAN, こうこうする: 航行,, 増水期には一萬トン級の汽船が樂々と航行するのである。
- ト, MAN, こめる, 文韻, しらじらと、朝霧野山をこめて、
- ト, MAN, こらす: 凝,, いろいろと工夫をこらしました。
- ト, MAN, ころがる,, コロコロトコロガツテ來テ、
- ト, MAN, さえる,, たゞ晴れた夜空に星がきらきらときえ、銀河があざやかに中天にかゝつてゐる。
- ト, MAN, さかのぼる,, 廣田川をだんだんとさかのぼつて、
- ト, MAN, さがる, 手, まことに神々しくて、しぜんとあたまが下りました。
- ト, MAN, さきにおう,, らんまん咲きほふ山櫻の花は、

- ト, MAN, ささやく, 韻, さやさやと喜をさゝやき、
- ト, MAN, しがみつく, , しつかりとそれにしがみつきます。
- ト, MAN, しげる, , 草が青青としげつてみました。
- ト, MAN, しんぐんする, , 一萬五千の精兵が堂々と進軍して来た。
- ト, MAN, すむ: 済, , 一番、二番、三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、
- ト, MAN, する, , 一番しよんぼりとして、さびしさうに見えた。
- ト, MAN, する, , 天井の高い、廣々とした室は、
- ト, MAN, する, , 長いゆつたりとしたゆれ方と、
- ト, MAN, する, , 醫者は、ぼう然としてほとんど手の下しやうも知らぬ。
- ト, MAN, する, , 顔はふつくらとしてゐるが、
- ト, MAN, する, , 針葉樹林の海は、たゞ黙々として聲なく續き、
- ト, MAN, する, , 市街は井然として道幅が廣く、
- ト, MAN, する, , たゞうつとりとして感に打たれてゐる。
- ト, MAN, する, , さうして其の夜はまんじりともせず机に向かつて、
- ト, MAN, する, , 孔子は平然として答へた。
- ト, MAN, する, , 其の業は遅々として進まぬ。
- ト, MAN, する, , 尾をお切りになつた時、かちつと音がして、
- ト, MAN, たおれる, , 味方は、ばたばたとたふれた。
- ト, MAN, たたく, , トントンとたゞいてゐる。
- ト, MAN, たちさる, , いういと其の場を立去つた義光は、
- ト, MAN, つづく, , 山がうねうねとつぶいてみました。
- ト, MAN, てらす, , 午後の日がかんかんと照らしてゐる。
- ト, MAN, とりかこむ, , 元春・隆景の率ゐる七萬の大軍にひしひしと取圍まれた。
- ト, MAN, ながれる, , くづれた雪は、〈略〉、ちよろちよると流れて行く。
- ト, MAN, なく: 泣, , しくしくと泣きながら、
- ト, MAN, なくなる, , 阿里山蕃には首取の悪習がふつつりとなくなつた。
- ト, MAN, ならぶ, , 日用品のありとあらゆるものが雑然と並んでゐる。

ト, MAN,ぬける,,秋野君がすたすと急ぎ足に其の前を抜けて、
 ト, MAN,のびる,,ひよろひよるとのびたポプラの下の一けん家、
 ト, MAN,のぼる,,もう太陽はうらうらとのぼつてゐる。
 ト, MAN,のりうつる,,恐しい海賊がどやどやと乗移つて来て、
 ト, MAN,はたらく,,營々と働く彼等に、
 ト, MAN,はる,,田に水がなみなみと張られる。
 ト, MAN,ひかる,,きらきらと光ってゐました。
 ト, MAN,ひびく,,正午を知らせる町のサイレンが長長と響いた。
 ト, MAN,ふる:降,会,雨よ、瀧つ瀬と降れ。
 ト, MAN,まく:巻,,輪ゴムできりきりと巻いて、
 ト, MAN,めぐりあるく,文,窯の周圍をぐるぐると廻り歩きぬ。
 ト, MAN,やってくる,,ぐんぐんこっちへやって來ました。
 ト, MAN,よこたえる,,黒々と大きな體を横たへてゐる船のかげで、
 ト, MAN,よせる,,ひたひたと寄せる潮の静かな音、
 ト, MAN,わたる,,賊が我先にと渡つた。
 ト, MAN,わらう,,思はず顔を見合はせてからからと笑つた。

(4) 〈役割〉: ROL

役割を表わす。比喩的に用いられることもあり、「として」と置き換えられる。

【実例】

ト, ROL,いでたつ,文韻,今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と出
 立つわれは

ト, ROL,たのむ,,續いて杖柱とも頼み給ふ御兄孝明天皇が崩御しました。

(5) 〈内容規定〉: COT

発話の内容等を示すのに用いる。いわゆる引用の「と」であり、トの用法の中で最も多いものである。他の助詞の場合にもあるが、述語が省かれることが少からずある。「〈略〉。」と、兄の声。」という例文は「声にする」の省略形と

みなした。また、表層上でトを受ける動詞がト格支配の用言でない場合には、トの後に「いう」「思う」等の動詞が省略されたものとみなした。

例：何ほどの事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、
名詞を受ける「とする」は概ね「にする」に置き換えられるので、原則的には〈終状態〉とするが、「と仮定する」「とみなす」等の意味を持つ場合には〈内容規定〉とする。

「とは」は現在〈内容規定〉と〈提題〉に別れている。「千二百三十九とは、すばらしい得票だな。」というのは〈内容規定〉で、「地紙とは此の紙のこと。」というのは〈提題〉となっている。

【実例】

- ト, COT, (いう), 文, しばしば行啓あらせられたりとぞ。
ト, COT, あいさつする,, 「〈略〉。」とあいさつした。
ト, COT, あおぐ: 仰,, 武人の手本と仰がれるやうになつたのは、
ト, COT, あざける, 文, 人は此の有様を見て、たはけとあざけり、
ト, COT, あせる: 焦,, 拂ひのけようとあせつた。
ト, COT, あやまる: 謝,, ジブンガワルカッタトアヤマリマシタ。
ト, COT, ある,, もらつた名刺には金俊泰とあつた。
ト, COT, いいだす,, お供物のおだんごをたべたいと言出した。
ト, COT, いう,, 大阪は俗に煙の都といはれ、
ト, COT, いう, 文, 信昌、將士を集めていはく、「〈略〉。」と。
ト, COT, いのる,, 御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。
ト, COT, おしえる,, 「〈略〉。」と教へてくれました。
ト, COT, おもえる,, 自分の船は止つてゐるとしか思へない。
ト, COT, かぎる,, 其の他思ひがけぬ災難にあはぬとも限りません。
ト, COT, かく: 書,, 「クラゲ」といふのを「久羅下」と書いた。
ト, COT, かくごする, 文, 今は逃れぬところと覺悟したりけん、
ト, COT, きく: 聞, 文韻, 波を子守の歌と聞き、千里寄せくる海の氣を吸ひてわらべとなりけり。
ト, COT, きていする,, 民法に「〈略〉。」と規定してあるが、

- ト, COT, きまる,, 昔カラ、船トイヘバ、皆水ノ上ヲ走ルモノトキマツテ居
タガ、
- ト, COT, ころをくたく、文、如何にしてかこれを除かんものと心を碎く折
から、
- ト, COT, しょうする：称、文、世に熊野三山と稱せられ、
- ト, COT, する,, それか死の世界であると知つても、
- ト, COT, する,, 孔子の理想とする「仁」についても、
- ト, COT, する,, 例へば甲の持つてゐる家が焼けたとする。
- ト, COT, たずねる,, 「〈略〉。」と、やさしく尋ねる。
- ト, COT, たたえる：称,, 後世歌聖とたゞへられた。
- ト, COT, なく：鳴,, 「〈略〉。」と、せみが鳴き出した。
- ト, COT, みえる,, 小川の水は銀の帯とも見え、
- ト, COT, みえる, 会, 誰かいたづらをしたとみえて、
- ト, COT, みる,, 中國・西國の大藩を目の上のこぶと見た家康が、
- ト, COT, ゆびさす,, 「〈略〉。」と指さす彼方、
- ト, COT, よぶ,, 空一ぱいに薄黒くおほふもので、亂雲と呼ばれてゐます。
- ト, COT, わかる,, 少しはなれた川向かふの町だと、すぐわかつた。

(6) 〈提題〉：TOP

まず主題を取り立てて提示するもので、「とは」の形で用いる。ただし、「とは」がすべて〈提題〉とは限らないので、注意を要する。

【実例】

- ト, TOP, だ,, 「もの言ふおもちや」とは、言ふまでもなく電話のことです。
- ト, TOP, だ,, 照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月とは、かういふ雲
のかゝつた場合ですが、
- ト, TOP, だ,, 東交民巷とは各國公館のある所で、
- ト, TOP, だ,, 「萬葉」とは「萬世」の意で、

(7) 〈比較の基準〉：COR

ト格の場合は述語が「同じ」「違う」等、少数の語に限定される。これを〈比較の基準〉とするか〈相手1〉とするかは問題である。「比べる」「比較する」のときは〈相手1〉で「くらべものにならない」「比較にならない」のときは〈比較の基準〉だということに矛盾があるようにも思えるが、「くらべる」は行為、「くらべものにならない」は性状記述ということで別のものとする。比較の基準を示す助詞はト・ニ・ヨリ・ヲなどであるが、そのうち最も典型的なヨリが性状記述にしか用いられないからである。ただし、どの辺までをこれに含めるかはむずかしいところである。同一人の作業の結果として、「～と似る」が〈比較の基準〉、「～に似る」は〈相手1〉という不統一を生じていた。いずれも誤りではないので、複数の深層格を付けてよければ両方付与するところであるが、一つだけという方針なので、〈相手1〉に統一することにした。

【実例】

ト, COR, おないどし, 会, 來年は僕とおない年になるね。

ト, COR, おなじ,, 其の中には太陽より小さいもの、太陽とほぼ同じ大きさのものもあるが、

ト, COR, かわる: 変,, 沿道の景色は、内地とは大分變つてゐる。

ト, COR, ことなる, 文, 筆・鉛筆等、小學生の用ふる物と異なる所なし。

ト, COR, ちがう,, あの色美しい鳥とは全く違つたものでした。

ト, COR, どうぜんだ,, 船は大きな箱の中へはいつたと同然ですが、

ト, COR, どうよう: 同様,, 急に啞になつたと同様である。

ト, COR, ひかくなる, 手, 内地の夕立とは全く比較にならぬ、すさまじいスコール、

(8) 〈随伴〉: ACO

「と共に」「と一緒に」と置き換えることのできるもの。任意格に属するが、どの動詞にも現れうるわけではなく、〈動作主〉の共同行為者であり、有意志体である点が制限となっている。「結婚する」「協議する」のように、相手を不可欠の要素として持つ動詞においては、トが〈随伴〉ではなく〈相手1〉(PAR)となる。主役ではないが、事象としては〈動作主〉といっても差支えないものである。

【実例】

- ト, ACO, いく,, ねえさんと動物園へ行きました。
- ト, ACO, さんぽする,, 夕方、父と町を散歩した時、
- ト, ACO, すわる,, 僕は文治とへさきにすわつて、
- ト, ACO, つかえる：仕,, それから頼朝の御殿へ上つて、うばと二人でお仕へしたいと願ひ出ました。
- ト, ACO, つく：突, 文韻, 子供らと手まりつきつムこの里に遊ぶ春日はくれずともよし
- ト, ACO, でる,, 月のさえた夜、友人と二人町へ散歩に出て、
- ト, ACO, ながめる,, 六七人の官女たちと、お庭の雪を眺めていらつしやいました。
- ト, ACO, のる,, ニイサント電車ニ乗りマシタ。

(9) 〈度合〉：DEG

数詞とともに用いられるが、同時に打消を伴うことが多い。「二度とつかまるなよ。」「もう百米とは離れてゐない。」などがその例である。むろん肯定形もある。「今日は一だんと冷気が加り、」などがその例である。

【実例】

- ト, DEG, する, 会, 過も二度とはしない男でございましたが、
- ト, DEG, ない,, 日本に二つとない美しい塔がこれである。
- ト, DEG, のれる,, 最頂は、十人とは乗れない程狭かつた。

(10) 〈陳述〉：PRE

「佛の御言葉とあれば聞かねばならぬ。」のように助動詞「たり」の原形と思える例があるので、例数が少ないながら立てておく。

4.6 カラ格

「から」には「まで」と同じく副助詞的用法がある。行為の主体や対象の順序を指定する「から」であり、これらは格助詞「から」の例として適当でない

ので除外する。

カラ, AGT, いう, 会, 姉のゴナリルから申せ。

カラ, AGT, はじめる, 会, ゆき子さんからはじめてください。

(1) 〈動作主〉: AGT

例数が少なくははっきり言えないが、対人関係を示すものが多いようである。受動態において「から」をとる場合といくらか重なる部分があるようだ。

【実例】

カラ, AGT, おしよせる,, 敵の攻寄せるのを待ちきれず、こつちから押寄せた。

カラ, AGT, たずねる, 会, この男に出あひますと、向かふから、『〈略〉。』と尋ねるのでございます。

カラ, AGT, やる, 会, 人夫には、役所から手當をつかはす。

(2) 〈与え手〉: ORI

述語は概ねやりもらいの動詞であり、カラ格名詞は主として有意志体である。

【実例】

カラ, ORI, ある,, 義仲からはすぐ返事があつて、

カラ, ORI, うける, 手, 班長殿から、明日の事について注意を受けます。

カラ, ORI, かかる,, 當直將校から威勢のよい號令がかかる。

カラ, ORI, きく: 聞,, にいさんからおもしろい説明を聞いた。

カラ, ORI, くる: 来,, 一郎さんから、はがきが来た。

カラ, ORI, くる: 来,, 工の家へ河成から使が来て、

カラ, ORI, ひったくる,, 其の手から、ほとんどひったくるやうにして受取つた號外は、

カラ, ORI, まなぶ,, 我が國は、もと支那から數學を學んだ。

カラ, ORI, もらう, 会, あなたから、いはれのない金をもらはうとは思ひません。

カラ, ORI, もらう, 会, 皇后陛下から賜はつた義足をつけたが、

(3) 〈相手 1〉: P A R

「離れる」の2例のみ。「～から離れる」は通常〈場所-始点〉になるが、人との関係なので、別立てにした。「～と／に別れる」と同じ扱いである。

【実例】

カラ, PAR, はなれる, , みんなからはなれて、

カラ, PAR, はなれる, , 母船から離れた我が捕鯨船は、

(4) 〈時〉: T I M

「てから」の形で現れることが多い。「～した後」の意で、動作に継続性のない点が〈時-始点〉と異なる。その他に「折から」「後から」など、「に」や「で」と置き換えられるものがある。

【実例】

カラ, TIM, あおぎみる, , 最敬禮をしてから仰ぎ見ますと、

カラ, TIM, いう, , 学校の門を出てから、正雄君が僕に言つた。

カラ, TIM, いたる, 文, 如何にしてかこれを除かんものと心を碎く折から、
一日暴風至り、

カラ, TIM, くる: 来, , 父も後から来たので、

カラ, TIM, しぬ, , 心ゆくばかり笛を吹いてから死にたいと思つた。

カラ, TIM, みる, , スッカリデキテカラ、オヂイサンニミテイタダキマスト、

(5) 〈時-始点〉: T F R

時間的出发点または起算点。係り先が名詞になることも多い。その場合には、述語欄に「？」が入れてある。そういう例は表3の統計には入っていない。なお、〈時-始点〉をとる用言には継続動詞や状態性述語が多いが、多少の例外はある。

【実例】

カラ, TFR, ?, , それから数日後の事である。

カラ, TFR, あそぶ,, それから、夕方まで、弟と一しよに遊んだ。

カラ, TFR, ある,, 自分もあゝいふ風に飛んでみたいと思ひ、いろいろ工夫をこらした人は、かなり古くからあつたやうです。

カラ, TFR, いいつたえる,, 武門の家大伴氏が上代から言傳へたものとして、カラ, TFR, うごく,, あさからばんまで、「かっちん、かっちん。」とうごいてゐます。

カラ, TFR, うたう,, 「ブッポウソウ。」と鳴く鳥のことは、千年の昔から、我が國の詩や歌にうたはれてゐますが、

カラ, TFR, おもう,, 僕は、此の間から星のことを知りたいと思つて、

カラ, TFR, かける,, 九月の末から十月の初にかけて、

カラ, TFR, きこえる, 韻, どんひやらゝ、朝から聞える笛たいこ。

カラ, TFR, くる : 来, 手, 日本人が早くから来て農業を営んだ所で、

カラ, TFR, さかんだ,, 大阪は、又、昔から商業の盛な所です。

カラ, TFR, しんらいする,, 孔子はかねてから深く信頼してゐた。

カラ, TFR, すきだ,, 若い頃から讀書が好きで、

カラ, TFR, すぎる,, それから又幾年か過ぎた。

カラ, TFR, だ,, けふから夏休だ。

カラ, TFR, つづける, 手, あれからなほ航海を續けて、

カラ, TFR, でかける,, 今日の日曜日なので、僕は朝から圖書館へ出掛けた。

カラ, TFR, ではいりする,, 其の日は、朝から、大勢の人が出はいりました。

カラ, TFR, ない,, それであて、昔から月程やさしい、平和な氣持を與へてくれるものではありません。

カラ, TFR, ならう : 習, 会, 明日からは、きつと、一生けんめいにお經を習つて、

カラ, TFR, なる : 成, 会, 今日から、そなたの所で世話にならう。

カラ, TFR, なる : 成,, 放牧に出してから、北斗の體はめきめき丈夫になりました。

カラ, TFR, はげしい,, 朝から大分風が烈しいので、

カラ, TFR, はじまる, 手, あしたから、學校が始りますが、
 カラ, TFR, まつ, , 一週間も前から、毎日々々待つてみた命令だったので、
 カラ, TFR, みせる, , さうして其の頃から、雲の色どりが何ともいへぬ美し
 さを見せる。
 カラ, TFR, やとう, , 八歳の時から人にやとはれて、
 カラ, TFR, りこうだ, , 子供の時から非常にりこうでした。
 カラ, TFR, わすれる, , それから、僕たちは何もかも忘れて滑つた。

(6) 〈場所〉：SPA

1例のみ。整理したいと思ったが、「で」と置換可能であり、他の格は与えにくい。ただ、「真ん中から切れる {折れる}」など固定した用法に限られるような気がする。他の資料を調べる必要がある。

【実例】

カラ, SPA, もえきれる, , 橋は、まん中からもえ切れて、

(7) 〈場所—始点〉：SFR

移動もしくは起算の始点または空間的な範囲を指示する場合の始点を指す。範囲を示す場合はマデと対になることが多いが、係り先の用言が指定できず、名詞句になったり、名詞にかかったりする場合が多い。その種のものは、「の」が付かないために当初用例削除の対象にならなかったが、最終的には表3の統計から除いた。

例：カラ, SFR, ?, , どこからどこまでが港内か見きはめもつきません。

カラ, SFR, うえ, , 雪の積つた山々の頂から上の空は、

【実例】

[移動の起点]

カラ, SFR, あらわれる, , どこからかあやしい船が現れて、
 カラ, SFR, うつる：移, , 四日市を過ぎて、平野から次第に山地に移る。
 カラ, SFR, おしよせる, , 賊が、四方からこれを目かけて押寄せると、
 カラ, SFR, おちる, , 下枝の紅葉から紅のしづくでも落ちて、

カラ, SFR,かえる：帰,,僕が學校から歸ると、
 カラ, SFR,くる：来,,太陽から來る光や熱を調節するものがないから、
 カラ, SFR,しみこむ,,厚い飛行服の上から寒さがしみ込む。
 カラ, SFR,たちのぼる,,鞍山の製鋼所から茶色の煙が立ちのぼり、
 カラ, SFR,だす,,石のらうから唐絲を出してやりました。
 カラ, SFR,でる,,星も大體東から出て西へはいるのです。
 カラ, SFR,とる,,弟子屈から道を北へ取つて、
 カラ, SFR,はなす：放,,寸時もこれを身邊からはなさなかつた。
 カラ, SFR,ふきあげる,,下から風が強く吹上げる。
 カラ, SFR,むかう,,再びかへして二條の離宮から北西へ向かへば、
 カラ, SFR,わきでる,,箱の底に仕掛けてある水道から水が湧出て、

[分岐点・起算点]

カラ, SFR,ある,,其の邊から、所々に殘雪があつた。
 カラ, SFR,うめる,手,香港は、美しい建物を以て麓から中腹までぎつしりと
 埋められた島山でした。
 カラ, SFR,つらなる,,天の一方から他方へ幾條か連なつたりすることがあり
 ます。
 カラ, SFR,つるす,,天井からつるしてある此の大きなランプが、
 カラ, SFR,はなれる,,火元からは大分はなれて居たが、
 カラ, SFR,むす：生,会,どの島も水際からこげがむし、
 カラ, SFR,わかれる,,こゝからチ、ハルへ線が分れる。

[立脚点]

カラ, SFR,いう,,にいさんが、外から窓ごしにおつしやつたので、
 カラ, SFR,さしずする,,見張から指圖する聲は次第にしげくなり、
 カラ, SFR,ながめる,,最上階から眺めると、
 カラ, SFR,のぼす,,救の手はどこからもぼされなかつた。

(8) 〈場所—経過〉：S T H

出入りもしくは出し入れする場合、または見通す場合の経由点。

【実例】

- カラ,STH,いれる,,萬壽は格子の間から手を入れて、
- カラ,STH,じょうりくする,,西岸から上陸すると、
- カラ,STH,たどる,,宮の御後から急ぎ足に道をたどつて來たが、
- カラ,STH,のぞく:視,,時にぶなの密林が、梢の間から青空をのぞかせたり、
- カラ,STH,のぼる,,外観五層の大天守は、内から登ると七階であつた。
- カラ,STH,はいる,,何心なく南側の戸口からはいらうとした。
- カラ,STH,みえる,,木の間から、私たちの學校や役場が、小さく見えました。
- カラ,STH,みる,,ガラス戸から外を見ると、
- カラ,STH,もれる,,雲の端々が白く見えて、其の間から日光がもれたりします。

(9) <始状態> : SOU

変化の起点。意味的には<終状態>(GOA)と対をなすものであるが、頻度はずっと低い。

【実例】

- カラ,SOU,ふえる,,千米から千五百、二千と高度がふえる。
- カラ,SOU,ぼかしあげる,,夕空を染めて、空は赤から金に、金からうす青に、ぼかし上げたやう。

(10) <原因・理由> : CAU

原因または理由を示す。任意格であって、動詞との結びつきは弱い。

【実例】

- カラ,CAU,おもいたつ,,それから歴史編纂を思ひ立ち、
- カラ,CAU,おもいつく,,リ、エンタールも、同じやうに鳥から思ひついて、翼に似た物を作りました。
- カラ,CAU,とりかこむ,,孔子の顔が陽虎に似てゐたところから、匡人は孔

子を取囲んだのである。

(11) 〈範囲規定〉：RAN

行為・現象の発生源の範囲および影響の及ぶ範囲。

【実例】

カラ, RAN, いう,, お供の中から大聲に、「〈略〉。」と言ふ者がある。

カラ, RAN, くつがえす,, 武家政治を土臺からくつがへして、

カラ, RAN, せていする：選定,, 又人民中から選定された十二人の陪審員が、

(12) 〈比較の基準〉：COR

ここでは1例のみだが、無視するわけにはいかない感じである。

【実例】

カラ, COR, おくれる,, モウミンナカラ、スッカリオクレテシマヒマシタ。

(13) 〈観点〉：VIE

判断の根拠や判定者の立場を表す。「に」の場合と異なり、動詞が限定される。

【実例】

カラ, VIE, いう, 会, にぎやかな事からいへば、或は東京一かも知れない。

カラ, VIE, いう, 手, 日本の内地からいへば、遠い所でも何でもありません。

カラ, VIE, かんがえる,, 夏の日熱さから考へてみてもわかるやうに、

カラ, VIE, さっする,, 附近にそれらしい楊村・柳村がないところから察すると、

カラ, VIE, みる, 手, 地圖で見れば狭くて長い紅海も、船から見れば殆ど陸地を見ぬ大洋同然です。

(14) 保留したもの

【実例】

カラ,?,したなめずりする,,「〈略〉。」と言ふそばから、さも食ひしんばうらしく、羅刹は舌なめずりをした。

カラ,?,とぶ,,つばめのやうに空中に舞上つて、二十米から三十米も飛ばれる姿は、

カラ,?,のる,,荷主・炊事夫・舵夫・雑役夫から、村の客まで幾十人がそれに乗つてゐる。

カラ,?,はじまる,,秋は蟲の聲から始る。

◎数としては、マデと呼応するものが多い。

4.7 ヨリ格

最も多くかつ特徴的なのは〈比較の基準〉(COR)であるが、これは比較的判定が容易である。とはいえ、係り先は用言とは限らず、名詞や副詞になる場合もあるし、比較の対象も名詞対名詞とは限らないが、その種のものも数に入れてある。「連用名詞句が用言に係る場合の意味関係」という定義に違反することになるが、これを無視して比較のヨリを考えるのは、片手落ちのように思えるからである。その他はカラと似た傾向があり、それに準じて処理する。〈比較の基準〉以外は文語の例がほとんどである。

(1) 〈与え手〉: ORI

【実例】

ヨリ, ORI, (さしだす), 手, 四月十日 父より さち子どもの

ヨリ, ORI, ある, 文, 我が哨艦信濃丸より、無線電信にて「〈略〉。」との報告あり。

ヨリ, ORI, うける, 文, 續いて我が駆逐隊より二回の水雷攻撃を受けて、

(2) 〈時〉: TIM

【実例】

ヨリ, TIM, おきる, 文, 此の度こそはと、夜半より起きて橋上に行けば、

ヨリ, TIM, よそくする, 文, 会, 事の成否は今より豫測すべからず、

(3) 〈時—始点〉：TFR

【実例】

- ヨリ, TFR, ?, 文会, 今日より五日目の朝早く來れ。
- ヨリ, TFR, おおい, 文, 下關海峡を出入する船舶の航路に接するを以て、古よりこゝに難破するものすこぶる多く、
- ヨリ, TFR, かける, 文, 秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、
- ヨリ, TFR, かぞえる, 文, 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、
- ヨリ, TFR, さだめる, 文, 我が海軍は、初より敵を近海に迎へ撃つのを定め、
- ヨリ, TFR, ねっちゅうする, 文, 其の日より、喜三右衛門は、赤色の麩附に熱中し始めたり。

(4) 〈場所—始点〉：SFR

【実例】

- ヨリ, SFR, あらわれでる, 文, 黒き影は城の一方より現れ出で、
- ヨリ, SFR, いく, 文, 長四郎、こなたより屋根傳ひに行きて、
- ヨリ, SFR, いたる, 文, ノテトよりナニラーに至る間、
- ヨリ, SFR, うちかける：撃掛, 文, 敵はこれを見て、三方より盛に大砲を打ちかく。
- ヨリ, SFR, おちる, 文, 荒尾は馬より眞逆さまにどうと落ちて、
- ヨリ, SFR, かぞえる, 文, 東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。
- ヨリ, SFR, こぎだす, 文, 美しくかざりたる船一さう、平家の方より漕出す。
- ヨリ, SFR, とりだす, 文, 妻は鏡箱より小さき一包を取出して、
- ヨリ, SFR, むかう, 文, 那智驛より、自動車を驅つて那智山に向かふ。

(5) 〈場所—経過〉：STH

【実例】

- ヨリ,STH,したがう,文,後より従ひ行けども、
 ヨリ,STH,でる,文,ひそかに三千餘騎を引連れ、後より山を傳ひて、ひよ
 どり越に出づ。

(6) <原因・理由> : CAU

【実例】

- ヨリ,CAU,しる,文韻,さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも春を
 知るらむ

(7) <比較の基準> : COR

【実例】

- ヨリ,COR,えらい,会,セカイデュウニハ、私ヨリモットエライ人がキマス
 カラ。
 ヨリ,COR,おおきい,,いわし雲より、ぐつと大きな塊になつて群生する白
 い雲があります。
 ヨリ,COR,おき:沖,会,昨夜より少し沖へ出たな。
 ヨリ,COR,かたい,文韻,幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。
 ヨリ,COR,くろい,,にいさんは、前よりもずっと色が黒くなって、
 ヨリ,COR,くわえる:加,,一音は一音より妙を加へ神に入つて、
 ヨリ,COR,さき:先,,二ハトリヨリ先ニ、スマメガ逃ゲテ行キマス。
 ヨリ,COR,しゅくしょうする,,二層は初層より、三層は二層より著しく縮
 小して、
 ヨリ,COR,すきだ,,小學校に通ふ頃から、何よりも機械が大好きでした。
 ヨリ,COR,たいせつだ,会,私自身の命よりも、父上を大切と存じます。
 ヨリ,COR,たかい,,今では、僕よりもずっと背が高いが、
 ヨリ,COR,とおい,,太陽が月より非常に遠い所にあるからである。
 ヨリ,COR,とくだ,,弟は、理くつよりも、實際の物を作るのが得意でし
 た。

- ヨリ, COR, ひきしぼる, 文, 十三束三伏、前よりもなほ引きしぼりて、
- ヨリ, COR, ひくい, , 頭の眞上まで行く途中、眞中邊より少し低い所に、
- ヨリ, COR, ほうねんだ, 会, 今年は、思つたより豊年だつたから、
- ヨリ, COR, まえ, , それより一年ばかり前の事です。
- ヨリ, COR, まず, 文, あまつさへ多額の費用を要する事とて、彼は何よりも先づ其の調達に奔走せざるべからざりき。
- ヨリ, COR, みじかい, , かげの方が其の物より短くなり、
- ヨリ, COR, めざましい, , 古都としてよりも、現代都市として最近の活動にめざましいものがある。
- ヨリ, COR, よい, , 海といふより平原といつた方がよいかも知れません。
- ヨリ, COR, よろしい, 会, 刀は短いより長い方がよろしい。

4.8 へ格

全体にニ格に似たところがあるが、〈場所-終点〉(STO) が圧倒的に多く、絶対数において「に」を上回る。深層格の種類が少ないのは単に用例数が少ないせいばかりではない。〈原因・理由〉(CAU)、〈目的〉(PUR)、〈方式〉(MAN)、〈対象〉(OBJ) のように、ニには多数あってへには皆無というものもある。〈終状態〉(GOA) のように1例しかないものもある。ただし存在するものについては、ニに準ずる。他の格助詞と異なるところは、「へと」の形で用いられるものがあるということと、連体修飾形「への」が「にの」の機能を代行していることである。以下に用例のみ挙げる。

(1) 〈受け手〉: REC

【実例】

- へ, REC, (いう), 手, 年 月 日 木村正一 四年生の皆様へ
- へ, REC, おそれいる, 候手, 朝敵と共に生命を捨て候事は、朝廷へ恐れ入り候事と誠に心痛致し居候。
- へ, REC, かける: 掛, , 近所の家々へ、めいわくをかけることになる。
- へ, REC, こう, , 朝廷へ寛大の御處置を請ひ奉る歎願書をたづさへた關東方の

使者は、

- へ、REC,さんばいする,,養老神社へ参拜する。
- へ、REC,しらせる,,早く此の事を大石橋守備隊へ知らせようとしたが、
- へ、REC,ほうのうする,,鶴岡の八幡宮へ舞を奉納する事になつて、
- へ、REC,もうしでる,,旅人は思案に暮れて、とうとう役所へ申し出た。
- へ、REC,もらう,会,こちらへいたゞきませう。
- へ、REC,やる,会,とけいやへなほしにやったのです。
- へ、REC,わびる,,切に天朝へおわびのお取成しを願ひ、

(2) 〈時〉：T I M

【実例】

- へ、TIM,いいだす,,困つて居る所へ、御殿に仕へて居る萬壽がよからうと申し出た者がありました。
- へ、TIM,くる：来,会,ひきがへる、よい所へ来た。
- へ、TIM,とおる,,ソコへ、トノサマガ、オトホリニナッテ、
- へ、TIM,はいる,会,北八、お前先へはいれ。
- へ、TIM,ふりそそぐ,,さうでなくても二三分咲かけた所へ、よく意地わるの雨が降りそゞぐ。

(3) 〈場所〉：S P A

【実例】

- へ、SPA,うえる：植,,犬ノオハカラツクッテ、ソコへ、小サナ松ヲ、一ポンウエマシタ。
 - へ、SPA,たおれる,,あすこへ二ひき、こゝへ三ひきとごろごろたふれてしまひました。
 - へ、SPA,つくる,,だから、あそこへ運河を作らうといふことは、
 - へ、SPA,のせる,,手のひらへのせてかへりました。
- ◎「てのひらへのせる」が〈場所〉で、「いわしを船へあげる」が〈場所一終点〉になっている。この辺が〈場所〉と〈場所一終点〉の境界に近いところで

ある。ニ格においても同様の扱いをしているが、「乗せる」場所というのは道具のようにも解しうる。

(4) 〈場所—終点〉：STO

【実例】

- へ、STO、あげる、, 網からいわしをどンドン僕等の船へ上げる。
- へ、STO、あつまる、会、こゝで支度をして、學校園へお集りなさい。
- へ、STO、あんないする、, 命を御殿の中へ御案内なさいました。
- へ、STO、いく、手、遠足で旅順へ行きました。
- へ、STO、いそぐ、, 赤坂離宮へと急いだ。
- へ、STO、いれる、, 磁石ヲ釘箱ノ中へ入レテ、
- へ、STO、うつる：移、, 深い所からだんだん浅い所へ移つて、
- へ、STO、おくる：送、, 鹿介は西へ送られた。
- へ、STO、おちる、, まん中からもえ切れて、谷底へどうと落ちた。
- へ、STO、かえる：帰、, 此の子は新京へ母と歸るところで、
- へ、STO、かけつける、, 押取刀で其の場へかけつけたが、
- へ、STO、かよう、手、アメリカの小學校と日本語學校と、兩方へ通つてみます。
- へ、STO、きえる、, 「かあん」と長く尾を引いて廣野の彼方へ消えて行つた。
- へ、STO、きょくせつする、, 坂道は必ず右か左へ曲折する。
- へ、STO、くずれる、, むくむく盛上つたと思ふと、四方へくづれる。
- へ、STO、さしかかる、, 船が沖合へさしかると、
- へ、STO、さそう、, 軽く曲折しながら、人を奥へ奥へとさそつて止まない。
- へ、STO、しんぐんする：進軍、, 大和へ御進軍になつた神武天皇は、
- へ、STO、そそぐ、, さうして、其の上へ油を注がせた。
- へ、STO、たつ：発、手、それから京都へ立ちます。
- へ、STO、たれさがる、, 上から下へたれ下るのが柳である。
- へ、STO、つく：着、会、きれいな御殿へお着きになります。
- へ、STO、つたえる、, 我が國へは、アジャ大陸から青銅器を作ることが傳へ

- られ、
- へ、STO、つっこむ、会、ソレヲ、砂ノ中へツツコンデゴラン。
- へ、STO、つらなる、天の一方から他方へ幾條か連なつたりすることがあります。
- へ、STO、でかける、僕は朝から圖書館へ出掛けた。
- へ、STO、とおす、オデイサンヲオザシキヘトホシマシタ。
- へ、STO、とっしんする、雲のやうに山手へ突進して來た水煙の外は、
- へ、STO、とびのく、我を忘れて後へ飛びのいた。
- へ、STO、どうようする、風が強いので機は上へ下へ動揺します。
- へ、STO、ながれる、白い煙が後へ流れてゐる。
- へ、STO、のぼる、土佐の國から京都へ上らうとして、
- へ、STO、はいだす、今日こそと穴から地上へはひ出します。
- へ、STO、はいる、星も大體東から出て西へはいるのです。
- へ、STO、はこぶ、砂山の上へ機を運んで、
- へ、STO、ひく：退、文、今は先へも進まれず、後へひかんやうもなし。
- へ、STO、ひっぱる、むりに旅人を役所へ引つぱつて行つた。
- へ、STO、まがる、船は軽く左方へ曲り、
- へ、STO、みまう、会、父が病床へお見舞申すと言へ。
- へ、STO、もぐる、敵が近い時ニハ、水ノ中へモグツテ、
- へ、STO、もどる、私は自分の部屋へもどつた。
- へ、STO、やってくる、汽車が白い煙をはいて、こちらへやつて來ます。
- へ、STO、よる：寄、一人の大原女が彌次郎のそばへ寄つて來て、
- へ、STO、わかるる：分、こゝからチ、ハルへ線が分れる。

(5) 〈終状態〉：GOA

【実例】

- へ、GOA、めぐりうつる、手、航海の印象は、まるで走馬燈の畫のやうに、それからそれへと廻り移つて、

4.9 マデ格

「まで」は通常副助詞とされている。また実際にそういう用法もあるが、格助詞「から」「より」と呼応するものや、時—終点、場所—終点の意味で用いられるものは、格助詞と解すべきであろうと思い、調査対象に含める。

(1) 〈時—終点〉：TTO

【実例】

マデ, TTO, あずかる, 会, コンド來テクダサル時マデ、オヂイサンノ右ノホ
ホニアルコブヲ、アヅカッテオキマセウ。

マデ, TTO, ある, 会, 昨日の夕方までは、確にございました。

マデ, TTO, いる,, これまでうちに居た牛は、

マデ, TTO, かたる, 文会, 何とて此の金のあることを今日まで我に語らざり
しぞ。

マデ, TTO, かなしそうだ,, 今まで悲しさうだつた雪舟の顔は、

マデ, TTO, する, 会, わたしは、今まで知らなかつた。

マデ, TTO, つつむ,, 今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壮大な姿が、

マデ, TTO, つづく, 手, 此の沙漠は翌日まで續きました。

マデ, TTO, ない,, 今まで見たことも、聞いたこともない、大きな舟でした。

マデ, TTO, にぎわり, 韻, 夜までにぎはふ宮の森。

マデ, TTO, じる: 煮,, 薬品でどろどろになるまで煮、それを洗つて乾かし、

マデ, TTO, ぶじだ,, 家は最後まで無事であつた。

マデ, TTO, もつ, 会, ととも七日までも持ちませんね。

マデ, TTO, わかる,, 其の聲の主がどんな鳥であるかは、最近まで、はつき
りわかりませんでした。

◎述語欄はすべて用言の終止形で記入してあるが、否定形にしないと意味が通じないものもある。「今まで～しなかつた」という言回しで、述語「かたる」「する」「わかる」を持つ例がそれに該当する。動詞そのものより「ない」が問題なのである。これを肯定形にするとしたら、「まで」の代りに「までに」を

使わなければならない。

(2) 〈場所—終点〉：STO

【実例】

マデ, STO, あがる, 韻, テンマデアガル。

マデ, STO, あるく,, 江戸から大阪まで、〈略〉、両親と共に歩いて行つた。

マデ, STO, うめる, 手, 美しい建物を以て麓から中腹まで、ぎつしりと埋められた島山でした。

マデ, STO, くる：来,, 或小さいみすぼらしい家の前まで来ると、

マデ, STO, つづく, 手, 見渡す限り濁つた水が、殆ど天まで續いてゐるのを船窓から見ました。

(3) 保留したもの

【実例】

マデ, ?, かざる, 手, 貝殻・珊瑚の類から、たいまい・とかげ・極樂鳥の剝製まで、店一ぱいにかざつてあるのが目につきます。

マデ, ?, のる,, 荷主・炊事夫・舵夫・雑役夫から、村の客まで幾十人がそれに乗つてゐる。

◎カラと呼応する例が多い。

4.10 格助詞相当連語

連語の中にも一つの助詞として扱った方が文意を把握するのに便利だと思われるものがある。ここではそのうちの主なもの、あまり異論の出ないようなものを選んで、単一の格助詞と同様に深層格を付与してみた。その結果が表4である。もともとデータ量があまり多くないので、格助詞相当連語の度数も多くない。したがって、異なり語と異なり用法をつくしたとはいえないが、これでもいくらか参考になろう。

表2において助詞相当連語の一部をなすものとして除いた格助詞158例の内訳は次の通りである。

ト	42	格助詞		トトモニ	42
ニ	116	格助詞	62	ニタイシテ	18 (うち連体 6)
				ニトツテ	4
				ニヨツテ	40 (うち連体 11)
		接続助詞	10	ニシタガツテ	5
				ニヨツテ	5
		その他	42		

「その他」というのはすべて「と共に」「と一緒に」の例であり、トトモニと重なるものである。これらはすべて『国定読本用語総覧』においてこまかく分割されていたものであるが、以上のほかに用語総覧で一単位として認められていたものが少しある。格助詞「において」5、「における」3、「について」11、接続助詞「とともに」7である。両方から連用格助詞のみを抽出して深層格を付与した。

[と共に、と一緒に]

すべて〈随伴〉(ACO)に属する。その多くは並列的なものである。つまり「AがBトトモニ」といった場合、Aが〈動作主〉ならBも〈動作主〉、Aが〈対象〉ならBも〈対象〉というように等質のものである場合が多いが、その他に、ある出来事が音や響きを伴う場合、または時の経過に伴って変化が生じる場合にこれが用いられる。

【実例】

[等質のもの：共に〈動作主〉]

トトモニ, ACO, あそぶ, , 夕方まで、弟と一しよに遊んだ。

トトモニ, ACO, あたる, 文, 上村艦隊と共に先頭なる敵の主力に當り、

トトモニ, ACO, きく：聞, , マルタはお晝御飯をたべながら、母と一しよに聞きたいと言ふ。

トトモニ, ACO, すてる, 候手, 私一命は惜しみ申さず候へども、朝敵と共に身命を捨て候事は、

表 4. 格助詞相当連語と深層格の対応

	ト ト モ ニ	ニ オ イ テ	ニ タ イ シ テ	ニ ツ イ テ	ニ ト ッ テ	ニ ヨ ッ テ	計
対象			3				3
受け手			5				5
時		1					1
場所		1					1
場所ー終点			1				1
原因・理由						15	15
手段・道具						9	9
条件						5	5
範囲規定		3	2	11			16
観点					4		4
比較の基準			1				1
随伴	42						42
計	42	5	12	11	4	29	103

[等質のもの：共に〈対象〉]

トトモニ, ACO, きこえる,, 遠くでしきりに鈴の音、それと共に「〈略〉。」といふ呼聲が聞える。

トトモニ, ACO, だ, 手, サイパンやロタの島々と共に、砂糖の生産地で、

トトモニ, ACO, もつ,, 其の幅と共に深さを持つ美観に、

[現象への随伴]

トトモニ, ACO, しんどうする,, ものすごい地ひゞきと共に、東京の何十萬の家は、一度に震動した。

トトモニ, ACO, たかい, 文, 忠義にかをる弓矢のほまれは、年と共にいよいよ高し。

トトモニ, ACO, ほろびる,, つまり神代以来の尊い歴史も文學も、彼の死と共にほろびてしまふかも知れないのであつた。

[において]

〈時〉(TIM)、〈場所〉(SPA)、〈範囲規定〉(RAN)の3種がある。

【実例】

ニオイテ, TIM, いただく,, 新年において我等の抱く心持が、
ニオイテ, SPA, だ, 文会, 飛行場東西両側の格納庫附近においては、敵爆撃機
離陸準備中なるものの如し。
ニオイテ, RAN, おとる, 会, 廣さにおいても、値うちにおいても、決して姉
のに劣りはせぬぞ。

[に対して]

わずか12例の範囲でも、〈対象〉(OBJ)、〈受け手〉(REC)、〈場所—終点〉(STO)、〈範囲規定〉(RAN)、〈比較の基準〉(COR)の5種の用法が見られた。言い換えれば、もっとも意味があいまいで定めにくいということである。発話動詞においては、〈範囲規定〉と〈対象〉が近い関係にある(ニツイテ…ヲ)が、「問いに対して」答える場合は〈対象〉、「人に対して」答える場合は〈受け手〉とし、「小言が出る」のように必須格を持たないものには〈範囲規定〉を用いる。

【実例】

ニタイシテ, OBJ, こたえる,, 「〈略〉。」といふ家人の間に對して、元帥は、
おごそかに、「赤坂離宮へ。」と答へた。
ニタイシテ, OBJ, はんたいする, 文, しかもはからざりき、此の擧に對して反
對する者甚だ多からんとは。
ニタイシテ, REC, かんしゃする,, 此の記章を附けた人々に對しては、いくら
感謝しても感謝しきれないのだと思つた。
ニタイシテ, STO, せまる,, 鯨の逃道に對してイの字なりに迫つて行く。
ニタイシテ, RAN, でる, 会, あなたのお附の者の亂暴に對して、或はお小言

が出たかも知れませぬが。
ニタイシテ、COR、ちがう、,、かうした天下の輿論に對して、たゞ一人荻生徂徠の言ふ所は違つてゐた。

[について]

範囲規定のみである。

【実例】

ニツイテ、RAN、かんがえる、,、どういふ動力を附けるかについても、いろいろ考へましたが、
ニツイテ、RAN、ころろえる、,、裁判について誰でも心得ておくべきことは、
ニツイテ、RAN、こらす：工夫を、,、プロペラについても、いろいろと工夫をこらしました。

[にとって]

すべて観点である。

【実例】

ニトツテ、VIE、ありがたい、,、私たち人類にとつて、〈略〉、太陽ほどありがたいものがあるだらうか。
ニトツテ、VIE、だ、,、實に、我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

[によって]

比較的頻度が高い上に、受身文においては〈動作主〉にもなるなど、連語の中では重要度が高い。〈原因・理由〉(CAU)と〈手段・道具〉(TOO)が多いが、〈条件〉(CON)を示す有力な標識でもある。

【実例】

ニヨツテ、CAU、あつまる、文、東郷司令長官の命により鬱陵島附近に集りて敵を待ちしが、
ニヨツテ、CAU、しょうずる、文、きりをもむが如く廻せば、まさつによりて

火を生ず。

ニヨッテ, CAU, しんがいする, 文, 故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ、

ニヨッテ, CAU, つづく,, 今渡りつゝある長橋によつてのみ、ベニス陸と續いてゐる。

ニヨッテ, TOO, かんがえる,, かうした遺物を調べることによつて、古墳の年代を考へることが出来るのである。

ニヨッテ, TOO, たすける,, 佛の慈悲によつて、助ける道でもあらばといふ下心であつたらう。

ニヨッテ, TOO, つくる, 文, 今も太古の法に従ひ、これによりて火を作るといふ。

ニヨッテ, TOO, つたえる,, 遂に電線によつて、かすかながらも音を傳へたのです。

ニヨッテ, CON, おこなう,, 事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれるが、

ニヨッテ, CON, ちがう,, 其の高さは、見る場所によつて幾分違ひます。

大部分と考える理由は次の通りである。一般に格助詞と係助詞とは意味的には独立のものである。つまり相互依存的でもなければ排他的でもなく、共存しうるものである。実際、三上も指摘するように（文献 48）、ガ・ヲ以外の格においては、ニハ、デハ、トハ、カラハのように、格助詞と係助詞等が接続することがよくあるが、ガとヲについては、ガハ、ヲハ、ガモ等の形はない。ヲについてはヲバ、ヲモ等多少の例外があるものの、ガと係助詞との接続は皆無といってよい状況にある。格助詞の中でガとヲは最も基本的なものであって、省略してもあまり不都合が生じないことがその原因だと思われる。つまり表層では、接続に代って交替という現象が現れるものと解しうる。

5.3 実地検証

第四期国定読本中の係助詞「は」4534 例について意味用法を調べたところ、次のようになった。

名詞+「は」3477 例 ただし時・数量など副詞的名詞に付く場合を除く。

①ガ	3382	97.3 %
②ヲ	78	2.2 %
③ニ	10	0.3 %
④その他	7	0.2 %

圧倒的にガが多いが、ヲも無視できるほど小さくはない。

5.4 判別の方法

他の副助詞については調べていないが、圧倒的に多いのがハで、次がモで、他は数えるほどであるから、これで大体の傾向はつかめる。仮にガとヲに限定するとしても、格助詞の付かない連用名詞句に対し、どうやって表層格を認定するかが問題である。人間が日常生活においてそれを判別するには大して苦勞もしていないようだが、人間ではなく機械が判別するとしたら、どういう手順が考えられるか。「意味を使えばいいんですな。」という人がある。その通りである。しかし意味を使うとは具体的に何をすることなのか。コンピュータに

何をさせることなのか。一つの素朴な手法を以下に示す。

- (1) 述語がヲ格を取らないものである場合 →ガ

例1：ワタクシハハナコデス。

- (2) 同一単文中にガとヲのいずれか一方が明示されている場合

例2：シシハ、ネズミヲハナシマシタ。 →ガ

例3：これは、あの方が落して行つたに違ひない。 →ヲ

- (3) ガ格名詞またはヲ格名詞のいずれかが省略された場合

例4：にいさんは、おいしさうにのみました。(ヲ格省略)

例5：各国で日本語の研究が盛であることは聞いてゐたが、(ガ格省略)

- (4) 両方が無格である場合

例6：磁石ハ、鐵ヤニツケルハ吸着ケルガ、銅ヤ、眞鍮ヤ、アルミニウムハ吸着ケナイ。

例7：私も、お二方のおおんは、けっして忘れません。

もっとも簡単な(1)の場合でも、その述語がヲ格を取るか取らないかということが動詞辞書その他でわかるような仕組になっていなければならないが、技術的には比較的容易であり、(2)もあまり問題がない。したがって主たる課題は(3)と(4)の処理法である。基本的には、個々の用言の結合価とそれぞれの格スロットに入りうる名詞の意味分類、さらに個々の名詞の意味分類が辞書で示されていることが必要である。しかし、そのような情報が与えられても、例7のように判別を要する名詞が「私」[HUMAN]と「御恩」[ABSTRACT]というように意味分類上へだたっている場合はよいとして、例6のように、すべての名詞が[CONCRETE]に属する場合はお手上げである。単に具象物だというだけでなく、これらの名詞は、仮にもっとこまかい意味分類を用いたとしても、同じカテゴリーに入る確率が高い。もっとも例6のようなケースでは出現順にガヲとすればよいことがほぼ確かめられているが⁸⁾、となると問題は(3)である。上にあげた例4・例5は名詞の意味分類でうまく処理できそうだが、そういかない例もある。次の例8はガ格の例、例9はヲ格の例である。このようにガ格・ヲ格ともに有意志体という動詞が少なくないので、いささか厄介で

ある。

例8：おとひめさまは、しきりに止めましたが、浦島がどうしても聞きませんので、

例9：元の兵は、一人も上陸させぬといふ意気ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

ただし意味分類によっても語順によっても判定できないとなると、人間でも解釈を誤るおそれがあるから、そういう表現を避けようという意識は働くはずで、比率としては小さいはずである。上記のガ・ヲ相当の「は」3460例についてざっと内訳を調べたところ、下記のようになった。

(1)述語がヲ格を取らないものである場合	71.7 %
(2)ガ・ヲのいずれかが明示されている場合	22.7 %
(3)ガ格名詞・ヲ格名詞の一方が省略された場合	3.5 %
(4)両方が無格である場合	1.1 %

上記のアルゴリズムは、見出しだけで自動詞・他動詞が決められることを前提にしている。すなわち(1)は自動詞の場合、(2)~(4)は他動詞の場合を念頭に置いている。しかし実際には自他両用動詞もあるので、アルゴリズムはもっと複雑になる。それでもかなりの程度までうまくいきそうな感じなので、今後は無格の名詞句についても深層格をあてはめてみたいと思う。

8) 文献47 P105 上記のアルゴリズムを用いて係助詞等を格助詞ガ・ヲに置き換えた。そこで扱った実験データの範囲では、正答率100%と報告されている。

6. 基本方針に係わる問題点

深層格のセットや調査方法の基本を定めるにあたって問題になった点がいくつかある。それぞれの説明に付随して論じたところもあるが、説明の流れを妨げないために省いたところもあるので、改めてすこし考えたい。

6.1 態変換と迷惑の受身

受身・使役・可能等、動詞の態によって基本文型と異なる表層格パターンをとる場合、基本文型に変換することを3.3.3に述べた。とはいっても、実際にはそれができない場合がある。使役文型または受身文型と基本文型との間で項の数が異なる場合である。使役については3.3.3に述べたが、それは技術的な問題というより、どう決断するかの問題である。一方受身については、もう少し面倒な場合がある。よく引合いに出される迷惑の受身がその例である。

甲が乙に弱味をにぎられる

における甲は直感的に〈経験者〉とみなせるが、この文を能動態にすると、

乙が甲の弱味をにぎる

となる。つまり「甲」が連体修飾語になって、用言の直接従属語たる地位を失うため、深層格が付与できない。となると、態変換を行うこと自体が問題になるが、格フレーム記述を態ごとに行うのはあまりに非能率であるから、基本的にはその方針が正しいといえよう。そこでこれをどう扱うかである。純粋の受身と迷惑の受身を機械的に区別することができれば、迷惑の受身だけそのまま扱うのがよいと思うが、はたしてそれが可能かどうか。「甲が乙に弱味をにぎられる」と「かにが猿に柿をぶつけられる」の違いを何で判定するかの問題である。第一に考えられるのは、動詞「にぎる」と「ぶつける」の格支配パターンの違いである。「にぎる」の格支配パターンは「AがBヲ」であり、「ぶつける」の格支配パターンは「AがB＝Cヲ」であるから、ここから生じる単純

受身のパターンにも差があって、迷惑の受身は大部分認定可能である。

もう少し話を一般化しよう。文献 20 において、受身文と基本文の変換のパターンを 13 個挙げているが、そのうちのタイプ(7)~(9)が迷惑の受身に関するものである。それを以下に掲げる。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| (7)A が X スル | D が A = X サレル |
| 例 1. 子供が泣く。 | 親が子供に泣かれる。 |
| 例 2. 雨が降る。 | 人が雨に降られる。 |
| 例 3. 従業員が悪事を働く。 | 店主が従業員に悪事を働かれる。 |
| (8)A が (B ノ) C ヲ X スル | B が A = C ヲ X サレル |
| 例 1. 家人が(泥棒の)顔を見る。 | 泥棒が家人に顔を見られる。 |
| 例 2. 警察が(彼の)身柄を拘束する。 | 彼が警察に身柄を拘束される。 |
| (9)A が (B ノ) C = X スル | B が A カラ C = X サレル |
| 例 1. 彼が(友人の)協力に感謝する。 | 友人が彼から協力に感謝される。 |

タイプ(8)に属する動詞はすべてヲ格支配であり、かつそのヲ格名詞が受動文のガ格名詞の属性・部分・所有物であるのが特徴である。タイプ(9)は(8)のヲ格の代りにニ格が立つものであり、頻度は小さい。なお、これらのパターン中に記される A、B、C…は格助詞の変換に関与する部分だけを抽出したものであって、これ以外の格を持たないという意味ではない。つまり他動詞はつねに(8)型とは限らず、(7)型の可能性もあるのであって、個々の動詞がどの変換型に属するかを辞書に記載することを念頭においている。言い換えれば、本来の受身と迷惑の受身との判別は、辞書中でその動詞に与えられた態変換情報でかなりの程度まで可能である。

すべてのタイプに共通するのは、受動文のガ格が常に有意志体であり、能動文で表される事柄によって被害もしくは恩恵をこうむるということである。これに深層格を与えるとすれば、経験者格ということになるだろうか。この経験者格名詞が基本文型化によって失われるのは困るので、そういう場合には受動文をそのまま残すべきであろう。

6.2 深層格の組合わせ

人によっては一つの名詞に複数の深層格を与える方式をとることがある。たとえば「与え手」「受け手」の代りに「動作主・始点」「動作主・終点」と表示する。そうすれば同じ事柄をどちらの側から記述するかによって深層格が異なるということは少なくなるであろう。それがいちばん明瞭に現れるのは、やりもらいの場合である。すなわち「与える」動詞のガ格名詞を〈動作主〉とするか〈与え手〉とするか、「受取る」動詞のガ格名詞を〈動作主〉とするか〈受け手〉とするか迷ったあげくに出てきた案といえるだろう。そうした二重・三重の格を無制限に認めるか、規定された範囲に限って認めるか、全く認めないかの問題がある。特に明言はしていないが、柴谷・仁田はどうやら無制限派で、井上はどうやら限定派であるらしい。そして木村は非容認派である。深層格を一つに限定すると、可能な組合わせの間に優先順位を設ける必要が生じるなど、不都合な面があるのは事実である。また優先順を設けたとして必要な情報が漏れるのではないかという危惧もあろう。逆に余分な情報を付加することによってノイズが発生する恐れもある。現実はどうなるかということは使い方が決まらないとはっきりしないが、今観念的に考えた限りでは、AとBの組合わせというのは、Aの下位概念でもありBの下位概念でもあるということになるであろう。つまりAという要求に対しても、Bという要求に対しても合格することになる。一方、名詞に対しても複数の属性が与えられたりする（例：+CON,+LOC）と、格と名詞の掛け合わせで、本来あるべき姿よりも非常に広範囲なものになる恐れがある。その意味で木村は深層格についても名詞意味マーカーについてもあまり組合わせを認めたくない。これは情報量の増加というより、むしろ減少につながるのではないかと恐れる。

「AがB=Cヲ 送る」のAはただの動作主で、「AがB=Cヲ 運ぶ」のAはA自身も移動するから動作主対象だという意見がある。なるほど、述語論理か何かで記述するとすれば、そういうことになるかもしれない。そして、Aに関するそういう情報が役に立つ場合が全くないとは言いつてもいい。しかしそういう情報が何かの役に立つというはっきりした見通しが無い限り、そこまで複

雑にしたくない。仮に深層格の組合わせを認めるにしても、無制限にはなく、あらかじめ決めた少数のものに限定したいと思う。

6.3 ガ格・ヲ格と他の格との関係

村木新次郎は深層格に相当するものとして「叙述素」という独自のものを設ける。他と異なる点は、その叙述素が主格の動作に関わるものか対格の動作に関わるものかによって、1と2に分かれることである。基本的な叙述素の数は30であるが、1と2を別のものとして数えれば、50になる。「AがBから出る。」「ZがAをBから出す。」の「Bから」は前者においてはLS1、後者においてはLS2である。通常はLS1もLS2も空間的起点として一まとめにする。「Aを」は対象O2だが、「Aが」は時として動作主Aであり、時として対象O1である。つまり、述語と名詞1個だけとの二者間の意味的關係を示すものは、動作主・手段・時間等、少数のものに限定されていて、主格および対格の名詞の一方を含む二つの名詞と述語との關係を示すものが多いのである。

同様の考えは仁田にもある。ただしその表記法はまだ十分固まっていないようである。表層と意味が融合したようなこの情報を、どのような場合にどのように生かしうるのかわからないが、前節と違ってノイズになることはあるまい。したがって、辞書記述の際にひどく負担が大きくなるというのでなければ、記述しておいた方がよいだろう。1か2かということは動詞によっておおむね決まるから、深層格ごとに記述しなくても、自動詞か他動詞かという区分を記しておけばよいという人もいるだろう。ただ、サ変動詞には自他両用のものが多いので、一見出しにつき1回記入するだけでは足りない。少なくとも文型パターンごとに記す必要はある。

おわりに

問題が大きすぎて筆者等の力では十分にまとめきれなかった。特に辞書記述用作業マニュアルとしてはまだまだ不十分であることを自覚している。今後の課題として以下の三点が挙げられる。

- ①深層格について、分野的普遍性を増すことに努める。そのために、別種のデータを取り上げる。言語的普遍性も考えたいが、自信はない。
- ②格フレームに組込むべき格の範囲を定める。そのための手続きとして、
 - ア. 任意性・必須性をはかる統計的なものさしを考案し、実験する。
 - イ. 任意性の高いものについて、格助詞と名詞の意味から深層格が認定できるかどうかを検討する。
- ③各深層格の内容と境界を鮮明にするように努め、できる限り判定の手続きを明確にする。その手段として、次の作業を行う。
 - ア. 今回扱ったデータを、助詞単位ではなく、述語単位でまとめる。すなわち、述語とそれに直接従属する名詞句の組を無格名詞まで含めてパターン化し、それによって述語の分類を行う。できれば名詞の意味属性も組み込みたい。
 - イ. 格フレームの中核部分を設定する。前に述べたように、パターンの数はかなり多く、名詞の意味まで含めるとおそらく数千にのぼり、1回しか出現しないものもかなりあると予想される。つまり、語彙が流動的であるのと同様、データが変ればパターン集合も変るということである。その中の中核部分とそれ以外とで、マニュアルの記述法を変えるべきかもしれない。

上記3点のうち、③については、無格の部分以外はずでに深層格が与えてあるので、係助詞・副助詞に対して同様の作業を行ったのち合併して出典番号順

にソートし、文単位に区切って、表層格・深層格・述語の組を作ればよいわけであるが、実際のデータにおいては、語句の省略や述語の連体修飾語化によっていわゆる必須格が欠ける場合も多いので、パターン化するにはまだ多くの操作が必要である。またその際、作業者の判断によって変換したり補ったりしたものに、どういう地位を与えるかの問題もある。

順序としては、まず②を実行すべきではないかと思うが、必須性をはかるものさしについて、今のところよい考えがない。必須格についてはある程度直感に頼りうるとしても、必須・任意・不用（共起不能）という三つの区別を付けるよう要求されたときに、任意と不用の区別を自信をもって付けられる人はまずいないだろう。その辺をまずなんとかしたいと考えている。

参 考 文 献

1. Filmore, C.J.(1966): "A proposal concerning English prepositions",
Monograph series on Languages and Linguistics 19,
19-33
2. Filmore, C.J.(1968): "The case for case", E.Bach and R.T.Harms
(ed.) Universals in Linguistic Theory, (N.Y., Holt,
Rinehart and Wisnston), 1-88
3. Filmore, C.J.(1968): "Lexical entries for verbs"(「動詞の語い記載項
目」), M. Halle (ed.) Foundations of Language IV,
373-393. [『格文法の原理—言語の意味と構造』(田中春
美・船越道雄訳), 159-188]
4. Filmore, C.J.(1969): "Toward a modern theory of case" (「現代の格理
論をめぐって」), D. A. Reidel and S. A. Schane (ed.)
Modern Studies in English (Englewood Cliffs, N.
J.: Prentice-Hall), 361-375. [『格文法の原理—言語の意
味と構造』(田中春美・船越道雄訳), 1-26]
5. Filmore, C.J.(1970): "Types of lexical information"(「語い情報の種
類」), F.Kiefer(ed.) Studies in Syntax and Seman-
tics (Dordrecht, Holland: D. Reidel), 109-137. [『格
文法の原理—言語の意味と構造』(田中春美・船越道雄
訳), 189-232]
6. Filmore, C.J.(1970): "The grammar of *hitting* and *breaking*"(「Hit と
Break の文法」). R.A.Jacobs and P.S.Rosenbaum
(ed.) Readings in English Transformational Gram-
mar(Waltham, Mass.: Ginn and Company), 120-133.

- 〔『格文法の原理一言語の意味と構造』(田中春美・船越道雄訳) 27-48〕
7. Filmore, C.J.(1971): “Some problems for case grammar” (『格文法の諸問題』), Monograph Series on Languages and Linguistics 24(Washington D.C.: Georgetown University Press), 35-56. 〔『格文法の原理一言語の意味と構造』(田中春美・船越道雄訳), 233-266〕
 8. Huddleston, R.D.(1970): “Some remarks on case grammar”, *Linguistic Inquiry* 1, 501-524
 9. Mel'čuk, I.A. & Zholkovsky, A.K.(1984): *Explanatory Combinatorial Dictionary of Modern Russian—Semantic-Syntactic Studies of Russian Vocabulary*, Wiener Slavistischer Almanach, Vienna
 10. Апресян, Ю.Д.(1995): *Лексическая семантика—синонимические средства языка*(語彙論的意味論——言語の同義表現法). 119-163, 《восточная литература》, Москва
 11. 井川 肇(1990): 深層構造と表層構造, *日本語学*, 9巻10号, 13-17
 12. 石綿敏雄・荻野孝野(1983): 結合価から見た日本文法, 水谷静夫 他編『朝倉日本語講座3——文法と意味I』, 朝倉書店, 81-134
 13. 井上和子(1976): 『変形文法と日本語(上)(下)』, 大修館書店
 14. 井上和子(1980): 格助詞をめぐる, *言語*, 9巻2号, 20-30
 15. 榎本久彦(1979): 結合価理論とその成果, *言語*, 8巻11号, 46-53
 16. 海老名洸子(1977): 格文法について, *東京成徳短期大学紀要*, 10号, 17-22
 17. 加藤 弘(1991): 自動詞・他動詞の対応と格組成, *東北大学日本語教育研究論集*, 6号, 68-88
 18. 川本茂雄(1974): アンダーソンの「格文法」——その目標と方法, *言語*, 3巻5号, 27-37
 19. 北原保雄(1984): 日本語の格——格をどうとらえるか—, 『日本語文法の

- 焦点』, 63-74, 教育出版
20. 木村陸子・空閑茂起(1985): 態による格助詞変換, 計量国語学, 15 卷 2 号
 21. 言語学研究会編(1983): 日本語文法・連語論 (資料編), むぎ書房
 22. 小泉 保・船越道雄・本田唱治・仁田義雄・塚本秀樹編(1989): 『日本語基本動詞用法辞典』, 大修館書店
 23. 坂本義行・石川徹也(1989): 『日本語動詞の格フレームに関する構文・意味情報資料集』, 昭和 63 年度文部省科学研究費報告書
 24. 柴谷方良(1978): 『日本語の分析—生成文法の方法—』, 269-332 (第 6 章 意味関係), 大修館書店
 25. 柴谷方良(1984): 格と文法関係, 言語, 13 卷 3 号, 62-70
 26. 柴谷方良(1985): 主語プロトタイプ論, 日本語学, 4 卷 10 号, 4-16
 27. 情報処理振興事業協会技術センター(1987): 『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL』
 28. 情報処理振興事業協会技術センター(1990): 『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL』
 29. 杉本 武(1988): いわゆる「文法関係」への意味的要因の関与について, 九州工業大学情報工学紀要—人文・社会科学編 1 号, 1-26
 30. 田中春美(1974): フィルモアの格理論, 言語, 3 卷 5 号, 19-26
 31. 田中春美・船越道雄(1975): 格文法概説, 『格文法の原理—言語の意味と構造—』, 267-334, 三省堂
 32. 寺村秀夫(1982): 『日本語のシンタクスと意味 I』, 79-201 (第 2 章 コトの類型), くろしお出版
 33. 長尾 真・辻井潤一・中村順一・坂本義行・鳥海 剛・佐藤雅之(1985): 科学技術庁機械翻訳プロジェクトの概要, 情報処理, 26 卷 10 号, 1203-1213
 34. 西山佑司(1976): 格文法批判の要点, 井上和子編『日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用』, 昭和 50 年度文部省科学研究

費報告書, 99-118

35. 仁田義雄(1980):『語彙論的統語論』, 明治書院
36. 仁田義雄(1982): 日本語, 森岡健二 他編『講座日本語学 10 外国語との対照 I』, 118-138, 明治書院
37. 仁田義雄(1986): 動詞と格体制, 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究-7』, 104-213, 情報処理振興事業協会
38. 日本科学技術情報センター・電子技術総合研究所・京都大学(1982-1986): 『日英科学技術用語辞書データベースの開発に関する報告書』, 科学技術庁
39. 中右 実(1983): 意味と文法関係, 日本語学, 2 巻 12 号, 4-12
40. 船山伸他(1990): 文法関係と基本格, 崎山 理・佐藤昭裕編『アジアの諸言語と一般言語学』, 三省堂, 595-613
41. フィルモア チャールズ. J. (1975): 『格文法の原理一言語の意味と構造-1』(田中春美・船越道雄訳), 三省堂
42. 防衛庁・計量計画研究所(1976): 自動インデックスシステムに関する調査研究報告書
43. 防衛庁・計量計画研究所(1976): 自動インデックスシステムに関する調査研究報告書 別冊 1
44. 防衛庁・計量計画研究所(1977): 自動インデックスシステムに関する調査研究報告書 別冊 4
45. 防衛庁・日立製作所(1976): 自動インデックスシステムに関する調査研究報告書 別冊 2
46. 防衛庁・日立製作所(1977): 自動インデックスシステムに関する調査研究報告書 別冊 3
47. 防衛庁・日立製作所(1978): 自動インデックスシステムに関する調査研究報告書 別冊 5
48. 三上章(1975): 象ハ鼻ガ長イ, 係助詞「ハ」etc, 『三上章論文集』, くろしお出版
49. 宮島達夫(1964): 助詞・助動詞の用法, 国研報告 25『現代雑誌九十種の

用語用字』第三分冊第三章，秀英出版

50. 村木新次郎(1986): 述語素について, 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究— 7』, 1-101, 情報処理振興事業協会
51. 村木新次郎(1987): 動詞の結合能力からみた名詞, 国文学 解釈と観賞, 52-2, 17-30
52. 村木新次郎(1991): 動詞の結合能力, 『日本語動詞の諸相』, 137-172, ひつじ書房
53. 森山卓郎(1988): 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院
54. 山本清隆(1984): 複合動詞の格支配, 都大論究, 21号, 32-49
55. 和田四郎(1975): 格文法覚書, 神戸外国語大学論叢, 26巻4号, 29-43
56. 和田四郎(1981): 場所論的格文法と日本語の助詞, 神戸外国語大学論叢, 32巻4号, 35-58

付 表

- 付表 1. 深層格と格助詞の対応一覧（報告者別）… 227
- 付表 2. 格助詞を含む慣用句一覧…………… 232
- 付表 3. 深層格ごとに見た述語一覧…………… 234

存在するもの	ガ					
判断の主辞	ガ					
受け手	ヲ					
目当て	ヲ					
作品	ヲ					
内容	ヲ		ト			
対象	ガ	ヲ				
通り路	ヲ					
所有・所属する人		ニ				
相手		ニ		カラ		ヘ
片方				ト		
誘因		ニ				
基準（品定め）		ニ				
変化の結果状態		ニ				
存在の場所		ニ				
出どころ	ヲ			カラ		
到達点		ニ				ヘ マデ
動的事象を包む場所			デ			
連れ				ト		
時		ニ				#
期限						マデニ
判断の及ぶ範囲			デ			
比較の基準					ヨリ	
道具・手段			デ			
原因			デ			
規準			デ			
動作主			デ			
主体の一部・一面	ガ					
◆仁田						
主	ガ					
対象		ヲ	ニ		ト	
相方			ニ			
片割れ			ニ		ト	
めあて			ニ			ヨリ
領域			ニ			
基因			ニ		デ	
手段					デ	

同定項	ニ	デ	ト	
経過域	ヲ			
経由域	ヲ			
ゆく先	ニ		ト	へ
出どころ	ヲ	デ	ト	カラ
ありか	ガ	ニ		
主:ゆく先	ガ			
主:出どころ	ガ			カラ
対象(変化):ゆく先/対	ヲ		ト	
対象(変化):出どころ/対	ヲ			
相方:ゆく先/対		ニ		
相方:出どころ/対		ニ		カラ
基因:出どころ				カラ
出どころ:材料/対				カラ
対象-主	ガ			
主-対象	ガ			
相方-主		ニ		
ゆく先-ありか/対		ニ		へ
出どころ-ありか		ニ		カラ
ありか-手段		ニ	デ	
◆村木				
空間的位置 1/2		ニ		
非空間的位置 1/2		ニ		
空間的起点 1/2				カラ
空間的着点 1/2		ニ		
方向 1/2				へ
空間	ヲ			
時間	ヲ			
範囲		ニ		
対称 1/2			ト	
関連 1/2		ニ		
比較 1/2				ヨリ
資格 1			デ	
資格 2		ニ		
内容 1/2			ト	

相手 n		ニ			
相手 k				カラ	
数量 1/2					#
起因		ニ			
動機 1/2		ニ			
逆動機 1/2				カラ	
非空間的起点 1/2				カラ	
非空間的着点 1/2		ニ			
対象 (出現) 1	ガ				
対象 (出現) 2		ヲ			
対象 (消滅) 1	ガ				
対象 (消滅) 2		ヲ			
対象 (変化) 1	ガ				
対象 (変化) 2		ヲ			
対象 (受影) 2		ヲ			
動作主	ガ				
態度		ニ			
対象 1	ガ				
対象 2		ヲ			
手段			デ		
全体・部分 gg	ガ				
全体・部分 go		ヲ			
全体・部分 gn		ニ			
全体・部分 gk				カラ	
全体・部分 gd			デ		
焦点	ガ				
◆μプロジェクト					
主体	ガ		デ	カラ	ヨリ
対象	ガ	ヲ	ニ		
受け手			ニ		へ
与え手			ニ	カラ	ヨリ
相手 1			ニ	ト	
相手 2				ト	カラ ヨリ
時			ニ		
時・始点				カラ	ヨリ

時・終点	ニ			マデ	
時間					#
場所	ニ	デ		へ	
場所・始点	ヲ		カラ	ヨリ	
場所・終点	ニ			へ	マデ
場所・経過	ヲ				
始状態			カラ	ヨリ	
終状態	ニ	ト		へ	マデ
属性	ニ				
原因・理由		デ	カラ	ヨリ	
手段・道具		デ			
材料		デ	カラ	ヨリ	
構成要素		デ	カラ	ヨリ	
方式	ニ	デ			
条件		デ			
目的	ニ				
役割	ニ				
内容規定			ト		
範囲規定	ニ	デ	カラ		
提題			トハ		
観点		デ	カラ	ヨリ	
比較	ヲ	ニ		ヨリ	
随伴			ト		
度合					#
陳述 (不明)					

注. "#” はゼロ。

付表 2. 格助詞を含む慣用句一覧

格助詞の用例のうち、慣用的表現の一部をなすものは調査対象からはずすということを 3.3 に述べたが、そこで慣用句とみなしたものを以下に掲げる。助詞ごとに列挙したので、一つの慣用句中に複数の格助詞が含まれる場合には、それぞれの場所に重複して現れる。なお () 内は頻度を示す。

(1)ガ格の慣用表現 164 例

目がさめる(5)、気／思い／感じがする(8)、気がつく(13)、が早いか(7)、きまりが悪い(1)、目がくらむ(3)、〈動詞〉がよい(11)、ことがある／ない(16)、ことができる(48)、目がまわる(2)、方／のがよい／ました etc (14)、骨が折れる(1)、気が違う(1)、が最後(1)、余念がない(3)、いとまがない(1)、見分けが付く(1)、見当がつく(5)

(2)ヲ格の慣用表現 47 例

目をさます(6)、気をつける(8)、なだれを打つ(1)、気をもむ(1)、手に汗を握る(2)、涙を吞む(1)、気を失う(1)、ざるをえ(ない)(5)、首を長くして待つ(1)、年をとる(2)、ごめんをこうむる(1)、頭角をあらわす(1)、やむを得ない(1)、櫛の歯を引く(1)、腰をかける／おろす(5)、今を盛りと(1)、耳をかたむける(3)、話に花を咲かせる(1)、上を下への大騒ぎ(1)、我を忘れる(2)、夜を日につぐ(1)、～を〈形容詞語幹〉み(1)

(3)ニ格の慣用表現 342 例

お～になる(216)、ことにする(10)、ことになる(35)、〈連用形〉にする〔例：置き去りにする〕(12)、わけにいく(4)、気にする(1)、気にとめる(1)、ために(18)、気に入る(2)、気になる(1)、につれて・にしたがって(11)、お目にかける・ご覧に入れる(5)、につけ(2)、目につく(3)、手に入れる(5)、に及ばない〔必要がないの意〕(1)、お目にかかる(2)、手に汗を握る(3)、役に立つ(5)、我に返る(3)、夜を日につぐ(1)、話に花を咲かせる(1)

(4)デ格の慣用表現 なし

(5)ト格の慣用表現 127 例

へと(3)、となく・ともなく(9)、なんともない(1)、なにくれと(2)、という〔こと

ごとくの意。例：武士という武士] (4)、うとする・んとす(107)、とやら(1)

(6)カラ格の慣用表現 39例

片端から(9)、後から後から(20)、次から次へ・次から次と(5)、心から(5)

(7)ヨリ格の慣用表現 6例

それよりも(4)、より外(ない)(2)

(8)へ格の慣用表現 4例

次から次へ(4)

(9)マデ格の慣用表現 18例

どこまでも(16)、までに(2)

付表 3. 深層格ごとに見た述語一覧

1. ガ格

(1)動作主

合図をする、上がる、開ける、明け渡す、あげる、あざける、与かる、遊ぶ、
 集まる、集める、後押しをする、表す、現れる、歩く、合わせる、案内をす
 する、言合う、言い聞かせる、言い出す、言い付ける、言い伝える、言う、行
 く、一にする、祈る、いばる、居る、射る、入れる、植える、受け持つ、動
 く、歌う、打ち当てる、打ち出す、討ち取る、打つ、討つ、うなずきあう、う
 なずく、売り歩く、売る、掩護する、おいかける、追い詰める、おいでおいで
 をする、追う、応じる、起きる、置く、送る、起こす、行う、おさえる、治め
 る、教える、押し進める、押し寄せる、おじぎをする、押す、踊りあかす、踊
 る、おぶう、おまいりをする、泳ぐ、下りる、織る、会見する、回復する、介
 抱する、買う、帰る、かきあつめる、書きつらねる、書く、駆け上がる、駆け
 出す、かけっこをする、かけつける、駆け寄る、掛ける、囲む、かじる、かた
 どる、語り合う、肩を並べる、かつぐ、滑走する、活躍をする、かぶる、噛
 む、躲わす、観測をする、帰艦する、聞く、築かせる、鍛える、給仕をする、
 きょんとんとする、切り込む、切る、着る、虐待する、行幸する、食い切る、食
 う、くぐりぬける、くだる、くっつける、工夫する、汲む、繰り返す、来る、
 呉れる、加える、警戒する、撃沈する、研究する、見物する、航行する、越え
 る、腰掛ける、こする、答える、ごちそうをする、込める、殺す、催促する、
 裁縫をする、さえずる、先に立つ、叫ぶ、下げる、提げる、捧げる、ささやき
 かける、指図する、差し出す、差し招く、差す、さそう、さまよう、さらう、
 去る、散開する、散歩する、叱る、敷く、従う、支度をする、疾駆する、疾走
 する、閉める、修養する、主張する、出仕する、出帆する、調べる、しり押し
 をする、進軍する、実験をする、従事する、進む、勧める、住む、する、擦
 る、座る、生活する、制する、征服する、背負う、説明する、攻めのぼる、攻
 め寄せる、攻める、世話をする、洗濯をする、沿う、創始する、相談する、供
 える、そらんずる、揃える、帯する、助ける、尋ねる、正す、立合う、立ち上
 がる、立つ、立てこもる、立てる、頼む、食べる、抱き上げる、抱く、出す、
 近付く、近寄る、追撃する、ついていく、ついてくる、使う、捕まえる、掴

む、突き立てる、つぎものをする、つく(随)、作り上げる、作る、注ぐ、付ける、続く、つづる、つぶる、詰めかける、連れていく、連れれる、手に入れる、手招きをする、照る〔擬人化用法〕、手を休める、出入りする、出掛ける、出て行く、出てくる、出入りする、出る、訪う、通り過ぎる、通る、渡海する、突破する、嫁ぐ、飛ばせる、飛び上がる、飛び込む、飛び立つ、飛びちがう、飛ぶ、止る、泊る、供をする、取り返す、取り囲む、取締をする、取り締まる、取り縫る、取り捨てる、取り出す、取る、どなる、ながめる、鳴き立てる、鳴く、投げ入れる、嘗める、並ぶ、成る、逃げ出す、逃げる、にこにこする、にっこりする、入営する、縫う、脱ぐ、抜ける、盗む、塗る、寝つかせる、練り歩く、寝る、覗く、ののしる、述べる、飲む、乗り移る、乗り降りする、乗込む、乗る、這い寄る、入る、運ぶ、走る、始める、外す、はせ集まる、旗揚げする、働く、発する、発着する、発明する、話し合う、話し掛ける、話をする、話す、跳ね上げる、撥ね付ける、はばむ、払う、張る、番する、引き受ける、引きしぼる、引く、弾く、開く、捨う、吹く、拭く、塞ぐ、踏み散らす、踏む、振り向く、振る、ぶらさがる、勉強する、奉納する、保存する、ほめる、掘る、参る、舞う、待つ、まつる、学ぶ、招く、まねをする、見送る、見せる、見張りをする、見張る、見舞う、見守る、見回す、耳をかたむける、見る、向うにまわす、目をいからす、面倒を見る、もぐる、持たせる、持ち合う、用いる、持ってくる、持つ、求める、戻る、やってくる、雇う、破る、遣る、ゆききする、指さす、寄せる、呼び起こす、呼ぶ、詠む、読む、嫁入りする、寄り集まる、寄る、練習をする、分れる、渡す、渡る、笑い出す、笑う

(2)経験者

汗をかく、あやしむ、あわてふためく、勢い込む、容れる、飢え死にををする、受入れる、受ける、疑う、生み出す、生む、恨む、うれしがる、得る、置き忘れる、忘る、怒る、惜しがる、押し通す、落とす、思い込む、思い立つ、思う、面白がる、勝つ、かわいがる、考える、感心する、感じる、聞く、緊張する、好意を見せる、志す、事に触れる、ころぶ、残念がる、慕う、死ぬる、知る、信任する、心配する、退屈する、倒れる、食べられる(可能)、追慕する、出会う、動揺する、泣く、慣れる、逃がす、願う、発見する、人となる、不思議がる、平然とする、誇る、欲しがる、負ける、待ちこがれる、待つ、免れ

る、見覚える、見つける、見る、目覚める、珍しがる、目を覚ます、目を付ける、目を見張る、持つ、もてあます、敗れる、油断をする、用心する、我に帰る

(3)無意志主体

あおる、開ける、与える（慰めを）、圧する、洗う、彩る、動かす、打つ、奪う、えがく、えぐりとる、追う、覆う、送る、押し上げる、囲む、飾る、かぶる、かむ、清める、消し止める、さえぎる、差し交わす、実現する、吸込む、吸い付ける、救う、そそる、染める、高める、立てる（音を）、伝える、包む、つりこむ、照らす、展開する、閉ざす、とらえる、取り囲む、取る、流す、投げかける、乗せる、呑む（気を）、吐く、放つ、引く（心を）、表現する、吹き散らす、吹く、防ぐ、待ち受ける、見下ろす、導く、めくる、もてあそぶ、物語る、破る、ゆする、揺り落とす

(4)対象

赤い、明るい、上がる、明らか、空く、開く、明ける、浅い、与る、当たる、暑い、熱い、集まる、あふれる、危うい、誤る、あらわだ、現す、現れる、ある、荒れる、いい、言う、息絶える、行き詰まる、生きる、行き渡る、行く、いけない、いそがしい、痛む、一変する、嫌だ、入り交じる、入り乱れる、居る、色づく、浮び上がる、浮かぶ、浮き上がる、浮き出す、浮く、動く、薄赤だ、薄暗い、薄れる、渦巻く、打ち寄せる、打つ、美しい、映る、うなる、うねり続く、うねる、うまくい、生まれる、うようよする、うらやましい、うれしい、映ずる、生い茂る、多い、大きい、おかしい、起き上がる、遅れる、起こる、敵かた、惜しい、押し寄せる、遅い、落ち込む、落ちて着く、落ちる、同じだ、帯びる、おぼつかない、おもしろい、泳ぐ、及ぶ、降りる、居る、終わる、回転する、孵る、顔を出す、掛かる、輝かしい、輝く、確定する、隠れる、欠ける、重なる、かすむ、固まる、傾く、活動する、叶う、悲しい、枯れる、かわいい、かわいそう、変わる、消える、利く、聞える、築く、きちんとする、気に入る、気になる、気の毒だ、黄ばむ、決まる、急だ、曲折する、きらきらとする、きれいだ、切れる、近代化する、逆戻りする、行儀がよい、崩れる、下る、くつつく、組みあう、曇る、くやしい、来る、暮れる、黒い、加わる、群居する、けむる、恋しい、凍り付く、快い、こぼれる、込める、こわい、冴える、盛んだ、下がる、咲く、さしかかる、差し込む、差す、さびし

い、寒い、散在する、残念だ、幸せだ、茂る、沈む、滴る、死ぬ、忍び寄る、閉まる、しみこむ、しみる、湿る、占める、消散する、白む、白い、振動する、心配だ、自慢だ、じめじめしる、上手だ、丈夫だ、好きだ、透き通る、過ぎる、救える、少ない、進む、素敵だ、素通りする、すばらしい、滑り出す、滑る、すまない、済む、澄む、する、成立する、背伸びする、狭い、迫る、注ぐ、そそり立つ、峙つ、そびえる、染まる、ぞよめく、存在する、だ、大切だ、絶える、高い、高鳴る、抱合う、出す、助かる、湛える、正しい、ただよう、立ち込める、立ち並ぶ、立ち上る、経つ、立つ、逢する、たなびく、垂れる、小さい、近い、近付く、近寄る、千切れる、調和する、ちらつく、散らばる、散る、支える、突き立つ、尽きる、着く、付く、点く、付ける、伝う、伝わる、続く、繋がる、つぼまる、冷たい、強い、つらい、連なる、出かかる、出来上がる、適当だ、出来る、でこぼこする、出そろう、照り輝く、照りつける、照る、出る、展開する、点在する、遠い、遠ざかる、通る、溶け込む、解ける、閉じる、とどめる、飛ぶ、止る、取れる、ない、直せる、直る、長い、流れ去る、流れ澄む、流れ付く、流れる、なくなる、成す、なつかしい、並び続く、並ぶ、鳴り出す、成り立つ、鳴り響く、成る、鳴る、生る、匂う、抜ける、眠る、濃厚だ、残る、のしかかる、伸びる、昇る、乗り移る、乗る、はいる、這う、生え茂る、生える、映える、はかどる、激しい、挟む、走る、始まる、弾む、はっきりする、発達する、話し掛ける、離れる、跳ね返る、はまる、速い、破裂する、晴れる、繁茂する、控える、光る、退く、ひしゃげる、ひっかかる、ひっくりかえる、等しい、ひどい、響き渡る、響く、開く、開ける、ひらめく、翻る、ひれ伏す、広い、広がる、広まる、病気だ、増える、深い、深まる、吹き上げる、吹き回る、吹く、ふくらむ、更ける、不思議だ、負傷する、不順だ、太る、踏める、ぶら下がる、降り掛かる、降り注ぐ、降り出す、降り続く、降る、震える、触れる、滅る、放射する、朗らかだ、ほしい、ぼっとする、火照る、ほとぼしる、ほほえむ(梅が)、ぼやける、舞い込む、曲がりくねる、まき散らす、まじる、まじわる、増す、間近い、真っ赤だ、まるい、回る、見える、短い、見せる、満ちる、見付かる、みなぎる、耳に入る、むす、むっとする、群がり咲く、芽ぐむ、めずらしい、目立つ、目に付く、目を覚ます、持つ、もどかしい、盛り上がる、洩れる、役立つ、焼ける、やってくる、破れる、止む、和らぐ、愉快だ、行く、弛む、揺れる、良い、横

たわる、寄せる、呼びかける、甦る、寄る、らしい、流行する、分かる、分れる、湧き上がる、わきおこる、湧き出る、湧く、悪い、割れる

(5)受け手

浴びる、受ける

(6)属性

赤い、上がる、あざやか、荒い、ある、言う、勇み立つ、痛い、痛む、いっぱい、入る（実が）、美しい、大きい、落ち着く、落ちる、おとなしい、躍る、及ぶ、角ばる、乾く、変わる、黄色だ、緊張する、腐る、口を開く、黒い、加わる、濃い、こみあげる、下がる、褪める、白い、丈夫だ、空く、すべりこむ、せいせいする、平だ、絶える、高い、だ、違う、続く、つぶれる、詰まる、遠い、どきどきする、ときめく、ない、直る、長い、なくなる、似る、ぬける、ぬるりとする、はちきれぬ、光る、ひきしまる、開く、広い、増える、深い、ふくれあがる、ふくれる、減る、棒になる、貧しい、まっくらだ、まるい、見える、短い、ゆるむ、よい、弱い、悪い、割れる

(7)原因・理由

明るくする、あたためる、結びつける

(8)範囲規定

巧い、上手だ、違う、得意だ、不自由だ、へただ

2. ヲ格

(1)動作主

争わせる、従わせる、立たせる、たわむれさせる、止らせる、鳴かせる、逃がす、廻らせる

(2)経験者

あつと言わせる、驚かす、感動させる、緊張させる、苦しめる、さわがす、なつける、寝つかせる、眠らせる、満足させる

(3)対象

(いう)、(切る)、(する)、(持つ)、愛する、愛撫する、仰ぎ見る、仰ぐ、明るくする、あがめる、開く、開け放す、開ける、明け渡す、上げる、あざむく、味わり、預る、与える、暖める、圧する、集める、あてはめる、当てる、浴びせかける、浴びせる、浴びる、あぶる、余す、あやつる、洗う、争う、改め

る、表す、併せ有する、合せる、あわれむ、案ずる、案内する、言い交わす、
 言い出す、言い付ける、言い渡す、言う、射落とす、射かける、射切る、諫め
 る、いざない寄せる、いざなう、維持する、いじめる、いじる、急ぐ、射倒
 す、いただく、痛めつける、痛める、いたわる、抱く、一変する、いとう、い
 となむ、祈る、威服する、射る、炒る、入れる、いろどる、祝う、植込む、植
 える、窺う、浮かす、うかべる、浮き立たせる、受け入れる、承る、受け継
 ぐ、受け付ける、受け取る、受ける、動かす、失う、埋める、歌う、疑う、打
 ち落とす、撃ちかける、撃ち込む、撃ち沈める、討ち従える、打ち立てる、撃
 ち出す、打出す、打ちつける、討ち取る、訴える、打つ、討つ、撃つ、映し出
 す、移す、奪い取る、奪う、生み出す、生む、埋める、恨む、売る、憂える、
 映発させる、描き出す、描く、選ぶ、得る、掩護する、追い落とす、追いか
 ける、追い越す、追い立てる、追い払う、追いまくる、追う、負う、応援する、
 応用する、終える、覆い隠す、覆う、拜む、補う、置く、送り出す、送る、贈
 る、起こす、興す、怠る、行う、押えつける、押える、収める、修める、治め
 る、押し上げる、押し入れる、教える、押し込める、押し立てる、押し出す、
 押し量る、惜しむ、押す、襲う、恐れる、おっかける、陥れる、落とす、訪れ
 る、おどす、踊らせる、踊る、帯びる、おぶう、おほえる、思いあわす、思い
 浮べる、思い立つ、思い出す、思いやる、思う、重んずる、折る、織る、おろ
 す、終わる、解決する、開墾する、開始する、買い取る、回復する、改良す
 る、買う、飼う、返す、かえりみる、変える、抱える、掲げる、書き上げる、
 かき集める、書き表す、書込む、書き散らす、書きつける、書きつらねる、書
 き残す、かきまわす、かきむしる、掻き寄せる、かきわける、限る、かく、書
 く、掻く、描く、隠す、確立する、かける、加減する、囲む、重ねあわせる、
 重ねる、かざす、飾る、かしげる、貸す、かすめる、数える、形作る、片付け
 る、かたどる、傾ける、固める、語る、かつぐ、兼ねる、かぶる、構える、噛
 み切る、噛む、借りる、刈る、駆る、かわいがる、乾かす、躲す、考える、感
 謝する、感ずる、感嘆する、聞かせる、聞きつける、聞き伝える、聞き届け
 る、聞き取る、聞く、利く、刻む、築く、きたえる、切って落とす、気遣う、
 記念する、決める、きらう、切り落とす、切込む、切り倒す、切り抜く、切り
 抜ける、切り開く、切る、着る、虐待する、食い切る、食い取る、食う、くく
 りつける、くくる、くだく、下す、口ずさむ、くっつける、くつがえす、くね

らせる、配る、工夫する、組みあう、汲み上げる、組み合わせる、組伏せる、汲む、組む、食らわす、繰り返す、繰り出す、くりぬく、繰り広げる、繰る、くるむ、呉れる、加える、銜える、企てる、警戒する、啓発する、汚す、消し止める、消す、決する、決定する、蹴る、研究する、見物する、撃退する、撃沈する、現出する、乞う、考案する、攻撃する、こうむる、凍らせる、焦がす、こきまぜる、呼吸する、刻する、漕ぐ、こしらえる、こする、好む、こぼす、こまぬく、込める、凝らす、懲らす、殺す、壊す、採用する、さえぎる、咲かせる、探し出す、探す、裂く、探る、叫ぶ、下げる、提げる、捧げる、ささやく、差し上げる、差し込む、指図する、差し出す、刺し通す、差し伸べる、差し招く、差し向ける、差す、刺す、指す、点す、授ける、させる、誘う、定める、察する、悟る、裁く、覚ます、さらう、さらす、三分する、仕上げる、仕掛ける、叱る、指揮する、敷き並べる、敷く、仕組む、視察する、沈める、静める、慕う、したためる、叱する、しとげる、しとめる、凌ぐ、忍ばせる、偲ぶ、忍ぶ、縛り付ける、しぼる、しまう、閉め切る、示す、閉める、占める、集中する、祝する、祝福する、主張する、出版する、出願する、請じ入れる、称する、賞する、生ずる、招待する、処理する、使用する、知らせる、調べる、知る、記す、侵害する、振動させる、心配する、持する、実行する、吸込む、吸い付ける、吸う、据え付ける、結く、救い出す、救う、掬う、すすぐ、進める、勧める、捨てる、済ます、澄ます、すり付ける、する、擦る、ずらす、請求する、製作する、制する、征服する、背負う、せき止める、説得する、攻める、占領する、掃除する、奏する、想像する、装置する、添える、損ねる、注ぐ、そそる、育てる、供える、染め抜く、染める、そらんずる、揃える、尊敬する、存する、たいじる、帯する、大成する、平らげる、倒す、たがやす、焚く、手繰る、助け入れる、助ける、携える、尋ねる、訪ねる、湛える、称える、叩く、畳み上げる、正す、ただよわせる、断ち切る、達する、絶つ、たてかける、奉る、たてる、楽しむ、頼む、食べる、試す、絶やす、頼る、探検する、探知する、代表する、抱きしめる、諾する、出す、誓う、近寄せる、千切る、中止する、超越する、徴する、調節する、散らす、ちりばめる、陳列する、追慕する、費やす、使う、捕まえる、掴む、番える、突き立てる、継ぎ合せる、突く、撞く、搦く、尽くす、作り上げる、作り直す、作る、つくろう、注ぐ、継ぐ、付け狙う、付ける、漬ける、告げる、伝える、

突っ込む、突っ張る、つつく、包む、続ける、綴る、勤める、つなぎあわせる、つなぐ、つねる、募る、つぶる、つまむ、積み上げる、積む、摘む、詰める、貫く、連ねる、吊るす、連れ出す、連れる、つんざく、呈する、手伝う、手に入れる、手にする、照す、展開する、点出する、転ずる、点ずる、展望する、問い合わせる、問う、訪う、投ずる、尊ぶ、通す、溶かす、解く、説く、遂げる、閉じる、突破する、整える、届ける、留める、唱える、飛ばす、とぶらう、止める、伴う、捕らえる、取上げる、取扱う、取り落とす、取り返す、取り替える、取り囲む、取り調べる、取り捨てる、取り出す、取り付ける、取り外す、取りまとめる、取る、直す、流し込む、流す、眺める、なぎはらう、なくす、慰める、投げ入れる、なげうつ、投げ落とす、投げかける、投込む、投げ捨てる、投出す、投げつける、投げる、なさる、成し遂げる、なす、なだめる、名付ける、なでおろす、なでる、なめる、習う、鳴らす、並べる、握る、憎む、二分する、腕み付ける、腕む、煮る、縫いあわす、縫う、抜き取る、脱ぎ捨てる、抜く、脱ぐ、盗む、濡らす、塗る、願う、狙う、残す、のせる、覗かせる、覗き込む、覗く、除く、望む、のぼす、延べる、述べる、呑み込む、飲む、乗り入れる、乗り出す、拝観する、拝する、計る、図る、吐き出す、はぎとる、吐く、掃く、履く、博する、励ます、運ぶ、挟み上げる、挟む、はしる、始める、はずかしめる、はずす、果たす、働く、発揮する、発見する、発する、発達させる、発明する、話し合う、話す、放す、放つ、撥ね上げる、食む、はめる、囃す、払う、張り上げる、張り渡す、張る、貼る、判断する、賠償する、馬鹿にする、爆撃する、罰する、ばちくりさせる、控える、光らせる、引き開ける、引き上げる、率いる、引き受ける、引出す、引き連れる、引き止める、引き伸ばす、引く、弾く、潜める、掬める、ひたす、ひっくりかえす、ひっくるめる、ひっこめる、ひっつかむ、引っ張る、表彰する、表す、開く、ひるがえす、拾い上げる、拾い集める、捨う、広げる、広める、封じる、吹き上げる、吹き掛ける、吹込む、吹き散らす、吹く、拭く、葺く、復唱する、ふくらませる、塞ぐ、防ぐ、敷設する、伏せる、踏まえる、踏みこたえる、踏み沈める、踏み締める、踏み鳴らす、踏みにじる、踏む、降らせる、振り上げる、ふりかける、振りまく、振り回す、振る、振るい起こす、振るう、震わせる、触れさせる、触れる、ふんばる、平定する、滅らす、勉強する、包囲する、奉還する、砲撃する、奉ずる、放送する、奉納する、誇

る、保護する、欲しがる、干す、舗装する、保存する、欲する、ほめたたえる、褒める、掘り返す、掘割る、掘る、減ぼす、舞う、巻き上げる、巻き起こす、まき散らす、巻きつける、巻く、撒く、蒔く、まくりあげる、曲げる、交える、混ぜる、待ち受ける、まちこがれる、待つ、祭る、まとめる、学ぶ、招く、真似る、守る、廻す、見上げる、見合せる、見いだす、見送る、見覚える、見下ろす、見限る、見掛ける、みがく、見極める、見比べる、見定める、見せあう、見せる、みそなわす、見立てる、導く、見つける、みつめる、認める、見逃す、見張る、見舞う、見守る、見回す、見回る、みやる、見る、見分ける、見渡す、迎え撃つ、迎える、剥く、報いる、向ける、むしりとる、結びつける、結ぶ、むにゃむにゃさせる、命ずる、めがける、めくる、めぐらす、めざす、召し出す、召しつれる、珍しがる、免ずる、設ける、申し上げる、申し出る、もぎとる、目撃する、用いる、持ち帰る、持ち越す、持出す、持ち運ぶ、持つ、持って行く、持って来る、もてあます、もてなす、求める、物語る、揉む、もらう、もらす、盛返す、盛る、焼く、養う、休む、休める、安んずる、やつす、雇う、破る、止める、やる、揺する、譲る、輸送する、ゆだねる、輸入する、指さす、揺り動かす、許す、用意する、要する、横切る、横付けにする、寄せつける、寄せる、よどませる、呼び集める、呼び起こす、呼出す、呼ぶ、読み上げる、読み込む、よみする、詠み出す、読む、詠む、喜ぶ、連絡する、分かち、わきまえる、分ける、忘れる、渡す、わめく、笑う、割る

(4)相手 2

避ける、免れる、よける

(5)時

合図する、射る、撃ち沈める、打つ、突く、飛び回る

(6)時—始点

去る

(7)時間

明かす、遊び暮らす、遊ぶ、送る、押し通す、踊り明かす、暮らす、越す、過ごす、経る

(8)場所

囲む、片付ける、籠める、探す、探る、指す、振り返る、振り向く、掘る、満たす、向く

(9)場所－始点

動く、落ちる、おりる、下る、去る、出航する、出立する、出発する、立ち去る、発つ、立つ、超越する、出る、抜け出る、逃れる、発する、離れる、引揚げる

(10)場所－終点

指す

(11)場所－経過

上がる、遊び回る、歩く、行く、急ぐ、至る、一巡する、一周する、入る、右往左往する、大回りする、押し寄せる、踊る、泳ぐ、おりる、帰る、駆けくだる、駆回る、駆ける、かすめる、滑走する、切る、潜り抜ける、潜る、下る、航海する、航する、越える、越す、さかのぼる、さまよう、散歩する、疾駆する、透かす、過ぎる、進む、素通りする、滑る、辿る、通過する、通じる、突き抜ける、伝う、伝わる、詰めかける、貫く、出入りする、通す、通り過ぎる、通り抜ける、通る、突進する、突破する、飛ばす、飛び歩く、飛び回る、飛ぶ、跳ぶ、流れる、縫う、抜ける、上り詰める、上る、乗切る、入る、這う、走る、跳ね回る、飛行する、吹きまくる、経る、廻る、見回る、向かう、めぐらす、めぐり歩く、めぐる、潜る、洩れる、やってくる、行く、横切る、旅行する、分ける、渡す、渡る

(12)終状態

作る、成す

(13)属性

現す、いう、一変する、入れる、浮き上がらせる、失う、映す、押出す、帯びる、折る、かがやかす、切らす、加える、差し交わす、差し伸べる、生じる、する [顔を、色を、姿を、声を、形を、風を]、する [一に、〈形〉く]、助かる、湛える、絶つ、垂れる、出す、付ける、吊る、とどめる、とどろかす、取り止める、残す、張る、引く、開く、広げる、吹出す、吹く、ふるわせる、誇る、交える、増す、全うする、見せる、もたげる、持つ、横たえる

(14)範囲規定

争う、ありがたい、言合う、怒る、祈る、問う

(15)比較の基準

くだる、超える、越す、過ぎる、突破する

3. ニ格

(1)動作主

いう、行く、かつがせる、させる、唱えさせる、飲ませる、引かせる、守らせる、持たせる

(2)経験者

ある、言える、要る、うかぶ、同じ、思いあわせせる、知る、知れ渡る、付く（見当が）、ない、なぐさめだ、なつかしい、弾ける、開かせる（悟りを）、不気味だ、みなぎる、珍しい、わかる、湧く

(3)無意志主体

かかる

(4)対象

会う、与る、当たる、ある、打ち勝つ、移る、遠慮する、追い付く、応じる、思い至る、赴く、掛かる、傾ける（耳を）、勝つ、かまう、かみつく、考え及ぶ、聞き入る、気付く、与する、心掛ける、志す、答える、しがみつく、従う、謝する、従事する、乗ずる、する、だ、対する、耐える、着手する、付く、就く、突進する、取り掛かる、取りつく、同意する、同情する、ない、眺め入る、倣う、成る（世話に etc）、慣れる、任ずる、熱中する、話し掛ける、服従する、服する、不服だ、待つ、見入る、見とれる、向かう、報いる、夢中だ、寄り添う

(5)受け手

（いう）、あいさつする、合図する、預ける、与える、あてはめる、当てる、浴びせる、言い付ける、言い張る、いう、いたずらする、暇乞いする、祈る、入れる、打ちかける、訴える、移す、売る、置く、送る、贈る、起こす（訴えを）、教える、お辞儀する、惜しむ（名残を）、襲いかかる、返す、書く、掛ける、貸す、語る、加筆する、感謝する、聞く、下す、降る [降伏]、呉れる、加える、敬礼する、降参する、控訴する、ごちそうする、叫ぶ、捧げる、ささやく、差し出す、授ける、参詣する、参拝する、仕組む、出願する、知らせる、上告する、すがる、済まない、装置する、添える、供える、属する、出す、尋ねる、頼む、頼る、注意する、仕える、掴まる、付く、付ける、告げる、伝える、強い、点じる、問う、投票する、説き聞かせる、説く、取り継

る、取り付ける、投げつける、願う、残す、話す、放つ、引く(弓を)、響く、吹込む、振る、報告する、誇る、ほほえむ、ほめる、参る、任せる、巻き付ける、見せる、向う、向ける、命ずる、申し出る、詣でる、持って帰る、物語りする、もらう、やる、譲る、委ねる、油断する、呼びかける、寄り掛かる、拠る、寄る、分かち、分け与える、渡す、わびる

(6)与え手

ある、言い付かる、聞く、もらう、依る

(7)相手1

会う、合う、握手する、当たる、ある(関係が)、合せる、打ち付ける、惜しむ(別れを)、代える、かたどる、通う、代る、くくり付ける、くつつく、比べる、際会する、親しむ、死別れる、縛りつける、すりよる、すれすれだ、接する、対する、対比する、例える、近い、直面する、番える、継ぎ合わせる、継ぐ、付ける、続く、続ける、つなぐ、連なる、出会う、嫁ぐ、似通う、臨む、反する、引き換える、比する、深い(由緒が)、触れる、ぶつかる、混ぜる、まみえる、結び付ける、目通りする、類する、別れる

(8)時

(する)、(経つ)、(着く)、合図する、仰ぐ、上がる、開ける、当たる、集まる、表れる、ある、いう、生き生きとする、生きる、行く、射殺す、急ぐ、いっぱいだ、入れる、浮かぶ、浮かべる、浮き上がる、受ける、打って出る、うなり出す、生まれ合わせる、終える、拜む、起きる、遅れる、起こす、起こる、落ちる、落とす、踊る、驚く、覚える、思い浮べる、思い立つ、思い出す、思う、泳ぎ始める、泳ぐ、下りる、下ろす、終わる、帰る、かかる、輝く、書く、駆け下る、駆け進む、かすむ、かわる、考え及ぶ、考え続ける、感ずる、消える、気が付く、帰艦する、聞く、寄港する、曲折する、切り立てる、くつつく、曇る、来る、呉れる、研究する、撃沈する、航行する、轟ずる、越える、こぼれかかる、採集する、際する、下がる、捧げる、さしかかる、差す、定める、覚める、褪める、去る、仕上げる、沈む、慕う、従う、死ぬ、出港する、出航する、出発する、出帆する、知る、振動する、上陸する、透き通る、過ぎる、進む、滑り出す、する、成功する、整頓する、切腹する、世話する、前進する、創始する、供える、だ、高い、出す、立ち上がる、立つ、立てる、近づく、散る、使う、尽きる、着く、作る、付ける、伝える、統

く、つつむ、積もる、連れて帰る、停車する、でかける、出来上がる、できる、出る、遠ざかる、通る、解く、取って返す、飛び出す、泊る、取る、ない、直る、眺める、流れる、なくなる、投げ付ける、涙ぐむ、並ぶ、成る、逃げる、入港する、抜いて出る、脱ぐ、塗る、寝込む、眠る、寝る、残る、伸びる、上る、乗る、這い上がる、入る、計る、始まる、はずす、はっきりする、発見する、発達する、発着する、発明する、放す、張り替える、光る、弾き始める、表彰する、開く、広がる、広げる、増える、吹き上げる、ふくらむ、膨れ出す、太る、踏む、踏める、降る、武装する、勉強する、ほころびる、保存する、巻く、まさりゆく、回る、満開だ、見いだす、見え出す、見える、磨く、見せる、見る、向かう、霧散する、命ずる、潜り込む、潜る、用いる、持つ、盛り返す、焼く、焼ける、養う、破る、止む、遣る、輸入する、揺れる、用意する、寄せる、寄ってくる、詠む、割れる

(9)時—終点

至る、入る、及ぶ、掛ける、語り継ぐ、さかのぼる、静まる、偲ぶ、進む、だ、近づく、伝える、伝わる、できる、成る、はいる、守る、持ち越す、安い

(10)時間

(織る)、(続く)、一度、三度、処理する、何千艘、二度、二つ、亘る

(11)場所

(ある)、(使う)、(積む)、(とまる)、(入る)、(見える)、(見つける)、相見
る、仰ぎ見る、仰ぐ、上がる、明ける、開ける(穴を)、上げる、遊ぶ、当た
る、あふれる、余す、現す、現れる、ある、安置する、いう、往来する、射込
む、営む、居並ぶ、祈る、いぼる、入り乱れる、居る、岩走る、植込む、植え
る、浮かす、浮び上がる、浮び出る、浮かぶ、浮かべる、穿つ、浮き上がる、
浮き出す、浮く、受ける、動く、薄れる、うずくまる、渦巻く、歌う、うちか
わす、討死する、映す、うつぶす、映る、写る、うねる、生まれる、生む、映
ずる、描き出す、描く、得る、生い茂る、追う、負う、多い、覆う、拝む、置
き去りにする、置く、行われる、起こる、収まる、収める、押し立てる、押
す、落込む、落ち散る、落ちる、踊る、泳ぐ、居る、下ろす(腰を)、飼う、
かえりみる、掲げる、かかる、輝かしい、輝く、書き表す、書き入れる、書き
込む、書きつらねる、書く、欠く、隠す、隠れる、掛ける、かける(腰を)、
重なる、重ねる、飾る、かしこまる、かすむ、形作る、固まる、傾く、活躍す

る、構える、噛む、狩する、感ずる、喜戯する、聞く、聞こえる、築く、きたえる、規定する、曲折する、斬る、砕ける、ぐったりする、配る、くべる、組み合う、くりひろげる、群居する、群生する、警戒する、削り立つ、煙る、激する、下車する、こおどりする、凍りつく、腰掛ける、こしらえる、こぼれ匂う、こぼれる、こめる、こもる、転がる、冴え返る、さえざる、冴える、咲き続く、咲き残る、咲く、下げる、捧げる、ささる、差し出る、さしのべる、点す、定める、さらしかける、さらす、散在する、ざらざらす、しかける、敷き並べる、敷く、繁い、茂る、静まる、沈む、したためる、したたる、じっとする、死ぬ、偲ぶ、しまい込む、占める、出現する、出没する、称する、生ずる、乗ずる、使用する、記す、陣する、据え付ける、巢くう、少ない、鈴なり、捨てる、住居する、住む、すりつける、座る、生活する、成立する、迫る、そそり立つ、育つ、そばだつ、聳え立つ、聳える、存在する、存する、だ、倒れる、訪ねる、湛える、たたく、たたずむ、畳み重なる、ただよう、たちこめる、立ち止まる、立ちのぼる、立ち塞がる、立つ、立てかける、立てこもる、立てる、たなびく、だます、たわむれる、断続する、誓う、近付く、ちらつく、ちらばる、散る、陳列する、突き進む、突き出る、付く、就く、作る、付ける、伝わる、続く、突っ立つ、積み上げる、摘む、積む、詰めかける、連なる、貫く、吊り下げる、吊るす、停車する、できる、出そろう、照らす、照りかがやく、照りつける、照る、出る、展開する、点在する、点出する、点ずる、訪う、動揺する、通す、通る、ときめく、説く、遂げる、閉ざす、閉じこもる、とどまる、とどろきわたる、とどろく、飛び立つ、飛び違う、飛ぶ、止まる、泊まる、取り付ける、取る、ない、流す、流れる、泣く、鳴く、なくなる、投げかける、投げ出す、並ぶ、並べる、成る、鳴る、難破する、ぬかずく、ねころぶ、眠る、狙う、寝る、残す、残る、のしかかる、乗せる、望む、上る、乗り組む、乗る、乗れる、入る、生える、挟む、走る、始める、旗揚げする、働く、発達する、放つ、張り渡す、張る、破裂する、繁茂する、控える、光る、引く、ひざまずく、ひそむ、ひたる、響き渡る、響く、開く、開ける、ひらひらする、ひらめく、翻る、ひれ伏す、広がる、広まる、広める、増える、吹き散らす、吹く、ふさぎこむ、踏まえる、降り掛かる、振り掛ける、降り頻る、降り注ぐ、降る、振るう、ぶらさがる、分乗する、干す、奔走する、没する、撒き散らす、撒く、増す、跨がる、待ち受ける、待つ、迷

う、回す、見上げる、見出す、見え出す、見える、見下ろす、見せる、満ち来る、満ちる、見つかる、見つける、認める、みなぎる、見張りする、見張る、見舞う、見る、見渡す、向い合う、迎え撃つ、結ぶ、群れ遊ぶ、芽ぐむ、めぐらす、目立つ、設ける、もぐる、用いる、持つ、もてはやす、もやいする、盛る、休む、やすらう、宿る、破る、湧出する、有名だ、夢見る、揺れ出す、用意する、横たえる、横たわる、横付けにする、寄せつける、寄せる、よどむ、呼ぶ、詠み込む、読む、乱舞する、力闘する、流行する、湧き上がる、湧く、渡す、渡る

(12)場所—終点

(入れる)、上がる、上げる、集まる、案内する、行く、誘い寄せる、誘う、至る、入れる、動く、打ち寄せる、移る、追い詰める、送る、押し入れる、押出す、押し寄せる、陥る、落ちる、落とす、踊り入る、踊り込む、赴く、泳ぐ、及ぶ、降り立つ、降りる、下ろす、返す(引き返す意)、帰る、かかる、隠れ込む、駆込む、駆け寄る、かける、傾く、通う、消える、寄港する、帰着する、行幸する、食い込む、下りつく、下る、来る、込める、転げ落ちる、さしかかる、挿し込む、差し込む、差し出す、挿す、差す、忍び入る、忍び寄る、しまう、集中する、上陸する、進む、溜り込む、迫り来る、迫る、沿う、注ぐ、助け入れる、立ち寄る、達する、辿りつく、たなびく、垂れる、出す、近付く、近寄せる、近寄る、散る、通じる、突き立てる、付く、着く、就く、付ける、伝える、伝わる、出掛ける、出る、投ずる、溶け込む、取って返す、飛び上がる、飛び移る、飛び込む、飛びつく、伴う、取り落とす、流し込む、流す、流れる、投げる、なだれこむ、成る、日参する、入港する、のしかかる、伸ばす、伸びる、上る、乗り入れる、乗り移る、乗り込む、這い寄る、入り込む、入る、運ぶ、走り出る、走る、はせ集まる、発着する、はめこむ、はめる、引き上げる、引き返す、引き出す、引き取る、響く、漂着する、広がる、舞上がる、回る、導く、向う、命中する、もぐりこむ、持ち帰る、持ち運ぶ、持って行く、戻る、洩れる、輸送する、寄せる、寄り付く、寄る、渡る

(13)場所—経過

さまよう

(14)終状態

(する)、改める、至る、入る、色づく、移る、生れる、推し進める、陥れる、

及ぶ、終わる、返す、替える、返る、書き上げる、書く、変る、着替える、砕ける、組む、加わる、決する、仕切る、指定する、漉く、進む、する、高める、就く、作り上げる、作る、取り替える、成る、塗る、伸びる、登る、入る、履き替える、減らす、変ずる、ほかしあげる、巻く、まとめる、廻す、訳す、結う、よみがえる、分れる、割る、割れる

(15)属性

ある、祈る、受ける、負う、思い浮べる、思う、かぶる、着る、決する、快い、沁みる、富む、成る、満ちる

(16)原因・理由

明ける、あわてる、生きる、忙しい、偉大だ、浮かれる、浮き立つ、動く、失う、うずまる、うずもれる、失せる、うち煙る、うち忘れる、美しい、うなされる、うなづく、映ずる、負う、恐れる、落ちる、踊らせる(胸を)、踊る、驚く、覚える、思い出す、思う、かおる、輝く、感心する、感ずる、感動する、緊張する、崩れる、屈する、くらむ、来る、苦しむ、暮れる、黒む、煙る、こうむる、こりる、覚ます(目を)、進む、する(はっと、呆然と)、戦死する、そよぐ、倒れる、縮む、支える、疲れ切る、疲れる、つく(気が)、作らせる、出る、となえる、取り落とす、動揺する、泣く、なびく、成る、匂う、濁る、映える、はぜる、発掘する、びっくりする、ひらめく、ひるがえる、耽る、震える、閉口する、まかせる、まみれる、回る、満載だ、満足する、見えがくれする、見える、満ちあふれる、みはる(目を)、見る、むせぶ、燃える、焼け死ぬ、焼ける、破れる、ゆられる、弛む、ゆれる、酔う、湧く、我に帰る

(17)手段・道具

(さらす)、(持つ)、当たる、あぶる、動かす、埋める、うち興ずる、うまる、負える、書き表す、限る、掛ける、固める、聞く、汲む、くるむ、銜える、叫ぶ、捧げる、さらす、受領する、すかす、すすぐ、する[手・耳に]、染まる、抱く、出す、尽くす、潰ける、包む、つまづく、通す、留める、唱える、取る、取れる、挟む、ひたす、ひっかかる、伏せる、振るう、見える、見詰める、持つ、もってくる、もまれる、ゆあみする

(18)方式

(願う)、(見える)、(向う)、明かす、開く、開ける、あこがれる、現れる、案

ずる、安置する、言い出す、いう、行く、入り違ひ、居る、射る、彩る、浮き上がる、動かす、動く、歌う、打ち落とす、うなずく、映発する、得る、追いかける、多い、置く、送る、治める、襲う、踊る、思う、快走する、改良する、帰る、輝く、書き表す、駆けつける、囲む、重なる、霞む、傾く、傾ける、感じる、聞き入る、聞く、切り開く、切りまくる、切る、近代化する、下る、屈曲する、組み合う、組み合わせる、来る、黒い、煙る、激動する、攻撃する、答える、こぼれる、咲きこぼれる、咲き誇る、叫ぶ、差し向ける、悟る、騒ぎ立てる、四散する、沈める、従う、しぼる、知る、しろしめす、上訴する、進む、滑り下る、する、迫る、そびえる、染め分ける、揃える、だ、高鳴る、出す、尋ねる、讃える、奉る、迎る、食べる、だまる、沈没する、付く、作る、伝える、続く、詰め寄る、連なる、連れてくる、できる、出てくる、照り映える、突進する、飛び上がる、飛び立つ、飛ぶ、流れる、泣く、並ぶ、並べる、成る、逃げ出す、縫い合わす、抜ける、残る、ののしる、呑む、乗る、入る、映え出す、生える、計る、運ぶ、挟む、走る、始める、話す、張る、光る、飛行する、表す、開く、深い、ふくれる、不自由だ、太る、降り続く、降る、振る、分岐する、葬る、ほほえむ、舞う、任せる、曲る、交わる、増す、待ち構える、見え隠れする、見える、見下ろす、見せる、見る、芽ぐむ、めぐらす、萌え立つ、求める、敗れる、やられる、用意する、よばわる、呼び集める、呼びかける、呼ぶ、読む、喜ぶ、連絡する、別れる、割る、割れる

(19)条件

(ある)、(だ)、与える、ある、一本、受け付ける、おいしそうだ、起こす、同じだ、掛かる、利く、汚す、消し止める、散開する、すく(胸が)、すべる、生活する、育つ、小さい、勤める、ない、成る、述べる、引き受ける、ひょうきんだ、見渡す、持つ、雄大だ

(20)目的

(行く)、当てる、生きる、行く、いそがしい、急ぐ、一生懸命だ、応じる、応用する、かかる、適う、適える、来る、加わる、研究する、捧げる、参加する、使用する、する、そむく、大切だ、耐える、出す、立つ、足る、費やす、使う、尽くす、努める、連れて行く、適度だ、出かける、出る、ない(余念がetc)、似合う、励む、走る、恥じる、働く、必要だ、ふさわしい、不便だ、便

利だ、奔走する、待つ、招く、見せる、向う、用いる、持ってくる、もってこいだ、やる、よい

(21)役割

ある、買う、書く、掛ける、飾る、呉れる、献ずる、差し出す、する、出す、立つ、作る、連れる、出る、唱える、取る、塗る、吹く：笛を、祭る、見せる、用いる、もらう、やる

(22)内容規定

(する)、思う、限る、数える、決める、決する、処する、する、相違ない、違いない、見える

(23)範囲規定

(ある)、明るい、ある、痛める(心を)、至る、居る、飢える、多い、起こる、折れる(骨が)、かける、考える、関する、困る、咲く、優れる、成功する、精通する、強い、富む、ない、二羽、発揮する、開く、ほほえむ、混じる、迷う、見つかる、めざめる、珍しい、目立つ、もれる

(24)観点

与る、暑い、危ない、同じ、慕う、せまい、だ、成る、もどかしい

(25)比較の基準

あまりある、余る、遅れる、劣る、同じ、及ぶ、勝つ、かなう、変わる、過ぎる、足りる、近い、似る、負ける、勝る、増す、満つ

(26)度合い

教える、思う、かかる、傾く、白い、切迫する、尊敬する、強い、熱心だ

(27)陳述

(する)、当たる、及ぶ、する、だ、達する、なる、のぼる、他ならない

4. デ格

(1)動作主

行く、打ちくらべする、踊る、決める、来る、こしらえる、採用する、する、相談する、育てる、出す、食べる、ためす、仕える、撞く、取り外す、始める、撒く、読む

(2)経験者

忘れる

(3)対象

いっぱいだ、埋まる

(4)時

洗う、ある、いう、おいとまする、終わる、聞く、ごめんこうむる、しぼる、使用する、高い、だ、飛ぶ、取る、成る、慣れる、始める、話す、昼寝する、本復する、訳す、止める、呼ぶ、笑う

(5)場所

(いう)、(打つ)、(起こる)、(語る)、(する)、(だ)、会う、上げる、味わえる、遊ぶ、集まる、現れる、ある、言い交わす、いう、受ける、打つ、撃つ、うなる、生まれる、描く、拜む、送る、行う、起こる、教える、落ちる、落とす、踊る、おもしろい、おりる、織る、おろす、終わる、買う、かきあつめる、書く、掛ける、片付ける、通う、刈る、かわいがる、代る、聞く、聞こえる、気付く、決まる、決める、教練する、切る、行儀良い、汲み上げる、組む、暮らす、くらす、繰り返す、消し止める、研究する、下車する、考案する、盛んだ、咲く、騒ぐ、叱る、敷く、支度する、死ぬ、ジャンプする、主張する、調べる、実験する、据え付ける、する、世話する、洗濯する、対座する、助ける、訪ねる、戦う、だ、立合う、立つ、食べる、使う、つかまえる、作る、付ける、綴る、積む、停車する、出会う、飛べる、泊る、取り替える、取る、ない、鳴く、なくす、なくなる、なめる、成る、鳴る、にこにこする、縫う、寝る、残す、覗く、乗り換える、乗る、運ぶ、始まる、始める、働く、話す、払う、光る、響く、開く、病気する、塞ぐ、降る、武装する、勉強する、弁論する、干す、掘る、舞う、交わる、まぜかえず、待つ、見送る、見掛ける、見せる、見つける、見守る、見る、目を覚ます、用いる、もろう、休む、休める、やる、揺れる、読む、喜ぶ、別れる

(6)原因・理由

運動する、思い出す、帰れる、かすむ、傾く、感ずる、決まる、くずれる、死ぬ、じめじめする、成立する、想像される(自)、だ、立つ、出来上がる、出来る、通る、飛び起きる、直る、成る、光る、ぼっとする、満足する、目をさます、焼ける、休む、休める、有名だ、愉快だ、分る

(7)手段・道具

(行く)、合図する、煽ぐ、握手する、上げる、洗う、表す、歩く、言い表す、

いう、行く、いじる、言って聞かせる、受ける、撃ち沈める、打出す、打ちつける、追いかける、追い払う、覆う、送る、行う、押さえる、教える、押す、開墾する、買う、抱える、書き表す、掻き出す、かきむしる、書く、搔く、掛ける、囲む、飾る、片付ける、考える、切り抜く、切る、くだる、来る、啓発する、攻撃する、漕ぐ、こする、刺し通す、定める、しがみつく、しとめる、締める、調べる、記す、振動させる、吸いつける、救う、する、たいらげる、たたく、発つ、ためす、近づく、捕まえる、掴む、着く、搗く、作る、伝う、つつく、続ける、つながる、つなぎあわせる、つまむ、吊る、つるす、手入れする、取り捨てる、取る、取れる、なでる、煮る、縫う、飲ませてもらう、呑む、刷く、運ぶ、挟み上げる、挟む、走る、話し掛ける、匆ね上げる、匆ね回る、貼り付ける、引き下ろす、ひっぱる、吹込む、吹く、踏む、踏める、振りまく、ぶつ、放送する、見上げる、見える、見る、向かう、結び付ける、持つ、連絡する、笑う

(8)材料

編む、書く、飾る、築く、くまどる、こしらえる、畳む、作る、包む、積み上げる、出来る、塗る、葺く、巻く

(9)構成要素

組織する

(10)方式

(いう)、挨拶する、いう、行く、居る、撃ち沈める、うなづく、うなる、売る、押し通す、押し寄せる、おりる、買う、かけつける、かける、かつぐ、かみつく、聞き取る、聞く、築く、決める、来る、越す、答える、凝らす、探す、叫ぶ、沈む、疾走する、しまう、上陸する、進む、する、田植えだ、詰めかける、連れて帰る、出る、投票する、唱える、飛ぶ、鳴く、逃げる、練り歩く、伸びる、入る、走る、外す、離れる、囃し立てる、防ぐ、踏みにじる、踏む、降り続く、ぶつかる、返事する、滅ぼす、舞う、廻る、向かう、燃える、呼び交わす、呼ぶ、笑う

(11)条件

(決める)、(だ)、上がる、与える、ある、行ける、及ぶ、帰る、勝てる、切って落とす、下す、見当が付く、仕上げる、済ます、だ、通過する、出来る、出る、取扱う、成る、呑み込める、乗切る、入る、判断する、光る、見える、渡す

(12)目的

行く、働く

(13)範囲規定

ある、いう、美しい、偉い、大きい、思う、おもしろい、かたい、きれいだ、
だ、高い、大事だ、強い、年若だ、整う、にぎやかだ、残す、速い、引く（目
を）、低い、古い、ほめたてる、負ける、めずらしい、よい

(14)陳述

思う、だ

5. ト 格

(1)相手 1

相映ずる、相接する、相望む、あいまつ、合せる、言合う、会見する、から
む、交わす、関係する、婚約する、じゃれる、すれすれだ、絶縁する、戦う、
続く、出会う、同時だ、友達だ、共にする、取り替える、仲良しだ、並ぶ、諮
る、話し合う、話す、離す、反対だ、一つになる、交わる、見合せる、向き合
う、結ぶ、約す、連絡する、別れる

(2)終状態

(する)、改める、生まれる、織り出す、決まる、静まる、する、成る

(3)方式

(輝く)、(する)、(たちのぼる)、(見える)、明るい、あがる、明け渡す、あた
たかい、暖める、あったかい、集まる、浴びる、現れる、歩き回る、歩く、諫
める、いじる、行ったり来たりする、移動する、植え付ける、浮び上がる、浮
かぶ、浮き上がる、浮き出す、浮く、動かす、動く、埋める、打ち付ける、写
し出す、映る、生い茂る、追いまくる、おおようだ、教える、押し寄せる、落
ち着く、落ちる、踊る、思う、泳ぐ、解決する、帰る、輝く、駆け出す、駆け
回る、重なる、かじる、かすむ、固まる、傾く、滑走する、噛む、刈る、乾
く、考える、感心する、感ずる、聞える、刻む、気忙しい、切る、きわまりな
い、くだける、繰り返す、繰り返し広げる、来る、加える、啞える、航海する、航
行する、こぼれかかる、こめる、凝らす、ころがる、冴える、さかのぼる、下
がる、咲き匂う、咲く、ささやく、誘う、去る、しがみつく、茂る、沈む、親
しめる、偲ぶ、締める、進軍する、吸う、進む、済む、する、世話する、そび

える、ぞよめく、倒れる、たずねる、湛える、叩く、畳み上げる、ただよう、立ち去る、たちのぼる、立つ、立てる、陳列する、通じる、着く、作る、付ける、つつく、続く、詰めかける、連なる、連れてくる、照らす、照りつける、照る、出る、通る、溶ける、飛び立つ、飛ぶ、取り囲む、流す、流れる、泣く、なくなる、なす(列を)、なびく、並ぶ、成る、にぎる、逃げ出す、抜ける、眠る、寝る、残る、のしかかる、のどかだ、伸びる、のぼる、飲む、乗り移る、乗る、拜する、入る、走る、働く、食む、張る、光る、引き揚げる、引く、ひっぱる、響く、増える、吹き回る、吹く(芽を)、ふくれ上がる、更ける、降る、朗らかだ、曲がりくねる、巻き上げる、巻きつける、巻く、回る、見える、見比べる、見せる、見る、めぐり歩く、めぐり移る、燃え移る、燃える、求める、戻る、やってくる、揺する、よい(歯切れが)、横たえる、寄せる、読み出す、読む、分かる、湧き上がる、湧き出る、渡る、笑う

(4)役割

出立つ、頼む、つけねらう

(5)内容規定

(あげる)、(いう)、(言える)、(思う)、(残念だ)、(する：声が)、(何事だ)、(放つ)、あいさつする、仰ぐ、崇める、開ける、上げる、あこがれる、あざける、焦る、謝る、あらそう、ある、歩き回る、案内する、言合う、言い終わる、言い聞かせる、言い捨てる、言い出す、言い付ける、言い張る、言い含める、言いふらす、言い渡す、いう、言える、いきまく、行く、勇ましい、いたわる、祈る、動く、歌う、移す、うなづく、うなる、うねり続く、追う、覆う(耳を)、大騒ぎする、大笑いする、起きる、教える、押し掛ける、押し退ける、襲い掛かる、驚かす、思い返す、思い詰める、思う、思える、返す、帰る、変える、限る、書く、覚悟する、駆け出す、掛ける、かすめる、教える、語り合う、語る、かわいがる、考え込む、考える、感心する、感ずる、聞く、聞える、気付く、規定する、決まる、決める、気を付ける、くたく(心を)、くやしそうだ、企てる、乞う、漕ぐ、心得る、志す、答える、叫ぶ、ささやく、指図する、誘う、論ず、さわぐ、叱る、称する、知らせる、知る、記す、知れる、信仰する、心痛する、心配する、心配だ、信頼する、勧める、する、する(声が)、する(相手に)、説明する、世話する、相談する、手繰る、出す、尋ねる、称える、叩く、立ち塞がる、立ち寄る、立てる(音を)、頼む、

嘆ずる、嘆息する、近付く、力を落とす、番える、つく（見当が）、付ける、伝える、包む、続く、募る、つぶやく、詰め寄る、手に汗を握る、問い返す、問う、通り過ぎる、説く、称える、とる（音頭を）、どなる、ながめる、泣く、鳴く、投げる、なじる、なだめる、名付ける、なでる、名乗る、鳴り出す、成る、鳴る、にらむ、願い出る、願う、残る、ののしる、這い出す、図る、計る、履く、はずむ（声が）、発する、話し掛ける、話す、囁す、張り上げる、ひきしぼる、引く、否定する、吹き鳴らす、ふしぎがる、返事する、勉強する、報告する、ほめる、まぜかえず、待ち構える、待つ、招き寄せる、迷う、満足する、見える、見切る、見る、命ずる、申し込む、申し出る、約束する、指さす、許す、よばわる、呼び出す、呼ぶ、詠む、読む、喜ぶ、わかる、別れる、笑う

(6)提題

（だ）、だ

(7)比較の基準

同じ年だ、同じだ、変わる、異なる、違う、同然だ、同様だ、似る、反対だ、比較になる

(8)随伴

遊ぶ、行く、植える、帰る、来る、散歩する、座る、育てる、仕える、突く、出る、眺める、乗る、撒く

(9)度合

明らかなだ、大きい、加わる、する、高い、つかまる、ない、なす（列を）、乗れる、離れる

(10)陳述

ある

6. カラ格

(1)動作主

押し寄せる、尋ねる、伝える、やる

(2)与え手

ある、受ける、かかる、聞く、来る、ひったくる、学ぶ、もらう

(3)相手 1

離れる

(4)時

仰ぎ見る、洗う、言い出す、いう、行く、至る、落ちる、帰る、書く、考える、聞く、聞こえる、来る、見物する、死ぬ、食事する、漉く、食べる、吊り下げる、出かける、出て行く、出る、通る、飛び来る、入る、見てもらう、向う

(5)時—始点

(する)、(経つ)、上がり始める、遊ぶ、ある、言い聞かせる、言い伝える、いう、生きる、行く、一生懸命だ、一変する、居る、動く、歌う、うれしい、起上がる、起こす、教える、帯びる、思う、かける、囲む、考える、聞く、聞こえる、来ている、決まる、急だ、下る、曇る、来る、盛んだ、咲き出す、刺さる、参宮する、信頼する、好きだ、過ぎる、過ごす、する、供える、だ、大好きだ、出す、経つ、作る、続く、続ける、積る、強い、連れて行く、手伝う、出かける、出入りする、出る、通る、閉じる、取り掛かる、取る(筆を)、ない、眺める、名のる、習う、なる(世話に)、成る、にぎわしい、にこにこする、眠る、覗く、伸ばす(手を)、上る、はげしい、始まる、始める、冷える、吹き出す、降り出す、降り積もる、勉強する、誇る、掘る、撒く、待つ、見える、見る、持越す、雇う、やる、利口だ、忘れる

(6)場所

燃え切れる

(7)場所—始点

(行く)、(する)、上がる、上げる、集る、浴びせかける、現れる、ある、歩く、いう、行く、至る、撃ちかける、打ち出す、打ち出せる、討つ、移す、移る、生れる、埋める、起こる、押える、押し寄せる、落ちる、落とす、降りる、下ろす、帰る、駆け降りる、駆け出す、掛ける、掛け渡す、聞こえる、切込む、切り付ける、下る、繰り出す、来る、越える、こぼれる、転げ落ちる、遡る、下がる、叫ぶ、差し込む、指図する、差し出る、さらしかける、染み込む、閉める、縦走する、進む、滑り込む、する(音・匂が)、迫る、沿う、尋ねる、畳み上げる、立ち上る、食べる、便りする、垂れ下がる、出す、近付く、徴集する、通ずる、つかむ、突き立つ、突く、付ける、伝える、連なる、吊るす、連れ出す、連れてくる、転ずる、出かける、出る、投ずる、渡海す

る、とどろく、飛上がる、飛び出す、飛ぶ、取り出す、取る、飛んで行く、流す、眺める、流れる、投げ落とす、投げる、並ぶ、鳴る、覗く、望む、伸ばす、のぼる、乗る、這い上がる、這い出す、入る、吐き出す、吐く、運ぶ、走る、はずむ、発見する、放す、離れる、繁茂する、引出す、飛行する、響き渡る、吹き上げる、噴き出る、ぶらさがる、噴出する、交える、見上げる、見える、見下ろす、見透かす、導く、見付ける、見る、向かう、生ず、めがける、めざす、やってくる、寄せる、呼ぶ、落下する、分れる、湧き上がる、湧き出る、湧く

(8)場所一経過

入れる、上陸する、迎る、出す(顔を)、ついて行く、ついてくる、眺める、覗く、望む、のぼる、入る、舞込む、見える、見る、見渡す、洩れる

(9)始状態

増える、ほかしあげる、導き出す

(10)原因・理由

いう、起こる、思い立つ、思いつく、考えつく、取り囲む

(11)範囲規定

いう、くつがえす、選定する

(12)観点

いう、考える、察する、見る

(13)比較の基準

遅れる

7. ヌリ格

(1)与え手

(いう)、(差し出す)、ある、受ける

(2)時

起きる、予測する

(3)時一始点

多い、顧みる、掛ける、数える、越える、定める、賞する、熱中する

(4)場所一始点

あげる、現れ出る、ある、いく、至る、移動する、打ちかける、撃ち掛ける、

- 落ちる、下りる、数える、北、来る、漕ぎ出す、咲き初める、下、伝う、出る、渡来する、取り出す、匂い出る、抜く、這い出る、走り出る、向う、寄る
- (5)場所－経過
したがう
- (6)原因・理由
知る
- (7)比較の基準
えらい、大きい(大きな)、沖、堅い、きれいだ、黒い、加える、先、下、縮小する、好きだ、少ない、だ、大切だ、高い、たくさん、たまらない、小さい、冷たい、強い、遠い、得意だ、なつかしい、早い、引きしぼる、低い、豊年、まず、短い、めざましい、目立つ、よい、よろしい、らしい

8. へ格

(1)受け手

(いう)、恐れ入る、掛ける、乞う、参拝する、知らせる、奉納する、参る(参詣)、申し出る、もらう、やる、わびる

(2)時

ある、来る、だ、出る、通る、入る、降り注ぐ

(3)場所

植える、おろす、掛ける、すわる、倒れる、付く、作る、乗せる、敷設する

(4)場所－終点

(いく)、(来る)、(着く)、(出る)、(逃げる)、(乗る)、上がる、上げる、あこがれる、集る、案内する、行きかける、往来する、いく、行ける、急ぐ、入れる、動く、移す、移る、往復する、多い、送る、押し上げる、押し掛ける、押し寄せる、落込む、落ちる、落とす、踊り込む、下りる、回航する、快走する、帰る、かかる、駆け込む、駆け出す、駆け付ける、駆け寄る、掛ける、駆けける、通う、消える、曲折する、行幸する、崩れる、くだる、来る、航海する、航する、越える、こぼれかかる、下がる、下げる、さしかかる、差し向ける、誘う、射出する、退く、進軍する、縦走する、吸込む、進む、進める、滑り落ちる、滑り込む、迫る、攻め上る、注ぐ、たぐる、発つ、垂れ下がる、出す、近くなる、近寄る、散る、遣わず、突き入る、突き抜ける、着く、付け

る、伝える、突っ込む、連なる、連れ出す、連れて行く、連れて帰る、連れる、出歩く、出かける、出る、通す、通る、突進する、取って返す、飛び上がる、飛び降りる、飛び込む、飛びのく、飛ぶ、取る、動揺する、流れ付く、流れ出る、流れる、投げ入れる、投げる、並ぶ、逃げ延びる、逃げる、延ばす、伸びる、上り付く、上る、登れる、のめる、乗り入れる、乗る、這い出す、入る、運ぶ、走る、放す、引き下ろす、引き返す、引く、飛行する、引越す、引っ張る、振る、放射する、舞込む、曲る、廻る、見せる、導く、見舞う、向う、向ける、燃え移る、もぐる、持って行く、持ってくる、戻る、やってくる、やる、寄せる、呼ぶ、嫁入る、寄る、分れる、渡す、渡る

(5)終状態

めぐりうつる

9. マデ格

(1)時—終点

(続く)、預る、遊ぶ、ある、いう、居る、動く、思い詰める、及ぶ、飼う、隠れる、掛ける、語る、悲しそうだ、消えない、給仕する、興ずる、来る、従う、修業する、知らない、高い、立つ、食べる、たるむ、突く、付く、包む、続く、閉じこもる、泊る、ない、泣く、鳴らし続ける、賑う、にぎわしい、煮る、残る、走る、働く、晴れる、引き出す、無事だ、経る、任せる、見える、燃え迫る、持つ、分からない

(2)場所—終点

上がる、ある、歩く、いく、埋める、送る、帰る、来る、攻め上る、だ、近付く、続く、貫く、出る、並ぶ、這う、走る、跳ね上げる、持ってくる

国立国語研究所報告 113

日本語における表層格と深層格の対応関係

平成 9 年 3 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘三丁目 9 番 14 号

電話 (03) 3900-3 1 1 1 (代表)

© The National Language Research Institute 1997

Printed in Japan

本書の市販品発行所

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目 22 番 14 号

(03) 3230-9 4 1 2

株式会社 三省堂

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	昭和 25.3	秀英出版刊
2	言語生活の実態—白河市および付近の農村における—	昭和 26.4	秀英出版刊
3	現代語の助詞・助動詞—用法と実例—	昭和 26.8	秀英出版刊
4	婦人雑誌の用語—現代語の語彙調査—	昭和 28.3	秀英出版刊
5	地域社会の言語生活—鶴岡における実態調査—	昭和 28.3	秀英出版刊
6	少年と新聞—小学生・中学生の新聞への接近と理解—	昭和 29.3	秀英出版刊
7	入門期の言語能力	昭和 29.3	秀英出版刊
8	談話語の実態	昭和 30.3	秀英出版刊
9	読みの実験的研究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—	昭和 30.3	秀英出版刊
10	低学年の読み書き能力	昭和 31.3	秀英出版刊
11	敬語と敬語意識	昭和 32.3	秀英出版刊
12	総合雑誌の用語(前編)—現代語の語彙調査—	昭和 32.3	秀英出版刊
13	総合雑誌の用語(後編)—現代語の語彙調査—	昭和 33.2	秀英出版刊
14	中学年の読み書き能力	昭和 33.3	秀英出版刊
15	明治初期の新聞の用語	昭和 34.3	秀英出版刊
16	日本方言の記述的研究	昭和 34.11	明治書院刊
17	高学年の読み書き能力	昭和 35.3	秀英出版刊
18	話しことばの文型(1)—対話資料による研究—	昭和 35.3	秀英出版刊
19	総合雑誌の用字	昭和 35.11	秀英出版刊
20	同音語の研究	昭和 36.3	秀英出版刊
21	現代雑誌九十種の用語用字(第1分冊:総記, 語彙表)	昭和 37.3	秀英出版刊
22	現代雑誌九十種の用語用字(第2分冊:漢字表)	昭和 38.3	秀英出版刊
23	話しことばの文型(2)—独話資料による研究—	昭和 38.3	秀英出版刊
24	横組みの字形に関する研究	昭和 39.3	秀英出版刊
25	現代雑誌九十種の用語用字(第3分冊:分析)	昭和 39.3	秀英出版刊
26	小学生の言語能力の発達	昭和 39.10	明治図書刊
27	共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—	昭和 40.3	秀英出版刊

28	類義語の研究	昭和 40.3	秀英出版刊
29	戦後の国民各層の文字生活	昭和 41.3	秀英出版刊
30-1	日本語地図(1)	昭和 41.3	大蔵省印刷局刊
	日本語地図(1)〈縮刷版〉	昭和 56.10	大蔵省印刷局刊
30-2	日本語地図(2)	昭和 42.3	大蔵省印刷局刊
	日本語地図(2)〈縮刷版〉	昭和 57.8	大蔵省印刷局刊
30-3	日本語地図(3)	昭和 43.3	大蔵省印刷局刊
	日本語地図(3)〈縮刷版〉	昭和 58.6	大蔵省印刷局刊
30-4	日本語地図(4)	昭和 45.3	大蔵省印刷局刊
	日本語地図(4)〈縮刷版〉	昭和 59.2	大蔵省印刷局刊
30-5	日本語地図(5)	昭和 47.3	大蔵省印刷局刊
	日本語地図(5)〈縮刷版〉	昭和 60.3	大蔵省印刷局刊
30-6	日本語地図(6)	昭和 49.3	大蔵省印刷局刊
	日本語地図(6)〈縮刷版〉	昭和 60.3	大蔵省印刷局刊
31	電子計算機による国語研究	昭和 43.3	秀英出版刊
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究 —親族語彙と社会構造—	昭和 43.3	秀英出版刊
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	昭和 43.12	秀英出版刊
34	電子計算機による国語研究(II) —新聞の用語用字調査の処理組織—	昭和 44.3	秀英出版刊
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究 —マキ・マケと親族呼称—	昭和 45.2	秀英出版刊
36	中学生の漢字習得に関する研究	昭和 46.3	秀英出版刊
37	電子計算機による新聞の語彙調査	昭和 45.3	秀英出版刊
38	電子計算機による新聞の語彙調査(II)	昭和 46.3	秀英出版刊
39	電子計算機による国語研究(III)	昭和 46.3	秀英出版刊
40	送りがな意識の調査	昭和 46.3	秀英出版刊
41	待遇表現の実態 —松江 24 時間調査資料から—	昭和 46.3	秀英出版刊
42	電子計算機による新聞の語彙調査(III)	昭和 47.3	秀英出版刊
43	動詞の意味・用法の記述的研究	昭和 47.3	秀英出版刊
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	昭和 47.3	秀英出版刊
45	幼児の読み書き能力	昭和 47.3	東京書籍刊

46	電子計算機による国語研究(IV)	昭和 47.3	秀英出版刊
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究 —性向語彙と価値観—	昭和 48.2	秀英出版刊
48	電子計算機による新聞の語彙調査(IV)	昭和 48.3	秀英出版刊
49	電子計算機による国語研究(V)	昭和 48.3	秀英出版刊
50	幼児の文構造の発達—3歳—6歳児の場合—	昭和 48.3	秀英出版刊
51	電子計算機による国語研究(VI)	昭和 49.3	秀英出版刊
52	地域社会の言語生活—鶴岡における 20年前との比較—	昭和 49.3	秀英出版刊
53	言語使用の変遷(1)—福島県北部地域の面接調査—	昭和 49.3	秀英出版刊
54	電子計算機による国語研究(VII)	昭和 50.3	秀英出版刊
55	幼児語の形態論的な分析—動詞・形容詞・述語名詞—	昭和 50.2	秀英出版刊
56	現代新聞の漢字	昭和 51.3	秀英出版刊
57	比喩表現の理論と分類	昭和 52.2	秀英出版刊
58	幼児の文法能力	昭和 52.3	東京書籍刊
59	電子計算機による国語研究(VIII)	昭和 52.3	秀英出版刊
60	X線映画資料による母音の発音の研究 —フォネーム研究序説—	昭和 53.3	秀英出版刊
61	電子計算機による国語研究(IX)	昭和 53.3	秀英出版刊
62	研究報告集—1—	昭和 53.3	秀英出版刊
63	児童の表現力と作文	昭和 53.7	東京書籍刊
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	昭和 54.1	秀英出版刊
65	研究報告集—2—	昭和 55.3	秀英出版刊
66	幼児の語彙能力	昭和 55.3	東京書籍刊
67	電子計算機による国語研究(X)	昭和 55.3	秀英出版刊
68	専門語の諸問題	昭和 56.3	秀英出版刊
69	幼児・児童の連想語彙表	昭和 56.3	東京書籍刊
70-1	大都市の言語生活(分析編)	昭和 56.3	三省堂刊
70-2	大都市の言語生活(資料編)	昭和 56.3	三省堂刊
71	研究報告集—3—	昭和 57.3	秀英出版刊
72	幼児・児童の概念形成と言語	昭和 57.3	東京書籍刊
73	企業の中の敬語	昭和 57.3	三省堂刊
74	研究報告集—4—	昭和 58.3	秀英出版刊

75	現代表記のゆれ	昭和 58.3	秀英出版刊
76	高校教科書の語彙調査	昭和 58.3	秀英出版刊
77	敬語と敬語意識—岡崎における 20 年前との比較—	昭和 58.3	三省堂刊
78	日本語教育のための基本語彙調査	昭和 59.3	秀英出版刊
79	研究報告集—5—	昭和 59.3	秀英出版刊
80	言語行動における日独比較	昭和 59.3	三省堂刊
81	高校教科書の語彙調査 II	昭和 59.3	秀英出版刊
82	現代日本語動詞のアスペクトとテンス	昭和 60.1	秀英出版刊
83	研究報告集—6—	昭和 60.3	秀英出版刊
84	方言の諸相—「日本語地図」検証調査報告—	昭和 60.3	三省堂刊
85	研究報告集—7—	昭和 61.3	秀英出版刊
86	社会変化と敬語行動の標準	昭和 61.3	秀英出版刊
87	中学校教科書の語彙調査	昭和 61.3	秀英出版刊
88	日独仏西基本語彙対照表	昭和 61.3	秀英出版刊
89	雑誌用語の変遷	昭和 62.3	秀英出版刊
90	研究報告集—8—	昭和 62.3	秀英出版刊
91	中学校教科書の語彙調査 II	昭和 62.3	秀英出版刊
92	談話行動の諸相—座談資料の分析—	昭和 62.3	三省堂刊
93	方言研究法の探索	昭和 63.3	秀英出版刊
94	研究報告集—9—	昭和 63.3	秀英出版刊
95	児童・生徒の常用漢字の習得	昭和 63.3	東京書籍刊
96	研究報告集—10—	平成元. 3	秀英出版刊
97-1	方言文法全国地図 1 助詞編	平成元. 3	大蔵省印刷局刊
97-2	方言文法全国地図 2 活用編	平成 3. 3	大蔵省印刷局刊
97-3	方言文法全国地図 3 活用編	平成 5. 3	大蔵省印刷局刊
98	児童の作文使用語彙	平成元. 3	東京書籍刊
99	高校・中学校教科書の語彙調査 分析編	平成元. 3	秀英出版刊
100	日本語の母音・子音・音節	平成 2. 3	秀英出版刊
101	研究報告集—11—	平成 2. 3	秀英出版刊
102	場面と場面意識	平成 2. 3	三省堂刊
103	研究報告集—12—	平成 3. 3	秀英出版刊
104	研究報告集—13—	平成 4. 3	秀英出版刊

105	研究報告集—14—	平成 5.3	秀英出版刊
106	常用漢字の習得と指導 付・分類学習漢字表	平成 6.3	東京書籍刊
107	研究報告集—15—	平成 6.3	秀英出版刊
108	日本語とスペイン語(1)	平成 6.3	くろしお出版刊
109-1	鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査報告1—	平成 6.8	秀英出版刊
110	研究報告集—16—	平成 7.3	秀英出版刊
111	マイペンライ—タイ人の言語行動を特徴づける言葉とその文化的背景についての考察その1—	平成 7.3	秀英出版刊
112	テレビ放送の語彙調査 I —方法・標本—覧・分析—	平成 7.12	秀英出版刊

注) 秀英出版の刊行物は、現在 大日本図書株式会社の取扱いとなっている。